

はじめに

真理は流れ星のように、時々天(神)から降ろされております。この流れ星のことを私は、聖音といっております。聖音とは天の言葉のことで、この書は、その聖音を私が受け取り文字にしたものです。本当に聖音なのかは、あなたが判断してください。もし、あなたの理性が納得しないなら、受け入れないでください。

どうでしょう？ 聖音(真理)は、お釈迦様やイエス様の口を通してしか降ろされないのでしょうか？ いえ、そんなことはありません。この地球に聖音の閉ざされた時代は、ただの一度もないのです。現在も聖音は、国を問わず、人種を問わず、性別を問わず、年齢を問わず、降ろされております。心の準備の整った人を見つけると、天は喜んで聖音を降ろしてくれるのです。心の準備が整った人とは、心の貧しい人のことです。

だから、イエス様はいわれたのです。"心の貧しき者は幸いなり、その者は神を覩るであろう"と…。この心の貧しき者という意味は、素直な心を持った者、疑いを知らない心を持った者、汚れない心を持った者という意味です。その純真な心を持った者だけが、天の言葉を受け取ることができるのです。どうかこ

の書を、子供のような純真な心で受け入れてください。そうすれば、聖音を心の底で感じ取ることができるでしょう。この書が「神の思想化」に少しでも役立てば、これ以上の喜びはありません。

二〇一四年一二月

かとう はかる

※このメッセージは、宗教とは一切かわりの無いものです。むしろ、宗教を否定しているメッセージといった方が良くも知れませんが。そのことを冒頭にお断りしておきます。

◎目次

はじめに	1
第1章 希望の道	5
第2章 光道	37
第3章 瞑想	83
第4章 宇宙	109
第5章 意識（本質）	149
第6章 霊	175
第7章 生命	198
第8章 愛	223
第9章 神	240
第10章 想念	266
第11章 真理	302
第12章 真理のよろず箱	337
第13章 人間社会と真理	378
第14章 地球の夜明け	420
おわりに	450

第1章 希望の道

私たちが希望を持って生きられる根拠は、この宇宙に一時の停滞や退化はあっても、永遠の停滞や退化はないという、神の愛(進化)の裏付けがあるからです。ですから今どんなに苦しい境遇にあらうとも、決して絶望してはなりません。どうか神の愛を信じ、今できることを精いっぱいやって待ちましよう。そのうちに、必ず前途が開けてくることを私は保証します。

言葉一・・・この本を読んでいるあなたは特別な存在である

一般人が真理を求める動機は、病苦から逃れたい、生活苦から逃れたい、家庭苦から逃れたいなど、殆どご利益が目的です。でも、今この書を読んでいるあなたは、違うと思います。今の人生に満足できない！一体、こんな人生でいいのか？他に別な人生があるのではないだろうか？そんな人生に対する疑問から、真理の道に入ってきたと思います。

あなたは今日まで、何かを探し求めてきたと思います。でも、何を探しているのか分からなかった。そこ

で、お金を求め、地位や財を求め、異性を求め、ついには家庭を持ち、そこに安住してしまいました。でも、妻を娶っても、子供を授かっても、地位や名譽を得ても、なぜか満足できないでいる。それどころか、何かがおかしい？ 何かが違う？ そんな悶々とした日々を送ってきたはずですが。そうです。あなたの魂は、現状に満足できないのです。

多くの人は、権威や名声を頼りに本を求めます。でもあなたは今、名声も権威も何も無い者の書いた書を読もうとしています。それは権威や名声に騙されない、理解力の高い熟成した魂だからです。そんな熟した魂が、今の人生に満足できるはずがないのです。あなたの魂は、今、喉を哽らしています。どうか、真理の水を与えてやってください。きっと水を得た魚のように、生き生きすることでしょう。あなたは、そのような特別な魂なのです。

言葉二・・・求道者の心得

真の求道者なら、真の求道者らしく、泰然とした態度で真理に向き合わねばなりません。何か起きたら、すぐに探求を諦めてしまうようでは、真の求道者とはいえないからです。では、真の求道者はどうあるべきか、その心得を述べたいと思います。

家庭や社会から逃れたくて、真理の道に入ってくる者がおりますが、そんな逃げ腰で真理が得られることは絶対ありません。なぜなら、嫌なことから逃げている限り原子核(魂・生命核)を増やすことができないからです。嫌なことから逃げている者は、宝物を捨てているようなものなのです。どうか勇氣を持って、嫌なことに挑戦してください。そうすれば、あなたの原子核は間違いなく増えます。社会で生きていること自体、真理を実践していることになるのです。

人間は、ほぼ同じ形をしていますので、誰もが同じ人間だと思っています。でも魂のレベルで見れば、みな違うのです。特にこの本が理解できる人は、一般人とは違います。どうか魂のレベルを意識して生きてください。そのように生きていけば、人との接し方が変わってきます。例えば、低い魂には寛容の心を持って接することができ、高い魂には敬意をもって接することができるようになります。

増長するのではと思われるかもしれませんが、反対に頭の低い人になります。ぜひ、魂のレベルを意識して生きてください

互いに魂のレベルを認め合ってください。認め合えば、見栄を張ることが無くなります。例えば、何か分らないことがあっても、はつきりと、「分かりません！」といえるようになります。人は自分ですから、自分の前で見栄を張ることなどないからです。また、自分の体験が人のためになると思ったら、どんな恥ず

かしいことでも話してあげてください。人の成長は自分の成長になるのですから、成長材料を捨てるのはもったいないです。自尊心を守ることが大切か、魂を成長させることが大切かは、あなたなら分かっていたはずですよ。

真理を難しく考えないでください。むしろ単純に考えてください。この宇宙は、一つの真実で創られているため、一つを知れば全体を知ることができるからです。一つは全体です。全体は一つです。ですから自分を知らば、全宇宙を知ることができるのです。子供のような、素直な心を持って真理と向き合ってください。

求道者に必要なのは、信じる心と、素直さと、続ける我慢強さです。すなわち、神を信じる揺るぎない信仰心、神を信じる素直さ、神を求め続ける我慢強さです。理論も技術も必要ありません。必要なのは、真理を求め続ける強い意志力だけです。

求道の旅を続けていけば、様々な誘惑に出会います。一番の誘惑は肉欲です。中でも、食欲・性欲は大敵です。他にも沢山の誘惑が待ち受けていますが、その誘惑に打ち勝つには強い勇気と意志力が必要です。どうか、どんな誘惑にも負けない強い心を養ってください。

何においてもそうですが、待つては何も得られません。自分から働きかけ、はじめて得られるのです。悟りも同じです。「来る者拒まず、去る者追わず」の姿勢を貫いているのはそのためです。だから私は、人

を誘うようなことはしません。人に誘われて求めるようでは、真の求道者とはいえないからです。真の求道者は、真理に人生を捧げています。その者は、どんな障害に遭っても挫けません。また、決して諦めません。ちよつと真理をかじったからといって、知識をひけらかす求道者にだけはならないでください。大切なのは知識ではなく、実感だからです。頭でっかちな求道者にならないでください。

家に閉じこもって瞑想にふける、求道者にならないでください。社会に身を浸して原子核を増やす、実践型の求道者になってください。といって、瞑想を軽んじる求道者にもならないでください。バランスの取れた求め方をしてください。

真剣に真理を求め続ければ、環境が変わります。環境が変わるのは、成長の証なのです。どうか、与えられた環境に相応した、真理の求め方をしてください。

以上、真の求道者としての心得を述べさせてもらいました。ただし、あまり囚われてもなりません。自然体で行ってください。自分の心の中に神がおられるのですから、その思いに素直に従うことです。

言葉三・先人たちに感謝をしよう！

私たちは実に幸せです。なぜなら、私たちの目の前に、すでに先人たちが開拓してくれた道があるからで

す。もし自分で道を開拓するとすると、大変な苦勞がいったでしょう。そう思うと、先人たちに感謝せずにはいられません。では最初に道を開拓した先人たちは、一体どのようにして開拓したのでしょうか？ 大自然をご覧ください。見事な調和を見せています。神は、その大自然の中に真理を隠されたのです。先人たちは、その隠された真理を発見し、悟りを開いたのです。

人が得た真理は人のものです。自分が得た真理は自分のものです。自分の中から得たものだけが、自分の実力となるのです。だから知花先生は、自力の大切さを訴えるのです。先生は、常に疑問を持ちなさいと、口癖のようにいっておられました。それは、先生自身の体験から得た答えだからです。どうか自分に問いかけてください。自分に問いかけた回答は、必ず自分の中から得られます。回答が得られれば、あなたの原子核(魂・生命核)は間違いなく増えます。ぜひ、”なぜ？ なぜ？ なぜ？”と、疑問を自分に問いかけてください。

言葉四・人生の目的は何なのか？ 人は何のためにあくせく働きに出かけるのか？

人があくせく働くのは、この肉体が自分だと思っているからです。肉体を自分だと思えば、肉体はか弱く作られていますから、どうしても沢山の物やお金がいるのです。世の親たちが、子供たちを良い学校に入れ

るのは、物やお金や地位や名譽を手に入れさせるためです。お金が沢山得られれば、いい家に住めます。いい着物が着られます。美味しいものがたらく食べられます。地位や名譽が得られれば、人に頭を下げる必要がなくなります。今の世の中をご覧ください。朝早くから夜遅くまで、みな働き蜂のように働いているではありませんか。肉体が自分だと思えば、誰もがこのような生き方をするのです。これは今の社会では仕方ないことで、誰も責めることはできません。でも、もし肉体が自分ではなく、生命が本当の自分だと知ったら、このような生き方をするでしょうか。いいえ、しないはずです。なぜなら、生命には、物もお金も地位も名譽もいらなからです。本当の私たちは、汚く、重く、不自由で、無能な人間ではないのです。清く、軽く、自由で、全能な生命なのです。その生命に生きたら、もう保身に走る必要はなくなるのです。

人生の目的は本当の自分を知るため、すなわち、生命の自分を知るためです。それ以上の目的はありません。人生の目的を知らない人は、どうしても物に溺れたり、金儲けに躍起になったり、地位や名譽や権力に執着したりしてしまうのです。これは肉体を自分だと思っている限り、やむを得ないことなのです。でもこの書を読んでいるあなたは、そうであってはなりません。人生の目的を知ったからです。といっても、日々の生活に追われると、つい人生の目的を見失いがちになるものです。多くの求道者が、真理を求めながら苦しんでいるのは、俗世の誘惑に負け、人生の目的を見失ってしまうからです。決して人生の目的を見失って

はなりません。もし見失ったときには、次のように自分に、いい聞かせてください。「一体自分は、何のために生まれてきたのか？ 何のために生きているのか・・・？」と・・・。きっと、冷や水を浴びせられたように目を覚ますことでしょう。

言葉五・・・無意味な人生はない！

「人間万事塞翁が馬」という諺は、「人生において何が幸せで何が不幸か分からない」という意味だそうです。本当の意味は、「神は何一つ無意味なことはなさらない！ どんなことにも意味があり、それはすべて良いことなのですよ！」という意味なのです。「無用の用」という諺も、「この世に無用なことは何一つ無い、すべて必要あって起きているのですよ！」という、神の完全性を教えている諺なのです。では、無意味なことのない理由を述べましょう。

・この世に肉体をもって生まれてくること自体、生命核(原子核・魂)を増やしております。ましてや苦難の人生において、どれほど多く生命核を増やしていることか。生きていること自体生命核を増やしているのですから、決して自殺などしてはならないのです。

・どんな短い人生も、周りの人たちに強烈なインパクトを残しております。事実娘の死は、私の人生を大

大きく変えました。今の私があるのは、娘の死のおかげであるといっても過言ではありません。

・あなたがいなければ学べることも学べない人たちが、周りに沢山いることを忘れてはなりません。あなたの人生は、あなただけの人生ではないのです。周りの人たちの人生でもあるのです。

・人生劇場における喜怒哀楽は、人生劇を迫真の演技に結びつけております。様々な感動のドラマはそこから生まれ、宇宙に永遠に尽きない、永遠に色あせない幸せを生み出しているのです。

・不幸災難を悪と決めつけてはなりません。不幸災難があるから私たちは成長できるのですから・・・。その意味では、病気も、事故も、事件も、災害も、みな善と見るべきです。事実、苦しみを多く体験した人ほど、賢い人間になっているではありませんか。

・どんな死に方をして、無駄死にということはありません。なぜなら、どんな死も進化の糧になっているからです。このことは魂が良く知っています。魂は、その死から必ず何かを掴んでいるのです。

このように、誰一人として無意味な人生を歩んでいる者はいないのです。だから今どんな境遇にあらうと、決して自暴自棄になつてはなりません。あなたの人生は、間違いないあなたの糧にも、周りの人たちの糧にも、人類の糧にも、地球の糧にも、宇宙の糧にも、なっているのですから・・・。

言葉六・四苦は予防灯のようなもの

人生には、生・老・病・死という四苦がつきまといまます。でもその苦しみは、夜道に迷わないよう神が用意してくれた予防灯のようなものだと考えてください。もし、この予防灯の一つでも欠けたら、無事に家に辿り着くことはできないでしょう。神は夜道をさ迷わないよう、四苦という四つの灯りを用意してくれたのです。今は灯りの意味が分からないかも知れませんが、いつか必ず感謝できる日がくるでしょう。荒野といわれるこの表現世界は、「天使とて地獄に落ちる」といわれるくらい厳しい世界です。だから神様は、迷わないよう四つの予防灯を用意してくれたのです。その予防灯は、確かに痛く、苦しく、辛いのです。でも、その痛みや苦しみがなかったら、私たちは道を正しく歩くことができないのです。

・「生きる」苦しみは、この世の情と欲に負けないための予防灯です。

・「老いる」苦しみは、人生の思索を促す予防灯です。

・「病になる」苦しみは、人生に疑問を持たせる予防灯です。

・「死ぬ」苦しみは、人生の意味を考えさせる予防灯です。

どれ一つ欠けても、ともに歩くことはできません。さあ四つの予防灯に守られながら、故郷を目指して歩みましょう。

言葉七・・・夢幻に生きている私たち

この世は夢幻の世界です。多くの人は、この世の儂さや死の哀れさを目の当たりにしながら、いまだにこの世を真実の世界だと思い込み、消えゆく物やお金のために命を削っています。なんと愚かな事でしょう！ お金や物に生きている人は、夢幻に生きているのですよ！

夢幻に生きているということは、死んでいるということですが、実際に無い世界に生きることは、死んでいるのと同じだからです。どうも長いこと人間をやってきたために、私たちは長い物に巻かれてしまったようです。それは長いこと寅さん役をやっていた渥美清が、本当に寅さんになってしまったようなものです。さあ、目を見開いてください。

・この世は無常の世界なのですよ！

・夢幻の世界なのですよ！

・実際に無い世界なのですよ！

どうか実際に有る生命に生きてください。その人は真に生きている人なのです。

言葉八・自分の人生に責任を持つ！

最近占いがブームになっているようですが、そんなものに頼っている人は、自分の人生をサイコロ任せにしている無責任極まりない人です。他人が、占いが、偶然が、神が、自分の人生を作るものではありません。自由意思を持つ自分が、自分の人生を作るのです。賢い人は、自由意思を良く使い幸せな人生を送っています。愚かな人は、自由意思を悪く使い不幸せな人生を送っています。これは誰の責任でもなく、自由意思を悪く使った自分の責任です。

もし他人が、占が、偶然が、自分の人生を作るなら、そこに人間としての尊厳があるでしょうか？ また神が人生を作るなら、その人生は一体誰の人生でしょうか？ こう歩きなさい、ああ歩きなさい、と案内される人生に何の意味があるでしょうか。自分の自由意思で作る人生だからこそ、やりがいもあるし、誇りも生まれるし、やり遂げた喜びも生まれるのです。操り人形の人生が、誇れる人生といえるでしょうか？ 喜べる人生といえるでしょうか？

確かに、操られる人生は楽かもしれませんが。何も考えなくていいし、何の努力もいらなからね……。でも、考えてみてください。もしその人生が失敗に終わったら、その責任は誰が取ってくれるのですか？ 他人ですか？ 占いですか？ 偶然ですか？ 神ですか？ いいえ、自分が責任を取るのです。痛みとして、

苦しみとして、悲しみとして……。他人任せで責任だけは自分が取る、そんな割の合わないことをあなたはするのですか？　どうか自分の人生を、他人任せにしないでください。さあ、自分の人生に責任を持ちましょう。

言葉九・希望を持つ！

真理が理解できないからといって、自分を卑下するようなことはしないでください。理解力のなさを認めることは良いことですが、それで波動を落とすようでは求道者としては失格です。理解力のなさは原子核の少なさですから、このように考えて自分を励ますことです。

“今日理解できなくても、明日にはきっと理解できるようになる”と……。なぜなら、私たちは毎日少なからず原子核を増やしているからです。

このような質問をする人がおりました。“私は年を取っているから、女性だから、頭が悪いから、今生悟れないのではないか”と……。悟るのに、どうして年齢や性別や頭の善し悪しなど関係あるでしょうか？　あなたは、自分の原子核の量を知っているのですか？

もしかしたら、一時間後自覚の境界線を超える量が集まるかもしれないのですよ。女性でも、前世です

に境界線を超えた魂かもしれないのですよ。これは誰にも分からないのです。分からないということは、希望が持てるということです。求道者なら、ポジティブに考えましょう。

やった者が勝ちです。やらない者は負けです。原因と結果の法則は完璧なのですから、これは当たり前前のことです。

言葉一〇・他力では何も変わらない！

ある人が、このようなことをいっておりました。“私はアセンションが終わってから人生設計を立て直すのだと”・・・。なんと愚かな考えでしょう。この人はアセンションが起きれば、自分が変わると思っているのです。自分は何もしないで、どうして自分が変わるのでしょうか？

よろしいですか。この宇宙は、愛のエネルギーが均一に遍満しているのですよ。宇宙のどこかに、エネルギーの高いゾーンがあるわけではないのです。ならば、どうしてアセンションが起きるのでしょうか。アセンションとは、自力で波動を上げれば高い波動(守護霊)と同調できるようになるため、様々なヒントが得られるようになるという意味です。しかしこれは、あくまでも自力によるのです。「こちらが一步近づけば、神は百歩近づいてくれる！」とは、このことをいっているのです。だから私は、守護霊が導きやすくなる

よう波動を高めてくださいというのです。守護霊は、いつも私たちを導こうと身構えております。でも、今の私たちは波動にギャップがありすぎて、導こうにも導けない状態なのです。それは物質に溺れ、情欲に溺れ、波動を落としているからです。欲に目がくらまされ、お金や物の虜になっている間は、守護霊は導きたくても導けないのです。

確かに、うお座の時代からみずかめ座の時代に移行しつつある今日、かつてないほど人類の意識が高まりやすい環境にあるのは事実です。それは、今地球上に多くの覚者が下生し法を説いているからです。でもそれは、あくまでも真理を自力で追及しての話であって、何もしないで意識が高まるわけではないのです。何もしないで自分が変わるなら、こんな楽なことはありません。何事も原因あつての結果です。良い原因を作りもしないで、どうして良い結果が得られましょうか。神が怠け者に都合の良い仕組みを作るわけがないのです。またそんな仕組みがあるなら、わざわざこの世に生まれてくる必要もありませんか。アセンションとは、節目の時代に多くの覚者が下生し、衆生に法を説くことよって真理が根付き、地球人類の波動が上がるという意味です。どうか巷のうわさに惑わされないようにしてください。

「言葉――真理を追究するのに臆病になってはならない！」

求道者の中にこのような人がおりました。

親が反対するから、妻(夫)が反対するから、子供たちが反対するから、友達が反対するから、真理を追究するのを諦めたという人

寒いから、暑いから、雨や雪が降ってきたから、台風がやってきたから、講話を聴きに行くのを止めたという人

遠いから、お金がかかるから、講話を聴きに行くのを止めたという人

電話しても迷惑だろうから、行っても会ってくれないだろうから、止めたという人

このような人は、自分で勝手に言い訳を作って真理に背を向けている卑怯者です。本来求道に、障害物などあるわけがないのです。真剣に神を求めている人の前に、神がどうして障害物を置くのでしょうか？もし障害物があるとしたら、真剣さを試すために置いた障害物か、叱咤激励するために置いた障害物かのどちらかでしょう。誤解してはいけませんので言い添えますが、神が障害物を置くことはありません。自分を奮起させるために自分が置いたのです。私がこのように厳しいことをいうのは、自覚の境界線付近まで来ている可能性のある魂だからです。私は小学生や中学生の魂にこのようなことはいいません。大学生の魂だからい

うのです。どうか、自分の魂にふさわしい求め方をしてください。

言葉二二・・求道者に大切なのは直感である

求道者が一番陥りやすいのは、知識をヨロイカブトにしてしまうことです。知識は悟りではありません。かえって悟りの妨げになるだけです。既成概念や観念を多く持てば持つほど悟りから遠のいてしまうのは、自分の意識の中に限定壁を作ってしまうからです。一旦そのような壁ができれば、その壁を壊すのは大変なのです。

悟りは学問ではないのです。知識ではないのです。実感が大切なのです。その実感には知識では得られないのです。知識は、実感の道筋を閉ざしてしまうだけです。求道者に必要なのは直感です。インスピレーションです。ひらめきです。純粋な心の中にキラメク一筋の光です。知識は、物質世界に生きる人々には必要であっても、真理を求める人々には不要なのです。不要なところか、あればあるほど、悟りの妨げになるだけです。なぜなら、真理は外側にあるのではなく、内側(自分の心の中)にあるからです。さあ、余分な知識を捨てましょう。真理は、直感が大切であることを知ってください。

言葉一三・真理を求めながら苦しんでいる人へ！

“真理を求めたいけど求めるのが苦しい！”、という人に私はいいたい、強い勇気と強い意志を持ってくださいと・・・。生活に追われながら真理を求める大変さは良く分かります。でも、今せっかく布石が打てるというのに、そのチャンスを逃しては大損ではありませんか。今チャンスを逃したら、いつまたチャンスが巡ってくるか分からないですよ！ あなたは、また何千年もさ迷いたいのですか？ また同じ苦しみを味わいたいのですか？ もうこりこりですよね！・・・。

本当は、苦しんでいることをあなたは喜ぶべきなのです。なぜなら、苦しむところまで魂が成熟しているからです。世の中には、このいつている意味さえ分からない魂が沢山いるのですよ！ そのことを考えたら、あなたはどれほど成熟した魂か・・・。さあ魂の望みに応えるためにも、一つでも多く布石を打っておきましょう。それは誰のためでもない、未来の自分のためなのですから・・・。

確かに世間の人たちが汗まみれになって働いているとき、一人静かに神に意識を向ける自分に疑問を持つのも無理はありません。いくら神を想っても一向に手応えがない！ “一体こんなことをしていて本当に意味があるのだろうか？” “そう思うと虚しくなって涙が出てくる。でも、良く考えてみてください。外で働いている人たちは、永遠のものを追い求めているのですか？ 朽ち果てる物を追い求めているのですよ！

それに比べたらあなたは、永遠のものを追い求めているのですよ！ これは凄いなのです。どうか神を信じてください。この宇宙の仕組みを信じてください。自分を信じてください。

言葉一四・今一番にすべきことは？

お釈迦様の教えの中に「毒矢の例え」があります。ある者が毒矢に射られました。伴の者がすぐに毒矢を抜き手当てをしようとしたところ、射られた当人は、「誰が矢を射ったのか？ 矢はどの方向から飛んできたのか？ どんな弓矢を使ったのか？」など詮索するばかりで、一向に矢を抜かせようとしません。こんなことをしているのは、毒が回って死んでしまいます。今一番にすべきことは、あれこれ詮索することではなく、矢を抜き手当てをすることです。

真理の探究も同じです。求道者の中には、論議に夢中になり、一向に瞑想しない人がおりますが、そんなことをしているのは悟る前に寿命が尽きてしまいます。今一番にすべきことは議論することではなく、神につながる瞑想をすることです。神につながるのに理屈や議論はいらないのです。今一番にすべきことは、

- ・ 今与えられた環境の中で精いっぱい生きることです。
- ・ 正しい思いと言葉と行いをするということです。

・宇宙(神)の仕組みを知ることです。

・思索をすることです。

・時間の許す限り瞑想することです。

これ以外のことは、みな絵に描いたポタモチです。

言葉一五・・権威や現象を頼りにしてはならない

世の中には、権威を振りかざし人集めしている人や、不思議な現象を見せつけ人集めしている人がおります。なぜ、そのようなことをするのかといいますと、実力で(真理の内容で・波動で)人を集めることができなからです。彼らは、外側の飾りつけを見せて信者を集めているのです。でも残念なことですが、そのような人のところには多くの人が集まってくるのです。それは、多くの人が真偽を見分ける目を持っていないからです。彼らは、真偽を見分ける目を持たないがゆえに、権威や現象を頼りにするのです。真偽を見分ける目を持っている人は、権威や現象に惑わされることはありません。彼らは真理の中身を見て真偽を判断します。理解力が高いからそれができるのです。世の中には、そのような求道者が少ないため、ホンモノの指導者の下に集まる人も少ないのです。

この宇宙は良くできています。小学校の教室には小学生が集まり、中学校の教室には中学生が集まり、高校の教室には高校生が集まり、大学の教室には大学生が集まるようになっていっています。飛び級で上下の教室に行くことはないのです。例え一時行っても、実力に相応した教室に戻って行くのです。

形式や現象や名声や権威などを頼りにしている限り、本者の指導者に出会うこともありません。例え出会うても、すぐに去って行きます。頼りにすべきは、あくまでも真理の内容です。中身です。身に受ける波動です。真の求道者なら、私のいっていることが分かります。自尊心で道を閉ざさないでください。それは、自分が損するのですから・・・。

言葉一六・犬も歩けば棒に当たる

何でもそうですが、何もしないで待っているのは、与えられることはありません。真理も同じこと・・・自ら探し歩いて、はじめて与えられるのです。生き物になぜ足があると思いますか？ それは、歩くためではありませんか。歩けば必ず出会いがあります。出会いがあれば必ずドラマが生まれます。そのドラマでの体験が、自分を成長させてくれるのです。「犬も歩けば棒に当たる」の諺の意味は、「歩けば何か体験できますよ、体験できれば必ず成長できますよ！」ということなのです。

・お釈迦様は今も歩き続けています。

・イエス様も歩き続けています。

・知花先生も肉体を脱いだ今も歩き続けています。

彼の偉大な覚者たちでさえこのように、一時も休まず歩き続けているというのに、どうして凡夫の私たちは歩こうとしないのでしょうか。歩かないで、求めないで、真理が与えられた人など、いまだかつて一人もいないのですよ！どうか自尊心を捨ててください。謙虚になってください。そして、求めて、求めて、求め続けてください。向上心はその望みの高さです。努力はその意志の強さです。みな真理を得るために必要な道具です。どうぞ、しつこく求めてください！きっと神様は与えてくれるでしょう。

言葉一七・招かれし者は多いが選ばれし者は少ない！

知花先生の下に多くの求道者が集まってきました。彼らは

“素晴らしい真理だ！”と流し涙を流します。しかし、それもつかの間で、多くの者は先生の言葉にまず離れて行きます。言葉にまずくとは、理解できなかつたということです。理解できなければ、話を聴いてもおもしろくないのです。

おもしろくなくても、理解できなくても、根気良く聴くことが大切です。何度も何度も聴いている内に、先生から頂いた波動によって意識の高揚が起こり、次第に理解できるようになります。意識の高まりは理解力の高まりを呼びますから、色々な気付きが起きるようになるのです。さらに師授してゆくと、波動の同調が起こり、これまで味わったことのない気持ちの良さを体験します。また、先生から頂いたエネルギーによって体調も良くなります。ここまで来た人は、もう離れることはありません。でも、ここまで来る前に離れて行く人が多いのです。「招かれし者は多いが、選ばれし者は少ない！」とは、真理を聴いた者は多いけれど、理解のできた者は少ないという意味です。それほど真理を理解するのは、容易なことではないのです。

言葉一八・本当の自分を発見するまで躓きは続く

本当の自分を知る厳しさは、口ではいえません。多くの人は本道に入る前に躓きます。

まず、「人間は実在しない！ 肉体は実在しない！ 物質は実在しない！」というところで躓きます。次に、「物質界は実在しない！ 幽界は実在しない！」というところで躓きます。

さらに、「病気は存在しない！ 老は存在しない！ 死は存在しない！」というところで躓きます。それを乗り越えても、「自覚できなければ知ったことにはならない！」というところで大きく躓きます。

そして、「この宇宙には私しか実在しない！」というところで完全に躓きます。

このように、本当の自分を発見するまで躓きは続くのです。躓かなくなったとき、あなたは選ばれし者となつたのです。

言葉一九・大ハンマーで叩こう！

一番陥りやすいのは、焦るあまり知的に悟ろうとすることです。知識を組み立て悟ろうとしても、それは無駄骨というものです。なぜなら、悟りは知識を超越しているからです。大切なのは焦らないこと、難しく考えないこと、単純に、素直に、ただ一心に、本当の自分を見詰めること、意識すること、それは理屈抜きです。ただただ生命に意識を集中し、天の岩戸を開くことです。

・自我で叩くハンマーは小ハンマー

・心の底から(魂の底から)叩くハンマーは中ハンマー

・自覚して叩くハンマーは大ハンマー

大ハンマーで叩いたら最高ですが、それが適わぬなら、せめて中ハンマーで叩きたいものです。それも五分間、雑念なしにやれたら最高です。ハンマーは外にはありません。また、誰も与えてはくれません。ハン

マーは自分の強い意志力と強い思いです。想念はエネルギーですから、強い思いを持って叩けば、どんな硬い扉でも開けることができます。あくまでも、自力です。強気です。やる気です。根気です。

言葉二〇・・・信仰浅き者と深き者

信仰浅き者とは、教義や経典をただ盲目的に信じる者のことをいいます。また、外形だけを見て(偶像・儀式・現象)信じる者も、信仰浅き者のする所業です。信仰深き者は、決して盲目的な信じ方しません。まず疑い、深く知り、さらに理解し、納得して、はじめて信じるのです。決して人から聴いたことを鵜呑みしません。

真理の導き手(本当の自分)は、いつも自分の中におります。だから信仰深き者は、安易に外に導き手を求めないので。といっても、アドバイザーは必要です。なぜなら、真理を追究するためには、コツを教えてください。アドバイザーが必要だからです。そのアドバイザーの一人が知花先生です。「いまだかつて真理の導き手が人手に渡ったことが無い！」といわれるのは、一人一人の中に導き手がおられるからです。生命がおられるからです。神がおられるからです。すなわち、本当の自分がいるからです。その自分から教えを受けてください。では、どうすれば教えを受けることができるのでしょうか？

それは、

・常に内側(生命・本当の自分)に意識を向けることです。

・本当の自分と親しくなること、すなわち、生命と、神と、親しくなることです。

・本当の自分と問答し合うことです。

やっている内にコツが掴めます。焦らず、諦めず、根気よく続ければ、必ず本当の自分から答えが得られるようになります。あなたはそのとき、自分の中に神の存在を確信するでしょう。

言葉二二・・・求道の旅は永遠に続けられるべきもの

師と仰いでいた者が亡くなると、あたかも求道の旅が終わったかのような振る舞いをする人がおりますが、求道の旅はそんな軽薄なものではありません。求道の旅は、前世でも続いていたし、今も続いているし、今後も永遠に続くのです。師がいなくなることはありません。常にあなたと共におります。会いたかったらいつでも会えます。ですから何も寂しがることはありません。

もし、イエス様に会いたかったら、イエス様を呼んでください。

もし、お釈迦様に会いたかったら、お釈迦様を呼んでください。

もし、知花先生に会いたかったら、先生の名を呼んでください。

肉体を持つ持たないにかかわらず、あなたの中にはこれまで悟られたすべての覚者がおられるのですから……。

言葉二二一・何を追い求めるべきか？

私たちはいったい何を追い求めるべきでしょうか？ 消えて無くなるお金や物や地位や名声でしょうか？ それとも永遠に無くならない真理でしょうか？ 永遠に無くならない真理ですね……。理由は、私たちそのものが永遠不滅の真理だからです。

宇宙は、実に正直に私たちの要求に応じてくれます。真実を求めれば真実が、幻を求めれば幻が……。だから聖書では、「真実を求めなさい！ さすれば必ず与えられるであろう」と謳われているのです。また聖書では、「子供がパンを欲しがるのに石が与えられまじょうか、石を欲しがるのにパンが与えられまじょうか」とも謳われています。私は求めたが与えられなかった！ “という人は、求め方が少なかつたか、間違つた求め方をしていたからです。「想念は実現の母」ですから、真剣に求めて与えられないはずはないのです。

人間が作った法は裏切りますが、宇宙(神・生命)が作った法は絶対裏切りません。真の求道者が、どんな困難にも怯まず真理を求め続けるのは、宇宙法則の完全性を信じているからです。さあ宇宙法則を信じ、求め続けましょう！ 探し続けましょう！ 叩き続けましょう！ 宇宙法則は、きつとあなたの要求に応えてくれるでしょう。

言葉三三・人間はみな同じではない！

人間は、ほぼ同じ形をしていますので、誰もが同じ人間だと思っています。でも、それは、外面を見るからであって、内面を見ればみな違うのです。内面とは意識の高さのこと、魂の熟成度のことです。人間の中に宿っている魂は、同じ時期に生まれた魂ばかりではないのです。早く生まれた魂もあれば、遅く生まれた魂もあるのです。早く生まれた魂は、それだけ体験豊富ですから熟成度が高く、遅く生まれた魂は、体験不足ですからそれだけ熟成度が低いのです。これは誰が悪いのでもなく、ただ、遅く生まれたか、早く生まれただかの違いです。でも、その違いを意識して生きることは、とても大切なことなのです。

今の人類の最大の欠陥は、命格(魂)を認めないことです。認めれば、自分より幼い魂に対して、寛容の心をもって接することができるようになります。例えば相手が分からないことをいつてきたり、喧嘩を仕掛けて

きたりしても、「まだ幼い魂なのだから許してやろう！」という、大きな心で接することができるのです。これは先輩が後輩に見せる心の余裕のようなものです。不思議なもので人間は、相手が幼い子供だと思えば、何をいわれても、何をされても、笑って済ますことができるのです。もう一つは、慎み深くなることです。すなわち、行為を慎み、言葉を慎み、思いを慎む、「身・口・意」の正しい制御ができるようになるのです。では、どうすれば、自分より幼い魂かどうか見分けることができるのでしょうか？

それは、自分の魂が今どの位置にあるのか、常に意識していることです。自分の魂の位置を冷静に判断できる人は、大人の魂です。その人は相手の魂の高さが判断できます。その人は謙虚です。人を許せます。決して増上慢になることはありません。でも子供の魂は、そんなことを少しも考えませんから、増長します。自分を偉そうに見せます。小さな問題を大きくして、人と争いを起します。下から上は見えなくても、上から下は見えるのです。魂の高さを意識できる人は、上から下を見通せる人です。その人は、相手が自分より高い魂だと思ったら、敬慕の念を持って接します。相手のいう事を良く聞いて自分の成長につなげます。反対に相手が幼い魂だと思ったら、少しでも魂を成長させてやろうと腐心します。この書を読んでいるあなたは、それができる魂です。ぜひ、自分の魂のレベルを意識して生きてください。その人は大きな心が表せます。その人はもう、人と争いは起さないでしょう。

言葉二四・進化の旅を続けてきた私たち

私たちは、永遠の旅を続けている生命核(魂)です。今、私たちは、人間の形の中に入って旅をしておりますが、ここまで来るのにどれほどの時を必要とし、どれほどの試練を潜り抜けてきたことでしょうか。では、これまで私たちは、どのような旅を続けてきたのか、ここで振り返ってみることにしましょう。

私はあるとき、もうろうとした意識の中に放り込まれました。私という意識はあるのですが、私は何者なのか分からないのです。一体、私は誰なのか？ 何者なのか？ まったく記憶が無いのです。私は不安になり、辺りを見渡しました。そのとき空間が開かれ、そこに沢山の意識核が浮遊しているのに気づきました。私は一個の意識核に近づき訊ねました。

「君は誰なの？」

でも、彼も首を傾げ、

「君こそ誰なの？」と訊きかえます。

さらに近くの意識核に同じ質問をしたのですが、誰もが「分からない？」と首を傾げるばかりです。そこで私は、「どうだろう、一緒に自分探しの旅に出掛けようじゃないか？」と提案しました。

「賛成！」「私も賛成！」と皆が賛同してくれます。

どうやら、皆自分が何者なのか知っていたようです。そのような意識核が、一つ、また一つと集まってきました。皆と一緒にいると、なぜか勇気が湧いてきます。こうして自分探しの旅が始まったのです。後で分かったことですが、この集まりの力が、神の用意された親和力だったのです。

今思えば、それはそれは気の遠くなる年月をかけての進化の旅でした。私たちはこれまで、ある時は鉱物に身をやつし、ある時は植物に身をやつし、ある時は動物に身をやつし、やっと自我を持つ人間にまで進化してきたのです。今私たちは、人間としての自覚を持っておりませんが、私たちの本性は生命です。ですから、いつまでも人間で止まっていってはならないのです。一日も早く人間を卒業し、生命の自覚を持つところまで上り詰めねばならないのです。進化の先は、生命がおられる天です。さあ、生命を目指して旅を続けましょう。それが、自分探しの旅の目的なのです。

【神様からの手紙①・意識を持っていることが生命の証である】

あなた達は、「生きる」ということについて、どのように考えていますか？「命」ということについて、どのように考えていますか？これは、人生における最大の課題なのです。

「命」とは意識のこと・・・、「生きる」とは意識があること・・・、形のあるなしにかかわらず、意識

を持っているものはみな命であり、みな生き物なのです。皆さんは、人間だけに意識があると思っていますが、どんな物にもみな意識があり生きています。石ころ一つ、花一輪、原子一個、みな意識があり生きています。現代科学は物質の中にエネルギーが同居していることを認めています。このエネルギーが命であり意識なのです。意識はエネルギーそのものなのです。だから、どんな物の中にも命があり意識があるのです。

テレビが働いているのではなく、電気エネルギーが働いているのです。冷蔵庫が働いているのではなく、電気エネルギーが働いているのです。

同様に、人間という形が生きているのではなく、意識エネルギーが人間を生かし働かせているのです。ということ、意識(エネルギー)は永遠に無くなりませんから、私たちも永遠に無くなりません。つまり、私たちは永遠に死なないということです。無くなるのは形(肉体)だけで、エネルギー(命)は永遠に無くなりません。どうか、そのことを知ってください。それも、心の底で知ってください。心の底で知らなければ、絵に書いたボタモチで終わってしまいます。

人生の目的は、家族を養うためでも、名声を得るためでも、財産家になるためでもありません。真実を知るためです。どうか真実を知ること、人生の最優先順位にしてください。

第2章 光道

私たちが生命の世界から出てきた目的は、「真実を知る！」という今生計画してきたことを遂行するためです。あなたはその計画を、どこまで遂行しましたか？ 計画にやり残しがあつては、死んでも死にきれません。肉の死は待つてはくれません。グズグズしている暇など無いのです。さあ、今生計画してきたことをやり遂げて帰りましょう。

言葉二五・私たちは人間ではない！

私たちはよく、人の道に恥じない生き方をしなさいとか、人間味を無くしてはならないとか、人間らしく生きなさいとかいいますが、人間が最高の生き物だと思っているから、そのような方をするのです。人間は神に至る進化途上の生き物であつて、最高点にいるわけではないのです。それどころか、まだ進化の下方の位置にいるのです。なぜなら、鉱物・植物・動物の次に位置しているのが人間だからです。人間の上には、無限に近い進化の階段があるのです。その下方に位置している人間に生きなさいとは、おかしい話では

ありませんか？ 私たちは一日も早く人間を卒業し、次のステップを踏まなければならないのです。そのためには、まず自分が神(生命)であることを知らねばなりません。

私たちは神の分身なのです。私たちは神から生まれた神の子なのです。神の子であるがゆえに、神になれるのです。なぜなら、子はいずれ親になるからです。蛙の子であるオタマジャクシは、幼い時にはオタマジャクシと呼ばれていますが、いずれ蛙と呼ばれるようになります。神の子である人間も、今は人間と呼ばれていますが、いずれ神と呼ばれるようになります。蛙の子は蛙なのです。神の子は神なのです。人間の子と思うから、人間の生き方しかできないのです。今私たちは、神でありながら人間と錯覚し、人間として生きているのです。それはただ、錯覚しているだけです。錯覚を解けば、そく神なのです。どうか高いレベルで人間を見てください。人間は間違いなく、神の子なのですから……。

言葉二六・・自我の自分との戦い

「人」という字は、左辺の「ノ」と右辺の「亼」が支え合った形をしております。左辺の「ノ」は、肉體人間(物質)を指し、右辺の「亼」は生命を指しているのです。人間は物質と生命の複合体なのです。つまり、陰と陽の結晶体が人間なのです。そこには、肉の自分と生命の自分の二人の自分がいるのです。自分探しと

は、この右辺の生命の自分を探すことなのです。しかし、私たちはこの世の生活に追われ、なかなか生命の自分を探せないのであります。外側に夢中になっている間は、生命の自分は探せないのです。なぜなら、「生命」の自分は外側にいるのではなく、心の奥深い密室におられるからです。

私は密室まで降りて行きました。しかし密室の前に、扉を遮るように自我の自分が待ち構えていました。その自我の自分は様々な手を使い、生命(真我)の自分に合わせないよう邪魔してくるのです。この自我と生命との戦いが、ジハードとか聖戦とかいわれる戦いなのです。私はこの戦いに、幾度負けかけたことでしょうか。ある時は感情を揺さぶり、ある時は欲望を掻き立て、ある時は病苦を与え、ある時は氣力を萎えさせるといった、巧妙な手を使って邪魔してくるのです。でも私は、齒を食いしばって戦い続けました。その甲斐あって、やがて自我の勢力が弱まりました。どうやら、生命(真我)の自分が指導権を握ったようです。自我は今も時々姿を見せますが、もう昔のような力はありません。見破れば、コソコソと逃げてしまう滑稽な存在です。

求道者の最後の戦い、それが自我と真我との聖戦です。さあ、聖戦に勝ちましょう。

言葉二七・一人の清まりは全体の清まり

コップの中に淀んだ水があるとします。そのコップの中に清い水を一滴入れたらどうなるでしょうか。清い水一滴だけが固まっているのでしょうか。それとも全体に溶け込んで行くのでしょうか。ある国のサルが芋を洗うようになったら、全世界のサルが芋を洗うようになったのも、個の影響が全体に及んだからです。意識は一つしかないのですから、個の影響が全体に及ぶのは当然なのです。ですから、「私一人良いことをやっても！」といわないでください。あなたが良い波動を出せば、全体に影響を及ぼさずにはおかないのですから・・・。

これは魂の成長にもいえることで、一人の魂の成長は全体の魂の成長にもつながるのです。つまり自分の魂の成長は、全人類の魂の成長につながるのです。意識が一つしかない宇宙において、影響を及ぼさない意識はないのです。あなたの意識は全体の意識であり、全体の意識はあなたの意識です。だからあなたが成長すれば、全体が成長するのです。どうか良い想いを持ってください。それは自分を清めるだけでなく、全人類を清めることにも、地球を清めることにも、全宇宙を清めることにもなるのですから・・・。

言葉二八・川上を掃除しよう！

世の中には、人助けを喜びとしている人たちが大勢おります。彼らは災害が起こると率先して寄付をしたり、ボランティアをしたりします。また政府も、災害復旧に力を注ぎます。確かに、寄付をしたりボランティアをしたたり災害復旧をすることは、とても大切なことです。でも、それで満足してはならないのです。なぜなら、結果対処では根本的解決にならないからです。

なぜ自然災害が多く起きるのでしょうか？ なぜ病で苦しむ人が後を絶たないのでしょうか？ なぜ地球環境が悪化の一途を辿っているのでしょうか？ それは、多くの人が悪的想念を放っているからではないでしょうか。悪的想念を放ちながら、どんなに結果対処(寄付や災害対策)しても、それは一時しのぎで終わってしまうのです。川下をどんなに綺麗にしても、川上を綺麗にしなくては根本的解決にはならないからです。私たちがすべきことは、川下を綺麗にすることではなく、川上を綺麗にすることです。つまり、良い想いを持ち、良い言葉を使い、善い行いをすることです。そうすれば、原因を取り除くことになりすから、根本的解決になるのです。悟りも同じなのです。

議論に夢中になっている人たちが現象を追いかけている人たちは、川下でゴミを拾い集めているようなものですから、悟ることはできないのです。原因(意識)を変えず、結果(議論・現象)を拾い集め、どうして悟

れるでしょうか。結果は、もう終わったものなのです。終わったものを拾い集めて何になるのでしょうか。私たちは、まだ終わっていないものを拾うべきです。終わっていないものとは、まだ現れていないもの、すなわち真実(意識・生命)のことです。私たちは、真実を拾うべきです。真実を拾ってこそ、悟ることができのです。その拾う作業が、社会体験であり、瞑想であり、思索なのです。

言葉二九・痛みや苦しみはなぜ必要か？

人間は、痛み、痛み、苦しみますが、なぜ神は、そのようなおぞましいものを人間に与えたのでしょうか。いいえ、神はそんなものを与えていません。人間の無知が、自ら苦しみを作っているだけです。でも、それは必要だからです。ではなぜ必要なのか、考えてみましょう。

一、肉体を粗末に扱うのを避けるため。

もし、痛みや苦しみが無かったら、自分の体を粗末に扱ってしまうでしょう。それでは肉体を健全に保つことはできません。肉体を健全に保てなくては、悟るところではありません。痛いから気をつけるのです。痛いから身を守ろうとするのです。痛みや苦しみは、危険から身を守る警報装置の役割を果たしているのです。この警報装置は、植物や動物にもあるのです。だから、進化の階段を登ることができるのです。

二、真劍に学ぶため。

もし、痛みや苦しみが無かったら、この世を夢や幻だと思い、誰も真劍に生きようとしないでしょう。それでは、学ぶことができません。この世が修業の道場といわれるのは、痛みや苦しみを通して真劍に学べるからです。

三、神に顔を向けさせるため。

人間は神を知るために生まれてきたにもかかわらず、一向に神に顔を向けようとしません。それでは、神を知らず、一生を終えてしまうでしょう。だから、神はそうならぬよう、痛みや苦しみを用意したのです。誰でも耐えられない痛みや苦しみに襲われると、” 神様助けて下さい！ ” と神頼みするようになるものです。この神頼みが、神に顔を向けさせることになるのです。

四、反省をさせるため。

痛みや苦しみに襲われると、” なぜ私はこんなに苦しまねばならないのだろうか？ 何かバチでも当たったのだろうか？ ” と疑問を持つようになるものです。痛みや苦しみが無かったら、自分が暴走していても気づきません。振り返ってこそ、反省してこそ、どんな走り方をしていたか気付くのです。反省は方向転換させる大変意義あることなのです。

五、疑問を持たせるため。

四、の反省は、結局人生の思索を始めるきっかけになります。人間とは何か？ 人生とは何か？ 人は死んだらどうなるのだろうか？ 等々……。これは特に、死に直面している人の中に芽生えてきます。疑問は気付きにつながり、気付きは目覚めにつながります。だから、眠っている魂には、どうしても痛みや苦しみが必要なのです。

六、因果の法則を知らしめるため。

良いことをしても、悪いことをしても、身に何も返ってこなければ、良かったのか、悪かったのか気付くことはありません。特に悪いことはそうです。悲しいことですが、人はこの身で痛みや苦しみを体験しなければ、自分の過ちに気付かないのです。痛みや苦しみは、因果の法則を知らしめる重要な役割を果たしているのです。

七、肉体の執着を解くため。

幼い魂は肉体を自分だと思い違いしていますので、寿命が来てもなかなか肉体から離れようとしません。でも、どんなに執着を持つ魂でも、耐え切れない痛みや苦しみに襲われると、肉体から出たいと思うようになります。痛みや苦しみは、肉体の執着を解く重要な役目を果たしているのです。

八、相手をいたわる心を育てるため。

自分が体験した痛みや苦しみは、結局、相手をいたわる心を育てます。”自分があれだけ痛かったのだから、相手も同じように痛いはずだ！”と……。つまり、自分の苦しみを、相手の中に見ることができるようになるのです。特に肉親の痛みや苦しみは、自分のこととして受け止められるだけに、より身につまされるでしょう。この身につまされる切迫感が、疑問をもたらし、気づきをもたらし、魂を成長させるのです。

このように痛みや苦しみは、神に顔を向けさせるきっかけになり、それが本当の自分を発見することにつながるのです。

言葉三〇・・・なぜ努力が必要か？

この世になぜ、「努力」という字があるのでしょうか。それは、努力して身に付けねばならないことが山ほどあるからです。努力という字の意味を、漢字からひも解いてみましょう。

努力という字は、「女」「又・股」「力」という字が組み合わさって出来ております。これは女性の「お産」の努力を意味しているのです。鮭が卵を産みに川を遡上するのも産む努力です。親鳥がヒナを返すため

に卵を抱くのも産む努力です。大切なものを産むためには、努力が必要ですよ！ とこの字は教えてくれているのです。

何でもそうですが、何かが欲しかったら、こちらから働きかけねば得られません。何もしないで口を開けていても、食べ物が入ってこないということです。真理も同じで、こちらから働きかけてはじめて得られるのです。努力は、思い、考え、行動を起こすことなのです。棚ぼた式で得られるものなど何一つ無いということです。

通常、高いところにいる者が、低いところに降りてくることはありません。でも真剣に望めば、情にほだされ降りてきてくれるかもしれません。でも最初に行動を起こすのは、やはり望む方です。望んでこそ、求めてこそ、与えられるのです。望む、求める、その働きかけが努力なのです。

何事も時間が解決するといわれるのは、エネルギー(意識)が時間を生み出しているからです。時間そのものには解決する力は無いけれど、時間を支えているエネルギーが解決しているため、時間が解決しているように見えるのです。そのエネルギーには、物質を変質させたり、気持ちを変えさせたりする力があるのです。だから私は、エネルギーが物事の解決を図っているというわけです。そのエネルギーを生み出すのが、想う努力なのです。

土の上に書いた線は、雨が降ればすぐ消えてしまいます。でも何度も書けば、少々雨が降っても消えなくなりません。それは、繰り返し書くことで溝が深まったからです。瞑想も同じです。繰り返し行えば、溝が深まり根付いてゆくのです。原因を積み重ねれば、深い結果が得られるということです。その原因を積み重ねる努力が、何事も成就させるのです。

この世に生を受けた者は、みな落第生です。まだ課題を克服していないから、この世に落されたのです。そんな落第生が、何もしないでノホホンと生きていいでしょうか。そうです。落第生には努力が必要なのです。といっても、苦しむほど努力しなさいといっているわけではありません。与えられた今の環境の中で、精いっぱい努力しなさいといっているのです。

表現の世界は創造の場です。思いは創造の力です。想念が実現の母といわれるのは、思いが行為に結びつき、行為が結果を生むからです。その思いは、努力心から生まれるのです。心を動かすのも、努力だということです。努力なしに何も生まないことを知ってください。

エネルギーの高いものは、高いところに位置しています。エネルギーの低いものは、低いところに位置しています。これは白い雲が高い位置に、黒い雲が低い位置に浮いていることでも分かるでしょう。雲さんたちは、どうしたら高い位置に昇ることができるか、今学んでいる真つ最中というわけです。これは位置エネ

ルギーの高さを示しており、私たちに大切な示唆を与えているのです。つまり、位置エネルギーの高い者はそれだけ努力して高いところに入った結果であり、低い者は怠けて努力しなかった結果であるという暗黙の示唆です。その怠け者の代表が、地を這う蛇です。だから、蛇には天敵が多いのです。地を這う生き物に天敵が多いのは、まだ沢山努力する必要がありますからです。人間も地を這う生き物ですが、それはまだ沢山努力する必要がありますからです。努力は、魂を高い所に引き上げてくれるのです。努力すればするほどエネルギーが高まり、高い位置に昇れるようになってるのが、この宇宙の仕組みなのです。だから私は、努力が大切だというわけです。

言葉三二・・・自分を変えるには？

今の自分に嫌気がさしているあなた！ 自分の人生が無意味に思えるあなた！ 前が真っ暗で何も見えないあなたに進言したい、ぜひ私の勧めめることを実践してみてくださいと・・・きつと自分を変えることができるでしょう。では、何をどう実践すればいいのでしょうか。

あなたは今、本当に精いっぱい生きていますでしょうか。何かから逃げていないでしょうか。努力しているでしょうか。向上心を持って生きていますでしょうか。もし何かから逃げているなら、逃げないでください。

これが自分を変える基本的生き方です。なぜなら、私たちの生命核（魂）は、精いっぱい生きれば生きるほど増える仕組みになっているからです。普段の生活でさえ生命核は増えるのですから、精いっぱい生きて増えないわけがないのです。思ったら行動を起こすことです。肉体を動かすことです。行動を起せば、間違いない原子核は増えます。

“私は真理を実践しているのに何も変わらない！”という求道者がおりますが、それは頭でっかちになり、実際に行動を起こしていないからです。つまり知識に溺れ、実際に行動を起こしていないからです。座って何もしないで自分が変わるわけがないのです。原因あつての結果です。原因を変えず、結果が変わるわけがないのです。求道者なら、行動を起こしてください。まずは、社会体験をすることです。そして、思索をすることです。更に、瞑想をすることです。そうすれば、間違いなく変わります。例え、外面は変わらなくても、内面は間違いなく変わります。私のいうことを信じ、ぜひ挑戦してみてください。

言葉三三二・・・反省も自分を変える方法の一つ

私たちの本性は神ですから、本来、私たちの心には、シミ一つついていないのです。しかし残念なことに、殆どの人が心に汚れを付けております。でもそれは、汚れが付着しただけで、心そのものが汚れたわけでは

ないのです。汚れを落とせば、そく神の心に戻すことができます。良く水が汚れたといいますが、いまだかつて水が汚れたことは一度もありません。水にゴミが付着しているだけです。ゴミを取り除ければ、そく綺麗な水に戻るのです。心の汚れも同じなのです。ではどうすれば、心の汚れを落とすことができるのでしょうか？ それは、反省(懺悔)をすることです。反省(懺悔)は、心の汚れを落とす一番の方法なのです。(反省の仕方は、人類の夜明2「自分を変える瞑想」の中に書いてありますので参考にしてください。)

反省で一番大切なことは、反省後「二度と過ちを犯さない！」と堅く良心に誓うことです。あとは、心に汚れを付けないよう日々注意して生きれば、神の心と自分の心が同調し神の光が入ってくるようになります。この現象は第一次の変性変容が起きたことを意味し、自分が変わった証です。このように、反省によっても自分を変えることができます。

言葉三三三・・・波動を高める簡単な方法

この宇宙で一番波動の低いのは物質です。次に低いのは幽質です。一番高いのは霊質です。物質文明が栄えると病気が増えるのは、物質人間が多くなり、地球の波動を落してしまうからです。今地球の波動は最低にまで落ち込んでいますが、これを上げることができるのは、唯一波動を落としている人間です。波動を落

としたのも人間ならば、上げるのも人間なのです。波動を上げる一番の方法は瞑想ですが、瞑想はなかなか難しく一般人には不向きです。そこで私は、次のようなことを提唱したいと思います。

それは、 “ありがとう！ はい！ 行ってきます！ 行ってらっしゃい！ お帰りなさい！ お休みなさい！ おはようございます！ いただきます！ ごちそうさま！” といった言葉を、意識して使うことです。日常生活で使っているごく当たり前の言葉ですが、ただ儀礼的に使っているだけで、意識して使っている人は殆どいません。意識するという意味は、「心から」という意味です。

心から有り難いと思うから、 “ありがとう！” というのです。
心からそうだと思うから、 “はい！” と返事するのです。

心を込めて使った言葉には、その人の心音を感じられます。この心から語ることを本音で語るといい、神の媒体としての大切な役割の一つなのです。本音とは、神の御心が奏でる響きのことで、言霊(ことだま)のことです。言葉は、心がこもってこそ生きてくるのです。心を込めて語った言葉は、間違いない波動を高めます。ぜひ、心を込めて良い言葉を語るようにしてください。そのような人が一人でも多くなれば、地球の波動は間違いない上がります。小さなことかもしれませんが、難しいことをやるより、できることから始めた方が確かだと思ひ勧めます。ちなみに波動の良い言葉は、「あ・い・う・え・お」のあ行の清音の

言葉です。「愛！　ありがとう！　うれしい！　安心！　平安！」などの言葉は、その清音の代表でしょう。反対に波動の悪い言葉は、「ば・び・ぶ・べ・ぼ」のば行の濁音の言葉です。バカ、グズ、ドジ、ブス、ダメなどの言葉は濁音の代表かも知れません。言葉も使うなら、できるだけ波動を高める「あ行」の言葉を使うようにしましょう。

言葉三四・・汝の理解力が汝を救う！

「汝の信仰汝を救う！」とは、「汝の理解力が汝を救う！」という意味なのです。なぜ理解力が高ければ汝を救うのかといいますと、理解力の高い人は法を犯す愚かなことはしないからです。壁に頭をぶつければ怪我をします。これは、「ぶつけた」原因に対して「怪我」という結果が帰ってきたからです。この法則を知りながら、わざわざ壁に頭をぶつけに行く人はいません。でも理解力の乏しい人は、自らぶつけに行くのです。それは、法の存在を知らないからです。知っても、認めないからです。認めても、信じないからです。世の中には、このような人たちが沢山いるのです。世間の人たちは、苦しんでいる人を見て可愛そうだと思いますが、これは自業自得なのです。人間は、この身で痛みや苦しみを体験しなければ、法の存在を認めようとしないし、信じようとしないのです。だから私は、可愛そうだと思う代わりに、”一日も早く理

解力を高め、法の存在を認めてください！信じてください！実践してください！”と祈るのです。

言葉三五・環境を変えるには？

世間には、“一向に環境が変わらない！”と愚痴をこぼす人がおりますが、それは努力が足りないからではありませんか。例えば、一生懸命努力して成績を上げれば、会社での地位も給料も上がるでしょう。そうなれば、アパート暮らしからマンション暮らしに変えられるかもしれません。もっと努力すれば、一軒家が持てるかもしれません。それどころか重役に抜擢され、大邸宅が持てるかもしれません。心の環境を変えるのも同じなのです。

努力して疑問を追及すれば理解力が高まります。理解力が高まれば気付きが起き、気付けば自覚が高まり変性変容が起きます。これは努力という原因に対して、変性変容という結果が起きたためです。怠けていて、どうして環境が変わりましょうか。怠けているということは、歩いていないということですから、景色(環境)が変わるわけがないのです。私が他力を否定するのは、自分の足で歩かなければ前に進まないからです。進まなければ、周囲の景色(環境)が変わるわけがないのです。

自分の足で歩くという意味は、

- ・嫌なことに挑戦し、自分を大きくするという意味です。
- ・普段の生活の中で、生命を意識し、生命に委ね、生命に生きるという意味です。
- ・思索をするという意味です。(自分に疑問を問いかける)
- ・自力で理解力を高めるという意味です。
- ・瞑想し自覚を高めるという意味です。

何事も努力なしには得られません。これは当たり前のことです。もし努力も向上心も不要なら、この世にそのような言葉は無かったです。あるのは、まだ人類に必要なからです。

言葉三六・ポックリ死ぬことは良いことか？

世の人々は、ポックリ死ぬことを願っております。苦しまず一瞬のうちに死ねれば、こんな幸せな死に方はないからです。でもポックリ死ぬことは、本当に良いことなのでしょうか？ 世間ではガン宣告することを避けています。特に末期ガン患者に対しては、その傾向が強いです。今の医学ではガンは死を意味するので、宣告された途端絶望し生きる気力を失ってしまうからでしょうが、でも刻々と死が近づいているというのに、何の準備も何の学びもさせず過ぎさせることが、本当に本人のためになっているのでしょうか。

ガンで死ぬ人は、死ぬまで相当の時間が与えられます。ガン宣告はショックかもしれませんが、宣告されることで本人は、きっと人生の思索を始めるはずです。ガン患者は最後の学びをしようとしているのです。

・死とは何か？

・人は死んだらどうなるのか？

・人生とは一体何だったのか？ など・・・。

この思索は魂を大きく飛躍させます。自殺や横死が犬死だといわれるのは、ポックリ死んでは何の学びもできないからです。その意味では、死刑執行まで時間が与えられている死刑囚は、少なからず学んで帰っているはず。死刑囚とガン患者を一緒にするのは不謹慎かもしれませんが、思索の時間が与えられている点では同じだと思います。だから私は、死ぬまで時間の与えられるガンに「ありがとう！」といたいのです。（死ぬまで時間の与えられている他の病気も同じです。）

本当にその人を愛するのなら、苦しみを避けて通してはなりません。非情な言い方ですが、これは愛するがゆえと思ってください。とはいっても、青い果実を強引にもぎ取るようなことはしないでください。つまりガンを宣告するにしても、魂の成熟度がどれほどか？ 本人の心情がどのような状態か？ さらに良くよく機会を伺い、適切な判断を持ってやることです。もし、魂が幼すぎて宣告が耐えられないようなら、避ける

べきでしょう。

苦しんでいるのは、当人だけではありません。肉親も一緒になって苦しんでいるのです。その苦しみを苦しみで終わらせないためにも、病気から学んでください。人間は近視眼的なモノの見方しかできませんので、事の真意が把握できないでおりますが、神の意図は苦しみの中にこそ息づいているのです。どうか、苦しみの奥に隠されている真意をくみ取ってください。そうすれば、苦しみや悲しみの意味が納得して受け入れられるでしょう。本当は、苦しまず死を迎える方がいいに決まっています。でも幼い魂の多い今の地球では、死の苦しみは必要なのです。その意味において死は、地球人類の魂の成長につれ、静かに、穏やかに、ポツクリと、やってくるようになるでしょう。

言葉三三七・・・生命核(魂)・原子核を増やす三つの方法

①決意(決心)することによって増やす方法

瞑想は生命核(魂)を成長させる最も有効な手段ですが、決意(決心)が生命核(魂)を成長させることは、あまり知られておりません。これは大変な見過ごしであり、求道者にとって大きな損です。私たちの思いと行いを良く観察してみてください。意識するしないにかかわらず、行動する前には必ず決意が伴っているはずで

す。たとえば手足を動かす場合も、勝手に手足が動いているのではなく、動かそうと思って動かしているはず。もつとも無意識に近い反射運動もありますが、これは浅い意識レベルの（エネルギー的に低い）決意の伴わない行動ですから、魂の成長にはあまり貢献していません。しかし、深い意識レベルでの行動には、必ず決意が伴っていますから、魂を成長させているのです。

やろうと強く決意すると、エネルギーが集まるのです。それは意識核が集まること、原子核が増えること、すなわち魂が成長することなのです。それも嫌なことであればあるほど強い決意が必要ですから、それだけ魂が成長するのです。たとえば、冬の朝、寒ければ寒いほど寢床から出るのに強い決意がいるでしょう。人の嫌がる仕事を引き受けるにも、強い決意がいるでしょう。人にお金を恵む場合も、なけなしのお金を恵むときには強い決意がいるでしょう。私たちは嫌なことを避けたがりますが、これは魂の成長にとって大変な損なのです。このことについて、私の体験談を二つほど紹介しましょう。

それはそれはとても嫌な集会があり、そこで謝らなければならぬ立場になったことがありました。そのとき手足が震えるほどの強い勇気と決意がいりました。でも、やり終えた後の達成感、あのすがすがしさ、あの充実感、嫌なことを補って余りあるものでした。私はそのとき、何となく自分が成長した感じがして嬉しくなったものです。もう一つは、人生の一大転換を図ったときのことです。そのときの私は、断崖絶壁

から飛び降りるくらいの勇氣と決心がいりました。でも、やり終えた後の私は、すっかり人が変わってしまったのです。これは原子核が増えたために起こった変化だと、今でも私は思っています。このように私の体験からいっても、嫌なことに挑戦すればするほど自分を成長させることができるのです。だから私は、人から嫌なことを押し付けられたら、宝物をタダでもらったようなものだから喜んで引き受けなさいというのです。でも多くの人は、嫌なことを人に譲ったり先送りしたりしています。どんなに先送りしても、課題を克服しない限りまた同じ課題が与えられるのですから、先にやった方が気楽です。では、なぜ私たちは嫌なことを避けたがるのでしょうか？

私たちの肉体には五感が備わっていますが、この五感とは、心地良いもの、快適なもの、怠惰なものに傾きやすく、苦しいこと、きついこと、厳しいことは避けたがるのです。サタンの誘惑とは、この五感(肉欲)の誘惑のことをいっているわけですが、殆どの人はこの誘惑に負け楽な方へ楽な方へ身を置いています。特に快適・便利・快楽を追い求める今日の文明は、多くの人たちを墮落へと運んでおります。確かに嫌なことはいたくないものです。でも、それでは、魂を成長させることはできないのです。どうか強い決意をもって自我(サタン)の誘惑を退けてください。これが聖戦とかジハードとかいわれる戦いで、私たちはこの戦いに勝つてこそ、この世に生まれてきた甲斐があるのです。

近年、嫌な仕事を外国人労働者に押し付けける傾向にあります。これは日本人にとって大きな損です。人の嫌がる仕事を率先してすれば、自分を大きく成長させることができます。決して人に押し付けな
いこと、逃げないことです。インドのマザーテレサは生涯人のために身を捧げましたが、それは自分のため
でもあったのです。もし、人から嫌なことを押し付けられたら、自分が成長できるチャンスだと考え、喜ん
で引き受けてください。

② 思索によって増やす方法

私の恩師である知花先生は、常々「なぜ? なぜ?」と疑問を持ちなさいとおっしゃっておられました。
それは、大自然の中に真理を解くカギが隠されているからです。大自然はまさに神の体現化したものです。
その大自然の中に、人間の謎を解くカギ、宇宙(神)の謎を解くカギが、教材として隠されているのです。神
は人間に、「この教材を通して真実を知りなさい!」とおっしゃっておられるのです。謎を一つ解けば気
付きが起き、気付けば原子核が増え、神の自覚が高まります。どうか疑問を持ってください。思索してくだ
さい。神が何を目的として自然界を作られたのか、考えてください。それが神に近づくコツです。神の自覚
を得るコツです。

③ 瞑想によって増やす方法

この宇宙には神の意識核、すなわち原子核が無数に浮遊しております。通常その原子核は、宇宙に均一に遍満しているため、そのままでは使いものになりません。使えるようにするためには、濃縮しなければならぬわけですが、その濃縮作業が瞑想なのです。なぜ瞑想すれば原子核が増えるかといいますと、私たちの想念は、エネルギーを集める力を持っているからです。想念力といわれるように、想念は創造力そのものなのです。エネルギー＝原子核ですから、想念力を利用すれば原子核を増やすことができるのです。瞑想は、遍満している原子核を早く多く集める有効な手段なのです。

言葉三三・人間の思い癖を取る

私たちは気の遠くなる年月、人間として生きてきたために、神でありながら神と思えなくなってしまいました。オオカミに育てられた人間の子が、オオカミだと信じ込んでしまったように・・・この思い癖を取るには、神に対する深い理解力と気づきと瞑想が必要です。どうか理解力を持って「吾神なり！」の瞑想をしてください。人間の思い癖を取るには、何度も何度も「神」を瞑想するしかありません。根気良く想い続けていけば、必ず思い癖は取れます。くだいようですが、「私は神である！」と無意識に思えるようになるまで想い続けてください。騙されたと思って想い続けてください。例え今生何の変化が起きなくても、決し

て無駄になることはありません。それは原因と結果の法則が、裏支えしてくれているからです。原因を作れば、必ず結果に結びつきます。これは宇宙の法則ですから、間違いありません。自分探しの旅は、今までも続いていたし、今も続いているし、今後も続きます。やれば、必ず成果が上がります。「神を想い続けること、瞑想すること」これが自分探しの旅の秘訣であることを知ってください。

言葉三九・天上天下唯我独存(尊)の意味

お釈迦様は生まれてすぐ三步あゆむと、天と地を指さしながら「天上天下唯我独存(尊)」と唱えたといわれます。でもこれは、お釈迦様を神秘化するために作り上げた偽りの話です。お釈迦様は、私たちと何ら変わらない手順を踏んで生まれた普通の人間です。どうでしょう。生まれたばかりの赤ちゃんが歩くと思いませんか？ 話すと思いませんか？ 天上天下唯我独尊の字も意味も、誤謬化して伝えられています。「天上天下唯我独尊」という字が使われていますが、本当は「天上天下唯我独(存)」が正しいのです。その意味も、「この宇宙で自分が最も尊い者」と伝えられています。本当は「この宇宙には自分(私)しか存在しない！」というのが正しい解釈なのです。事実お釈迦様は説法の中で、「この宇宙には私しか存在しません！」とはっきりいっておられます。この「私しか！」という意味は、仏しか(神しか)存在しないという意味です。

その私が仏(神)の化身ですから、お釈迦様が「私しか存在しない！」
“といった理由も分かろうというものです。(仏と神は同じ)

言葉四〇・・・本音で語る

よく本音で語りなさいといいますが、この本音とは何かといえますと、本心(神の心)から発せられた音のことです。この本音は神音とか聖音とか呼ばれ、波動の高い精妙な音なのです。この宇宙には清く精妙な波動の高い、この聖音のみが存在するのです。でもその聖音はあまりにも精妙なため、通常音として捕えることはできません。音にするためには媒体が必要になるわけですが、その役割を担っているのが人間なのです。人間の声帯は、まさに神の思いを響かす聖なる場所です。だからその場所を、「のど仏」とか「聖帯(声帯)」とかいわれているのです。しかし残念なことに、今の地球人類の「のど仏」からは、歪んだ音が多く発せられております。歪んだ音とは、偽心で語る言葉のことです。だから今地球人類は、役割を果たしていないのです。今の地球において聖音を降ろす役割を担っているのは、聖人たちだけです。

ちなみに聖人という字には、次のような意味があります。「聖」という字は、「耳」と「口」と「王」(王とは天のこと)と書きますが、これは天の言葉を正しく「耳」で聞き、正しく「口」に出して話す人のこと

を指しているのです。天の言葉は波動が精妙なため、正しく受け取るには大きな耳が必要です。また口が歪んでいては、正しく伝えることができませんのでまっすぐな口が必要です。だから聖人の耳たぶは大きく、口はまっすぐな口をしているのです。政治家に口の歪んだ人が多いのは、偽りの言葉を多く語っているからです。

この聖音は二千五百年前にはお釈迦様を通して、二千年前にはイエス様を通して降ろされました。では今は、聖音は降ろされていないのでしょうか？ いいえ、この地球上に聖音の閉ざされた時代は一度もありません。いつの時代にも、どんな場所にも、どんな人種にも、聖音は平等に届けられています。天はえこひいきするようなことはしないのです。ただ降ろされた聖音を、どのような解釈力を持って受け取るかが重要なのです。

聖音を正しく受け取るには、次のような注意が必要です。

- 一、素直に受け取ること。
- 二、既成概念や観念を捨て、先入観のない真っ白な心で受け取ること。
- 三、頭で受け取るのではなく、心で受け取ること。
- 四、権威や名声を物差しにすることではなく、語られた言葉の内容(波動)を物差しにすること。

以上の四点を守れば、歪みのない聖音を受け取ることができましょう。先程、地球上に聖音の閉ざされた時代は無いとしましたが、理由は、聖者がこの世を去る時には必ず後継者にバトンタッチして帰るからです。

言葉四一・特別な話ではない！

外側のモノは、外側にいる人は貰えます。でも内側のモノは、外側にいる人は貰えないのです。貰うためには、外側の扉を開けて内側に入らねばならないのです。これは当たり前の話であって、何も特別な話ではありません。しかし人間はどうしてか、外側において内側のモノを貰おうとしているのです。これでは、いつまでたっても内側のモノを貰うことはできないでしょう。しかし、そのことに一人も気づいていないのです。外側のモノとは、物質のことです。内側のものとは、真理のことです。外側のモノは誰からでも貰えますが、内側のモノは当人しか貰えないのです。なぜなら、内側のモノは一人ひとりの心の中にあるからです。だから欲しかったら、自らが外側の扉を開け内側に入らねばならないのです。それは人に頼んで、できることではないのです。

どうか、内側に入って真理を受け取ってください。それは、あなただけにしかない自力です。他力信

仰が無意味なのは、自力でしか内側の扉は開けられないからです。宗教は他力です。科学は自力です。だから私は、科学的な生き方をしなさい！というのです。

言葉四二一・無名でありなさい！

世の人々は、有名人になることを憧れているようですが、私は「無名でありなさい！」といたいのです。理由はこうです。

有名という字は、「名」が「有」と書きますが、名が有るということは、限定されているということです。今でさえ、人間という名に限定され、個人という名に限定され、誰の誰べえという名に限定されているのに、これ以上名前に限定されてどうするのでしょうか。私たちの本性は、自由無碍なる生命ですから、本来名前も自由でなくてはならないのです。自由とは、制限が無いということです。無碍とは、障害がないということです。つまり、無限であるということです。その無限を指さなければならぬ生命が、どうして不自由な名に囚われるのでしょうか。有名であればあるほど、動きがとれなくなってしまうのですよ！その証に、有名人は、いつも自分を殺して生きております。顔形を気にし、着る物を気にし、言葉づかいを気にし、行いを気にし、常に人目を気にして自分を殺しています。

白色の中には無限の色が包含されておりますが、その白色から赤色だけを取り出してみてください。赤色だけの小さな存在になってしまいます。無名の中から有名を取り出してみてください。有限の小さな存在になってしまいます。私は、そんな小さな存在になりたくありません。だから私は、「無名」でありたいと願うのです。どんなに有名になっても、この世限りのものであって、永遠に名が残るわけではないのです。しかし宇宙の中で「無名」になったら、宇宙は永遠ですから永遠に名が残るのです。名に囚われて、大きな自分を小さな自分にしないでください。できたら、今持っている誰の誰べえという名前さえ忘れてください。世の中には、「空海」だとか「天海」だとか、偉そうな名前を付けている人がおりますが、彼らは真理の中で人を引きつけられないから、名前で権威を保とうとしているのです。私の恩師である知花敏彦先生は、生まれもった名前を一生通して使われました。ナザレのイエスも、ゴータマ・シッダールタ（お釈迦様）も、生まれもった名前です。一生通されたのです。キリストだとか、ブツタなどの偉名は、後の人たちが付けた異名です。

この宇宙は、たった一様の神によって創られたのですから、創られたものはみな神であるはずですよ。すべてのものが神ならば、神という名が一つあればいいものではありません。人間が神から遠ざかってしまったのは、人間の名だけでなく、個人の名まで付けてしまったからです。個人名は、有限を意味するため小さな

存在にしてしまうのです。でも「無名」は、無限を意味するため大きな存在にしてくれるのです。私が「かとう はかる」という名を重視しないのは、すでに神という名を持っているからです。私たちは神の子ですから、本当は神(生命)という名を一つ持てばいいのです。だから仏教では、人間から神に改めるという意味で、戒名(正しくは改名)しなさいというわけです。いずれ私たちは、みな神という一つ名を持つようになるのです。ちなみに「無名」とは、一つ名という意味です。すなわち、たった一つしかない「神の名」のことを、「無名」というのです。

言葉四三・・・精神性の高い人とは？

見えないモノを信じられる人は、意識の高い人です。反対に信じられない人は、意識の低い人です。この宇宙の真実は、見えないモノの中に隠されていますから、見えないモノを信じられる人は精神性が高いのです。では宇宙の「真実」とは何でしょうか？

真実の「実」とは、結実したものの、形に現れたもの、つまり表現世界のことを意味します。「真」とは、「真空」といって見えない空を意味します。「空」はエネルギーあるいは命のことですから、通して解釈すれば、見えない「モノ」と見える「物」が一体となった表現宇宙が「真実」という意味になります。精神性

の高い人はそのことが理解できるため、見えないモノが信じられるのです。エネルギーは見えません。命も見えません。でも、その見えないエネルギー(念)が、この宇宙を差配しているのです。だから、常にエネルギーの高低が問題になってくるのです。精神性の高い人は、エネルギーが高いため知恵が豊かです。判断力が鋭いです。悪を嫌います。謙虚です。素直です。純粹です。向上心が旺盛です。我慢強いです。エネルギーの持つ性質上、そのようになるのです。これは転生輪廻において培った、徳といつてもいいかもしれません。精神性の高い人は、エネルギーを高めるために日夜瞑想しています。嫌なことにも怯みません。常に疑問を持っています。どうか精神性の高い人になってください。真実の扉を開く権利は、精神性の高い人に与えられていることを知ってください。

言葉四四・・・何を追い求めるべきか？

私たちはいったい、何を追い求めるべきでしょうか？ 消えて無くなるお金や物や地位や名声でしょうか？ それとも永遠に無くならない真理でしょうか？ 永遠に無くならない真理ですね。理由は、私たちそのものが永遠不滅の真理(神・生命)だからです。宇宙は、実に正直に私たちの要求に伝えてくれます。真実を求めれば真実が・・・幻を求めれば幻が・・・。だから聖書では、「真実を求めなさい！ さすれば必ず

与えられるであろう。」と謳われているのです。また聖書では、「子供がパンを欲しがるのに石が与えられましようか、石を欲しがるのにパンが与えられましようか」とも謳われています。私は求めたが与えられなかったという人は、求め方が少なかつたか、間違つた求め方をしていたかのどちらかです。「想念は実現の母」ですから、真剣に求めて与えられないはずがないのです。

人間が作った法は裏切りますが、宇宙(神・生命)が作った法は絶対裏切りません。真の求道者が、どんな困難にも怯まず真理を求め続けるのは、宇宙法則の完全性を信じているからです。さあ、宇宙法則を信じましよう！　宇宙法則を守りましよう！　宇宙法則を実践しましよう！　宇宙法則は、きっとあなたの要求に応えてくれるでしょう。

言葉四五・・即身成仏とは？

即身成仏とは、ミイラになることではありません。肉体を持ったまま生命の自覚を持つことを、即身成仏といふのです。生命の自覚を持った人は、肉を持ちながら生命なのです。地にいながら天にもいるのです。すなわち、成仏しているのです。「死んだらみな仏になるのですよ！」というお坊さんがおりますが、人間だと思って死んだ人が、どうして生命だと思えるようになるのでしょうか。人間だと思っている人は、死んで

も人間だと思っっていますので、向こうへ帰っても人間のままでおります。つまり彼らは、人間意識を持ったまま幽界に留まっていますのです。ですから幽界は、迷った人たちで一杯なのです。慣性の法則は幽界でも働いていますので、肉体に執着を持っている幽界人は、再び肉を持って生まれてきます。つまり輪廻転生するのです。生命の自覚を持った人は、肉体を脱いだら直接靈界(生命の世界)へ帰りますので、もう肉を持って生まれることはありません。

よく滝行や、断食行や、山野を駆け巡るなどの荒業をして悟ろうとする人がおりますが、肉体をいじめて悟った人などいまだかつて一人もいません。肉体をいじめて悟れるなら、スポーツ選手はみな悟っていないではありません。悟りはあくまでも意識状態です。心の中でできごとです。だから、肉体業はしないことです。

言葉四六・現象に囚われている限り、真実を掴むことはできない

世の中には、霊が見えるとか声なき声が聴こえるとかいう人がおりますが、真理を追究する者にとってこれほど障害になることはありません。なぜなら、真実から目が逸らされてしまうからです。不思議なことができるから、何かが見えるから、何か聴こえるから、意識が高いのではありません。そういう人は幽界の

低い階層に結びついていきますので、返って意識の低い人なのです。私たちが求めるべきものは真理です。本当の自分です。それは、何かが見えたり聴こえたりするところには無いのです。真理は無形無双の光一元の世界にあるのですから、決して現象の世界(闇の世界)に興味を抱いてはなりません。

真の求道者は真理のみを追い求めます。彼らは謙虚です。素直です。向上心が旺盛です。忍耐強いです。諦めません。自尊心で真理を閉ざす愚かなことはしません。特別なことのできる人は自尊心が強いため、人のいうことに耳を貸そうとしません。ですからそのような人は、今生真理を掴むことは絶対できないのです。さあ、真理のみを追い求めましょう。そこには何の奇跡も、何の現象も、必要ないのでから……。

言葉四七・・神になるのに努力はいらない!?

学びの友の中に、このようなことをいう人がおりました。

”お風呂に入ってくつろいでいたとき、突然自分が神だと気付いた、だから私は神になる努力はしなくていいのです。何せ私は、このままにして神なのですから・・・”そういつて彼女は、以後瞑想しなくなったのです。確かに人間は神ですから、神になる努力は必要ありません。でも彼女は、本当に心の底から自分を神だと思っているのでしょうか？ 神と気付くことと、神の自覚は別なのですよ？

人間はもともと神です。生まれながらにして神です。このままにして神です。だから仏典にも聖典にも、努力して神になるとは一言も書かれていないのです。何と書かれているかといいますと、「人間は生まれながらにして神仏である！」と書かれているのです。だからといって、今まで散々人間として生きてきた者が、急に神と考えるようになるでしょうか？ もし努力せず神と考えるようになるなら、どうして聖者たちは瞑想するのでしょうか？ 神と考えることが難しいから、瞑想しているわけではありませんか？

どうでしょう。地金が金だからといって、金にまつわり付いているド口を取らないで金の輝きが出せませんか？ 今までアヒルと誤解し地を這い回り回っていたカモが、目覚めたからといって急に空を飛べるようになれますか？ 今まで人間と誤解し生きていた者が、神だと知っただけで、急に神だと思えるようになれますか？ 金を輝かせるにも、空を飛べるようになるにも、神と考えるようになるにも、それなりの努力が必要なのです。

彼女は、気付きと自覚を誤解して受け取っているのです。もともと神だから神になる努力はいらないけれど、神と考えるようになる努力はいるのです。この点を誤解するから、”瞑想など必要ない！” “など” といひ出すのです。もし彼女が本当に神だと思えているなら、変性変容が起きているはずです。変性変容が起きないのは、単に神だと気付いただけで、実際には神の自覚がないからです。どうでしょう。本当に草木

が成熟しているなら、花を咲かせ実を付けているのではありませんか？ 花も実も付けないのは、そこまで草木が成熟していないからではありませんか？ つまり神の自覚がないから、変性変容が起きないのです。ではなぜ、そのことに気付かないのでしょうか？ それは増長しているからです。自分を優秀な魂だと自負している者は、どうしてもこの落とし穴に陥りやすいのです。だから彼女は、いまだに自我人間として生きております。どんなに偉大な魂でも、神の自覚がなければ、自我人間と何も変わらないのです。どうか尊大な心を捨ててください。謙虚になってください。この表現世界に「努力」という言葉があるのは、まだ「努力」する必要があるからです。どうか「神に気付くこと」と、「神の自覚を得ること」を、混同しないでください。

言葉四八・・私たちは天使である

天使とは、「天」の「使い」という意味です。天とは神のことですから、天使とは、神の使いということ。私たちは肉体と生命の結晶ですから、誰でも天使の資格を持っているのです。ただ、生命の自覚が持てないから、天使でありながら天使の生き方ができないだけです。この宇宙に天使でないものなど一物も無いのです。どんななものも、神の意識核によって創られた神の分身ですからみな天使なのです。神は自分を表

現するために、この表現世界に自らを分化し遣わしたのです。神の使いこそ、天の使い、すなわち天使たちなのです。だから鉱物も、植物も、動物も、天使たちです。ならば、人間が天使なのは当たり前ではないでしょうか。天使でありながら、人間として生きている私たち、何と哀れなことでしょう。私たちの中には、間違いなく天使の種が宿っているのです。その種に水を与え、光を与え、大切に育てましょう。そうすれば、必ず芽を出し花を咲かせ実を着けるでしょう。さあ、自分が天使であることに目覚めましょう。

「人」は、肉体と生命の結晶なのです。どちらが欠けても、「人」の存在はないのです。ということは、この表現世界に送られた時、すでに半分天使の資格を持っていたということなのです。その半分の資格を持つ人間は、やがて完全なる天使になるのです。どうか、天使としての自覚を持ってください。天使として生きてください。あなたは間違いなく、天から遣わされた天使なのですから……。

言葉四九・堂々と神を語ろう

この地球には、アラーとかヤハウエとか仏陀とかゼウスなど、様々な神の呼び名がありますが、この宇宙にはたった一様の神しかおられません。呼び名は違って、みな同じ神なのです。ただ、その時代にその地域でどう呼ばれていたか、それだけのことです。神は一樣です。その一様の神が私たちなのです。ですから

イエス様は、私は血や肉に非ず！「吾神なり！」とはっきり宣言しておられたのです。お釈迦様も、私は人間に非ず！「吾仏なり！」と宣言しておられたのです。しかも彼らは、「あなたたちも神なのですよ！」とはっきりいっておられたのです。「私だけが神だ！」とはいっていません。ということは、今人間だといっている私たちは、嘘をついていることになりませんか？ そうです。私たちは神なのに、今人間だと嘘をついているのです。これは神に対する冒瀆です。神は一樣です。一樣の神が、鉱物・植物・動物・人間の中に宿って生きて働いているのです。どうか、人間と嘘をつかないでください。大人が嘘をつけば、子供たちも嘘をつきます。どうか子供たちに、“私たちは神ですよ！”と本当のことを告げてください。そろそろ地球も、そのような時代に入っても良い頃です。どうか、堂々と神を語れる世の中にしてください。きつと神は喜んでくれると思います。

言葉五〇・・真の目明き人とは？

目明き人には、第一段階の目明き人と、第二段階の目明き人がおります。第一段階の目明き人とは、五感で物を体験し理解できた人、つまり今の人間のことをいいます。私たちは普段、目で物を見て見えていると思っていますが、これでは本当に見えているとはいえないのです。その物が理解できて、はじめて見えてい

る状態になるのです。理解できないものは、(納得できないものは)ただ網膜に写っているだけで、実際に見えている状態になっていないのです。だから赤ちゃんは、なめたり、しゃぶったり、触ったり、匂いを嗅いだり、叩いたりして物を理解しようとしているのです。今私たちが納得して見ている物も、実際この身で体験し理解した物ばかりです。ですから一度も見たことのない物は、見ていても実際に見えている状態になっていないのです。このように、第一段階の目明き人とは、五感で物を理解し納得できた人間のことをいいます。

第二段階の目明き人とは、物の本質を理解し納得できた人のことをいいます。物の本質が心底で理解できるようにになると、見えないモノが観えるようになってくるのです。お釈迦様がいつていた「正見」とは、物を色や形で見るのではなく、物の本質を観なさいということだったので、そのためには、物の本質を見る理解眼(心眼・本質眼)を開かねばなりません。覚者たちは、この理解眼が開かれています。このように、第二段階の目明き人とは、物の本質を理解力で観れる覚者たちのことをいいます。

今地球上では、痛ましい出来事が多々起きていますが、これは人類が第二段階の目明き人になるための試練です。つまり今人類は、様々な痛みや苦しみを通して理解力を身につけ、目明き人になろうとしている真っ最中というわけです。痛みや苦しみは、大いなる疑問を持たせることができます。中でも病気はその筆頭

です。病気は、人類を成長させるための事案なのです。その事案を解決するには、物の本質を追求する必要があります。があるのです。

なぜ物の本質を追求することが大切かといいますと、形は時と共に消え去る幻ですが、本質は永遠に無くならない真実だからです。外形の幻を見ている状態は「見る」なのです。内面の真実を見ている状態は「観る」なのです。病気を根絶するためには、「見る」から「観る」に方向転換しなければなりません。地球に真の平和を持つてくのも、「見る」から「観る」に方向転換しなくてはなりません。本質を心底で理解できるようにになると、自分を本質として観られ、本質として生きられるようになるため、何事にも執着を抱かなくなるのです。その者は、第二段階の目明き人になったのです。つまり、真の目明き人になったのです。その者は、もう病気になりません。もう争い事は起こしません。

今日の教育の一番の問題点は、原因(本質)を教えないで結果(形・物)ばかり教えている点です。そんな結果をいくら教えても、たいして意味のあることでは無いのです。なぜなら、消えて無くなる幻の教えだからです。教えるべきことは、永遠に無くならない、原因・真実・すなわち真理です。真理を教えずには、真の教育とはいえないのです。真の目明き人に育てる教育こそ、真の教育なのです。このことに早く気づいて欲しいと思います。

言葉五一・・魂の熟成した人の特徴

魂の熟成した人の特筆すべき点は、第一に意志が強いこと、第二に想念力が強いことです。その意志や想念力の強さは、魂の熟成度の高さを示しており、それだけ多くの転生を重ねてきた証なのです。でもそれは、単に魂の歴史が短かったか長かったかの違いで、自慢することではありません。魂の成熟した人の第三の特徴は、不思議なことに興味を持つことです。自然や宇宙に興味を持ちます。超常現象などに興味を持ちます。人の死に対して興味を持ちます。特に、人生の不可思議さに対して疑問を持ちます。第四の特徴は、どんな困難に出会ってもくじけないことです。例え躓いても、すぐに起き上がります。決して諦めません。また、常に高みを目指して努力します。今の今を大切に生きます。機転が利き、判断力が優れています。いざという時、持っている以上の力を出します。第五の特徴は、ポジティブな生き方をするということです。何でも良く受け取ります。だから明るいのです。魂が成熟すると、エネルギーが強くなるのです。エネルギーが強くなると、意識は地より天の方に向かうので明るくなるのです。ということは、エネルギーの強い人は、それだけ神に近い人ということになるでしょう。そうです。魂の成熟した人は、神に近い人、天に近い人なのです。その人は、神と近しくしていたから、エネルギーが強くなったのです。どうか、神と近しくしてください。近しくするコツは、常に神を想うことです。神と会話をすることです。すなわち、瞑想をすることです。そ

の者は、驚くようなエネルギー人間になるでしょう。

言葉五二一・決意の大切さ！

この世の中には、中絶される墮胎児がおります。産道を通るだけの体験をする死産児がおります。産まれて数年で死ぬ幼子がございます。なぜ彼らは、そのような薄命をもってまで生まれてくるのでしょうか。それは、少しでも魂を成長させたいからです。すぐ死ぬと分かりながら生まれてくるのに、どれほどの決心が必要だったと思いますか。それはそれは、断崖絶壁から飛び降りるくらいの決心が必要だったはずです。この決意・決心が、魂を大きく成長させるのです。赤ちゃんが泣き声をあげ生まれてくるのは、この世の厳しさを体験するのが嫌だからだといいます。また赤ちゃんがニコツと笑うのは、魂を大きくできる嬉しさからだといいます。どちらにしても、この世に肉体を持つということは大変なことなのです。

なぜ幽界では魂の成長は少ないかといいますと、痛い、苦しい、寒い、暑い、などを感じる肉体が無いからです。幽界人は、生温い湯に入っているようなものなのです。生温い湯に入るのに決心はいりませんから、あまり原子核が増えないのです。この世においても、甘やかされて育った御曹司は、すぐに弱音を吐いたり逃げ腰になったりします。これでは魂を成長させることはできません。私たちの魂は、強く決心すればする

ほど、嫌なことに挑戦すればするほど、増える仕組みになっているのです。これは善悪に関係なくです。だから私は、嫌なことから逃げてはなりませんよ！ 果敢に挑戦してくださいよ！ というのです。もし臆病風を吹かし家に閉じこもっている人がいたら、どうか外に出て嫌なことに挑戦してください。間違いなく魂を成長させることができるでしょう。

言葉五三二・神の子の教育をしよう！

このメッセージは、真剣に真理を求める人たちに届くようプログラムされてあります。ここまで読み進んできたあなたは、その中の一人です。そのことを踏まえた上でお願いしたいのは、ぜひあなたのお子さんに、神の子の教育をしていただきたいということです。こんなことをいうと世間の人たちは、「そんな非常識な事！」と言うかもしれませんが、あなたなら分かっていただけだと思います。といっても、特別な教育をお願いしているわけではありません。日常生活の中で普通にできる教育です。

例えば、

神の子の誰々ちゃん、おはようございます！

神の子の誰々ちゃん、いってらっしゃい！

神の子の誰々ちゃん、こちらにいらっしやい！

このように、声をかけるだけの教育です。ただその場合、その子を神の子として認め、神の子として接するよう心掛けねばなりません。ですから、悪いことをしても怒ってはなりません。叱ってください。勿論、体罰はいけません。体罰を加えないでも分かる魂だからです。それより良いところを引き出す、ほめる教育をしてください。この教育は、今妊娠中のお母さんにもぜひお願いしたいと思います。やり方はまずお腹に手を当て、”お母さんのいうことをよく聞いてくださいね！” といつてから、

あなたは神の子ですよ！

神の子さんお元気ですか？

神の子さんすくすく育ってくださいね！

と、やさしく声をかけてやることです。他にも、童話を語ってあげても良いでしょう。童話を唄ってあげても良いでしょう。心穏やかになる音楽を聴かせてあげても良いでしょう。要するに、子供が喜ぶようなことなら何でも結構ですからやってあげてください。そのように接すれば知らず知らずのうちに、”ああ自分分は神の子なのだ！” という意識が芽生えてくると思います。どうでしょう。神の子の教育は悪いことでしょうか？ 良い子には育っても、決して悪い子には育たないと思います。幼い頃に受けた教育というもの

は、大人になっても決して忘れないものです。ぜひ、あなたのお子さんに神の子の教育をしてください。これは選ばれた者の義務だと思ってやってください。これから地球は、聖なる星に向かって突き進んでゆきます。その牽引車となるのが、あなたのお子さんです。どうか立派な牽引車に育つよう、神の子の教育をしてやってください。

【神様からの手紙②・あなたは生命(神)の子です】

これまで私は、"あなたたちは生命(神)の子ですよ！"と行ってきました。でも、そのことを心底で理解できた人は殆どいないと思います。それは頭で知っただけで、実際には体感していません。宇宙の景色の素晴らしさは、実際に体感した者にしか解らないのです。私のいうことを疑い、宇宙にそんな景色があるはずがないといわれる人は、登ってからいってください。登ってもいないのに疑るのは、宇宙に対して失礼です。ぜひ、山に登ってください。そして山頂から、宇宙の絶景を眺望してください。私のいっていたことが、本当であったことが分かっていただけでしょ。

第3章 瞑想

瞑想は難しいものではありません。神と親しくすることが瞑想なのです。神に思いを向けることが瞑想なのです。神と対話することが瞑想なのです。神を想い続けることが瞑想なのです。多くの求道者は、瞑想を誤解して受け取っています。ここでは、瞑想の誤りを正し、真の瞑想とはどのようなものか、説明してみたいと思います。

言葉五四・・瞑想は無心になることではない！

瞑想は、ジツと座って無心になることではありません。瞑想は、本当に有るものに意識を向けることです。本当に有るものとは生命(神・仏)のことですから、生命に意識を向けることが瞑想なのです。何度も述べてきましたように、私たちの本性は生命です。でも私たちは、気の遠くなる年月人間として生きてきたために、自分のことを人間だと誤解してしまったのです。その誤解を解くためには、生命を想い続けるしかないのです。

一般的に行われている瞑想は、ある抽象的な言葉(マントラ)を唱え無心になることのようにですが、それは生命の自覚に結びつかないので意味がないのです。瞑想は、忘我になるためでも、無我になるためでもありません。生命の自覚を得んがためにするのです。それは、無心になってはできないのです。ましてや何かが見えるような瞑想では、本末転倒になりかねません。どうかこれまで持っていた、瞑想に対する既成概念を捨ててください。瞑想の目的は、人間の誤解を解くためです。本当の自分(生命)に目覚めるためです。

言葉五五・・瞑想で必要なのは続けること

瞑想に技術らしい技術は必要ありません。必要なのは、やり続けることです。バダバタと泳いでいればいつか泳げるようになるように、瞑想もやり続けていればコツが掴めるようになるのです。知花先生はよく、
“五分間靈性でありなさい！”
“とっておられましたか、この五分間靈性でありなさいという意味は、”
五分間神を想い続けなさい！
生命を想い続けなさい！
“という意味なのです。でも五分間雑念なしに思い続けられる人は、まずいないでしょう。それほど、雑念なしに神を想い続けることは難しいのです。そのことを察してか、ある日の講話で先生は、
“一秒間集中できたらいいのですよ！”
“といわれたことがあります。そのとき私は、ホットしたものです。後で分かったことですが、先生がいていた五分間靈性であ

りなさいという意味は、一秒一秒の積み重ねのことを十回やったり、十秒間思い続けたことになります。百回やったら、百秒間思い続けたことになります。その積み重ねが、五分間の集中になるのです。ですから途中で雑念が入っても、一秒間集中できたらいいのです。一秒間なら誰でもできます。一秒間できたら、二秒間でできます。二秒間できたら、三秒間でできます。それを続けていいたら五分間になるのです。先生が「何よりも続けることが大切なのですよ！」といった意味がそのとき分かったのです。事実、それ以後私の瞑想は、一段ステップアップしたのです。親である神が、我が子にできないことをさせるわけがないのです。どうか瞑想を難しく考えないでください。一秒一秒の積み重ねが、続けることが、大切だということを知ってください。

言葉五六・・宇宙(神)を深く知らなければならぬ理由

私はこれまで、原子核を増やす方法を三つ掲げてきました。一つは、この世の厳しい体験を通して原子核を増やす方法、二つは、瞑想を通して原子核を増やす方法、三つは、思索を通して原子核を増やす方法です。なぜ思索をすれば原子核が増えるかといいますと、宇宙(神)を知る引き出しが多くなるからです。なぜ子供は、オモチャを分解して壊してしまうのでしょうか？ それは、オモチャがなぜ動くのか知りたいからです。

私たちも神を知るためには、宇宙を細かく分解する必要があります。こんな例え話があります。

ある四人の盲人に象を触らせ、象とはどのような生き物か訊いたところ、足を触った盲人は、"象とはドラム缶のような生き物である！"といました。しっぽを触った盲人は、"ムチのような生き物である！"といました。耳を触った盲人は、"ウチワのような生き物である！"といました。鼻を触った盲人は、"ホースのような生き物である！"といました。これでは誰も、象の全体像をいい当てているとはいえません。それは、一部分しか観察していないからです。私たちも、宇宙(神)の一部を観察していたのでは、宇宙の全体像を知ることができないのです。私が様々な切り口から宇宙を説明するのは、宇宙の正しい姿を知って欲しいためです。私の恩師である知花先生は、"求道者なら常に疑問を持ちなさい！"とっておられました。私も同じことをいいます。宇宙(神)を知りたかったら、どうか疑問を持ってください。

私たちは今、夢を見ている真つ最中なのです。この夢には寒さや暑さや痛みが伴い、またストーリー性があるため、誰もが夢の虜になってしまうのです。夢が本当だと思えば、苦しく、悲しく、恐ろしいのです。この夢から目覚めるには、宇宙について深い疑問を持つ必要があるのです。宇宙を深く知れば、宇宙は神そのものですから、「吾神なり！」のマントラの一言が、深く心に響いてくるようになるのです。その響き

が、神の自覚に結びつくのです。口先だけの「吾神なり！」では、心に響かないことを知ってください。

言葉五七・・瞑想の本文とは？

瞑想の本文は、本当の自分に目覚めることです。本当の自分とは「神・仏・生命」のことですから、「神・仏・生命」に目覚めることが瞑想の本文なのです。そのためには、「神・仏・生命」に常に思いを向けていなければなりません。瞑想は難しいという人がおりますが、自分の思いの中に「神・仏・生命」を留めればいいのですから、本当は簡単なことなのです。しかし、その簡単なことがなかなかできない求道者が多いのです。それは、外側の世界に意識が奪われているからです。

私たちは、常に何かを思っています。何も思わないでいる人など、この世に一人もいません。ということは、私たちは常に瞑想をしているということです。ただその思いを、この世のことに使っているため、正しい瞑想になっていないだけです。

「神・仏・生命」を想い続けることが瞑想なのです。それは、誰でも簡単にできるはずなのです。それができないのは、目に見え耳で聞えるこの世のことを優先させているからです。ということは、優先順位を間違えているということです。何を優先すべきですか。この世の雑事ですか？・・・神仏ですか？・・・真の

求道者は、時間の許す限り神仏に意識を向けています。その人は、自分の宇宙を正しく管理していることになるのです。この世のことを想っている人は、自分の宇宙を正しく管理していないことになるのです。なぜなら、この世は幻の世界で、生命の世界は真実の世界だからです。その意味では、生命を想っている人は、生人です。この世のことを想っている人は、死人です。死人になりたくなくなったら、生命を想い続けることです。

このように瞑想は、本当にある生命に意識を留めることなのです。

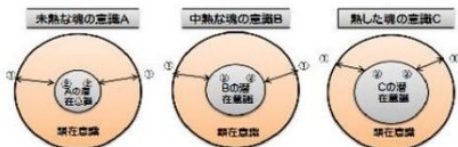
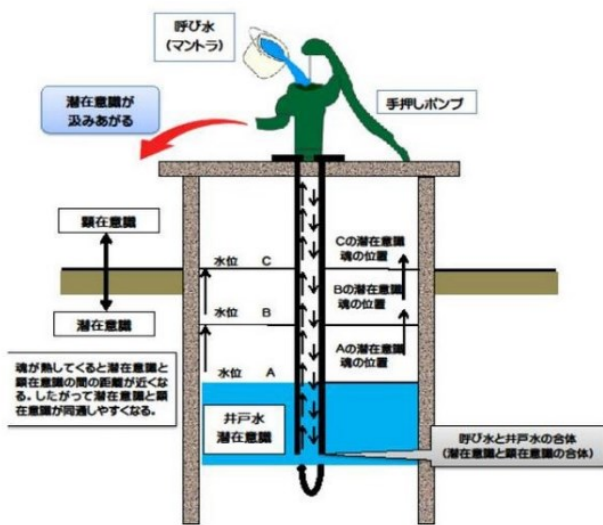
言葉五八・井戸水を汲み上げる例え

瞑想は、顕在意識を潜在意識に触れさせる作業です。潜在意識は神我（真我）意識ですから、顕在意識を潜在意識に触れさせれば神の自覚に到るのです。では、潜在意識に顕在意識を触れさせる作業を、井戸水の汲み上げに例え説明してみましよう。

私の子供のころ家で使う水は、近くの共同用水所で井戸水を汲み上げ持ち帰っておりまして。当時、手動式のポンプを使っていましたが、汲み上げるためには最初に呼び水を入れてやらねばなりませんでした。なぜ呼び水が必要かといいますと、呼び水が井戸水を呼び込むからです。この呼び水に当たるのが、マントラ

なので。マントラを意識的に唱えると、潜在意識が顕在意識のところまで上ってくるのです。ただし、顕在意識と潜在意識の距離の違いによってマントラの唱える量が違ってきます。近ければ少し唱えても上ってきます

手動式ポンプにおける瞑想の解説図



①顕在意識
②潜在意識

①と②の距離が遠いほど沢山の呼び水(マントラ)が必要になる。

が、遠ければ多く唱えねば上ってこないのです。つまり、井戸水の水位が高ければ呼び水を少し入れても上がってきますが、水位が低ければ呼び水を多く入れねば上ってこないのです。水位が高いという意味は、潜在意識(真我意識)までの距離が近いという意味です。水位が低いという意味は、潜在意識(真我意識)までの距離が遠いという意味です。これは魂の成熟度を意味し、瞑想をひとくりり説明できない理由なのです。でも呼び水を与えれば、間違いなく潜在意識は上ってきます。前述したように潜在意識が真我意識ですから、顕在意識と潜在意識が触れれば、神の自覚が蘇ってくるのです。さあ、井戸水を汲み上げるイメージを持って瞑想してください。

言葉五九・・自覚とは？

自覚とは「自ら」に「覚める」と書きますが、「自ら」とは神のことですから、神に覚めることが自覚の意味なのです。知識的に知っただけでは、覚めたことにはなりません。心の髄の髄で知って、はじめて覚めたことになるのです。では心の髄の髄で知った自覚とは、どのような意識状態なのでしょう。これを説明するのは、容易なことではありません。容易でないどころか、説明のしようがないのです。なぜなら、この世に存在しない「匂いや味」が説明できないように、この世に存在しない「自覚」も説明しようがないから

です。医者が病人に「自覚症状がありますか？」と訊ねることがありますが、この場合の自覚は痛さや苦しみのことです。ですから説明できませんが、「生命・神」の自覚は心的境地のことですから説明のしようがないのです。長年知花先生の教えを受けた人たちでさえ、「自覚」の意味が理解できないのですから、一般人に自覚の意味を理解させることは絶無といつていいでしょう。どうでしょう。神は見えないのですよ！ その見えない神が自分だと自覚できた状態を、どうして人に説明できるでしょうか。これは体験した当人しか解らない稀有な意識状態なのです。でもその意識状態になったら、神そのものになった気分になれるのです。大宇宙そのものになった気分になれるのです。要するに、今人間であると思っっているように、神であると本当にそう思えるようになるのです。

すなわち、

- ・ 痒いところに手が届いた状態・・・
- ・ のど仏に引つ掛かっていた名前を思い出した状態・・・
- ・ 心臓の鼓動が手に取って分かった状態・・・
- ・ 数学の応用問題が納得して解けた状態、いわゆる腑に落ちた状態・・・

しかしこのいい方にして、隔靴搔痒のごとく真意を伝えているとはいえません。でもそのような意識状

態になったら、考え方も、感じ方も、観じ方も、生き方も、全く変わってしまうのです。すべてが自分だと思えるようになるため、他人を、すべての物を、自分の如く愛せるようになるのです。心の面だけ変わるのではなく、肉体面(変性変容が起きる)も変わります。これは驚くべき変化です。

・どんなに空飛べるカモでも、自分のことをアヒルだと思っている限り空は飛べないのです。

・どんなに偉大な生命でも、自分のことを人間だと思っている限り偉大な能力は使えないのです。

生命の自覚なしに理想の世が実現できないといわれるのは、人間とされている限り人間以上の生き方はできないからです。あなたは、自分の肉を剃ってまで人に与えることができますか？ 餓死寸前の自分が、最後の握りの飯を人に与えることができますか？ できないはずですが、それが肉体人間の偽らざる姿です。誰も責めることはできません。でも生命の自覚ができたなら、必要な場合にはそれができます。それほど自覚というのは、真に迫れる意識状態なのです。

言葉六〇・・自覚に至る流れ

自覚がどのような意識状態か説明することはできなくても、自覚に至る流れは説明できますので、ここではその流れについて述べたいと思います。「想念は実現の母！」といわれるように、想念は偉大な力を持

っています。その偉大な想念を使って、吾生命なり！
“と想えば、生命の波動まで意識が高まらずには
おかないのです。意識が高まれば、それだけ潜在意識と顕在意識の距離が近くなりますから、生命の自覚が
得られやすくなるのです。ただし、吾生命なり！
“の想念力がどれほど強く、どれほど集中し、どれ
ほど生命を理解しているかによって、自覚の高まり方が違ってきます。

この表現宇宙には、生命の記憶を失った意識核の断片が無数に浮遊しております。それも、薄い薄いオプ
ラートのような意識核の断片です。でもどんなに記憶を失った意識核であっても、生命であることに違いは
ありませんから、集めて濃縮すれば記憶を蘇らせることができます。その意識核は、想念を集中させれ
ばさせるほど多く集まるようになってくるのです。そしてある一定量集まると、自分が生命であると思える
気付きが起きてくるのです。さらに意識核が濃縮されると、胸のあたりに思い出せそうで出せない記憶の間
えが生まれ、さらに濃縮されるとその間えがポンと取れ、
“ああ、私は生命だった！”と生命の自分を思
い出すのです。

自覚と未自覚は背中合わせにあるのです。薄皮一枚で仕切られているようなものです。その薄皮が破られ
れば、怒濤のごとく記憶が蘇ってくるのです。これと良く似ている例えが、手動式ポンプによる井戸水の汲
み上げ作業です。井戸水を汲み上げるためには、手動式のポンプに呼び水を入れてやらねばならないわけ

すが、その呼び水に当たるのが瞑想なのです。呼び水(瞑想)は、深いところにある記憶を汲み上げる手段なのです。深いところにある井戸水と呼び水が接触すれば、引っ掛かり(胸の辺りに問え)が生まれます。その引っ掛かりを利用して、勢いよく井戸水(記憶)を汲み出すわけです。一度汲み出すことに成功すれば、後はいつでも自由に汲み出せるようになります。すなわち、いつでも自由に自覚の境地に入ることができるのです。これが自覚に至る流れです。まさに自覚とは、"そうか、私は生命だった！"と合点がいった状態です。そうになると、心身ともに変性変容が起き、常人では理解できない意識状態になって、生命を、神を、宇宙を、自分として生きられるようになるのです。

言葉六一・・自覚の境界線とは？

自覚にグレイゾーンはありません。白か黒か？ 自覚したかしていないか？ のどちらかがあるだけです。夢から目覚めた時、はっきりとした目覚めの自覚があるように、自覚の境界線を超えた時も、はっきりとした目覚めの自覚があるのです。未自覚の状態は、「地」にいて眠っている状態です。自覚した状態は、「天」にいて目覚めた状態です。つまり人間だと思っているときは地におり、生命だと思っているときは天にいるのです。

未自覚と自覚の間には、はっきりとした境界線があり、その境界線をまたいで天に入ったら、自分が大きく変わるのです。それも観念的に変わるのではなく、現実的に、実際的に、変わるのです。例えば、ものの見方や考え方が全く違ってきます。今まで見えなかったものが観えてきます。つまり、視野が広がり遠くのものが見透せるようになるのです。また正しい判断ができるようになるため、正しく思い、正しく語り、正しく行うことができるようになります。さらに驚くべきことは、自分の身に変性変容が起きることです。これは驚くべき変化です。

面白いことに、自覚の境界線をまたいだ瞬間、この世が夢の世界だということがはつきりと分かるのです。そのとき、一人で笑っちゃいます。"何だ！ 今まで自分は夢を見ていたのか！ ハハハハ！"と・・・こんな体験ありませんか。夢の中で悪者に追われ、心臓が止まりそうなほど恐怖している。でも"これは夢だ！"と思えた瞬間、恐怖が去ったという体験が・・・これと同じことが、自覚の境界線をまたいだときに起きるのです。

"私は神であった！ 生命であった！"と心の底で想えた状態を自覚の境界線を越えたといい、これが夢から目覚めた状態なのです。でもこれは、本人にしか分からない特別な意識状態ですから、人に伝えることはできません。だから仏典の中にも聖典の中にも、その記述が見当たらないのです。いや記述するにも、

記述する言葉や文字がこの世に無いのです。それほど、自覚の意識状態を伝えるのは難しいのです。だから多くの求道者は、途中であきらめてしまうのです。

人生の最大の目的は、自覚の境界線を超えることです。特に、この書を見ているあなたはそうです。自覚の境界線を超えることが、この世における求道者の最終目標なのです。私たちはこの難関を突破するために、何万転生もしてきたのです。どうかこの難関を目指して突き進んでください。

言葉六二一・自覚の境界線に立つ条件

人間が生命に目覚めるものではありません。生命が生命に目覚めるのです。生命が「人間だ！ 肉体だ！ 個人だ！」と迷っているわけですから、生命が生命に目覚めるのです。といっても、本源にいる生命が迷っているわけではありません。表現世界に出ている生命体（人間）が迷っているのです。その生命体は何万転生もの人生体験を繰り返し、やっと自覚の境界線付近までやってきたのです。今この書を見ているあなたは、その境界線付近に立っている偉大な生命体といっていいでしょう。でも自覚の境界線に立つためには、次のような条件が満たされていなければなりません。

一、欲望の克服。

この世の欲望を抱えていては、心のざわめきから開放されることはありません。自覚の境界線に立つためには、物欲、色欲、食欲、金銭欲、地位や名誉欲など、この世の欲望を一切捨てなければならぬのです。この欲のざわめきから開放されたとき、あなたは第一条件を満たしたのです。

二、感情の克服。

憎しみ、恨み、怒り、嫉妬、妬み、憂い、恐怖などの感情に流されれば、どうしても苦しみや悲しみが深くなります。これでは平安な心を保つことはできません。感情の誘惑は、私たちを自覚の境界線から遠ざける最悪のサタンなのです。どうか情に流されない自分を確立してください。感情の克服は、求道者にとって必須科目なのです。

三、想念のコントロール。

人に何かいわれて、すぐムキになるようでは、まだ自覚の境界線付近にいるとはいえません。何をいわれようと、どんなものを見せられようと、悪想念を抱かない想念のコントロールが必要です。この想念のコントロールは、求道者にとって自覚の境界線を超える最後の関門なのです。

この三条件は、求道者にとって満たさねばならぬ必須科目ですが、更に「忍耐力を養う」「集中力を養う」「意志の強さを養う」条件も満たす必要があるでしょう。これまで歩んできた数々の人生体験は、すべてこ

の条件を満たすために必要だったので。無駄な人生がなかったと思えるのは、自覚の境界線に立った時かも知れません。

言葉六三・・自覚の境界線を超える近道

自覚の境界線を超える近道があるなら、地球はとっくに聖なる星になっております。簡単に超えられないから、いまだに多くの魂が呻いているのです。残念ながら、自覚の境界線は自らの力で超えるしかないのです。一人ひとりが自らの努力で、知り、発見し、実践し、体感し、超えるしかないのです。私はこれまで、様々な切り口から真理を述べてきましたが、それは同じ切り口で述べていたのではマンネリ化し、気付きが起きづらいからです。真理を意識の中に定着させるためには、色々な切り口から繰り返し繰り返し攻める必要があるのです。そのように攻めていけば、長いものに巻かれるように、やがて思想化される時がくるでしょう。

瞑想は、自覚の境界線を超えるための最良の方法です。瞑想をやり続ければ、間違いなく原子核が増えます。原子核が増えれば意識が濃縮されるため、必ず自覚の境界線を超えることができます。一定量の原子核が濃縮されれば、自動的に自覚の境界線が超えられるのが宇宙の仕組みです。このようにいえるのは、

私が体験者だからです。私はただ、恩師のいう通り黙々とやっただけです。黙々とやった結果、自覚の境界線を超えたのです。といっても、境界線があるわけではありません。自分の意識の中に、異質な意識の境界線があるという意味です。その境界線を超えると、**「私は神だ！ 生命だ！**
」と本当に想えるようになるのです。神そのもの、生命そのもの、宇宙そのもの、になれるのです。この境地は本人にしか分からない特別な意識状態ですから、これ以上表現のしようがありません。

瞑想に技術はいりません。技術があるとすれば、素直にやり続ける根気強さだけです。何の変化が起きなくても、疑いを持たずやり続けることです。やり続けていれば、例え今生自覚の境界線を超えられなくても、間違ひなく後々の布石になります。今あなたがこの書を見ていられるのも、前世布石を打っていたお陰です。もし布石を打っていなかったら、今あなたはこの書を見ていないでしょう。神は完全ですから、完全なる神が無駄なことをさせるわけがないのです。どうか神を信じてください。この書を見ている、自分を信じてください。

言葉六四・・・気づき・直観・啓示

自覚に至る前に、様々な気づき起きます。気づきが多ければ多いほど、理解力が増し生命に対する確信

が深まります。それが結局自覚に結びつくのです。よく啓示が与えられたとか、直感が得られたとかいいますが、気付きも、直感も、啓示も、同じものと考えていいでしょう。この気付きはどのようなものかといいますと、なぜか分からないけど答えが解ってしまうのです。理屈抜きで解ってしまうのです。問題の答えが先に分かった状態です。しかも、その気付いたことが納得して受け入れられるのです。探していたパズルが合わさったような感覚です。不明だった点が合わさった状態です。だから、"なるほど！"と合点がゆくわけです。それも不明な点が多く合わされば合わさるほど、強く深く合点(納得)がゆくのです。これは自覚の一步手前の状態と考えたらいいでしょう。

啓示を得るためには、神仏(生命・自然・宇宙)に対する疑問を持ち続けることです。啓示は自分の問いに対して降りてきますので、疑問を持ち続けていれば、リラックスしているときなどに、答えがヒラメキとして降りてきます。それが啓示・直観です。この道筋が付けば、やがて啓示と自分の思いが一つになります。自分の思いそのものが、啓示そのものになるのです。もともと意識は一つですから、そのようなことが起きても何の不思議もないのです。

言葉六五・・相対させる瞑想

以前にも述べたように、私たちが相対の世界に出てきたのは、相反するものを相対させ、その違いの差からホンモノを発見するためでした。私たちの心は、はっきりとした段差を見せれば、気がきが起きるようになっていくのです。その心の性質を利用して自覚に結び付けようというのが、相対させる瞑想なのです。つまり、ニセモノの自分(人間)とホンモノの自分(生命)を相対させ、そのギャップを心の底で感じようというわけです。生命の自覚は、そのギャップが大きければ大きいほど生まれるのです。これは意外と落とし穴になっている部分です。相対させる瞑想については「人類の夜明3」の中でも触れていますが、ここではさらに踏み込んだ説明をしたいと思います。

まず、左側に醜い肉体人間をイメージします。次に「私は汚くて、臭くて、醜くて、鈍重で、無能な人間なのか？」と自分に何度か問いかけます。そうすれば波動が下がりますので、下がったところで、今度は右側に生命の自分(光の自分)をイメージします。そして、いや「私は清く、香ばしく、美しく、精妙で、全能なる生命だ！」と自分に言い聞かせます。そうすれば波動が急激に上りますので、その波動のギャップから気持ちの良い波動が体感できるはずですよ。その気持ちの良い波動を感じながら「吾生命なり！ 吾生命なり！ 吾生命なり！・・・」と生命を想い続けるのです。この相対させる瞑想には、あまり集中力はいりません。必要なのは、波動のギャップを感じるコツを掴むことです。そのコツは、人間の想いと生命の想いを

交互に繰り返すことで掴めます。

以前にも述べたように、ぬるま湯からぬるま湯へ移動しても何の違いも感じられませんが、冷たい水から熱いお湯へ移動すれば強烈な違いが感じられます。その違いの差が、自覚を生み出すのです。違いが大きければ大きいほど、生命の自覚が生まれます。どうか汚く無能な人間と、清く全能な生命とを相対させ、生命の自覚を得てください。ただし、人それぞれ原子核の量（魂の成熟度）も理解力も違いますから、同じ自覚が得られるという保証はありません。でも、当人の今の意識の高さに相応した自覚は得られるはずです。

言葉六六・イメージを利用する瞑想

よく私は、「背中の中の奥に意識を留め、そこで神を想いなさい！　」という言い方をします。知花先生は、「汝、汝、意識しているところにおけるのである」という言い方をしました。想いは自由ですから、どこにでも意識は置けるのです。ということは、神は至るところにおけるわけですから、意識を留めたところに神がおることになるのです。知花先生が、「汝の見るもの受け継がん！」　といわれたのも、何処に何をどう意識するかで何でも受け継ぐことができるからです。私たちは神を受け継ぎたいのですから、単純に神を意識したらいいのです。人間を意識しているから、人間を受け継いでしまうのです。これでは、意識を盗

んでいると言われても仕方ありません。勿論、盗もうと思つて盗んでいるのではなく、無意識のうちに盗んでいるわけですが、それは人間意識と神意識との見分けがつかないためです。見分けがつかないということとは、人間意識は神意識であり、神意識は人間意識であるということです。ですから、人間意識と神意識を一つにすれば、そく神意識に転換できるのです。では、人間意識と神意識を一つにする瞑想について説明しましょう。

まず軽く目を閉じ、肉体に引つ張られている意識を感じてください。意識が感じられない人は、胸のあたりに光(白色でも良い)として感じてください。その光を思いで奥深いところまで運び、そこに置いてください。はい、それが神意識です。意識を置いた途端、神意識になったのです。これは、人間意識と神意識が同じだからできるのです。人間意識もあり神意識もあるなら、人間意識をどこに持つて行つても人間意識のままですが、神意識しか無いから神意識にできるのです。神との対面とは、神意識と人間意識を合体させること・、つまり、肉体に引つ張られている人間意識を、奥深い所に潜らせそこに置くことです。私たちが希望を持てるのは、人間意識と神意識が一つだからです。ただ、神を想うか人間を想うかで、神意識にもなり人間意識にもなるだけです。さあ、意識を奥深いところに持つて行き、神と合体してください。その一つに合体した自分が、「吾神なり！」と瞑想するのです。それが、一番有効な瞑想方法なのです。

言葉六七・・白をイメージする

生命(神)の自分をイメージしなさいといっても、生命には姿形がありませんので、イメージしづらいかも
しれません。そこで私は、次のようなイメージの仕方をお勧めしたいと思います。

天皇の「皇」という字を見てください。上に「白」と書き下に「王」と書きますが、「王」は天を意味していますので、通して解釈すれば、「白」は「天」である、つまり「神」である「生命」である、という意味になります。白色は総合色で、生命や神を意味するのです。ですから白をイメージすれば、生命や神をイメージしたことになるのです。白ならイメージしやすいでしょうから、「白」を生命(神)と思ってイメージしてください。白と天のつながりについて、もう少し詳しく説明したいと思います。

- ・ 神棚は白木によって作られています。
- ・ 神具の平子も高杯も水器も白色です。
- ・ 白馬や白蛇や白龍は天の使いだといわれています。
- ・ 天使は白衣を着けております。
- ・ 亡くなった人には、白衣装を着せます。
- ・ 第七のチャクラは白です。

・ 靈太陽は白光そのものです。光は白なのです。

・ 白い雲ほど天高く浮いています。

・ 鉄を高温で熱すれば最後には白くなり消えてゆきます。

どんな物も波動が高まると白くなり、最後には透明になって天に昇ってゆくのです。このように白色は、波動が高く天に近い色なのです。つまり白は、天や神を示す象徴的な色なのです。ですから白をイメージしているときは、私たちの意識は高揚しているのです。どうか白をイメージしてください。そのときあなたは、光を、神を、生命を、イメージしていることになるのです。このイメージ力がつけば、どんな物の中にも「生命を！ 神を！」を観ることができるようになります。

言葉六八・目覚めた者の変化

瞑想し生命(神)の自覚が深くなるにつれ、全身が光で覆われたり細胞が振動したりする体験をします。この現象は、瞑想の深まりを意味し、生命に対する確信を深めてくれます。特に靈太陽が見えてくれば、生命に対する確信は一層深まるでしょう。靈太陽の光は、目をつぶすほど強烈です。はじめ靈太陽は右横からチラッと見えてきますが、慣れてくると正面で見えるようになります。そうすると、靈太陽の輪郭まではつき

り見えるようになります。でもその靈太陽も、やがて視界から消えてゆきます。なぜ消えてゆくかについては、別な機会をもうけ述べたいと思います。この靈太陽は原子一個一個の中にも存在していますので、万象万物の中にも存在していることとなります。もとより、靈太陽の中にすべての物が存在し、すべての物の中に靈太陽が存在しているわけですから、内にも外にも靈太陽が存在しているのは当然でしょう。天照大御神とは、この靈太陽のことをいっているのです。つまり、全宇宙を照らす光、万象万物を照らす光、すべての国民を照らす光です。生命の自覚が深まれば、他にも、次のような変化が起きてきます。

- ・すべての中に自分が観られるようになります。
- ・神の意図が解るようになります。
- ・宇宙の営みの意味が解るようになります。
- ・神の最終的な目的が解るようになります。
- ・肉体的な変性変容が起きてきます。

(すでに述べているので、ここでは触れなくておきます。)

このように様々な変化が起きてくるわけですが、これは何も自慢することではないのです。なぜなら、現象はすべて幻だからです。幻を自慢していたのでは、本末転倒になりかねません。瞑想は生命の自覚を強めるためにするのですから、決して現象に囚われないようにしてください。

瞑想について述べてきましたが、今地球上で完璧な瞑想のできている人は一人もいないといっている人も追いや。それほど瞑想は難しいのです。瞑想には、「忍辱・忍耐・我慢」この種の文字をいくら並べても追いつかないほどの辛抱がいるのです。私たちは、その辛抱強さを身に付けるため何万転生もしてきたのです。だから私は、「私たちは忍耐力を養うために、地球を何周もするほどのマラソンをしてきたのですよ！ 集中力を付けるために、何千年も針の穴に糸を通す作業をしてきたのですよ！」というわけです。そうですね。私たちはやっと、瞑想に必要な我慢強さと集中力を身に付けたのです。今この書を読んでいるあなたは、その体験をし終わった魂の一つです。その魂を、褒めてやってください。

【神様からの手紙③・神の心の中に入る】

あなたは私(神)と、心ゆくまでお話ししたいと願っているようですが、あなたはいつも私と共に生き、私と共に苦楽を共にしてきたのですよ。ただ、気付かなかっただけです。神の自覚が無かったから、一緒にいても分からなかっただけです。でも自覚がなくても、あなたは間違いなく神なのですよ！

私があなを神と呼ぶのは、肉体のあなたの事をいっているのではなく、あなたの中に宿っている「生命」のことを、「意識」のことを、神といっているのです。あなたが自分と思える、その意識が神だけ

からです。でも今のあなたは、自分のことを人間だと思い違いしていますね、だから、人間としての生き方し
かできないのです。(生老病死に苦しんでいる。)

とはいえ、神の自覚を得るのは容易なことではありません。なぜなら、あなた達は気の遠くなる年月、
人間と思って生きてきたからです。人間と思えば、人間以上の生き方はできないのです。あなた達が何度も
肉を持って生まれてくるのは、心の底から神だと思えるようになるためです。でもそのためには、瞑想する
しかないのです。瞑想以外、神の自覚を得る方法はないのです。

といっても、瞑想を難しく考えないでください。「神を想うこと、神を意識すること、神と親しくなるこ
とが」、瞑想なのです。思うことは、歩いていても、電車に乗っていても、風呂に入ってもできますか
ら、やる気になればいくらでもできるはずですよ。

「生命を・神を・光を・霊を」想っている時は、神と親しくしている時なのです。その親しくしている時
間を、今までより増やしてほしいのです。「想念は実現の母」ですから、思ったことは必ず実現します。こ
れは宇宙の法則ですから間違いありません。多く思えば思うほど、充実した一日になります。その充実した
一日が積み重なれば、充実した一生になります。この世に生まれてきた目的を果したことになります。どう
か私を想い続けてください。私と親しくなってください。私の心の中に入れてください。私の心の中に入

るとは、あなたの心と私の心が一つになることです。

第4章 宇宙

目覚めるとは、何も見えなくなることです。何も聞こえなくなることです。何も感じなくなることです。目で何かを見ていたり、耳で音を聴いていたり、肌で何かを感じているうちは眠っているのです。その意味では、五官で色々なものを感じている私たちは、今眠っている真つ最中というわけです。表の表の顔は裏なのです。裏の裏の顔は表なのです。真実の扉が開かれるのは、その謎を解き明かした時です。さあ宇宙を知り、本当の自分を知り、夢から目覚めましょう。

言葉六九・なぜ私たちは宇宙（神）なのか？

この宇宙は、たった一つの本質によって創造されました。そのたった一つの本質のことを、神と呼んでいるのです。神はすべての本源にして本質なのです。だから、宇宙そのものが神なのです。宇宙は神であり、

神は宇宙なのです。宇宙は神のご身体なのです。でも、神の名に囚われる必要はありません。神と呼ぶのが恐れ多いなら、生命と呼んでも、霊と呼んでも、無限と呼んでも、光と呼んでも、エネルギーと呼んでも、何と呼んでもいいのです。なぜなら、何と呼ぼうと、全て神の本質によって創造されたモノだからです。そうです。

神は全てのすべてなのです。だから私は、神は何処にでも転がっているありふれたお方である、ということです。宇宙は、そのありふれた神で満ち溢れているのです。私たちは、今その宇宙の中にいるのです。そして宇宙は、今私たちの中にあるのです。いや、すべての存在物は今宇宙の中におり、すべての存在物の中に今宇宙があるのです。

宇宙(神)はすべての本源本質ゆえに、意識と意志と理念を持っているのです。だから宇宙(神)が何かを創造する場合、自分がそのものになることができます。宇宙が宇宙を創っているということです。神が神を創っているということです、ゆえに、そこに何かが存在しているなら、それは間違いなく宇宙であり、神であるということです。そこに鉱物・植物・動物が存在しているということは、それはみな宇宙であり、神であるということです。ならば、人間が宇宙であり神なのは、当たり前ではありませんか。

もう一度いいます。この宇宙には神の外何も存在しないのです。すべてが神であるといい切れるのは、存

在しているすべてのモノの中に神なる本質が内在しているからです。だから私たちは、間違いない神であり宇宙なのです。

言葉七〇・・・主観的宇宙

私抜きで何事もはじまりません。私は「その宇宙」において、唯一の存在であり主役だからです。なぜなら、私の意識は主観的意識だからです。この主観という見方が、「その宇宙」を理解する上においてとても大切なことなのです。主観という意味は、一つの立場から観る世界観や宇宙観のことです。だからその立場（主観）に立てる者は、一様しかいません。唯一の宇宙しか存在しない理由は、その立場に立てる主観者は一様しかいないからです。その宇宙を存在させているのは、唯一その主観者であるということです。

その主観者が私なのです。あなたなのです。ということは、その主観者は人類の数ほど存在することになります。また同時に、人類の数ほど宇宙が存在することになります。なぜなら、主観者は内側に一様しかいなければならないけれど、外側には人類の数ほど存在しているからです。「その宇宙」と表現したのは、「その主観者の観る宇宙は」という意味で、唯一の主観者を意味しているわけではありません。つまり、唯一の主観者は一様しかいなければならないけれど、「その主観者」は人類の数ほど存在しているという意味です。

私たちは意識を持っていますが、それはあくまでも主観的なものです。主観者が認めなければ何も存在しない理由は、主観者が認めてはじめて、認められるものが存在できるからです。認める者がいなければ、宇宙はおろか何も存在できないのです。その認識はあくまでも主観的なものですから、主観的意識を持つ私たちが唯一の創造主であるといえるのです。つまり、主役であるといえるのです。主観者抜きで何事もはじまらないのは、主役抜きでは何の物語も生まれません。神とはこの主観者のこと、すなわち主役のことをいっているのです。だから私は神です。あなたは神です。その意味では、この表現宇宙に無数の主役(神)が存在すると同時に、唯一の主役(神)しか存在しないことになるでしょう。先ほどもいったように、その主観者は外側には無数に存在するけれど、内側には一様しか存在しないからです。

言葉七一・一つしか存在しない原因者

この宇宙には、たった一つの偉大なる宇宙意識しか存在しません。その意識は、人間の意識でもあるのです。なぜなら、人間は意識を持っているからです。この宇宙には、たった一つの宇宙意識しかないわけですから、人間の意識が宇宙意識なのは当然でしょう。人間の意識は宇宙意識であり、宇宙意識は人間の意識なのです。だから人間がいなければ、表現宇宙(物質宇宙)はあり得ないのです。人間がいなければ、表現宇宙

を認識する者がいないわけですから、表現宇宙が存在できないからです。表現宇宙は、人間が認識することによって存在できているのです。つまり人間の意識は原因体であり、表現宇宙は結果体なのです。原因体である人間の意識がなければ、結果体である表現宇宙はあり得ないのは当たり前でしょう。しかし残念なことに人間は、百人が百人とも自分のことを肉体(結果体)だと錯覚しております。本当の自分は大きいなる原因者(宇宙意識)なのに、形を自分と錯覚し、小さな自分になっているのです。

意識は意識している通りのもので、それ以上のものでも以下のもでもありません。だから私たちは、花にも、鳥にも、雲にも、星にも、大宇宙にもなれるのです。なのにあなたは、なぜ小さな肉体の中に自分を閉じ込めるのですか？なぜ大いなる自分を、小さな自分にしてしまうのですか？私たちは偉大なる宇宙意識なのです！ 私たちはその意識を持っているわけですから、何にでもなれるし、何でも創造できるのです。私たちは建築主であり、設計家であり、建築家であり、素材であり、建築物そのものなのです。原因体である私がいなければ、結果体である妻(夫)も、子供も、会社の上司も、友達も、恋人も、花も、猫も、犬も、月も、地球も、宇宙も、何もあり得ないのです。

私は創造主です。

私は根源です。

私は親です。

私は大元です。

私は有りて有るもの、すべての全てです。

私は宇宙の主です。

私は大王です。

私は宇宙そのものです。

だから遠慮なく大宣言すれば良いのです。

吾は生命なり！

吾は神なり！

吾は宇宙なり！

吾は原因者なり！ と・・・。

生命とは、神とは、宇宙とは、原因者とは、この宇宙にたった一つしかない、私の（あなたの）意識のこと
なのです。

言葉七二一・見えないモノこそ真実である

見えないモノは一つしかないといえ、”そんなこと当たり前ですよ！”といわれそうですが、これは当たり前で済まされる問題ではないのです。なぜかといいますと、見えないモノが一つしかないということは、その見えないモノは自分であるということになるからです。その根拠を示しましょう。

見えないモノが一つしかないということは、この宇宙は一つしかないことになります。

見えないモノが一つしかないということは、この宇宙は無限であることになります。

見えないモノが一つしかないということは、この宇宙は永遠であることになります。

見えないモノが一つしかないということは、この宇宙は完全であることになります。

なぜなら、その見えない一つのものは、絶対に無くならないからです。無くならないものは、無限であり、永遠であり、完全なのです。また、見えないモノが一つしか無いということは、その見えないモノは全てですべてということになり、その見えないモノは、私であり、あなたであり、万象万物であるということになります。

そうです。

私はその一つしかない見えないモノです。

あなたはその一つしかない見えないモノです。

万象万物はその一つしかない見えないモノです。

ということは、私たちは、いつもその一つの見えないモノを観ていることになりました。その一つの見えないモノと語り合っていることになりました。その一つの見えないモノとお付き合いしていることになりました。そうです。私たちは毎日自分と語り合い、自分とお付き合いしているのです。なぜなら、私はあなただからです。あなたは私だからです。だから私は、私の物はあなたのもの、あなたの物は私のものというのです。もしあなたが誰かを恨み憎み怒っているなら、それは自分を恨み憎み怒っていることになるのです。もしあなたが誰かを愛しているなら、それは自分を愛していることになるのです。何せこの宇宙には、見えないモノは一つしかないのですからね……。つまり私しかいないのですからね……。真実とはこのように、この宇宙に一つしかない見えないモノを指しているのです。つまり私のことを指しているのです。

言葉七三・・・十字架は宇宙そのもの

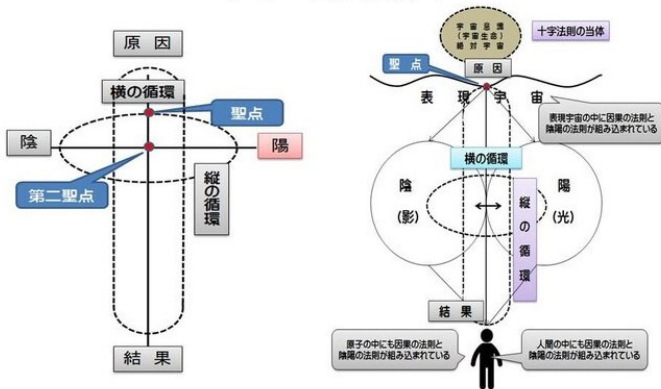
十字架は横の線と縦の線が十字に交差した形をしています。この形は宇宙の法則を示しているのです。すなわち十字の縦の線は原因と結果の法則を示しており、横の線は陰陽の法則を示しているのです。この二

つの法則を私は、大宇宙を支える「十字の法則」と呼んでおります。十字架は正に、宇宙の象徴なのです。ではこの二つの法則は、どのような働きをしているのか見てみることにしましょう。

宇宙には、絶対宇宙と相対宇宙にまたがる縦の大循環運動と、相対宇宙内における縦の小循環運動と、相対宇宙内における横の循環運動の三つの循環運動があります。縦の大循環運動とは、相対宇宙を生み、維持させ、消滅させている脈動運動のことで、これを私は宇宙の輪廻と呼んでおります。これは絶対宇宙の働きを動脈運動と考え、相対宇宙の働きを静脈運動と考えれば分かりやすいかもしれません。勿論、その働きを支えているのは因果の法則です。

縦の小循環運動とは、相対宇宙内で行われている物質

十字の法則図



宇宙の法則が十字架の形の中に秘められている。
十字架は真理そのものである。

界と幽界の輪廻のことです。私たちは、この縦の小

循環を繰り返すことによって進化成長を遂げてゆくわけです。勿論これも、因果の法則が裏支えしているのはいうまでもありません。相対宇宙内における横の循環とは陰陽の法則のことで、いわゆる物質とエネルギーの循環のことです。この循環の働きによって、相対宇宙に様々な生き物が誕生してくるのです。このように宇宙は、二つの縦の循環運動と一つの横の循環運動に支えられ、永遠の存続を可能にしているのです。

さて因果の法則と陰陽の法則は、原子一個の中にも、砂一粒の中にも、地球の中にも、大宇宙の中にも、人間の中にも組み込まれております。原子も人間も大宇宙も似ているといわれるのは、同じ十字の法則によって支えられているからです。人間は十字架そのものなのです。手を横に広げてみてください。十字架に似ていますね。頭の方が原因で、足の方が結果です。左手の方が陰で、右手の方が陽です。そして胸の中心付近が第二の聖点になっています。第二の聖点を中心にして原因と結果が縦に循環し、さらに陰と陽が横に循環して、人間を健全な方向へ導いているのです。だからこの循環が崩れたら、たちまち病気になったり、災難に遭ったり、死に至ったりするわけです。この宇宙は実に、単純、簡潔、相似に創られています。一つを知れば全体が解るのは、その単純さゆえです。だから人間を知れば、宇宙を知ることができるわけです。宇宙を知りたかったら、十字の法則を知ってください。人間を知ってください。

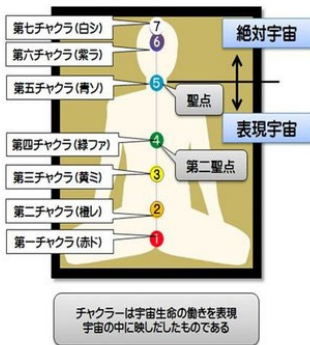
言葉七四・・・小宇宙におけるチャクラの働き

さて小宇宙である人間には、七つのチャクラがあります。

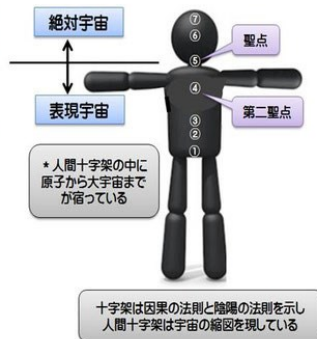
- ・頭のとっぺんに第七のチャクラ
 - ・眉間のところに第六のチャクラ
 - ・のどの付近に第五のチャクラ
 - ・胸のあたりに第四のチャクラ
 - ・お腹の付近に第三のチャクラ
 - ・丹田付近に第二のチャクラ
 - ・恥骨のあたりに第一のチャクラ
- この七つのチャクラには、大きく分けて三つの役割があります。

のどから上の五・六・七のチャクラは、天の役割を司っております。のどから下の三・二・一のチャクラ

チャクラ図



人間十字架図



は、地の役割を司っております。真ん中に位置する第四のチャクラーは、天のエネルギーをスパークさせる役割と、地のチャクラーの開発を促す役割を司っております。その意味では第四のチャクラーは、天と地の両方に属するチャクラーといつていいかもしれません。個別の主な役割としては、第七のチャクラーは、神の理念(想い)を降ろす役割を担っております。第六のチャクラーは、波動の増幅装置の役割を担っております。第五のチャクラーは、天と地の橋渡しをする役割と、神の想いを振動(音声・響き)に変える役割と、第四のチャクラーと第六のチャクラーを結びつける役割の三つの役割を担っております。だから第五のチャクラーのことを、0点とも、接点とも、第一の聖点とも呼んでいるのです。第三のチャクラーは、形を生み育てる役割を担っております。第二のチャクラーは、地のエネルギー(第三のエネルギー・酸素を燃焼させる役割を担っています。第一のチャクラーは、本能を揺り動かし、地のエネルギーを循環させる役割を担っています。このように上の方のチャクラーは靈的な働きをし、下の方のチャクラーは物質的な働きをしているのです。さてチャクラーには、下から上に向かって赤・橙・黄・緑・青・紫・白と七つの色が着いています。下の方は振動数が低く上の方は振動数が高いのです。この振動数は七つの複合体(人体の七層)と深い関係があり、さらに音階とも深いつながりがあります。例えば、赤は〔ド〕と、橙は〔レ〕と、黄は〔ミ〕と、緑は〔ファ〕と、青は〔ソ〕と、紫は〔ラ〕と、白は〔シ〕と、いった具合に音階と同調しているのです。この音階のコードを高

めてゆくと無音となり、最終的に想念の色にたどり着きます。また色階の波動を高めてゆくと無色となり、これも想念の色にたどり着きます。想念の色とは、白のこと、白光のこと、幸福の色のことです。まさに白色は、永遠に飽きない幸福を生み出す色なのです。先ほど五・六・七のチャクラーは天に属し、三・二・一のチャクラーは地に属すると述べてきましたが、その意味では青と紫と白は天上界(神界・靈界)の色で、黄と橙と赤は地上界(物質界・幽界)の色といってもいいでしょう。また中間に位置する緑は、天地のバランスを保つ色ですから、両方の世界に属する中庸の色といってもいいかもしれません。緑を見ると心穏やかになるのはそのためです。この七つのチャクラーは、原子の中にも人間の中にも地球の中にも大宇宙の中にも存在していて、相互に関係を保ちながら一糸乱れぬ運動した働きをしているのです。一つひとつ単独で働いているのではなく、すべてのチャクラーと同調しながら、絶対宇宙から相対宇宙へ相対宇宙から絶対宇宙へエネルギーを循環させているのです。

言葉七五・・・幻から眞実は生まれない！

ある人からこんな質問を受けました。「自我人間がどんなに”吾生命なり！”と瞑想しても、自我人間そのものが幻だから、幻の自我人間が幻の自我人間を自覚めさせることなどできないのではないでしょう

か？」と・・・。確かにこの人がいう通り、自我人間は実在しませんから、実在しない自我人間が瞑想しても、目覚めることはできないでしょう。でも、良く考えてみてください。その「吾生命なり！」と想わせている力は、どこからきているのでしょうか。神(生命)からではありませんか。ならばその想いには、神の力が秘められているのではないのでしょうか。思考が肉体から生まれているなら、そのような力は無いかもしれません。神からきているのですから、その力によって目覚めることは可能なはずです。よろしいですか。

どんなに人間だと想っても、その想いは神からきているのですよ！ ただ想いの中身と強さによって、実現力に違いが出てくるだけです。つまり、想いの中身が濃く強ければ強い実現力となるし、薄く弱ければ弱い実現力になるということです。でもどんなに薄く弱い想いでも、それなりの実現力はあるのです。「想念は実現の母」といわれる理由は、自我人間の想いにもそれなりの実現力があるからです。これはこういう事と同じなのです。

唯物論者は神を否定しますが、その否定する力はどこからきているのでしょうか。神からではありませんか。神の力なしに唯物論は説けないのですよ！ 彼らは唯物論を説く力が、神からきていることを知らないのです。でも知らなくても、神の力によって唯物論が説かれていることは間違いないのです。実在しない自我(肉体)、どうして考えることができるでしょう。どうして言葉を話すことができるでしょう。今思っ

いるのは、今語っているのは、紛れもない神なのです。ただ神でありながら、人間だと思いい違っている神がいるだけです。

何も無いところからは、何も生まれません。実際にある神から、幻も真実も生まれるのです。「あなたが、どんなに人間と思っても神である事実は変わらない！」と私がいうのは、その人間と思わせている力のものが神からきているからです。あなたを存在させているのは、神の力によるのですよ！

人間と思わせている思いは、真実から生まれたのです。真実から生まれた思いを否定すれば、真実を否定することになります。つまり神を否定することになります。神を否定するということは、自分を否定することです。自分を殺しているということですが、でも安心してください。幻は幻を殺せないのです。幻には何の力も無いからです。殺せるのは実際に有る真実だけです。その真実は幻さえも否定しないのですから、幻のあなたを殺すことは絶対ないのです。繰り返します。幻からは幻は生まれません。幻は真実から生まれるのです。真実を否定すれば、自分を否定するという矛盾に気付いてください。

唯物論者は肉体から思いも言葉も生まれると信じていますから、平気で神を否定するのです。肉体は永遠ですか？ 消えて無くなるのではありませんか？ 消えて無くなる肉体が、どうして真実でしょうか？ 幻です！ その幻の肉体に、思いも言葉もあるわけがないのです。そんな幻から生まれた唯物論が、どうし

て正しいのでしょうか。唯物論者に“肉体(脳)は実在しますか”と問うと、口ごもりながら実在しないとい
います。そういうながら、その実在しない肉体から生まれた唯物論が正しいと思っているのですから、こん
な滑稽なことはありません。幻の脳から、どうして思考が生まれるでしょうか。脳は実在しないといなが
ら、その脳から生まれた唯物論が正しいと信じる矛盾に、彼らはどうして気付かないのでしょうか。もし物
質である脳から思考が生まれるなら、コンピューターから思考が生まれるといわねばなりません。そんなこ
とはあり得ないわけですから、物質である脳から思考が生まれることはないのです。脳もコンピューターも
物質です。物質には、一点の知恵も力も無いのです。物質は消えて無くなる幻です。実際に無いから、真実
なるものではないから、消えて無くなるのです。

言葉七六・・宇宙は理解力に相応して展開して行く

宇宙は、人の理解力に相応して展開して行く意識の創作物です。この宇宙に、こんな宇宙がある、あんな
宇宙がある、といった出来上がった宇宙があるわけではないのです。一人ひとりの理解力によって生み出さ
れた、意識の創作宇宙があるだけです。だから地獄という世界があるわけでも、天国という世界があるわけ
でもないのです。自分の理解力に基づいて創られた自分の世界があるだけです。その世界を地獄の世界にす

るか天国の世界にするかは、どのような理解力に基づいた思考を持つかで決まるのです。つまり、地獄のような苦しい思考を持ってば地獄の世界を創るし、天国のような楽しい思考を持ってば天国の世界を創るわけです。これが理解できない限り、私たちは不自由な物質の世界に封じ込められ、様々な苦しみや悲しみに喘がねばならないのです。

確かに外側には、沢山の世界が有るように見えます。誰かが、何かが、創った世界が有るように見えます。でもその世界は、人間が生み出した幻の世界で、実存している世界ではないのです。私たちは、体験しなければ宇宙の実体が把握できないため、自ら幻の世界を創ってそこで学んでいるのです。迷った人間に必要なのは体験です。体験を通してしか、目覚めることができないのです。

人間は、一人ひとりオリジナルな宇宙を持っています。そのオリジナルな宇宙は、本人の理解力に基づいて創られた独自の宇宙ですから、その宇宙に他人が住むことはできないのです。なぜなら、人それぞれ理解力が違うからです。宇宙は一人ひとりのものなのです。一人ひとりがその宇宙の当事者なのです。その当事者は、あなたの主観宇宙にはあなた一人しかいないのです。主観宇宙を創っているのは、主観者である当人ですから当然でしょう。だから、あなたはあなたの宇宙の主なのです。大王なのです。天上天下唯我独存なのです。

誰もが共通の宇宙があると思っておりますが、この宇宙には共通の宇宙などあり得ないのです。あるのはその人の理解力が生み出した主観宇宙だけです。要するに、この地球に70億の人間がいるとすれば、70億人分の主観宇宙があるということです。確かに客観的に見たら、一つの宇宙を客観視している70億人の共通宇宙があるように見えるかもしれませんが、でもその客観視しているのは主観者ですから、客観的宇宙(共通の宇宙)などあるわけがないのです。先ほど述べたオリジナルな宇宙観は、分離観を持った迷い人の宇宙観であって、悟り人の宇宙観ではありません。悟り人の宇宙観は、全一体の宇宙観ですから、そこにはたった一つの究極の宇宙があるだけです。悟れば、一つの宇宙に収斂されてしまうわけですから、一つの宇宙しか存在しなくなるのは当然だからです。というよりも、一つの自分になってしまうわけですから、一つの宇宙しか存在しなくなるということです。

言葉七七・一つのものを二つに見せかける宇宙のカラクリ

宇宙のカラクリの見事さは、一つのものを二つに見せかける巧妙な技法です。

例えば、

大と小は二つで一つです。

膨張と収縮は二つで一つです。

吐き出しと吸い込みは二つで一つです。

右と左は二つで一つです。

上と下は二つで一つです。

人間と生命は二つで一つです。

陰と陽は二つで一つです。

影と光は二つで一つです。

宇宙は相対させることで、一つの真実を明かそうとしているのです。一つのを二つに見せかけねば、真実を知ってもらうことができないので、神は相対観念を通して私たちの意識を研いでいるのです。どうでしょう？ 小さなものがあるから、大きなものがあると解るではありませんか？ 右があるから、左があると解るのではありませんか？ 上があるから、下があると解るのではありませんか？ 一つだけなら、一つは解らないのです。ホンモノだけなら、ホンモノは解らないのです。どうかこの意味の深さを知ってください。

言葉七八・トリックに引っかかっている人間

私たちはそこにモノがあると認識します。なぜ認識できるかといいますと、そのモノの中に自分がいるからです。これまで何度も述べてきたように、私たちの本性は宇宙生命という本質です。その本質はモノを形作っている大元ですから、私はそのモノを認識した途端、私という本質がそのモノになるのです。なぜなら、私の意識そのものが本質そのものだからです。意識はモノを生み出す製造機の役割を果たしているのです。意識すれば何でも生み出されるのは、意識そのものが本質だからです。その意識が私ですから、私が認識すれば、私の本質がそのモノを創造してしまうのです。要するに私の意識が、この宇宙を創っているということです。ということは、私そのものが宇宙であるということです。宇宙は私の本質で創られている、私そのものなのです。

そこにモノがあるということは、私という本質がそのモノの中にあるということです。私という本質がそのモノの中に宿ってそのモノを創っているから、私はそのモノが認識できるのです。もし私とそのモノの中にいなければ、そのモノはあり得ないわけですから、そのモノを私が認識できるわけがないのです。私があるなを認識しているということは、あなたは私であるということです。私が花を認識しているということは、花は私であるということです。私が宇宙を認識しているということは、宇宙は私であるということです。そ

の本質は宇宙に一つしか無いのです。一つの本質が、様々なモノに化身して自分を表現しているのです。だから沢山のモノがあるように見えるけれど、その中身は一つなのです。一つしかない本質から、二つも三つも別なモノが創られるわけがないということです。だからその一つのモノを知れば、宇宙のすべてのモノを知ることができ、自分も知ることが出来るわけです。

神が一樣といわれるのは、その一つしか無い本質が神だからです。私たちは沢山の形を見せられることにより、沢山のモノがあるようなトリックに引っかかっているのです。沢山のモノがあるとせば、私がありあなたがありということになるので、他人を自分のように愛せなくなるのです。一つしか無いと思えば、あなたは私であり私はあなたであるという一体感になれるので、他人を自分のごとく愛せるようになるのです。そこにどうして争い事が生まれるでしょうか。すべては一つであるという真理が、地球を平和な星にするのです。私たちは一つを沢山に見せかけるトリックに引っかかり、今様々な争い事を生み出しているのです。どんなに沢山のモノを見せられても、それは一つのモノの現れですから、決して自分と切り離してはならないのです。確認しましょう。

私が宇宙を認めたから、宇宙は存在できるのです。私が宇宙を認識する限りにおいて、素材である私が宇宙そのものとなっていなくては、宇宙を認識することができないのです。要するに、そこに物が、世界が、

宇宙が、存在しているということは、私はその物を、その世界を、その宇宙を、認めたとということです。認めたとすることは、素材である私が、その物となって、その世界となって、その宇宙となって、そこに居るという意味です。だから物は、世界は、宇宙は、私の意識が創造しているといえるのです。意識そのものが、生命そのものであり、素材そのものであり、私そのものだからです。

認めている私と、認められている私は同じ私なのです。見ている私と、見られている私は同じ私なのです。私が人間を認めているということは、人間は私であるということです。認めている私は、認められている人間そのものだからです。認められている人間は、認めている私そのものだからです。私が生命を認めているということは、生命は私であるということです。認めている私は、認められている生命そのものだからです。認められている生命は、認められている私そのものだからです。

一なるものが、二にも三にもなることはないのです。一なるものは、どこまでも一なるものです。宇宙に一なる素材(生命)しか無いという絶対真理は、私しかいない、私の世界しか無い、私の宇宙しか無い、つまり「天上天下唯我独存(尊)」を意味しているのです。すべてを一なる目で見ることができましたら、天上天下唯我独存の意味が理解でき、このトリックを見破ることができるでしょう。一つのモノしか無いのに、沢山のモノがあるように見せかける巧妙なトリックが、今まで本当の自分を見失わせてきたのです。騙されてはな

りません。どんなに沢山のモノがあるように見えても、それは一つのもの（本質・生命）の化身です。その一つのもので私ですから、私の外に何も無いということです。

存在とは、存在の心です。存在させている意識です。私という意識です。その意識は、本質であり、生命です。その私という意識は宇宙に一つしかないわけですから、すべての物は私の意識によって存在させられているといえるのです。何を見ても、何を感じても、みな私の意識の現れだと心から思えたら、もうこのトリックに引つかかることはないでしょう。

言葉七九・・理解されないものは存在しない！

「理解されないものは存在しない！」というのは真理です。例えば、私がある人にあるお話をしたとしましょう。もしその話が理解できたら、その人は私の宇宙に存在することになります。でも理解できなかつたら、その人は私の宇宙に存在しないことになるのです。これは非常に理解しづらいことかもしれませんが、もしあなたがこのことが理解できないなら、あなたは私の宇宙に存在しないことになります。私の宇宙に存在しないということは、あなたはいないということです。こういうことです。

例えば、今Aチャンネルで世紀の話題が放映されているとします。この場合、Aチャンネルを持っている

人にはその世紀の話題は存在しますが、Bチャンネルしか持っていない人にはその話題は存在しないこととなります。当然Aチャンネルを持っている人と、Bチャンネルを持っている人との話題はかみ合わないでしょう。無理やり話題を合わそうとすれば、混乱してしまうだけです。上からは下が見えても、下からは見えないとは、このことなのです。

波動の違うAチャンネルとBチャンネルは、同調できないのです。同調できなければ、Aチャンネルの世紀の話題は、Bチャンネルでは無いことになるのです。つまり、Aの理解力を持つ人には世紀の話題はあっても、Bの理解力を持つ人にはその世紀の話題は無いのです。ということは、その人は自分の宇宙に存在しないということなのです。だから私は、存在しない人と議論してはならないということです。議論すれば、お互いの宇宙を混乱させてしまうからです。

例えば、神が理解できない人にとっては、神は存在しないことになり、またその人も存在しないことになるのです。なぜなら、理解できない意識は、存在意味が無いという意識の否定になるからです。理解されないものは無いのがこの宇宙の根本原理ですから、理解できない人はその宇宙に存在しないことになるのです。良く考えてみてください。理解できない人の前に何があっても、それは存在しないではありませんか。裏返せば、あなたの存在しない宇宙に何があっても、それは無いということです。それは、あなたにとって

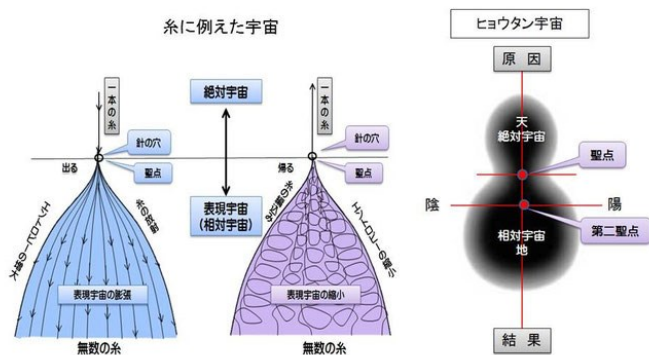
存在意味がないからです。あなたあつての世界なのでしょ！ あなたあつての宇宙なのでしょ！ ということは、先程から述べているようにあなたの理解できないものは、何があっても無いということです。理解できない人の前に何があっても、それは無いのです。

この話は、理解できる人には重い響きとして受け取って頂けるはずですよ。

言葉八〇・一本の糸と無数の糸

人間の身体を縦に二つに分けると、首から上の部分と首から下の部分に分けられます。首から上の部分は絶対宇宙を現わし、首から下の部分は相対宇宙を現わしています。横に二つに分けると、体の左半分が陰の宇宙を現わし、右半分が陽の宇宙を現わしています。首のくびれ

糸とヒョウタンに例えた宇宙図



た部分は、絶対宇宙と相対宇宙をつなぐ架け橋になっていて、そのくびれを通して表現宇宙の様々な営みが生まれてくるのです。(このくびれは、第一の聖点とか接点とか零点とか、あるいは針の穴とか呼ばれている。)ある聖者は宇宙をヒョウタンに例えています。まさにヒョウタンと人間と宇宙は良く似ております。例えばヒョウタンは、くびれを利用して、同じ量の水を出したり入れたりしています。人間も宇宙も、このくびれを通して絶対宇宙から相対宇宙へ、相対宇宙から絶対宇宙へ均等にエネルギーを循環させているのです。似ているのはそれだけではありません。機能的にも能力的にもまた表現においても、ヒョウタンと人間と宇宙は良く似ているのです。では人間と宇宙がいかにも似ているか、宇宙を一本の糸に例え説明してみたいと思います。

絶対宇宙には、たった一本の糸が存在します。その糸は別名、元数1とか、白光とか、宇宙意識とか、神とか、呼ばれている宇宙の主であり大元です。その一本の糸は、一本の糸のままでは自分の存在が明かせないため、無数の糸に別けて放射し表現宇宙を創造したのです。(無数の糸とは分数・元素・原子番号のことです。)いわゆる無数の糸は、一本の糸の分身となったわけです。でもこの無数の糸は、自分が何者なのか記憶を失っています。私はいったい何者なのだろうか？ 糸は考えます。でも分かりません。そこで糸たちは、自分を知るために集まってきました。

無数の糸たちは集まることによつて自分が何なのか、少しずつ知りはじめます。そしてついに、自分たちが一本の糸であつたことに気付きます。でも絶対宇宙に帰るためには、無数の糸のままでは帰れません。なぜなら、帰るためには一本の糸に戻らなくては聖点のくびれを通ることができないからです。そこで無数の糸たちは、長い時をかけ一本の糸に編込んでゆきます。これが糸の編込み作業、生命核(魂)の濃縮作業です。糸を編込んで行く途中で様々なドラマが生まれるわけですが、これが私たちの演じる人生ドラマの数々です。こうして一本の糸に編み終えた糸は、聖点のくびれを通つて故郷である絶対宇宙に帰つて行くのです。イエス様が「悟るのは針の穴を通るよりも難しい！」と比喩的に語つた所以です。

今の私たちは、無数の糸のような存在なのです。今私たちは人間社会において様々なドラマを演じ合つていますが、これは無数の糸を一本の糸に編み込む作業と考えたらいいでしょう。人類はやがて一本の糸に編み終え、針の穴を通つて故郷である宇宙生命に帰つてゆくことでしょう。一から出たものは一に帰るのが定めです。これは否応なしなのです。

言葉八一・見えないモノこそ絶対實在

「見える物は非實在で、見えないモノは實在である！」ということを心底で理解できたら、もうあなた

は何も学ぶ必要はありません。完全に目開きになります。ということは、宇宙のすべてが解ったということになります。そうなるに変性変容が起きてきます。あなたはいぶかしげな顔をしています、見えないモノが実在であるということは、今まで身を持って体験してきたものではありませんか？

例えば、

- ・あなたは、見えない宇宙法則の下に生かされているではありませんか？
- ・あなたは、見えない空気を吸って生きているではありませんか？
- ・あなたは、見えないエネルギーの恩恵を受け生きているではありませんか？
- ・あなたは、見えない想いを持ち生きているではありませんか？
- ・あなたは、見えない言葉を使い生活しているではありませんか？
- ・あなたは、見えない愛で支えられ生きているではありませんか？

宇宙法則は見えますか？ 空気は見えますか？ エネルギーは見えますか？ 想いは見えますか？ 言葉は見えますか？ 愛は見えますか？ これだけ見えないモノの恩恵を受けているというのに、あなたはどうして見えないモノを否定するのですか？ 宇宙法則は見えないのです。でも、見えない法則によって私たちは生かされているのです。このことを私は知って欲しいのです。

「見えないモノこそ絶対実在である！」ということを中心の底で知れば、目は大きく開かれ、あなたは間違ひなく変わります。さあ目覚めてください。目が覚めるということは、何にも見えなくなることです。目に何かが写っている間は、眠っているのです。ですから、毎日いろいろなものを見ているあなたは、今夢の中にいるのです。どうか目覚めてください。目覚めたら、”私は何も見えません！”というようになるでしょう。

言葉八二一・宇宙の創成物語

■ 神の意図

絶対宇宙には、唯一の意識体(宇宙意識)が存在します。これを私たちは神と呼んでおります。でも、神という名に囚われる必要はありません。神と呼ぶのが恐れ多いなら、「生命」と呼んでも良いのです。「無限」と呼んでも良いのです。「創造主」と呼んでも良いのです。「宇宙意識」と呼んでも良いのです。「宇宙」と呼んでも良いのです。要するに意識と意志を持ち、しっかりとした目的意識を持って宇宙を差配している存在が神なのです。ここで神という名を使わせてもらうのは、古来より人類が、あこがれ、畏怖し、崇め、すがってきた対象物が神の名であったからです。

その神には、三つの悩みがありました。

〔※神は完全ですから、神に悩みがあるわけがありません。説明上必要なので、このような表現を使いました。その点誤解のないようにしてください。〕

*一つは次のような悩みでした。

「私は偉大な能力を持っている。でもその能力は、私の思いの中にあるだけで、実現化されていないのだ！これで良いのか？」

そうです。どんなに偉大な能力を持っていても、表現しなければただの自己満足にしか過ぎません。どんなに素晴らしい理念を持っていても、表わさなければ単なる空論で終わってしまいます。どんなに素晴らしい絵の構想を持っていても、描いて見せなければ嘘になります。これが一つ目の悩みでした。

*二つ目の悩みは、次のようなものでした。

神は絶対宇宙における唯一の存在者ですから、そこには自分しかおりません。神は思いました。

「自分だけが自分の存在を知っていて、いったい何になるのだ？ 自分しか存在しない宇宙に、いったいどんな意味があるのだろうか？ いや、自分しかいなければ、自分の存在は無いのではないだろうか？ 誰かに認められて、はじめて存在意義が出てくるのではないだろうか？」

そうです。一しか無ければ、一は無いのです。自分しかいなければ、自分は無いのです。なぜなら、自分が自分を見る(知る)ことなどできないからです。あなたは、自分を直接見たことがありますか？ ”鏡に映して自分を見ました、あるいは写真に撮って自分を見ました”といわれるかもしれませんが、それは間接的に見たのであって、直接見たわけではありません。いまだかつて、直接自分を見た人は一人もいないのです。白板に白墨で書いても分からないのです。雪の中に白ウサギがいても分からないのです。このように絶対の中においては、絶対は分からないのです。一の中には、一は分からないのです。自分の中には、自分が分からないのです。

*最後の悩みは、次のようなものでした。

「確かに、今私は幸せいっぱいである。でもこの幸せは、一体いつまで続くのだろうか？ 昔は今以上に幸せだったのに、今はそれほど幸せとは思えない。どうも幸せに慣れ、幸せの味が薄れてきたようだ。このままだと、今の幸せもいつか消えてしまうのではないだろうか？」

意識の一番の弱点(強点かもしれません)は、飽きてしまうことです。皆さんも体験があると思いますが、どんなに面白い映画も、何度も見れば飽きてしまうものです。どんなに楽しい遊園地の乗り物も、何度も乗れば飽きてしまうものです。幸せも、同じ幸せの中には飽きてしまうものなのです。これは、永遠の意

識を持つ者にとつて大問題です。

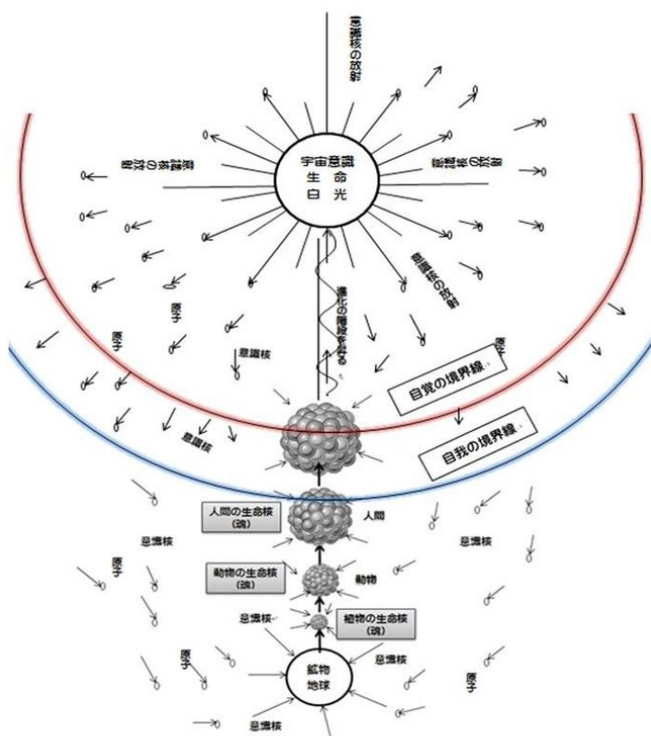
神は、この三つの悩みをどう解決すべきか考えました。

「そうだ！ もう

一つの自分(相対宇宙)を創ろう！ そうすれば三つの悩みはすべて解決するはずだ！」

神はこのような理由から、もう一つの自分(私・人間)を

悟りへの進化の旅図



創ることにしたのです。すなわち、相対宇宙(表現宇宙・物質宇宙)を創ることにしたのです。(自分とは、神「自」らが自分を「分」けたという意味です)

■ 宇宙の創造劇

神は相対宇宙を創るに当たり、自らの意識を四方八方に放射しました。(これをビッグバン、あるいはバンドラの箱現象ともいう)その放射した意識は、光であり、エネルギーであり、本質であり、神ご自身です。その意識は波動を下げ、色光となりました。さらに波動を下げ、意識核となりました。さらに波動を下げ、原子となりました。原子には質量があるため、原子化された段階で時間と空間が生まれます。これが時空の誕生、すなわち表現宇宙の誕生です。

「神が物を創造する場合、神自らがその物になるしかない！」といわれる理由は、この宇宙に神しか存在しないからです。神は理念の主であり本質そのものですから、物を創造する場合自らその物になることができるのです。ということは、この表現宇宙(相対宇宙)は、神ご自身で構成されているということです。言いかえれば、表現宇宙そのものが神ご自身であり、そこに創られた様々な物も神ご自身であるということです。こうして全能の神は、自らを素材として使いこの表現宇宙を創造されたわけです。

■ 目的の達成

【一つ目の目的の達成】

宇宙をご覧ください。あまねき輝く銀河の群れ、多彩な色光を放ち宇宙を浮き彫りにしている恒星たち、見事なまでに散りばめられた惑星や衛星たち、寸分の狂いも無く運行する星の動きの妙技、その星々に誕生した数知れない生き物たち、ああ神は何と素晴らしい絵を表現宇宙に描かれたことか……。この素晴らしい絵を一目見ただけでも、全能の神の偉大さが分かります。

こうして、神の一つ目の目的は達成されました。ただ一つ憂いがあるとすれば、神が放射された意識核の記憶が希薄になった点でした。自分が何ものか覚えていないのです。「私」という記憶はあっても、私がいいたい誰なのか分からないのです。

「私は何者なのだ!? 私はいったい誰なのだ!? 分からない!？」意識核は戸惑います。意識核に記憶が無ければ、意識核の集まりである生命核(魂)に記憶がないのは当然です。だからその生命核を宿している人間にも、神の自覚がないのです。でも神は、そうなることを織り込み済みで表現宇宙を創ったのです。それは意図あつてのことでした。もし人間に神の自覚があつたら、自分相手に一人芝居はできませんから、この表現宇宙に感動のドラマは生まれなかつたでしょう。後で説明しますが、感動のドラマが生まれなくては、

神の最終目的は達成されないのです。

【二つ目の目的の達成】

神は織り込み済みで意識核の記憶を奪いました。しかし神は、記憶を蘇らせる方法も忘れませんでした。それは意識核自らに、記憶を蘇らせる仕組みを持たせたことです。

(エントロピー縮小の仕組み)

まず、親和力によって意識核自らが集まってきて宇宙空間に塵が生まれます。その塵が集まって星が誕生します。星の誕生、すなわち鉱物の誕生です。その鉱物の中心に、意識核の集合体である生命核(魂)が宿ります。(形が創られると中心に生命核「魂が」宿るのは、宇宙の約束事「法則」である。)やがて本質の力によって数知れない植物が繁茂し、星は緑で覆われます。当然のごとく、植物の中心に生命核が宿ります。次いで動物が誕生します。動物が増えるのも、神が与えてくれた本能の力によるものですが、その中心に同じように生命核が宿ります。そして最後に人類が誕生します。そこには当然、鉱物・植物・動物から受け継いだ生命核を宿しております。このようにして、記憶を失った数知れない意識核が、生き物の中に生命核として濃縮されてゆくのです。生き物の誕生は、生命核を濃縮する作業そのものであるわけです。

生命核が濃縮され、ある量に達すると、失っていた記憶が一部蘇ります。つまり、”ああ私は人間なのだ！

宇宙がある！ 妻や子や友達がいる！ “と自覚できるようになるのです。これを自我が備わった生命体といい、進化の第一段階を卒業したことを意味します。宇宙を認識できるということは、神(自分・私)を認識できるということですから、これは神が意図していた二つ目の目的が達成されたことになります。

【三つ目の目的の達成】

さて神は、二つの目的は達成しましたが、最終目的である「永遠に尽きない幸せ！ 永遠に色あせない幸せ！」を得る目的はまだ達成できていません。そこで神は、私たちにドラマを演じさせる舞台を与えたのです。それが、地球(惑星)という舞台です。これまで地球上で、どれほどのドラマが、生まれたことでしょうか？ そのドラマの数々が、永遠に尽きない、永遠に色あせない、幸せを生み出してくれるのです。三つ目の目的が達成されるのは、そのドラマを神の世界(絶対宇宙)に持ち帰ることです。では、そのドラマを神の世界に持ち帰るには、どうすれば良いのでしょうか？

■ 悟りが果たす役割

この表現宇宙には、前述したように無数の意識核が浮遊しております。意識核が浮遊している間は、時空はそのままの状態で存在し続けます。それではドラマを持ち帰ることはできません。ドラマを持ち帰るには、時空を縮めなければなりません。その役割を担っているのが、人類の悟りなのです。悟った生命核(魂)

には膨大な意識核が濃縮されているわけですが、その意識核を神意識の一点(パンドラの箱)に帰すことが人類の最終目標なのです。

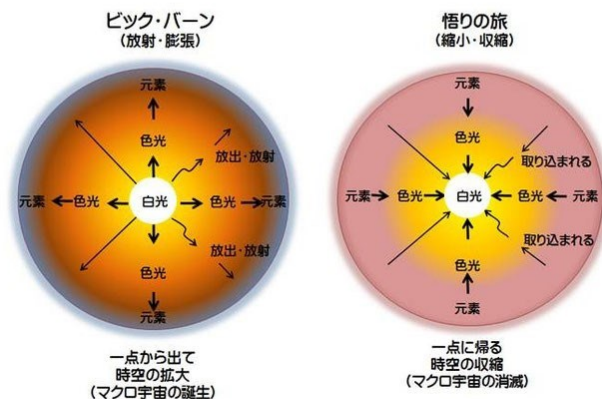
地球人類の生命核(魂)は、これまで鉱物・植物・動物が集めてくれた意識核を受け継ぎ、さらに自らも集め、やっと、“自分は人間である！”と自覚できるところまで成長してきました。でもまだ、神だと自覚できるところまで至っておりません。ということは、地球人類は未熟な魂の段階にあるということです。生命核がある一定量集まると、否応なしに“自分は神であった！”という自覚に至ります。これを自覚の境界線を超えた生命体といい、進化の第二段階を卒業したことを意味します。この段階に至った人の魂には、膨大な量の意識核が濃縮されているのです。つまり、表現宇宙を縮小させる(時空を縮める)力が秘められているのです。まだ地球は幼いため悟り人は少ないですが、いずれ多くの人が自覚の境界線を超え、進化の第二段階を卒業するでしょう。

■ 宇宙の脈動運動

ビッグバン以来、表現宇宙は膨張を続けてきました。その表現宇宙が成長しある境を越えると、膨張にストップがかかり安定の時期に入ります。それが脈動運動の分岐点です。それを過ぎると、ゆっくりと収縮に転じるようになります。その収縮は次第にスピードを増し、やがてスピードの極に達します。その頃には、

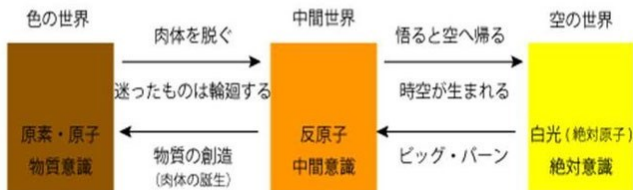
多くの人類が悟りの収穫時期を迎えておられます。つまり自覚の境界線を超え、神意識の一点に帰る準備を終えているのです。やがて表現宇宙は、一気に収縮を始めます。急激に時空が縮まり、神意識の一点に私たちがの生命核(魂)も、相対宇宙も、呑み込まれて行きます。これが

宇宙の脈動運動



大中心核から放射された分心核は、必ず大中心核に帰る運命にある。

無限小から無限大へ、無限大から無限小への循環を宇宙の脈動運動という。



一脈動運動の最期の姿です。

宇宙は今まで脈動運動を続けてきたし、今も続けているし、これからも永遠に続けるでしょう。水は流れているから清いのです。流れなければ淀んで腐ってしまいます。これは死を意味します。永遠に尽きない色褪せない幸せを得るためには、次から次へと注ぎ込まれる新鮮な水が必要なのです。その水に当たるのが、人間が持ち帰るドラマの数々なのです。この宇宙の創成物語は、人類誕生の物語であり、究極の幸せへ導く物語でもあるのです。

【神様からの手紙④・宇宙の管理人は一人ひとりである】

あなたたちは、みなそれぞれ自分の宇宙を持っております。その宇宙の管理責任者は、あなたたち自身です。喜び多い宇宙にするか、苦しみ多い宇宙にするかは、自分の宇宙をどう管理するかで決まるのです。自分の宇宙をどう管理するか？ とは、どのような想念を持つか？ という意味です。苦しんでいる人は、自分の想念を、憎しみや、恨みや、怒りなどの悪しきことに使っています。想念を悪しきことに使えば、悪しきことが返ってくるのが「因果の法則」ですから、苦しむのは当然なのです。自分の宇宙を幸せな宇宙にしたかったら、常に善い想いを持つことです。

この想念の管理は、自分の宇宙だけでなく、全宇宙にも及ぶ大変重要な問題なのです。もし全人類が、悪しきことに想念を使ったら、一体どうなるでしょうか？ 間違いなく、自分を破壊し、地球を破壊し、宇宙をも破壊してしまうでしょう。それほど想念には、偉大な力が秘められているのです。それゆえに、一人ひとりが正しく想念を管理する責任があるのです。一人ひとりの人生の行方は、当然、一人ひとりの想念が握っています。でも、地球の行方も、宇宙の行方も、一人ひとりの想念が握っているのです。どうか、想念を悪しきことに使わないでください。苦しむのはあなたたちだけでなく、全ての生き物たちが、いや、地球も、宇宙も、苦しむのですから・・・。

何でも生み出すことのできる想念は、宇宙そのものです。その想念を、あなたたち一人ひとりが持っているのです。どうか、想念の管理をしっかりとしてください。一人ひとりの宇宙の管理人はもとより、全宇宙の管理人もあなたたち一人ひとりなのですから・・・。

第5章 意識(本質)

意識＝本質です。本質の「本」は「大本」のことです。本質の「質」は「成している素材」という意味です。したがって、意識とは、「大本を成している素材」という意味になります。宇宙の大本を成している素材は意識なのです。神の大本を成している素材は意識なのです。ということは、意識を持っている私たちは、宇宙そのものであり、本質そのものであり、神そのものであるということになります。だから、私たちは、自分の意識を深く知り、しっかりとした意識の管理が必要になってくるのです。なぜなら、自分の意識のあり方が、そく自分の宇宙に反映されてくるからです。

言葉八三・意識から離れた形は無い！

人間が神であるというと、” えっ！ ”と驚きの声を上げる人がおりますが、驚きの声を上げるのは神の実体を知らないからです。神は神秘的な存在ではありません。恐れ多い存在でもありません。神とは、生命のこと、原子核のこと、元数1のこと、エネルギーのこと、本質のこと、すなわち意識のことです。神は

意識そのものなのです。その意識によって、すべてのものが創造されているのです。ならば、人間が意識なのは当たり前ではありませんか。

形が創られる場合、意識から離れて形が創られることはありません。創られた物と創り主である意識は、絶対不可分なのです。ということは、どんな形の中にも意識が、内在しているということになります。ならば、すべての物は、意識そのものではありませんか。唸りをあげる風も、しぶきを上げる海も、遠吠えを上げるオオカミも、陽気にさえざる鳥も、みな意識であり神であります。人間が意識であると平気でいえるのも、意識から離れた人間はいないからです。人間と意識は裏表一体なのです。決して切り離すことができないのです。ただ、表の顔と裏の顔があるだけです。つまり表を見れば人間の顔で、裏を覗けば意識の顔であるということなのです。人間は二重面相なのです。でも、その意識の顔は見えないのです。意識の顔が見えないがゆえに、人間は意識を無視してしまうのです。見える人間の顔がホンモノか、見えない意識の顔がホンモノか、どうか識別してください。

言葉八四・有る無しを決める判定員

意識は見えませぬ。触ることもできません。でもその意識は、間違いない実在しています。それは、この

もって真実を見失っているのです。

では、「有る無し」を決めるのは誰でしょうか？ それは、永遠の意識を持つ人間です。永遠のモノを判定するためには、永遠の意識を持つ判定員が必要であり、その役目を担っているのが人間なのです。永遠の意識を持つ人間が永遠の目で認めるから、永遠のモノが判定でき、永遠のモノ（宇宙）が存在できるのです。人間は、その永遠のモノを判定する審判員なのです。もし人間がいなかったら、本当に有るものか無いものか判定できないわけですから、宇宙は存在できなくなってしまうのです。永遠のものを計測するには永遠の測りが必要であり、その測りが人間だということです。ということは、「人間が宇宙の存在を握っている」、ということになるでしょう。それほど人間は、偉大な存在なのです。

言葉八五・光と影は二つで一

この表現世界には様々な物がありますが、それらの物は実際に有るのでしょうか。いいえ、どんな物も時がくれば必ず消えて無くなります。消えて無くなるのは、実際には無いからです。今、太陽の光に照らされ、ここに影ができています。しかし、太陽が雲に隠れ影が消えて無くなりました。では、今まであった影は何だったのでしょうか？ 幻だったのです。実際に無いから消えてしまったのです。この世の物は、光によ

て写し出された影のようなものです。影だから、光が遮られれば消えて無くなるのです。光は実在しますが、写し出された影は実在しないのです。でも、私たちはその影を、実際に有ると勘違いしているのです。この世に写し出された影は、光の現れとして一時存在しますが、永遠に存在するものではないのです。しかも、影一つ一つに光一つ一つがあるわけではないのです。一つの光が「私を、あなたを、万象万物を」写し出しているのです。だから、すべての影は、同胞といえるわけです。その同胞同士が喧嘩し合うとは、おかしな話ではありませんか？ もともと無い影同士が喧嘩し合うなんて、愚かだと思いませんか？

私たちは一時も早く、ニセモノとホンモノを見分ける理解力を持たねばなりません。そうしない限り、この地球に争い事は無くならないでしょう。ニセモノは物質です。ホンモノは本質(意識・神)です。そのニセモノとホンモノは、二つで一つなのです。その二つで一つなるものが、人間であり神なのです。人間という形と本質という神が、寄り添いながら、今、真実を探しているのです。

言葉八六・意識を分析する

意識はこの宇宙に、たった一つしかありません。それは神という意識です。神は意識の別名なのです。この宇宙には、神という名の意識が一つあるだけなのです。その意識は、すべての物を形作っている大元です。

その意識は、意思を持った生き物ですから生命ともいい、生きて働いているのでエネルギーともいいます。その意識は見えません。見えないけれど、すべての物の中にあつて、思い、考え、語り、行動指令を出しているのです。まさに意識は、形を背後で操る黒子のような存在です。

その意識は今絶対界（意識界）に一点として存在し、同時に相対界（物質界・表現世界）に無限として存在しているのです。つまり相対界に「多」なる物として存在し、絶対界に「1」なる意識として存在しているのです。ではなぜ「1」なる意識が、沢山の物の中に存在できるのでしょうか？ この辺りが非常に理解のしづらいところですが、このように考えてください。「一つの光が無数の影を作り、その影と光が表裏一体になっている」と・・・。影は無数にあります。光源は一つしかありません。この宇宙にはこのように、意識（光・実在）は一つしか無いけれど、形（影・非実在）は無限に存在するのです。

「多」なる物とは原子のことで影を意味します。「1」なるものとは光のことで意識を意味します。「光」と影は表裏一体、意識と物は表裏一体、一と無限は表裏一体、本質と原子は表裏一体」、だからその原子で造られている私たちも、一にして無限の存在なのです。その意識は永遠不滅で、決して無くなることはありません。意識は生まれもしなければ無くなることもないのです。だから私たちも、生まれもしなければ無くなることもないのです。意識である私たちが無くなれば、宇宙も消えて無くなってしまふからです。「私た

ち〓意識〓本質〓宇宙〓一〓神〓この真理を心の底で理解してください。

言葉八七・意識の本性は善か悪か？

意識は見えません。意識はエネルギーですから見えません。一つしかありません。一つしか無いということは、意識は無限であるということになります。

「一〓無限」なのです。また無限は完全の別名ですから、意識は完全であるということになります。また完全の別名は絶対善ですから、意識は絶対善であるということになります。私たちの世界には、性善説と性悪説があるようですが、本来、性善説があっても性悪説などないのです。なぜなら、意識(本質・神)は、絶対善であり、絶対正義であり、完全だからです。もし、性悪説が本当なら、意識(本質・神)は不完全ということになり、この宇宙は一瞬たりとも存在できなくなってしまう。意識(本質・神)が善なるがゆえに、私たちは安心して生きられるのです。

キリスト教では、「人間は罪の子である」と教えているようですが、罪の子がどうして神を拝むのでしょうか。罪の子なら悪魔を拝むはず。なぜなら、罪は悪魔の所業だからです。もし人間が罪の子なら、学校で道徳を学ぶ必要も、宗教を学ぶ必要もないではありませんか。善の子だから、神を拝み、道徳を学び、

宗教も学ぶのです。確かにこの世界には、悪を働く人たちが沢山おります。でもそれは、人間の本性が悪だからではなく、自分が何なのか知らないからです。本当はダイヤモンドなのに、泥の付いた石を自分だと誤解し、石として生きるから悪を犯すのです。誤解を解けば、泥を落とせば、ダイヤモンドに早変わりするのです。つまり、善人になるのです。どんなに泥を塗りたくっても、本質は決して変わることはないのです。本質の本性は、絶対善であり、絶対正義であり、完全ですから、この世に悪人など一人もいないのです。いるのは、迷った善人たち(迷った神たち)だけです。

言葉八八・宇宙は意識の海・生命の海・本質の海

表現宇宙は、意識で埋め尽くされた意識の大海原です。その意識の大海原から、様々な生き物が生まれてくるのです。なぜ意識の大海原から生き物が生まれるかといいますと、意識は命の本質だからです。科学者は真空からは何も生まれませんといいますが、真空こそ生命の故郷なのです。真空が物の素材そのものだからです。ということは、科学者がいうような真空でないことになります。真空という字を分解してみましょう。「真」とは、実際に有るものを意味します。「空」とは、エネルギー、生命、生き物、を意味します。通して解釈すれば、「真空」とは、実在する生き物という意味になります。すなわち、真空そのものが生き物で

あるという意味です。この宇宙そのものが生き物であるという意味です。宇宙が生き物であるがゆえに、理念を持ち、計画性を持ち、宇宙に素晴らしい絵を描くことができるのです。私たちは、その生き物の中に今いるのです。そして私たちの中に、今、その生き物がいるのです。言い換えれば、その生き物そのものが私たちだけということです。だから、本来なら人間も、この地球上に素晴らしい絵を描くことができるはずなのですが、今の地球上には醜い絵が描かれています。それは、本当の自分を知らない人間が、好き勝手に絵を描いているからです。さあ、本当の自分を知りましょう。自分の本性に目覚めましょう。目覚めたらそく、地球上に素晴らしい絵を描くことができるのですから……。

言葉八九・意識に生きるには？

“生き物とは何ですか？”と訊くと、誰もが形あるものを生き物といいますが、でも本当は、形の無いものが生き物なのです。なぜなら、生きているのは見えない意識(本質・神・生命)だからです。形が生きることは絶対ないのです。形には一寸の力も、一カケラの知恵も、一明の光も無いのです。形は幻なのです。だから人間も幻です。人間が生きているというのは錯覚なのです。肉体の中で生きて働いている意識こそが、人間の正体なのです。ゆえに人間は、意識そのものなのです。どうか形に惑わされなくてください。形は意

識の乗り物にしか過ぎないのです。

この宇宙の実体は、見えないモノが生き、見える形は生きていないのです。つまり見えないモノが実在で、見える形は非実在なのです。形が実在なら形に生きても仕方ありませんが、人間は形と意識が一体となった二重生命体ですから、形と意識の両方に生きなければなりません。具体的には、何を思っても、何を見ていても、何をやっていても、今意識が思っている！ 今意識が見ている！ 今意識がやっている！ 今意識が思っている、見ている、やっている、と思っただけです。肉体の自分が思っている、見ている、やっている、と思っただけです。慣れるまでは大変ですが、慣れたら無理なくできるようになります。ぜひ、挑戦してみてください。やっている内に、見えない意識が本当の自分である、と思えるようになってくるはずですよ。

言葉九〇・・意識には実体がある

神の意識は光です。その光によってこの表現宇宙は創られました。ということ、この表現宇宙は光の海であるということになるでしょう。そうです。この表現宇宙は、意識の海、光の海なのです。その光の大海原に浮いているのが地球です。そして、その地球の中に住んでいるのが私たちなのです。

地球は、神の想(光)いが投影された影ですから、自分で動くことも働くこともできないのです。当然、その中に存在している人間も影ですから、自分で動くことも働くこともできません。光あつての影ですから、光が閉ざされれば、地球も人間も消えて無くなってしまいますのです。それは実在しない影だからです。実在とは永遠なるものをいいますから、無くなってしまふ地球や人間が実在するわけがないのです。

地球にも人間にも、二つの側面があるのです。一つは影の側面、もう一つは光の側面です。影は無常なるものですが、光は永遠なるものです。私たちは無常なる影の側面だけ見て、永遠なる光の側面を見ていないのです。ということは、名前だけ見て中身を見ていないということです。どうでしょう、名前は実在しますか？ 形に実体が無いように、名前にも実体がないのです。実体ないものを、どうして分析できますか？ 分析するなら、実体のある意識を分析しましょう。意識には実体があるのです。それは、私という実体です。生命という実体です。宇宙という実体です。神という実体です。永遠に無くならないという実体です。完全であるという実体です。絶対善であるという実体です。無限であるという実体です。愛であるという実体です。どうか、この実体の意味を噛み締めてください。

言葉九一・形と意識・天と地・生命と人間は絶対不可分

形は意識から離れて存在することはできません。また、意識も形から離れて存在することはできません。もともと意識の中に形の要素が潜在していたから、意識が形になることができたのです。

もともと天の中に地の要素が潜在していたから、天が地になることができたのです。

もともと生命の中に人間の要素が潜在していたから、生命が人間になることができたのです。

形と意識が絶対不可分であるように、天と地も、生命と人間も、絶対不可分です。もし、形と意識を強引に切り離したら、その時点で時空は消え、表現宇宙は消滅してしまうでしょう。宇宙が存続していられるのは、二つが一つに結びつき調和されているからです。だから、形と意識は絶対切り離せないし、天と地も絶対切り離せないし、生命と人間も絶対切り離せないのです。ということは、一つであるということなのです。この宇宙に、二つのものはあり得ないのです。もしあるなら、あなたはその時点で消えてしまうからです。宇宙に一つのものしか実在しないという真理を、心の底で理解してください。それが理解できたら、あなたはそく、宇宙そのものになれるのです。本質そのものになれるのです。生命そのものになれるのです。神そのものになれるのです。意識⇕本質⇕宇宙⇕生命⇕神⇕人間だからです。

言葉九二・・・本質眼(理解眼)で観る！

形⇨本質⇨意識⇨生命です。形の中に本質である生命を観ることができたら、私たちは光る者となれます。でも心の目で観なくては、光る者となれません。本質という生命は、心でしか観えないからです。

コップはガラスという本質によって作られました。そこにはコップがあるのではなく、本質であるガラスがあるだけです。本質であるガラスがコップの形をしているだけです。だから本当にあるのはコップではなく、ガラスという本質です。

人間は生命という本質によって作られました。そこには人間があるのではなく、本質である生命があるだけです。本質である生命が人間の形をしているだけです。だから実際にあるのは人間ではなく、生命という本質です。

本質と形は、裏表の関係にあるのです。二つで一つなのです。形が形を生むことはないのです。形の生みの親は、あくまでも本質である生命です。肉体があるということは、その背後に必ず本質があるということです。何かがある背後には、その何かを存在させている本質が必ずあるのです。生命という本質が無くては、いかなる形も生まれません。このことが心の底で理解できたら、途端に私たちは光り出すのです。

形(物質)を見れば心がざわめきますが、本質を観れば途端に心が安らぎます。なぜ形を見れば心がざわめ

き、本質を観れば心が安らぐかといいますと、形は波動が低く本質は波動が高いからです。波動の高いものを観るか、低いものを見るかで、心に大きな変化が起きてくるのです。ではどうすれば、本質を観ることができるのでしょうか・・・？ それは、理解力を持ってモノを観ることです。そのためには、理解力を高めなくてはなりません。理解力を高め、本質を心の底で受け止めることができれば、見えない本質が観えるようになってくるのです。この目が開かれたことを、心眼が開かれたとか、本質眼が開かれたとか、理解眼が開かれたとか、いわれているのです。この眼が開かれたら、精神的にも肉体的にも変性変容が起きるのです。つまり、自分が変わるので。どうか、心眼⇨本質眼⇨理解眼を開いてください。

言葉九三・・・人間は、人間の形をした意識

人間は、人間の形をした意識です。私たちは形に惑わされ、意識の自分を見失っているのです。もし自分のことが意識だと心の底で思えたら、途端に自分が変わるのです。観念的に変わるのではなく、現実的に、実際に、変わるので。つまり、生・老・病・死から解放されるのです。なぜなら、意識は生まれもしない、老いもしない、病にもならない、死にもしないからです。私たちは真理を観念的なものと考えていますが、真理は科学です。その手で掴めば、人生が全く変わってしまう現実的なものです。実際に自分の身に変

性変容が起きる確かなものです。これはお釈迦様もイエス様も、口が酸っぱくなるほど説いてきた真実です。でもその教えは、心ない人たちの手によってこの世から葬り去られてしまいました。私はそれを掘り起こしに来たのです。人間の本質は意識です。人間の本質は生命です。人間の本質はエネルギーです。人間の本質は神です。本質をどのような名で呼ぼうが、人間はたった一つの意識によって創られた、意識の創造物なのです。意識は命の源です。すべての創造物の根源です。それが、この宇宙の実体なのです。どうかもう一度、意識というものを見直してください。

言葉九四・・・意識の中に入ってきたものには必ず意味がある

神は完全です。完全であるということは、どんなことにも意味があるということです。もし意味がなかったら、神は無駄なことをしていることになり、神は不完全になってしまいます。神が完全なるがゆえに、この宇宙で起きているすべてのことに意味があるのです。ということは、意識したことの中には、必ず意味があるということです。例えば、あなたの目の前に虫が現れたとしましょう。意味のないことは起きないので、虫が現れたからには必ず意味があるはずですよ。

例えば、「家の中が不衛生になっていますよ！ 家に隙間がありますよ！ 家族が不調和ですよ！」

と、虫は教えてくれているのかもしれませんが。あるいは、どう虫を処理するのか、心の動きを見ているのかもしれませんが。意識の高い人は、虫を紙でそっと包み家の外に出すかもしれませんが。意識の低い人は、殺してしまうかもしれません。物理的なことを気づかせようとしているなら、物理的な対処をすれば、虫はもう現れないでしょう。しかし、心の動きを見ているなら、答えは人様々です。なぜなら、意識の高さによって対処の仕方がみな違い、学びの内容もそれぞれ違うからです。でもそこから何かが発見できたら、その人は大きく成長できるのです。

原因(理由)なく意識させられることはないのです。意識した結果があったということは、必ず意識させられた原因があったということです。それは意識させられたことの中に、克服しなければならぬ課題があったからです。ですからもし何かを意識させられたら、その何かの中にどんな課題が隠されているか考えるべきです。

例えば、テレビで詐欺事件を意識させられたとしましょう。もし怒りがこみ上げてきたり、責める思いが湧いてきたら、自分の中に人を騙す思いがあるからだ、気付いてください。気付かなかったら、今度は自分が騙されることで気付かされるでしょう。残念なことですが、私たちは騙されなくては、自分の中に騙す思いのあることに気づかないのです。

殆どの人は、自分の課題が何か分からず生きています。それでは成長しないので神は、「人の振り見て我が振り直せ！」ということを通して気付かせようとしているのです。人それぞれ魂の高さによって課題は違っていきますから、一握りに出来ない部分はありますが、意識させられた中には必ず課題があるのです。だから何かを意識させられたら、そこにどんな課題が隠されているのか考えるべきです。もし課題が発見できれば、原子核を大きく増やすことができますでしょう。

意識に入ってくるものにはみな理由があり、そのすべてが、自分の成長の足掛かりになっているのです。どうか、意識に入ってきたことの意味を考えてください。意味なく意識させられることは絶対ないのですから・・・。

言葉九五・意識に入れる情報の扱い方

絶対宇宙の真相は、相対宇宙で体験すればするほど知ることができるようになっています。一を知るには、多を知る必要があるということです。だから私たちは、多様な相対世界に出てきて、今一を知ろうと奮闘しているのです。しかし多を知るためには、沢山体験が必要になり、沢山体験するためには、多くの人の出合いが必要になり、多くの人と出会うためには、多くの情報が必要になります。今日、目を見張るような通

信技術や交通技術の革新が進んでいるのは、幼い魂を抱える地球にとって必然的出来事だったわけですから。

もう一つ、私たちが相対世界に出てくる理由は、克服しなければならぬ課題を見付けるためです。「犬も歩けば棒に当たる」という諺がありますが、出歩けば必ず出会いがあります。出会いがあれば、様々な体験ができます。その体験から、必ず何かを掴みます。だから幼い魂は、多くの情報を欲するし、体験するため外に多く出たがるのです。情報花盛りの今の社会は、まさに幼い魂にとって必要不可欠な社会といえるでしょう。彼らは今、沢山の情報を頼りに様々な体験をし、成長しようとしているのです。その意味において、幼い魂が情報を多く得ることは良いことなのです。だからといって、野放図な情報のやりとりをして良い、といっているわけではありません。するにしても取捨選択が必要です。

注意せねばならないのは、想念の管理です。悪い想念を発信すれば悪い情報が入ります。良い想念を発信すれば良い情報が入ります。これは波動の法則によるものですから、正しい想念の管理が必要になるのです。良い情報を受け取りたかったら、できるだけ良い想念を発信することです。でも、このことを意識しながら情報のやりとりをしている人は、今の地球では殆どいません。多くの人は、心の寂しさを紛らわすために、野放図な情報のやり取りをしています。その結果、様々な犯罪に出くわしています。勿論自業自得なわけですが、でもそれも無駄ではないのです。なぜなら、苦しい体験から何かを学ぶからです。これは、神の完全

性を信じる上でもとても大切なことです。

魂が成長してくると、心の寂しさは少なくなりますますから、情報のやりとりも少なくなりますます。また判断力も増しますから、情報の取捨選択も正しくできるようになります。この宇宙には様々な想念波動が飛び交っています。その波動は想念の色に同調して入ってくるのです。白い想念の色には白い情報が・・・、黒い想念の色には黒い情報が・・・、どうか白い想念波動を出すよう心掛けましょう。その人は、きっと良い情報を受け取ることでしょう。

言葉九六・・結果の中には必ず原因者が存在する

この宇宙には、一つの意識しかありません。一様の神しかおりません。一つの意識しか無いということは、私しかいないということになります。なぜなら、私はその一つしか無い意識を持っているからです。私は、宇宙を認識できる唯一の存在なのです。それは、どんなものの中にも私がいることを意味します。つまり結果の中に、原因者である私がいることを意味しているのです。私がおかを見ているということは、私がおかを見ているということです。私が私を認識しているということです。私が私を作っているということです。今私が病気を認めているということは、その病気の中に私がいるということです。今私が苦しんでいるとい

うことは、その苦しみの中に私がいるということです。私が病気を作り、私が苦しみを作り、私が苦しんでいるということです。結果体の中には、必ず原因者である私がいるわけですから、これは当たり前のことです。

意識したものの中には、必ず認識者である私がいるということ・・・、それは私の意識がすべてのものを作っているからです。だから、正しい想念の管理が問われるのです。不幸を誰かのせいにしても良くならないのは、自分の想念が不幸を作っているからです。不幸は、すべて自分の想念が作った作品なのです。自分が苦しみを作り、自分が苦しんでいるということです。意識したものの中には必ず認識者がいるということ、結果体の中には必ず原因者がいるということをご理解ください。

今あなたが存在しているということは結果です。結果があるということは必ず原因があるということです。つまり、あなたという結果体の中には必ず原因者がいるということです。原因と結果は、切り離すことができないからです。結果体と原因者は二つで一つなのです。それは、原因者は一様しかおられないからです。ということは、原因者自らが結果体になるしか無いということです。モノを創造する場合、神がそのモノになるしかないといわれるのは、この宇宙には一様の神しかおられないからです。ということは、今存在しているあなたの中に神がおられるということです。つまり結果体であるあなたの中に、原因者である神がおら

れるということですから。だから、あなたは間違いなく神なのです。原因者なのです。どうか、この事実を受け止めてください。

言葉九七・・人生は想念が生み出した作品

なぜ想念は実現の母なのかといえますと、想念そのものがモノを形作っている本質だからです。人間はその想念を持っています。想念を持っているということは、創造力を持っているということです。だから私が何かを認めたら、想いに添って本質が働き、その何かを創造してしまうのです。私が何かを認めたということとは、その認めたものの中に本質である私がいるということです。想えば必ず実現するのは、その想いそのものが本質だからです。あなたが悪いことを想えば悪いことが起きるのは、本質であるあなたの想念が、その悪いことを創造してしまうからです。

人生は想念が生み出した作品なのです。不幸な人生を送っている人は、自分の想念を悪く使い、不幸な人生を送っているということです。幸せな人生を送っている人は、自分の想念を良く使い、幸せな人生を送っているということです。誰もあなたを不幸にしていないのです。みな、自分の責任において不幸になっているのです。すべて自分の想念の持ち方次第です。どうか想念の偉大さを知ってください。知れば、決して想

念を悪いことには使わないでしょう。人生を良くするも悪くするも、自分の想念の使い方次第であることを知ってください。

言葉九八・有ると思えば有り無いと思えば無い！

“有ると思えば有り無いと思えば無い！”と私がいうのは、人間の意識(想念)そのものが創造の原理であり創造の力だからです。イエス様は、“山よ動け！”と念じれば動くといわれましたが、想念の偉大さを考えたら、山を動かすことぐらい朝飯前でしょう。いやそれどころか、宇宙を創造することも不可能ではないでしょう。ただし、今人間が持っている創造力は、人間の自覚に与えられたものですから、そのような力はありません。せいぜいコンピューターを操って、ビルを建て、船を浮かべ、ロケットを飛ばすくらいなことしかできません。でも、軽んじてはなりません。その想念も集まれば、宇宙を破壊しかねないほどの大きな力になるからです。想念は自由なのです。どのようにでも使えるのです。想念ほど頼もしく、恐ろしく、また自由で確実なものはないのです。その想念を持っているのが人間ですから、上手に使えば素晴らしい世界を造ることも夢ではないのですが、残念なことに、今地球上には醜い世界が造られています。それは多くの人間が、想念を悪しきものに使っているからです。

想念によって何でも創造できる理由は、前述したように、想念そのものが本質であり、創造の原理であり、創造の力だからです。でも本来その想念は、実際に有るものは創れても、実際に無いものは作れないのです。例え作れたとしても、一時の幻しか作れないのです。なぜなら、本質は完全の塊だからです。病気や事件や事故などの不完全なものは、迷いの想いが一時生み出した幻であって、実際に有るものではないのです。幻だから、悪しき想念を断てば消えて無くなるのです。それは今もいったように、不完全な本質など宇宙には無いからです。私が良い想いを持ちなさいというのは、良い想いを持てば、それに沿って本質が働き良きモノを生むからです。反対に悪い想いを持てば、それに沿って本質が働き悪しきモノを生むからです。でも、その悪しきものを生み出した本質は、もともと善であり完全ですから、悪しき想いさえ断てば、悪しきモノは消えて無くなるのです。それは、もともと悪しき本質などこの宇宙に無いからです。想いの本質は、善そのものの、完全そのものですから、迷っている悪しき想いさえ断てば、悪しき現象は消えて無くなるしかないのです。だから私は、想念の持ち方が大切だということです。一にも二にも想念の持ち方次第なのです。

言葉九九・・・自分の意識に入ってきた情報(結果)はすべて自分が発信したものである

原因と結果の法則は、絶対曲げられない真理です。結果があったということは、必ず原因があったという

ことです。私たちは主観宇宙の主ですから、自分の宇宙内で起きたすべての結果は、原因者である真我の自分が責任を取らねばならないのです。良き原因には喜びを、悪しき原因には苦しみを……。ということは、自我の自分に必要な情報(結果)しか、自分の意識に入っていないことです。意味のない情報を(必要のない結果を)、真我の自分が自我の自分に認識させるはずがないからです。今、自我の自分の意識の中に情報(結果)が入ってきたということは、その情報(結果)が自我の自分に必要だから、原因者である真我の自分が自我の自分に認識させたのです。だから何かを意識させられたら、その意識させられた情報(結果)に疑問を持ち、その情報から意味を発見しなければなりません。発見すれば、自分が成長できます。原因者の真我の自分をさておいて、自我の自分が勝手に結果を生み出すはずがないのです。結果が原因に先立って、生まれるわけがないからです。

繰り返します。原因と結果の法則は絶対曲げられません。今自我の自分が認識した情報(結果)には、その情報(結果)を生み出した原因者があり、その原因者は真我の自分であるということです。必要あって、意味あって、真我の自分がそのような情報を発信したのです。真我の自分が原因を作りもしないのに、自我の自分の意識の中に勝手に結果が入ってくることはないのです。なぜなら、先程も述べたように、自分が主観宇宙の主だからです。真我の自分と自我の自分は、二つで一つなのです。ゆえに、自分の意識に入ってきた情

報(結果)は、すべて自分が発信しているといえるのです。もうお分かりと思いますが、この話を理解するには、二人の自分を考えなくてはなりません。一人は自我の自分、もう一人は真我の自分です。私たちの中には、二人の自分がいるのです。この理解がなされなくては、この話はこれ以上前に進みません。どうか、二人の自分の存在を理解してください。

【神様からの手紙⑤・本質(意識)と形は二つで一つ】

私が補色について話すのは、この宇宙は二つで一つであるということを心の底で知ってほしいためです。見える物は見えない本質で作られているのです。

物質はエネルギーという本質で作られているのです。

人間は生命という本質で作られているのです。

赤は青によって作られているのです。

赤を見ても青は見えません。しかし、赤の背後には必ず青があるのです。つまり、見える物の背後には、必ず見えない本質があるのです。このことを、補色を通して知ってほしいのです。

あなた達の目は、見える物しか見えないようにできています。でも、理解力で観れば見えないモノが観ら

れるのです。つまり心眼(理解眼)を使えば、物の背後にある本質が観られるのです。本質が観られるようになると、生命の自覚、神の自覚が持てるようになるのです。補色は、心眼を開く一つの方便なのです。誤解しないように言い添えますが、補色を見る訓練をすれば心眼が開かれるではありません。補色を見る訓練は、あくまでも背後にあるものを観るための訓練です。赤は赤だけで赤にはならないのです。赤の反対側に青があつて赤になるのです。つまり、見える物だけでは見える物にならないのです。見えないモノが反対側にあつて、見える物になれるのです。見える物は、見えないモノ(本質)から生まれてくるからです。見えないモノ(本質)が無くては、見える物はありません。その見えないモノ(本質)は、色や形がないため理解力によって観るしかないのです。心で理解して、はじめて見えないモノ(本質)が観えるようになるのです。観えるようになるといっても、本質には色や形がありませんから、目で見えるわけではありません。心で理解することによって、納得することによって、ああそうかと気付くことによって、観えるようになるという意味です。その見えない本質のことを、神とか、生命とか、霊とか、エネルギーとか、呼んでいるのです。

目で何かを見ている時は、形の世界を見ているわけですから、それは肉眼を使っているのです。形の背後にある、見えない本質を理解力によって観ている時は、心の眼を使っているのです。この辺が非常に理解の

しづらいところですが、神の自覚を得るためには、この理解力を最大限に高めるしかないので。それは、補色を観る訓練をすることによってコツが掴めるのです。

第6章 霊

霊とは、エネルギーのことです。すべての生き物は、この霊というエネルギーによって、生かされ、動かされ、働かされているのです。私たちが、息をし、脈を打ち、思い、考え、話し、行動できるのは、すべて霊というエネルギーの働きによるのです。私たちは霊の器なのです。霊の乗り物なのです。

言葉一〇〇・・霊とどう言葉の意味

霊は崇るもの、とりつくもの、悪さをするもの、恐ろしいもの、というイメージを持つ人が多いと思いますが、それは無知な宗教家や霊能者によって、霊が曲解され伝えられてきたためです。霊は恐ろしいものではありません。また神秘的なものでもありません。霊は本源にして本質です。宇宙の根本的支柱を成してい

るものです。それはすべての大元を意味します。ですから、この宇宙に存在するもので、霊とつながっていないものは何一つないのです。私も霊とつながっています。あなたも霊とつながっています。万象万物すべてが霊とつながっているのです。霊とつながらなくては不毛なのです。霊イコール万象万物です。霊イコール私です。霊イコールあなたです。現れているもの、現れていないもの、すべて霊です。どうか霊を曲解しないでください。

言葉一〇一・・霊に成ったという意味？

将棋に「成金」という言葉がありますが、成り金は歩駒が金駒に身分を上げた状態です。霊が物質に成った状態はこの反対で、金駒が歩駒に身分を落とした状態です。しかし身分を落しても、金の自覚を失わなければ金の働きはできるのです。ただ残念なことに私たちは、歩駒に慣れ親しんでいる内に金の自覚を失い、金でありながら歩の働きしかできない情けない存在に成り下がってしまったのです。でもどんなに自覚を失っても、私たちの本性は金（霊）ですから、依然として金（霊）の能力は持ち続けているのです。

この宇宙には、霊しか存在しません。霊がすべての物の中に宿って生きて働いているのです。すべての物の中に霊が宿っているということは、すべては霊そのものであるということです。空気も霊です。水も霊で

す。石も霊です。花も木も霊です。犬も馬も霊です。もちろん人間も霊です。霊がどんな形に化身しても霊は霊であり、形に化身したからといって霊で無くなることはないのです。何に化身しても霊は霊ですから、霊として見ることに、霊として感じることに、霊として生きることです。この宇宙には霊しか無いのですから、何を見ても霊だと思えば正解なのです。その理解力を持つか持たないかで、光る者となるかならないか決まるのです。

言葉一〇二・・霊と思っていないだけ？

物質と霊は絶対不可分です。絶対不可分ということは、物質と霊は切り離せないということです。一つのものであるということです。同じものであるということです。ならば、物質は霊であり、霊は物質ではありませんか。ということは、今あなたは、霊を見ているではありませんか。ただ霊だと思っていないだけ…、霊を見ているのに物質だと勘違いしているだけ…。

この宇宙には、霊しか無いのです。ならば見える物見えないモノ、すべて霊ではありませんか。形ある物形ないもの、すべて霊ではありませんか。ただ形に付けられた名前に惑わされ、霊を物質だと思いついていないだけです。あなたは今、何を見ていると思つているのですか？ 物質ですか？ 霊ですか？ 今あなた

は霊を見ているのですよ！ 見ているのに、見ていないと思っただけです。霊だと思えば、それは霊なのです。ただそれだけのことなのです。

言葉一〇三・・霊界は書物に記すことはできない。

この世には、霊界について書かれている書物が沢山あります。でも、その書物に書かれている内容の殆どは幽界についてです。幽界は見えるので、書物にすることができのです。私たちの住んでいる物質界にも沢山の書物がありますが、見える世界だから書物にできるのです。でも霊界は見えませんから、書物にすることはできないのです。見える幻の世界(物質界と幽界)が、なぜ書物にできるかといいますと、沢山の物と沢山の人たちが存在し、その沢山の物や人が絡み合い様々な物語を生み出しているからです。でも霊の世界には、神(生命)のみしか存在しませんから物語は生まれません。物語が生まれなくては、書物にできるわけがありません。

物質界とは、私たちが今住んでいる地球のことです。幽界とは、地球圏を取り巻いている波動の違う世界のことです。霊界とは、時空を超越した絶対界のことです。意識界ともいいます。天ともいいます。どうか、物質界と幽界と霊界の違いを知ってください。そうすれば、心ない霊能者たちに騙されることは無いでしょう。

う。

言葉一〇四・ここが霊界である

この宇宙に、霊界という特別な場所があるわけではありません。霊そのものが霊界なのです。その霊は、宇宙の至るところに存在していますので、至るところに霊界があるということです。ならば、霊を宿しているすべての物は霊界になりませんか。空気も水も石も木も動物も人間も、霊界ではありませんか。ということは、地球そのものの表現宇宙そのものが霊界だということです。そうです。今私たちが住んでいるところが霊界なのです。今私たちは、霊界の中にいるのです。そして霊界は、今私たちの中に存在するのです。霊そのものが霊界だから、そのような言い方ができるのです。しかし、その霊は見えません。見えなくては存在の意味がないので、霊自らが物質に化身して自分をアピールしているのです。だから、物質界こそが霊界なのです。見えるこの世界こそが霊界なのです。ただ見える側面を見るか、見えない側面を覗くかで、霊界と呼ぶか物質界と呼ぶかわるだけです。

誤解してはいけませんので付け加えますが、見えない霊そのものが霊界ですが、見えない霊を霊界だといっても、見えなくては「世界」と呼ぶわけにはいかないので、見える物に化身した物質界を霊界だといって

いるのです。どうか、私のいいたいことをご理解ください。

言葉一〇五・私たちは波頭の二つ

物質が霊で無かったら、物質は物質でいられないのです。物質と霊が同じものだから、物質は物質でいられるのです。逆も真なりで、霊が物質でなかったら、霊は霊でいられないのです。なぜなら、見えなくては存在意味が無いからです。どんなに偉大な存在でも、表現されなくては存在しないのと同じなのです。

宇宙には、霊から離れたものなど一つも無いのです。このことは、波頭と大海に例えることができるでしょう。私たちは大海に浮き沈みする、波頭のような存在なのです。私たちはその浮き沈みする波頭を見て、「私だ！」「あなただ！」といっているだけです。でも一つ一つの波頭は、大海の一部であり全体であるはずで、個我であると同時に大我であるはずで、一つ一つの波頭は小さくて無力ですが、大海につながれば全体を揺るがす大きな力とされます。一滴の海水は何もできませんが、大海と融合すれば大きな力とされるのと同じです。

波頭として外側にいれば、雨風にもてあそばれ様々な苦しみに喘がねばなりません。同じように私たちも、物質界にいれば自然の法則にもてあそばれ、様々な苦しみに喘がねばならないのです。でも霊として、大海

として、内側に帰れば安泰です。だから私たちは一日も早く、靈に、大海に、帰るべきです。大海に帰れば安泰でいられるのですから……。こういうものも、靈と物質は一体だからです。一つのものだからです。

言葉一〇六・否定論は無用である

物質を否定する人は、正しくものを見ていない人です。正しくものを見ている人は、物質を靈として観ますので、物質を否定しないのです。否定する代わりに、すべてのものを靈として観るのです。正しくものを見なさいという意味は、実際に有るものを観なさいという意味です。靈は見えませんが、現に実在しているのです。その見えない靈が、見える物となった状態を物質と呼んでいるだけです。物質が靈なのは当然でしょう。ただ見える側面を見るか、見えない側面を観るかだけの話です。

恐ろしいもので、見える物質の側面を認めると、物質は水を得た魚のように元気になり、様々な災いをもたらすようになるのです。それは私たちの想いが、物質に力を与えてしまうからです。だから、決して物質を認めてはならないのです。かといって、否定してもならないのです。否定すれば、物の本質を否定することになり、神を、宇宙を、私を、否定することになるからです。だから私たちには、物質を認めず、かつ物質を否定しない生き方が求められるのです。そのためには、靈に対する理解力を持つことです。

この宇宙に否定するものなど、一つもないのです。それは、宇宙にはたった一つの霊しか無いからです。一つしか無い霊を否定すれば、宇宙を否定することになり、神を否定することになり、更に自分を否定することになるからです。否定できるのは、霊が二つ以上ある宇宙だけです。でも、そんな宇宙はどこにも無いのですから、否定論は無用なのです。

言葉一〇七・霊を思うだけで良い！

宇宙は霊の海です。霊の外に何も無いのです。見える物見えないモノすべて霊です。もしあなたが霊を見なければ、鏡に自分を写して見ればいいのです。いやそれよりも、周りの物を見て霊だと思えばいいのです。霊だと思えば、すべて霊なのです。私たちは形に名前を付け、花だ、虫だ、猫だ、人間だといっておりますが、霊しか無いのですから、どんな物を見ても霊だと思えばいいのです。形に付けられた名前に惑わされ、霊を霊で無くしているだけです。こういったも、まだあなたは霊である自分を認めないのですか？ もしあなたが霊で無かったら、あなたは今この宇宙にいないのですよ！

・ 霊だからこそ、今あなたはこの宇宙に存在できるのです。

・ 霊だからこそ、今あなたは生きていられるのです。

さあ、自分が霊であることを認めましょう。そして、”私は霊である！”と大宣言しましょう。認めれば即そうなるのです。いやなるのではなく、もともと霊、生まれながらにして霊、そのままにして霊だから、なるもならないもありません。ただ認めればいいだけです。

そうです。霊になるのに、何の修行も何の努力もいらななのです。努力がいらすとすれば、霊と考えるようになる努力がいるだけでしよう。心の底で自分を霊だと思えるようになったら、その人は変わります。その人は、人類を変える人です。地球を変える人です。

言葉一〇八・霊は見える物ではない！

”迷える霊”という人がおりますが、霊は迷うことはありません。なぜなら、霊は全能の神であり、生命であり、エネルギーであるからです。全能の神が、どうして迷うでしょうか。迷っているのは人間です。人間として死んだ者は、慣性の法則によって死んだ後も、同じ人間の思いを持って生きるのです。生きている時に霊を正しく理解していないから、死んだ後さ迷うのです。だから私たちは、生きている内に霊を正しく理解しなくてはならないのです。霊は崇めるものでも祀られるものでもありません。世間では、お墓に霊を祀って拝んでいます。霊は無限ですから小さなお墓に祀れるわけがないのです。お墓に祀っているのは、

カルシウムです。カルシウムを祀って、一体何になるのでしょうか・・・？

このような話をするのは、多くの人が霊を誤解して受け取っているからです。霊は怖いものでも、崇めるのも、悪さをするものでもありません。霊はエネルギーですから、人に崇るわけがないのです。霊能者のいつている霊は、幽体のことです。エーテル体のことです。くれぐれも、宗教家や霊能者のいうことに惑わされないようにしてください。

言葉一〇九・霊によって生かされている私たち

霊は人間に憑くものでも、崇るものでも、怖いものでもありません。霊は神です。生命です。エネルギーです。光です。愛です。理念です。意識です。意思です。意志です。その霊は、無限なる存在です。普遍なる存在です。不変なる存在です。永遠不滅なる存在です。絶対善なる存在です。完全なる存在です。この宇宙を存続させている、本源にして本質です。だから姿形がありません。

私たちは、霊によって生かされているのです。いや、霊そのものが私たちなのです。なぜなら、息の源、脈の源、言葉の源、思いの源が、霊だからです。今私たちが生きていられるのは、霊が内在しているからです。今自分と思えるのは、霊が内在しているからです。言葉は霊の想いの表現道具であり、肉体はその媒体

です。この宇宙に、霊で無いものは何一つないのです。あなたは、今霊の中にいるのです。そして霊は、今
はあなたの中におるのです。私たちは毎日、霊を覗いているのです。霊を触っているのです。霊を食べている
のです。霊を排泄しているのです。霊と語り、霊と戯れ、霊を愛し、霊を親とし、霊を妻(夫)とし、霊を子
とし、霊を友とし、霊と共に生きています。どうか霊の誤解を解いてください。

言葉二一〇・私の中に大霊がいる

大霊の中に私があり、私の中に大霊がいるという意味は、大霊そのものが私だから、大霊の中に私がいら
れるのです。また私が大霊だから、私の中に大霊がいられるのです。だから、私の中に私がいることができ
るし、私の中に私がいることができます。つまり、大霊の中に大霊がいることができるし、大霊の中に
大霊がいることができます。

私と私は一つのものですから、私の外に出ることはできないのです。大霊は一つのものですから、大霊の
外に出ることはできないのです。私の外は無いです。大霊の外は無いです。すなわち、すべてのものが
私だから、常に私は私の中にいるのです。すべてのものが大霊だから、常に大霊は大霊の中にいるのです。
この意味が心底で理解できたら、外に何かを求めるようなことはしなくなるでしょう。

言葉一一・靈のみが実存する

この宇宙には、完全なものしか実存できません。なぜなら、実存していること自体が完全の証だからです。実存は完全の証であり、完全は実存の証なのです。だから私たちは、実存するもののみを考え、実存するものに生きなければなりません。

実存するものは、永遠に無くならない完全なるものです。実存しないものは、いつか消えて無くなる不完全なるものです。だから無常なるものを追い求めていては、完全な生き方はできないのです。永遠に無くならないものを求めてこそ、完全な生き方ができるのです。では、永遠に無くならないものとは何でしょうか？ 完全なものとは何でしょうか？ それは靈的なものです。靈は永遠不滅、完全無欠、永遠に常在するものです。それに対して、お金や、物や、地位や、名誉などは、みな消えて無くなる無常なるものです。その無常なる物を追い求めてきたがゆえに、私たちは苦しんできたのです。すべての不幸は、実在しないもの、不完全なものを追い求めてきた結果です。

靈こそ実存するもの、完全なるもの、それが私たちの探し求めるべき永遠の宝物です。無常なるものを見ず、実際に有るものに目を向けましょう。永遠なる靈を、完全なる靈を求めましょう。

言葉一・二・三に分けるから間違いを犯す

物質と霊は二つで一つです。霊と物質は一对になって完全な働きができるのです。もし霊と物質を分離してしまつたら、どちらも存在意義を失つてしまうでしょう。といっても、実際に存在しているのは霊の方です。

見える物と見えない霊は同じものです。でも私たちは、どうしても見える物に惑わされ、見えない霊を無視しがちです。もしあなたが見える物を物質として見ているなら、あなたは霊と物質を分けて見ていることになり、正しくものを見ていません。見える物を霊として見ているなら、物質と霊を一つとして見ていることになり、正しくものを観ていることになります。もともと無い物質を、どうして分けて見るのでしょうか。霊しかないのに、どうして分けられましょうか、ということ。そう思うのは、物質もあり霊もあると思つているからです。見える物に心が奪われ、見えない霊を見失っているからです。もう一度見直しましょう。

物質は霊です。霊は物質です。物質と霊は、二つで一つです。でも、実在しているのは霊のみです。実在している霊が、幻の物質を生み出しているだけです。でもその幻の物質が無かつたら、霊の存在は無いのですから物質と霊は対等なのです。しかし対等ではあるけれど、実存しているのは霊の方です。お釈迦様のい

っている、「色即是空・空即是色」の意味を深く噛みしめてください。物質と霊の意味の違いが解るでしょう。もしその意味が深く理解できたら、あなたは変わります。もう苦しむことはありません。

言葉一一三・それは霊ではないだろうか？

宇宙には、たった一つの霊があるだけです。そのたった一つの霊が、万象万物に化身しているのです。ならば、すべてのものは霊ではありませんか。

霊が物質になっているなら、それは霊ではないだろうか？

物質の中に霊がいるなら、それは霊ではないだろうか？

霊が物質を現わしているなら、それは霊ではないだろうか？

霊が物質の生みの親なら、それは霊ではないだろうか？

霊という光が物質という影を作っているなら、それは霊ではないだろうか？

霊と物質が絶対不可分なら、それは霊では無いだろうか？

物質など初めから無いのです。ただ、霊が形を取っているだけ・・・その形に物質という名前を付けただけ・・・だから、どこにも物質など無いのです。この宇宙には、たった一つの霊しか存在しないのです。そ

の靈が形を取ったら、どうして物質になるのでしょうか？ 靈が形を取っても、それは靈ではないでしょうか？ 一つのものが形を取ったら、なぜ二つのものになってしまうのでしょうか？ 靈が形を取っているだけですから、すべて靈と呼ばいいのです。人にいいふらす必要はありません。自分だけの秘密として、
吾は靈なり！ “と想いましょう。その想いが、あなたを靈まで引き上げてくれるのです。あなたはその時、靈として振る舞えます。靈として生きられます。どうか、靈を深く知ってください。

言葉一一四・有るものが有るものを生む

物質が物質を生むことはありません。また、物質が靈を生むこともありません。物質が物質を生まない理由は、「無」は「無」を生まないからです。「影」は「影」を生まないからです。物質は影ですから、実際に無い影が物質を生むわけがないのです。また物質が靈を生まない理由は、「無」が「有」を生まないからです。「影」が「光」を生まないからです。幻(影)である物質が、どうして本物(光)を生むでしょうか。「無」は「何も」生まないのです。「有」が「無」を生み、「有」が「有」を生むのです。(厳密に言えば、

「有は」有りて有るものだから、「有」を生むことはない)

本当に有る靈が、物質を生むのです。なのに人間は、あたかも物質が物質を生むものだとして誤解しておりま

す。特に物理学者は、「何も無い真空宇宙から生命が生まれることは無い！」といい切ります。もしそれが真実なら、宇宙に生命の誕生は無かったでしょう。真空宇宙は何も「無い」ではありません。それどころか、生命で充ち溢れているのです。宇宙は生命の海なのです。エネルギーの海なのです。霊の海なのです。生命の海であるがゆえに、そこから様々な生き物が生まれてくるのです。

言葉一一五・あなたは霊人？

この世が浮世と呼ばれる理由は、宇宙空間にポカリと地球が浮いているからです。私たちの目には、暗がりの空間に青く輝く地球が浮いているように見えますが、本当は空間の方が輝いていて、地球の方が薄暗いのです。なぜなら、宇宙空間は波動の高い霊の海で、地球は波動の低い物質の塊だからです。波動の高い霊は輝いて見え、波動の低い地球は暗く見えるのです。しかし暗くても、地球が霊であることに変わりはありません。ただ波動が高いか低いかだけの違いで、本質的には同じものだからです。

人間の肉体も同じです。今の私たちの肉体は波動が低いので暗くみえますが、本質的には霊ですから、霊眼（心眼・理解眼・本質眼）の開かれた人の目には、地球も私たちの肉体も輝いて見えるのです。自分のことを霊だと思っている人は、霊人です。自分のことを肉体だと思っている人は、浮世人です。あなたは浮世人

ですか、それとも霊人ですか？・・・

言葉一一六・霊と物質の区別を無くそう！

見えないモノがホンモノで、見える物はニセモノだといいましたが、なぜ見えない状態のときはホンモノで、見える状態になったらニセモノになるのでしょうか。見えないモノが見える物になっただけなのに、なぜニセモノと決めつけるのでしょうか。見える物の実体が見えないモノなら、見える物になっても見えないホンモノではありませんか。本当は見える物もホンモノなのです。それを霊として観るならばです。しかし人間はその目を失い、ホンモノをニセモノにしてしまったのです。人間の誤った概念が波動を下げ、霊を不自由な物質にしてしまったのです。

霊と物質は一つのもので、絶対不可分です。絶対不可分という意味は、霊と物質は同じものだから分けられないという意味です。一つのをどうして分けられましようか。ただ形を取っているか、取っていないかだけの違いではありませんか。もし霊と物質が別モノというなら、空気と氷は別モノといわねばなりません。コップとガラスは別モノといわねばなりません。そんなおかしな話しはありません。だから、霊と物質は同じものなのです。

その靈は宇宙に一つしかありませんから、すべての物は靈から生まれた靈の子供たちということになります。どんなに形が違っていても、みな兄弟姉妹です。だから私も、あなたも、万象万物も、みな兄弟姉妹です。さあ、物質と靈を区分けするのを止めましょう。同じものとして見ましょう。そうすれば、もう兄弟喧嘩をすることはなくなるのですから……。

言葉一一七・物質は靈の顔

靈は姿形がありませんから、そのままでは日陰の身のままです。それでは存在の意味が無いので、靈は自分の身代わりとして物質を作ったのです。物質は靈の顔なのです。アピールの道具なのです。手が人間の側面であるように……、足が人間の側面であるように……、耳が人間の側面であるように……、鼻が人間の側面であるように……、微生物も、鳥も、花も、海も、山も、人間も、地球も、靈の側面なのです。ですから側面を見て、全体を判断してはならないのです。

盲人の一人が象のしっぽを触り、象とはムチのようなものであるといいました。もう一人の盲人は象の耳を触り、象とはウチワのようなものであるといいました。もう一人の盲人は象の足を触り、象とはドラム缶のようなものであるといいました。みな一部分を見て、全体を見ていないがために犯した過ちです。私たち

言葉一一八・靈的素材

もこの盲人と同じように、靈の一部分を見て過ちを犯しているのです。正しく靈を見るためには、物質と靈を切り離さないことです。一つのものとして観ることで、物質そく靈、靈そく物質として観ることで、

何事も素直に見ることが大切です。たとえば、ここにリンゴがあったとします。リンゴがあるということ、リンゴを産みだした何かが背後に必ずあるはずで、何も無い所から、ポカリとリンゴが産まれるはずがないからです。卵が先か鶏が先かの論議が堂々巡りになるのは、「初めに種有りき！」が前提条件になっているからです。種は不要なのです。宇宙そのものが種だからです。宇宙は靈的素材(種)で満々ているのです。見えない靈的素材が、すべての物の生みの親なのです。子供に「物は何から生まれますか？」と訊いてみてください。多分、「見えないモノから生まれます」というでしょう。大人だけが屁理屈をいうのです。そうです。靈は全ての創造物の本源本質です。いわゆる種です。どんなモノも靈によって創られているのです。靈なしにこの宇宙は成り立たないのです。靈はすべてのすべて、有りであるものなのです。あなたも靈の化身です。私も靈の化身です。万象万物すべて靈の化身です。すべての形の素材となっているのが靈ですから、何を見ても靈と思えばいいのです。靈と感じればいいのです。想いそのものが靈だからです。靈が

想ったものは霊なのです。霊だけが創造できるのです。霊的素材そのものが、あなたであり私であるということです。

言葉二一九・物質とは何か？

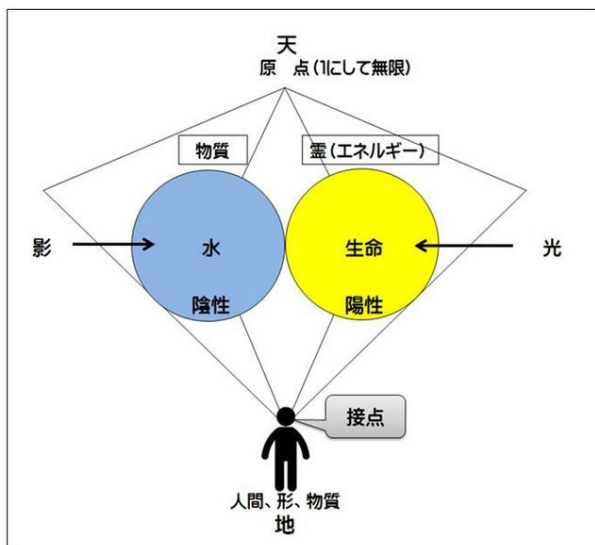
私たちは物質のことを知っているつもりですが、本当に知っているのでしょうか？ ではここで、地球の常識とは違う物質の別の顔を紹介したいと思います。物質の別の顔を知れば、より霊の深みを知ることができるといえるでしょう。

物質とは、

- ・ 有るようでありながら実際には無いもの：
- ・ 一時空間に写し出された影のようなもの：
- ・ 色分けされたもの：
- ・ 一時存在する氷のようなもの：
- ・ 分析不可能なもの：
- ・ 時間と空間を渡り歩く旅人のようなもの：

- ・名前だけの存在：
 - ・見られる立場のもの：
 - ・幻影：
 - ・非真実なるもの：
 - ・実在しないもの：
- 実在とは永遠に無くならないものを意味しますから、無くなってしまいう物質は本当に有るものではないのです。その意味では、私たちの肉体は必ず消えて無くなりますから、本当に有るものではありません。一時の存在です。無常なるもので

物質



- ・人間のボディは、お母さんの羊水で10ヶ月10日かかって作られ、そこに生命が宿って初めて生きるものとなる。
- ・物質は原子(分子)の集積されたものである。

す。だから「肉に生きるは死である！」といわれるのです。また肉に生きる者には、四つの苦しみがありません。

一つは生きる苦しみ、二つは老いる苦しみ、三つは病む苦しみ、四つは死ぬ苦しみです。物質には必ず「生・老・病・死」の四苦があるのです。また物質は、火で焼くことも、水で溺れさすことも、刀で切ることも、爆弾で破壊することもできません。でも霊は「生・老・病・死」がありませんし、焼くことも、溺れさすことも、切ることも、爆破することもできません。霊は永遠に安泰なのです。だから霊は、無くなって行く物質を観察することができません。物質は見られる立場のもの、霊は見る立場のもの、この関係は永遠に変わることはありません。要するに物質は、泡を掴むような、雲を掴むような、空しい存在なのです。だからこの物質の世界のことを、非真実の世界とか、色界とか、浮世とか、現象界とか、幻の世界とか、呼ばれているのです。「朝に紅顔ありて夕べには白骨となれる身なり」と詠んだ蓮如上人の詩は、まさに至言です。朝紅顔の若者が夕べに白骨になるなどは、交通戦争といわれる現代社会では、決して珍しいことではありません。金槌でモノを叩けば、粉々になってしまうのです。どんな強靱なモノでも、バーナーで焼けば燃えてしまうのです。ましてや人間のか弱い肉体など、風の前のチリ同然です。一風吹けば、飛んで消え去ってしまう存在です。このように物質は、無常なものなのです。

【神様からの手紙⑥・物質と霊を一つに観る】

霊とは、神なる私のことです。巷間でいわれている霊を鵜呑みにしないでください。霊とは、この宇宙に遍満する神なる私のことです。私はこれまで、様々な切り口から霊について述べてきましたが、ここでもう一度再確認してみたいと思います。

「物質即霊・霊即物質」とは、物質はそのままにして霊ですよ！ 霊はそのままにして物質ですよ！ だからすべての物は霊なのですよ！ という意味です。

「物質と霊は絶対不可分」とは、物質と霊は同じものだから切り離せないのですよ！ だからすべては霊なのですよ！ という意味です。

「霊肉一体」とは、肉体と霊は一体ですよ！ だから人間は霊なのですよ！ という意味です。

「霊と物質に境目はない！」とは、霊はそのままにして物質ですよ！ 物質はそのままにして霊ですよ！ そこに境目はないのですよ！ だから万象万物はみな霊なのですよ！ という意味です。

物質と霊を一つとして観られた途端、細胞が震えてきます。内的光が見えてきます。あなたはその時、自分が霊だと本当に思えるでしょう。これは何も不思議なことではありません。なぜなら、あなた達はもともと霊だからです。これから霊になるのではないのです。あなた達は、私によって平等に創られた霊の子なの

です。霊の子だから、霊だと想えれば霊に返り咲けるのです。特別な人などおりません。特別な霊などありません。覚者も一般人も、同じ霊の子です。覚者を特別扱いしないでください。覚者を遠くの存在だと思わないでください。さあ、「すべては同じ霊の子である！」という理解力を高めましょう。そうすれば、そくあなたは霊として生きられるようになるのです。

第7章 生命

生命は別名、エネルギーとも呼ばれています。生命エネルギーといって、命の素なのです。命の素ですから、生命が無くては、思うことも、話すことも、働くことも、できません。生命はすべての動力源なのです。どうか生命を「命の素」として「動力源」として考え、大切に扱ってください。

言葉二二〇・人間の本质は生命である

形が有るということは、必ず本質が有るということです。本質の無い形など、この宇宙に一つも無いので

す。では、人間の本质は何でしょうか。一つは水です。水は水素といって、形の大元なのです。どんな物も、水を介して形が作られるのです。だから、「水」の「素」と書くのです。肉体を「水子」と呼ぶのは、そのためです。しかし、肉体は生きていません。水の外に生かしている、もう一つの要素があるのです。それは生命です。生命が、肉体を生かし動かし働かしているのです。人間は、生命が宿ってはじめて生きるものとなるのです。私たちの肉体は、この生命と水との複合体、陰と陽の結晶、すなわち愛の結晶なのです。この宇宙には数知れないモノが存在しますが、その背後には必ず水と生命があるのです。水だけでも、生命だけでも、形は生まれえないということです。

形は創造の場で、生命は創造の力です。この表現宇宙は、この二つの要素が一体となって構成されているのです。でも人間は、形の肉体の方しか見ていないのです。肉体しか見ないがゆえに、不安でたまらないのです。それは、肉体には生・老・病・死があるからです。でも、安心してください。私たちの本性は、生・老・病・死のない生命なのです。その生命に生きたら、もう不安は無いのです。でも、どうしても生命だと思えない・・、それは、生命は目に見えず触れないからです。悲しいことですが、人間は見ても触れないものは信じられないのです。でも、見て触れなくても、私たちが生命であることは間違いないのです。あなたは間違いなく生命です。どうか、永遠に無くならない生命の自分に生きてください。

言葉二二二・生命はエネルギーそのものである

私たちは、冷蔵庫が働いているといいます。冷蔵庫が働いたことはありません。電気エネルギーが、冷蔵庫を働かせているのです。人間も同じように、生命というエネルギーが生かし、動かし、働かしているのです。生命エネルギーこそ、命の実体なのです。この宇宙は、その生命エネルギーで満ち満ちているのです。宇宙は生命の海なのです。エネルギーの海なのです。ということは、宇宙そのものがエネルギーそのものということになるでしょう。そのエネルギーが生きているわけですから、宇宙そのものが生き物ということになります。その生き物の中に私たちは今存在し、私たちの中にその生き物が今存在しているのです。しかも、そのエネルギーは、この宇宙にたった一つしかないのです。たった一つのエネルギーが、万象万物の中で生きて働いているのです。だから、あなたのエネルギー、私のエネルギー、というのはありません。全体としてのエネルギーがあるだけです。勿論エネルギーですから、見えも触れもありません。でも間違いなく存在し、すべての存在物を生かし、動かし、働かしているのです。

私が「すべては一つ！」と口癖のようにいうのは、同じ一つのエネルギーですべての物が生かされ、働かされているからです。エネルギーは、区切ることも、分けることも、出来ないのです。エネルギーは一つしかないのです。一つしかないということは、切り離せないということです。つまり、繋がっているという

ことです。だから私たちは、どんなモノとも仲良くしなければなりません。どんなに形が違っていても、みな兄弟姉妹なのですから……。いや、自分なのですから……。

言葉二二二・生命を知らない者は、命知らずである

この表現宇宙には、生かされているモノと生かしているものがあります。このようにいうと、二つの生きものが有るように聞こえますが、本当は一つのものしかないのです。

生かされているモノとは、肉体のことです。生かしているものとは、生命のことです。でも、生かされている肉体と、生かしている生命とは同じものなのです。生かしている生命が、生かされている肉体になっていくからです。生かしている生命がなくては、生かされている肉体はあり得ないのです。

生かしている生命は絶対無くなりません。でも、生かされている肉体は、必ず消えてなくなります。ということは、実際にあるのは、生かしている生命であるということになります。これは冷静に考えれば分かることです。生命は目に見えないためどうしても軽視してしまうのです。

どうでしょう。生かしているものと、生かされているモノと、どちらが本当に有るものですか？ 生かしているものですね。なぜなら、生かしているものは自ら生きていますが、生かされているモノは自ら生きて

いないからです。このことを知らないから、自分で生きようとして力むのです。生かされていると思えば、力まないではありませんか？ 力まないどころか、こんな気楽なことはありません。

多くの人が苦しんでいるのは、本当に無い肉体に生き、本当に有る生命に生きていないからです。生命に生きれば、生・老・病・死の四苦は無いのです。肉体に生きるから、四苦があるのです。だから覚者は、「肉に生きるは死である、肉に死んでこそ真に生きる者となる」というわけです。生命に生かされていることを知らないから、自分で生きようとして苦しむのです。だから、生命を知らない者を、「命知らず」というのです。「命知らず」の語源は、そこから来ているのです。

生命は完全です。その完全なる生命が、細胞を生かし働かしているのですから、本来病気になるはずがないのです。人を憎み、恨み、怒り、心配し、イライラする自我意識が、生命力を弱め病気にしているだけです。どうか生命に委ね生きてください。そのためには、生命を良く知ることです。生命を知れば、安心して生命に委ね生きることができるようですから……。

言葉一二三・・・生命は生き通しである

宇宙に生命は一つしか無いときましたが、その理由は、エネルギーは宇宙に一つしか無いからです。一

つしかなない生命だから、私の生命は皆さんの生命になるし、皆さんの生命は私の生命になるのです。生命は無差別なのです。無所得なのです。時空を超越しているのです。ということは、二千年前イエス様に宿っていた生命と、今、皆さんの中に宿っている生命は、同一の生命であるということです。だから私は、一つの生命の中にすべての人がおり、すべての人の中に一つの生命がおるといなのです。人間一人ひとり、一つの生命によって生かされ働かされているのです。

その生命は、永遠に死なないのです。生命は生き通しなのです。だから、この宇宙に死というものはないのです。死は肉体を自分とと思っている人たちだけにある幻想です。生命を自分だと思っている人には、死は無縁なのです。あなたは、エネルギーが死んだという話を聞いたことがありますか。エネルギー不滅の法則なのです。生命不滅の法則なのです。もし生命が死ぬなら、その時点で宇宙は消えてしまわなくてはなりません。宇宙は永遠に生き通すのですから、生命も永遠に生き通すのです。その生命が私たちですから、私たちも永遠に生き通すのです。でも、多くの人間は、肉体を自分だと思い違いし、不安な一生を送っています。これは、生命が本当の自分だということを知らないためです。どうか、自分の本性を知ってください。知れば、心安らかな一生を送ることができるのですから・・・。

言葉二二四・生命は無限である

生命は無限の存在です。生命には何一つ制限や制約が無いのです。制限や制約が無いということは、無碍自在であり自由であるということです。自由であるがゆえに、生命に生きれば幸せになれるのです。でも悲しいことに人間は、肉体の中に自分を封じ込め、不自由な人生を送っています。これは、自分の本性が生命であることを知らないためです。私たちは人間ではありません。肉体ではありません。個人ではありません。自由無碍なる生命です。

そうです。生命の世界には個人はいないのです。全体があるだけです。個は全体です。全体は個です。個の中に全体が無ければ、個は無いのです。また、全体の中に個がなくても全体は無いのです。全体は個の集まりであり、個は全体の大元なのです。だから個人はありません。人間の思いの中に、個人があるだけです。だから人間は、不自由な苦しみが多い人生を送っているのです。意識を限定すれば、必ず苦しみが生まれるのです。良く考えてみてください。細胞の集まりが、身体を形成しているのですよ。一滴の水の集まりが、大海を成しているのですよ。個の集まりが、無限を成しているのですよ。ということは、細胞は身体そのものではありませんか。水一滴は大海そのものではありませんか。個は無限そのものではありませんか。もし、全体から離れた個人が一人でもいるなら、この宇宙は無限でなくなり、宇宙は消滅しなくてはなりません。

個人が無限なるがゆえに、今まで宇宙は存在してこられたし、今も存在しているし、これからも存在できるのです。無知が個人と思わせているだけです。でも、どんなに個人と思おうが、人間が無限である事実は変わらないのです。なぜなら、今、現に宇宙が存在していること自体が、人間が無限である証しだからです。どうか、人間のいないことをご理解ください。肉体のないことをご理解ください。個人のいないことをご理解ください。私たちは無限なる、全体なる、自由無碍なる、生命なのですから・・・。

言葉二二五・生命にならなくては不毛である。

生命にならなくては不毛なのです。なぜなら、生命は存在の本源だからです。栄養源の断たれた土地から何も産まれないように、命の断たれたところからは何も生まれません。今、人間が存在できているのは、命とつながっているからです。命とつながっているがゆえに、考えることができ、語ることができ、行動することができのです。しかし殆どの人は、肉体が生き肉体が働いていると思っています。だから肉体を大切にし、生命をないがしろにしています。でもどんなに大切にしても、肉体から得られるものは、たかが知れています。それは、肉体は無知無力だからです。無知無力の肉体が自分なのか、全知全能の生命が自分なのか、良く考えてみてください！

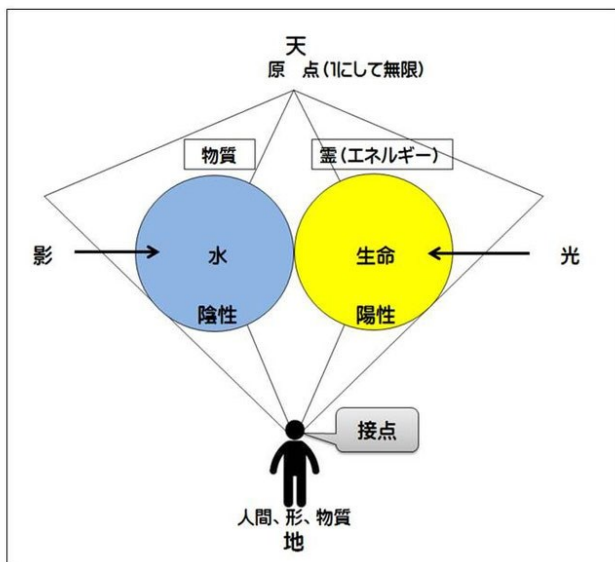
イエス様は、こういわれました。「吾は知恵なり、吾は力なり、吾は光なり、吾は生命なり」と・・・。イエス様は本当のことをいっていたのです。私たちは嘘をついているのです。この肉体を自分だといっている人は、自分で自分を偽っているのです。肉体は偽りの自分です。生命は真実の自分です。偽りをいっている限り、私たちは苦しまねばならないのです。なぜなら、偽りが真実を生むことはないからです。偽りはいつまでも偽りのままです。真実はいつまでも真実のままです。私たちの意識は何でも生み出す力を持っていますので、偽りを意識すれば偽りを生みだし、真実を意識すれば真実を生み出すのです。ならば、真実を意識しようではありませんか。生命を意識しようではありませんか。生命を意識するとは、生命に生きるということです。生命に生きるとは、生命を意識することです。さあ、生命を意識し、生命に生きましよう。そうしたら、一切の苦悩から解放されるのですから・・・。

言葉二二六・すべては生命の現れ

生命は人間の中だけで生きて働いているのではなく、鉱物・植物・動物の中でも生きて働いているのです。唯一不二の生命は、この宇宙のあらゆるものの中で生きて働いているのです。だから、あなたの生命・私の生命というのはありません。全体の生命があるだけです。たった一つの生命が、万象万物の中で生きて働い

ているのです。石の生命、花の生命、鳥の生命、馬の生命、人間の生命、すべて同一の生命です。区切られた生命というのは無いのです。一つの生命の現れとしての、普遍生命、無限生命、久遠生命があるだけです。だから生命においては、個人も人間もない、無限があるだけです。無限が個我を通して現れたのです。無限が万象万物を通し

生命



- ・生命は、霊でありエネルギーである。
- ・すべての生き物は、形の中に生命(霊)が宿った複合体である。

て現れたのです。その無限を自分と認めれば、そく無限生命として生きられるようになるのです。

私たちの肉体は、質量とエネルギー（生命の結晶体です。でも、実際に生きているのは、エネルギーである生命の方です。肉体は一時存在しているだけで、いずれ消えて無くなる虚しい存在です。だから私たちは、肉体に生きるのではなく、生命に生きるべきです。しかし、殆どの人は、肉体を自分と思い肉体に生きています。肉体に生きるから、四苦から逃れられないのです。それは自分が悪いのです。誰かが与えた苦しきみなどないので。すべて自分が与えた苦しきみです。でも人間は、誰かが、何かが、自分を苦しめていると思って怒っているのです。どうか本質なる生命を観てください。本質を観れば、私たちは間違いなく生命なのですから・・・。

その生命は永遠不滅です。完全無欠です。自由無碍なる存在です。無限なる普遍なる存在です。だから生命に生きれば、天国の中で幸せを満喫できるのです。天国とは、天国という場所があるものではありません。幸せの境地のことをいうのです。それは生命に目覚めれば、誰でも味わえる幸せの境地なのです。どうか、生命の自分に目覚めてください。

言葉一二七・何に確信を置くべきか？

“あなたは生命ですよ！”と私がいうと、“生命になった覚えはないのに、なぜ私は生命なのですか？”と問い返す人がおります。では、その人に訊きたい、“今、あなたは人間だと思つていますが、人間になった覚えがありますか？”と……。そうなのです。誰も人間になった覚えなどないのです。気が付いたら人間だったのです。なのにあなたは、何の疑いもなく、今、人間として生きています。もしあなたが、生命になった覚えのないことに疑問を持つなら、人間になった覚えのないことにも疑問を持つべきではないでしょうか。しかし誰も疑問に思わず、人間として当たり前前に生きています。

誰も人間になった覚えがないように、誰も生命になった覚えなどないのです。でも、どんなに生命になった覚えがなくても、あなたは間違いなく生命なのです。なぜなら、この宇宙に生命の外何もないからです。あなたは初めから生命だったのです。生まれながらにして生命だったのです。今このままにして生命なのです。ただ生命と思つていないだけです。では、なぜ生命と思わず、人間と思つているのでしょうか？それは、見て触れるこの肉体を、自分だと思ひ違ひしているからです。もし生命に形があつたら、あなたは生命を自分と思うでしょう。生命に形が無いから、生命と思えないだけです。

生命は、想いによって何にでも化身することができます。花にも、鳥にも、犬にも、雲にも、星にも、

人間にも……。生命は想っている通りのもので、それ以上のものでも、以下のものでもないのです。どんな形を想うかで、自分が変わるだけです。花の形を想えば、花になるのです。鳥の形を想えば、鳥になるのです。雲の形を想えば、雲になるのです。星の形を想えば、星になるのです。今、あなたが、人間の形を自分だと思っているように……。

あなたはどんな確信に基づいて、今、自分のことを人間と想っているのですか？ 見て触れる肉体を見て、人間と想っているだけではありませんか。ならばその確信を、生命に置き換えてみたらどうでしょうか。きっと生命だと思えるようになるはずですよ。ではどうすれば、生命に確信を置き換えることができるでしょうか？ それは、肉体と生命のどちらがホンモノで、どちらがニセモノかはつきり識別することです。

・ 肉体は消えて無くなりますが、生命は永遠不滅です。

・ 肉体は考えることも語ることができませんが、生命は考えることも語ることができます。

・ 肉体には四苦がありますが、生命には四苦はありません。

・ 肉体は不自由ですが、生命は自由です。

・ 肉体は不完全ですが、生命は完全です。

こうして照らしてみると、どちらがホンモノでどちらがニセモノか歴然ですね。そうです。生命がホンモノ

ノです。では、確信は何に置くべきですか。ホンモノの生命ですか？ ニセモノの肉体ですか？ ホンモノの生命ですね。姿形に騙されなくてください。姿形は無常なる物です。姿形のない生命は永遠なるものです。私たちは長いこと、肉体を自分だと思い違いしてきたために、生命を自分だと思えなくなっただけです。何がホンモノで何がニセモノか識別できたら、もう肉体に惑わされることはないでしょう。どうか、「自分は生命である！」という確信を深めてください。そうすれば、生命として生きられるようになります。

言葉二二八・生命を認めれば良いだけ！

私たちは、今から生命になるのではないのです。もともと生命だったのです。いや今の今、このままにして生命なのです。何かして生命になるのではなく、今の今、何もしなくても生命なのです。ただ “生命である！” と認めれば良いだけです。何の手続きも、誰の許しも、何の修行も、何の努力もいりません。もし、努力があるとすれば、“人間！” と嘘をつかないようにする努力がいるだけです。

私たちは、初めから生命だったのです。今も生命なのです。未来永劫生命なのです。自分が “生命である！” と認めれば、即生命に蘇れるのです。生命に蘇った者は、自由になれ、知恵者になれ、力ある者になれ、光ある者になれます。どうか、生命の自分を認めてください。生命に蘇れるかどうかは、あなたが、

認めるか、認めないかだけのことなのです。

こういう私も、知花先生から自分が生命であったことを教えてもらっただけです。それまでは、自分が生命だったことを知らなかっただけです。教えてもらい、”そうか私は生命だったのか！”と目覚めただけです。教えられる前も生命だったし、教えられた今も生命だし、これからもズツと生命なのです。目覚めたから、生命になったわけではないのです。目覚める前も生命だったし、目覚めた後も生命だったのです。だから、生命になろうとする必要はないのです。ただ、人間と嘘をつかないようにするだけです。

言葉二二九・生命を思えるようになるのに理屈はいらない

面白いから面白いのです。楽しいから楽しいのです。面白いにも楽しいにも何の理屈がいらないように、生命だと思えるのに何の理屈もいらぬのです。ただ「生命」を想い続けていれば、いつか「生命」と思えるようになるだけです。これは理屈抜きです。何の技術も何の修行もいりません。

本当に生命だと思えたら、自分が変わるのです。誰かに、何かに、変えてもらうのではないのです。そう思えたら、ひとりで変わるのである。思えるか？ 思えないか？ だけのことです。なぜ変わるかといいますが、私たちはもともと「もの思える」生命だからです。「もの思える」生命だから、生命と思えれば生命

になれるのです。生命イコール思いです。思いイコール生命です。生命そのものが、思いそのものであるという意味です。だから、生命だと思えば、生命になれるのです。いや、なれるのではなく、「そのものである！」ということですよ。生命になるのに、何の理屈も、何の技術も、何の努力も、知らないことを知ってください。

言葉一三〇・命の濃縮

ここでは、「命」と「生命」と「生命体」と「生き物」という、四つの言葉の意味について考えてみたいと思います。

「命」

生きている大元、意識の大元、存在の本源、すなわち、エネルギーそのもの、神そのものを意味します。

「生命」

生きているのは「命ですよ!」、という「生命」の意味を示している言葉です。

「生命体」

形あるものには、必ず生命が宿っています。生命を宿している物・形・存在物を、生命体というのです。

養分が濃縮されたものです。私たちの肉体も、意識核が「原子・分子・細胞」に濃縮されたものです。分かりやすい例としては、生態系の食物連鎖があります。微生物は虫たちによって捕食され、虫たちは小生物によって捕食され、小生物は中生物によって捕食され、中生物は大生物によって捕食され、濃縮の連鎖が進んでいきます。私たちの魂(生命核)も、意識核が鉱物に植物に動物に濃縮され、人間にバトンタッチされたものです。大宇宙も人間の魂(生命核)が濃縮され、いつか生命の本源に寛大な魂として帰ってゆきます。群魂は鉱物や植物や動物の世界にだけあるのではなく、広い意味では人間にもあるのです。その人間の群魂が、最終的に宇宙生命の中に取り込まれて行くのです。このようにすべての生き物は、無意識のうちに命(意識核)の濃縮の役割を果たしているのです。この働きを進化と呼んでいるのです。

言葉一三二・・・命に死はない！

前述したように「命」とは、意識そのもの、エネルギーそのものを指します。そのエネルギーによって宇宙が創造されたのですから、宇宙そのものが、命そのもの、意識そのものということになるでしょう。命Ⅱ意識Ⅱエネルギーなのです。すなわち命は、意識の本源、エネルギーの本源なのです。だから、生命エネルギーと呼ぶのです。

世間ではよく命を宿すという言い方をしますが、それは「形に命が宿ってはじめて生きる物になる」という意味で使っているのです。でも人間はそういうしながら、肉体そのものが生きていると思っっているのです。命を宿すといいながら、その命を認めようとしません。特に科学者は、頑なに命を認めようとしません。肉体がものを考え、話し、行動すると思っっているのです。

私は何度も死人を見てきましたが、死人は頭を叩いても痛いとはいいません。目に指を入れても瞬き一つしません。ただの物体です。生きている痕跡が全く見つからないのです。正に命の抜け殻です。私は妻の死を目の当たりにしましたが、不思議なことに全く涙が出てこないのです。父が死んだときも、母が死んだときも、娘が死んだときも、涙ひとつ出ませんでした。非情な人間に思えるかもしれませんが、私には、肉体が死んだだけで命(魂)は死んでないという確信があったからです。もし彼らの命(魂)が、この宇宙から消えて無くなったのなら、私は大泣きしていたかもしれません。

肉親の死の前にして大泣きする人がおりますが、肉体が肉親だと思っうからそれほど悲しいのです。どうか死を科学的に考えてください。肉体は物質ですから、生きているわけがないのです。生きているのは見えないう命です。命は死ぬことはないのですから、そんなに悲しむことはないのです。あまり悲しむと、魂が肉体から離れづらくなります。これは死んだ人にとっても、生きている人にとっても、良い事とはいえません。

よく仏壇の前でブツブツ話をする人がおりますが、これほど死んだ人の進化を妨げる行為はありません。彼らは、一刻も早く地上から離れねばならないのです。それを邪魔しては、逝くところにも往けません。生命は絶対死にません。生命は永遠に生き通すのです。どうか死人を前に泣き叫ばないでください。

言葉一三二一・生命に差別は無い！

すべての物は、一なる同じ生命から生まれた同胞です。細菌も、ゴキブリも、ネズミも、みな同じ生命から生まれた同胞です。だから、形が違うからといって差別してはならないのです。でも人間は形に囚われ、菌や虫を毛嫌いします。この宇宙に異質の生命など一つも無いのです。もしあるなら、とうの昔に宇宙は消滅していたことでしょう。みな同じ空気を吸って生きていますから、どんな生き物も同胞なのです。息子とは「息の子」という意味で、息している物はみな同じ生命の息子なのです。同じ兄弟姉妹だから、融合し合えるし愛し合えるのです。もし異質のものなら、物と物との融合はあり得なかったでしょう。一なる光から発生し、無数の色に分かれ、多様な元素となり、その組み合わせによって生まれた物質同士だから融合し合えるのです。肌の色が違おうと、目の色が違おうと、みな同じ命から出てきた兄弟姉妹です。だから、決して喧嘩してはならないのです。どんなものも根が一つだから、この宇宙は永遠に存続できるのです。ど

うかどんな物とも、どんな人とも、仲良くしてください。みな同じ生命から出てきた兄弟姉妹なのですから……。

言葉一三三三・見えない生命を観るには？

「天使として生命を見たことがない！」といわれるように、生命は決して見ることはできません。「その子を見たとき生命を見たのである！」と覚者がいうように、生命を観たければその子を通して観るしかないのです。空気も、水も、土も、虫も、花も、猫も、人間も、生命です。そうになると、その子は至る所にいるわけですから、どこにでも生命は観られることになりました。ただし生命を観るには、心眼を使って観なくてはなりません。なぜなら、生命の本質は心の目で観なくては見えないからです。心眼とは理解眼のことですが、生命の本質が心の底で理解できるようになると、生命が観えるようになります。勿論、形で見えるわけではありません。光として観えるようになります。

不思議なもので、モノの本質が心の底で理解できるようになると、モノの本質が観えてくるのです。それも深く理解できるようになると、生命の本質は光ですから、光として観えるようになります。そうになると、自分が光ってきます。なぜなら、私たちの本質は光だからです。とても気持ちが悪くなります。細胞が振動

してきます。この現象は、モノの本質が一つに観えたとき生まれるのです。つまり自分を含めあらゆるモノが、一つの本質で創られているという理解力が強まると、そのような現象が体験できるのです。これは言葉や文字で説明のつかないものですから、自ら体験するしかありません。

このように生命は見えませんが、様々な見える物質を通して、自分の存在を誇示しているのです。

山も生命の子です。

海も生命の子です。

鳥も生命の子です。

花も生命の子です。

微生物も生命の子です。

勿論、人間も生命の子です。

生命という親は、この宇宙に一樣しか存在しませんから、その親から生まれた子供たちはみな同じ兄弟姉妹です。同じ生命の子同士だから、どんなモノとも仲良くしなければならないのです。

言葉一三四・・当人がいつている

私が、「私は生命である！」と断言するのは、そういつている私が当人だからです。当人がいつているのですから、これほど確かなことはありません。このことは、生命を自覚した者だけがいつているのです。しかし自覚がなくても、私たちが生命である事実は変わらないのです。なぜなら、生命はこの宇宙に一樣しか存在しないからです。一樣しか存在しないなら、今現に存在しているあらゆるモノは、その一樣の生命ではありません。ならば、素直に認めることです。あなたがどんなに認めなくても、既成事実を変えることはできないのですから・・・。

私が断言するように、あなたも「私は生命である！」と断言してください。当人がそういつているのですから、間違いないのです。なぜなら、この宇宙には当人しかいないからです。一樣の生命が、様々な形をしているわけですから、当人しかいないのは当然ではありませんか。もし当人が否定したら、一樣の生命は存在しなくなってしまうです。つまりあなたが否定したら、その瞬間生命がいなくなるのです。否定者そのものが生命だからです。当人だからです。あなたは間違いない生命です。そう想わないから生命でないだけです。想えば即生命です。これは、当人がそういつているのですから間違いないのです。

言葉一三五・コインの裏表のようなもの

生命と人間は、コインの裏表のような関係にあります。裏の生命がなくては表の人間があり得ないし、表の人間がなくては裏の生命はあり得ないのです。裏のエネルギーがなくては表の物質があり得ないし、表の物質が無くては裏のエネルギーがあり得ないと同じです。コインに表と裏の境目がないように、人間にも、どこからが人間でどこからが生命という境目がないのです。手の裏と表が二つで一つであるように、生命と人間も二つで一つなのです。二つで一つということは、一つであるということです。人間と生命が二つで一つであるということは、人間であると同時に生命であるということです。この二つで一つという意味を心の底で理解できたら、生命の自覚に大きく近づくことができるのです。

二つは一つであり、一つは二つです。どちらがなくても、どちらも存在できないのです。だからどちらが上で、どちらが下だといえないのです。どちらが偉く、どちらが偉くないといえないのです。宇宙に上下が無いのは、みな同じ一つのものだからです。

【神様からの手紙⑦・・・どうすれば神(生命)と思えるようになるのか?】

今、あなた達は、何の疑問も持たず人間として生きておられますが、本当にあなた達は人間なのでしょうか? たまたま人間の形をしていたから、人間だと思っているだけではありませんか? 鳥の形をしていたら、鳥だと思えば鳥のように生きていたはずですが、虫の形をしていたら、虫だと思えば虫のように生きていたはずですが、花の形をしていたら、花だと思えば花のように生きていたはずですが。

本当のあなた達は、姿形を持たない生命なのです。偉大な能力を持った生命なのです。でも、形の中に入れば形に惑わされ、どうしても形だと思ってしまうのです。これは、生命の私にとって痛し痒しの部分なのです。もし私(生命)に形があつたなら、このようなことにはなっていないでしょう。姿形のない私は、そのままでは自己表現できないため、止む無く形の中に入って自分を表現しているのです。では、どうすれば生命と思えるようになるのでしょうか。こう思ってください。

「自分は、形の無い形を持った生命なのだ・・・。」

「自分は、見えない形をした生命なのだ・・・。」

形が無いのも形なのです。形の無い形だという意味です。見えない形をした、見えないモノであるという意味です。生命はどんな形も取ることができるという意味は、見えない形も取ることができるという意味で

す。その生命は、普段見えない形をしているのです。必要なときに、見える形になっているだけです。このことが心の底で理解できれば、あなた達はどんな形の中にも、私(生命)を見ることができるようでしょう。

第8章 愛

生ぬるい愛は、真の愛ではありません。魂を成長させる厳しい愛こそ真の愛です。本当にその人を愛するなら、峻厳な愛を持つて応えてあげてください。峻厳な愛ほど人を成長させることはないのですから……。

また愛はバランスですから、偏った生き方をしてはなりません。ほどほどの生き方をしてください。ほどほどの生き方とは、物質と生命(エネルギー)のバランスの取れた生き方のことです。この章では、この二点を中心に学びましょう。

言葉一三六・愛の表現です。

人間を真中から二つに切ってみてください。左右対称にきれいに分れるでしょう。花を真中から二つに切

ってみてください。左右対称にきれいに分れるでしょう。蜂の巣も蜘蛛の巣も、実に見事なバランスを見せています。自然界はバランスの意識の下に生かされていますので、みな美しいバランスの取れた姿を見せているのです。こういうと、山や岩などは左右対称になっていないといわれるかも知れませんが、それは進化の最後の姿を見ていないからです。岩の最終的な姿は丸い砂です。山の最終的な姿も丸です。丸は究極のバランスの姿なのです。その証に、星はみな丸い形をしているでしょう。人間界の建造物も、本当なら左右対称に造られるべきですが、最近の建築物の中には不バランスなものが多く見られます。土地が狭いせいか芸術性を考慮して分かりませんが、これはあまり感心したことではありません。昔の建物は、みな左右対称に造られていたのです。中でもピラミットや五重塔や城や神殿などは、その代表的建物とっていいでしょう。

前述したように最もバランスの取れた形は丸ですが、それは宇宙が円運動によって営まれていることも分かります。例えばマイクロ宇宙における素粒子は、円と楕円の回転運動によって物を生み出し、維持し、消滅しています。マクロ宇宙における星々も、回転運動によって生まれ、維持し、消滅しています。また、星雲も、恒星も、衛星も、みな円や楕円を描きながら秩序ある軌道を保っています。宇宙の何処を探しても、何一つ不バランスなものが見当たらないのです。

しかし、人間社会はどうでしょう？ バランスが取れているでしょうか？ もしバランスが取れているな

ら、戦争はないはずです。飢餓はないはずです。環境破壊はないはずです。病気はないはずです。あるということは、バランスが取れていないからです。神は宇宙の営みを通して、「バランスを崩せば肉体を破壊しますよ！ 社会を破壊しますよ！ 地球を破壊しますよ！ 宇宙を破壊しますよ！」ということを人間に教えてくれているのです。

愛とは、バランスのことなのです。偏りのないことなのです。中心です。真ん中です。それは、地球の中心に引つ張られ聳え立っている木々を見ても解っていただけだと思います。木々だけではありません。どんな物も、みな地球の中心に引つ張られているのです。私が「なぜ人間は直立で歩くのか疑問に思いなさい！」というのには、地球の中心に引つぱられていることを意識すれば、愛の計らいに気づくことができるからです。すなわち、「偏れば倒れますよ！ 偏れば苦しみが生まれますよ！ 偏れば争いが生まれますよ！」「偏れば破壊されますよ！」という愛の計らいに気づくことができるからです。

愛はバランスです。中心です。そこには神のみがいます。愛の計らいを知れば、そのことを知るのです。

言葉一三七・愛の人とは？

一般的にいわれている愛は、男女の結びつきの情愛のことをいっておりますが、それは真の愛とはいいま

せん。眞の愛とは、進化を促す愛のことです。その愛は、甘いお菓子の愛でなく、辛いワサビの愛でなくてはなりません。甘やかしの愛では、進化は促されないからです。例えば、今あなたに二つの道が与えられているとしましょう。一つは険しい道、もう一つはなだらかな道です。もしあなたが、なだらかな道を選ぶならば、それは愛の人とはいいません。なぜなら、なだらかな道では生命核(魂)を増やすことができないからです。本当に自分を愛するなら、魂の成長を一番に考え、厳しい道を選ぶべきです。

人に愛を与える場合も同じです。本当にその人を愛するなら、例え嫌われても厳しい愛を与えるべきです。動機が純粹であれば、その時は分かってもらえなくても、必ず分かってもらえる時がきます。ただし、幼い魂に耐え切れない愛を与えてはなりません。耐え切れない愛は、虐めの愛です。“人を見て法を説け！”といわれますが、愛を与える場合も同じなのです。どうか、魂の高さに相応した愛を与えてください。

厳しい愛は、必ず人を成長させてくれます。この宇宙の仕組みは、そのようにできているのです。ですから、自分にも、人にも、厳しい愛を与えることです。その人は、間違いなく愛の人と呼ばれるでしょう。

言葉一三八・愛の法則はプラス・マイナス・ゼロの法則である

この宇宙は、常に均衡を保とうとする意識が働いております。この意識を私は、愛の法則とも呼び、エネ

ルギー均衡の法則とも呼んでおります。この法則は、波風を起せば同じ波風によって諫められるという性質を持っております。つまり、やれば必ずやりかえされ、奪えば必ず奪い返される、という性質を持っているのです。この宇宙に一方通行がないのは、この愛の法則がどこまでも行き届いているからです。良き行為には良きものが帰り、悪しき行為には悪しきものが帰るのは、その法則ゆえです。神はこのことを、リスクという形で人間に教えているのです。最近ある国が、領有権を広げようと南シナ海に進出しているようですが、例えそこで利益を得たとしても、必ずリスクとして同じ分の損を被ることになるのです。このことについて、私の面白い体験があるのでご紹介しましょう。

良く得意先との付き合い上、麻雀をしなければならぬことがありました。不思議なことに、真理をやる前は、はっきりとした勝ち負けがありました。が、真理をやり出してからは、途中でどんなに勝ったり負けたりしていても、終わるころには必ずゼロになるのです。後で分かったことですが、神は私にギャンブルを介して「エネルギー均衡の法則」を教えようとしていたのです。この世にギャンブルで儲けた人も、負けた人も、一人もおりません。争って儲けた人も、損した人も、一人もおりません。今勝った負けたといっている人も、トータルには必ずゼロになるのです。人間は遠くが見通せないため一喜一憂していますが、いつか必ずプラス・マイナス・ゼロになるようになっていくのです。私は良く山彦に例えていいいますが、「オーイ！」

と叫べば「オーイ！」という返事が返ってくるのです。「ありがとう！」と叫んでいるのに、「バカ野郎！」とは返ってこないのです。

こういう例えもあります。

大掃除をすれば家は綺麗になりますが、その分汗をかき、服も汚れ、疲れもします。美しい景色を見に山に登れば、足腰が疲れ、お腹がすきます。遊園地に行った帰りの親子が、電車の中でコックリコックリする風景を見ますが、あれも応分のリスクです。目に見えないリスクもありますが、それは分散され目に見えない形になっているか、先延ばしされているかだけで、いつか必ず応分のお返りがあるのです。愛の法則は、一ミリの狂いもありません。実に正直で確実です。どうか「プラス・マイナス・ゼロになる」愛の法則を知ってください。知れば無理な愛を求めようとしないうし、与えようとしないうし。また偏った愛を欲しうとしないうし、与えようとしないうし。

言葉一三九・愛は鏡!!

この宇宙には、たった一つの命しか存在しません。その命は、愛そのものであり完全そのものですから、本来この宇宙に悪がはびこることはないのです。でも私たちの世界には、なぜか悪しきものが存在します。

なぜでしょうか。いいえ私たちの世界も本当は、愛そのものであり完全そのものなのです。人間の迷いの想念が、悪なるものを生み出しているだけです。自分の想念は自分だけの持ちものですから、人に貸すことも人に奪われることもありません。だから私たちは、思いのままに生きられるわけです。自分の想念が、自分の身体を操っているのです。風呂に入ろうと思い、身体を風呂に入れるのです。走ろうと思い、身体を走らすのです。何かが欲しいと思い、身体を買い物に行かせるのです。この想念の働きは自分の身体だけに留まらず、自然にも地球にも宇宙にも影響を及ぼし、必ず自分のところに返ってくるようになってはいるのです。良いことが起きるのも、悪いことが起きるのも、すべて自分の想念が震源地です。

例えば、自動車事故が起きたとしましょう。自動車事故が起きるには、起きる原因が必ず自分の中にあるのです。例えば、居眠りをしていたとか、よそ見をしていたとか、車が故障したとか・・・。車の故障が、なぜ自分の想念に関係するのか訝しく思うでしょうが、深く追求してゆくと必ず自分の想念に行き着くのです。なぜなら、震源地に返ってくるのが愛の法則だからです。この宇宙は、愛の法則によって支えられていますから、出した処に出したものが必ず返るようになってはいるのです。出してもいない処に、出したものが返ってくることは絶対なのです。テレビでもラジオでも、発信した波長に同調して見えたり聴こえたりするのは、私たちの想念も同じで、悪しき想念を発信したから、周りの悪しき波動に同調し悪しきこと

が返ってきたのです。人間は実に悪い癖を持っており、自分の身に何か不都合なことが起きると、全部人のせいにするのです。この宇宙に、外から与えられた不幸などないのです。すべて自分の想念が自分に与えた不幸です。それが分からないから、外側に責任を押し付け、人を罵り、世を罵り、神を罵るのです。こんな不遜なことはありません。

良き想念を放てば良きものが、悪しき想念を放てば悪しきものが……。この神の愛の働きは完璧です。それが信じられるようになったら、もう自分で自分を苦しめるような悪想念は出さなくなるでしょう。愛は鏡だと思ってください。美しいものを写せば、美しいものが映るのです。醜いものを写せば、醜いものが映るのです。愛の鏡は、一ミリの狂いもなく映し出すことを知ってください。

言葉一四〇・愛の使者

大調和の意味合いは、陰(物質)と陽(生命)がほど良く混ざり合った状態を指します。神はこの表現世界に、相反する物を一対として誕生させたのです。その相反する物の働きが拮抗しているとき、自然界の調和が保たれているのです。自然界の調和のとれた姿は、まさに陰と陽のバランスのとれた愛そのものの姿といつていいでしょう。物質と生命のバランスがとれているから、自然界は美しいのです。しかし人間の欲によって

均衡が崩されると、陰の働きの方が勝つようになり、人間にとって不都合な事が顕在化してくるのです。でもそれは人間にとって不都合なだけで、自然界にとってはバランスを保つ上で必要な働きなのです。その働きを、人間は悪と決めつけているだけです。人間はバイ菌や害虫を毛嫌いしますが、本来バイ菌も害虫も存在しないのです。存在しているのは、調和のとれた一对の菌や虫たちだけです。人間が調和を崩すから、均衡を保とうと反対の働きをするのであって、彼らは彼らの持ち場でしっかりと役割を果たしているだけです。菌や虫たちは宇宙の中庸の心に従い、バランスを保とうと懸命に働いているのです。虫や菌たちは、愛から遣わされた愛の使者なのです。本来、人間も愛の使者なのですが、今は物質に目が眩まされ、サタンの使者に成り下がっているのです。しかし、どんなにサタンの使者に成り下がろうと、愛の使者であることは間違いないのです。目覚めれば、そく愛の使者に早変わりできるのです。さあ、目覚めてください。あなたは、サタンの使者になりたいのですか？ それとも、愛の使者になりたいのですか？

言葉一四一・陰陽のバランスの大切さ

“私たちは家族仲良くしているのに病気になるた！”と嘆く人がおりますが、ではあなたは生命と仲良くしていましたか？ と私はお訊きたい。どんなに家族仲良くしていても、生命と仲良くしなければ病気

になるのは当たり前なのです。なぜなら、物質同士仲良くしても、エネルギーは高まらないからです。家族仲良くすると病気とは関係ないのです。関係するのは、肉体とエネルギーのバランスです。バランスを取れば燃焼効率が上がるため、エネルギーが高まり健康になるのです。これは次のような例えで示せるでしょう。

私の幼い頃の話ですが、その当時石炭ストーブに火をつけるのに大変苦労したものです。まず紙に火をつけ、次に燃えやすい木に火を移し、それを石炭の下に入れ、そこに息を吹き込むのです。息を吹き込むと勢いよく燃え上がりますが、それは石炭と酸素が結びついたためです。物を燃やすには、酸素が必要なのです。これは肉体も同じで、どんなに沢山食べても、生命という酸素を与えなくては、百パーセントエネルギーに変わらないのです。今多くの人が病気で苦しんでいるのは、肉体に酸素を注いでいる量が少ないからです。つまり酸欠状態だから病気になるのです。

私たちの肉体は、物質と生命(エネルギー)の複合体ですから、物質と生命のバランスが取れているときは健康なのです。しかし今多くの人間は物質に偏り、生命のことを忘れているのです。ということは、肉体と生命のバランスを崩しているということです。それではエネルギーが完全燃焼するわけがありません。エネルギーを完全燃焼させるためには、陰と陽、つまり物質と生命のバランスを取ってやるのが大切なのです。

もちろん、家族仲良くすることはとても大切です。でも、それだけでは健康にならないのです。物質と生命の調和を整えて、はじめて健康になれるのです。どうか家族とも仲良く、隣人とも仲良く、生命とも仲良くしてください。ちなみに酸素は、宇宙エネルギーの変形したものです。生命の別名といってもいいでしょう。

どうか生命を想ってください。生命に生きてください。生命と親しくしてください。その時あなたは、陰陽のバランスを取って生きていくことになるのです。愛の状態とは、物質(陰)と生命(陽)のバランスの取れた生き方をしている状態のことなのです。

言葉一四二一・愛・不調和・完全

【愛・調和】

宇宙の心根は陰陽が一体となることです。陰陽が一つになることで、愛がスパークし光が生まれるのです。愛は、結集・結合・合体・統合・エントロピーの縮小を意味するのです。一から出てきたものは、一に帰るのが定めなのです。私たちは、針の穴を通ってこの世に出てきた無数の糸なのです。その無数の糸は、一つに纏まらなければ針の穴を通って帰れないのです。原子に核があるのも、真珠貝に核があるのも、人間社会に王様や大統領や総理大臣が存在するのも、一つに結集しなければ纏まりがつかないからです。愛とは、集

まることなのです。寄り添うことなのです。調和することなのです。エントロピーの縮小が愛なのです。

【不調和】

不調和は一見悪のように見えますが、不調和は決して悪いことではないのです。なぜなら、元数1を知るには分数を相対させて知る必要があるように、一本の糸を知るには無数の糸を相対させて知る必要があるように、愛(調和)も不調和を相対させて知る必要があるのです。私たちは愛の中に浸りつきりでは、真の愛は解らないのです。だから私たちは今、不調和の世界で様々な苦しみを体験し、真の愛(調和)を学ぼうとしているのです。だから不調和は、決して悪いことではないのです。いいえ、不調和(無数の糸)は愛(一本の糸)そのものなのです。

【完全】

この宇宙で完全を現わすためには、どうしても「循環運動」が必要なのです。循環運動が無くては、腐敗し死に絶えてしまうからです。循環運動は、流れ行く新鮮な水のようなものなのです。完全を完全たらしめるためには、この新鮮な水の流れが必要なのです。以前に、○は絶対宇宙と相対宇宙をつなぐ架け橋的存在だといいましたが、○は循環のことなのです。○は循環が、この宇宙の完全性を支えているのです。いつもいうことですが、一つだけでは一つは解らないのです。完全から完全は生まれません。愛も同じで、愛

(調和)と不調和の循環を通して完全な愛になるのです。

言葉一四三・・相対物を通して学んでいる私たち

ある人から、このような質問を受けました。

「神は完全であるといいながら、なぜこの自然界には、毒キノコとか、毒蛇とか、毒フグなどのような危険な物が存在するのでしょうか？」と・・・。

確かにこの自然界には、そのまま食べたり触ったりすれば身に危険が及ぶ物が沢山あります。例えば、単体の元素ではヒ素やカドミウムや水銀などが、細菌類では大腸菌や炭疽菌やボツリヌス菌などが、植物ではウルシやドクゼリやドクキノコなどが、また動物では毒ヘビや毒グモや毒チヨウなどがその類です。でもこの自然界には、本質的な悪は一つもないのです。使い方や誤れば悪になるだけで、正しく使えばみな善になるのです。例えば毒キノコは、そのまま食べれば毒になりますが、その毒性を薬に利用すれば病氣治療に役立つのです。そのまま口に入れれば毒になる草木も、扱い次第では私たちの健康に役立つのです。毒が毒を制するといわれるのは、もともとその毒は毒ではなく役立つ薬だからです。神は自然界にある毒物を通して、人間の知恵を育てているのです。もしこの世に一つも毒物が無ければ、人間は何の疑問も持たない精神

薄弱者になっていたでしょう。自然界の毒物は、危険物を見分ける目を育てると同時に、危険物を利用する知恵も育てているのです。

存在物の背後には、必ず善と悪の二つの顔があるのです。でもその悪は、悪を通して善を知らしめる悪です。それは善なのです。私がこの世に本質的な悪は無いというのは、どんな悪も善に変わる要素をみな備えているからです。見方を変えれば、立場を変えれば、場所を変えれば、あるいは使い方を変えれば、善にも悪にもなるということです。この宇宙が相対的にできているのは、闇を通して光の尊さを学ばせ、悪を通して善の有り難さを学ばせ、苦しみを通して喜びの素晴らしさを学ばせるためです。魂の光輝は、その学びの中から生まれてくるのです。一つだけでは、何も学べないのです。相対させてこそ、私たちは気付けるし、学べるのです。だから、毒キノコは悪ではなく善なのです。毒蛇は悪ではなく善なのです。悪人は悪人ではなく善人なのです。だから神は完全なのです。神の目に悪が見えないとは、そういうことなのです。私たちも、一日も早くそのような目を持ちたいものです。

言葉一四四・愛すれば愛されるの法則

多くの人は、愛されたいと思っています。でも本来愛というものは、こちらから先に愛すべきものなので

す。なぜなら、愛は能動的だからです。「出発」という言葉はあっても、「発出」という言葉はありません。「出入り」という言葉はあっても、「入り出」という言葉はありません。何事も、こちらから働きかけねば始まらないのです。なぜなら、先に出して空間を作らなければ、入って来られないからです。愛も同じで、先に愛を出さなければ、入って来られないのです。だから愛されたかったら、まずこちらから愛することです。愛されないから愛さないのでは、本当の愛にはならないのです。

よく「ご自愛ください」という言葉を使いますが、この「ご自愛」を私たちは、自分の肉体をいたわる意味で、あるいは自分を大切にする意味で使っています。でも「ご自愛」の本当の意味は、すべてのものを自分のごとく愛する愛のことをいうのです。なぜなら、すべてのものは自分だからです。この宇宙には自分しかないのですから、「自愛」しかないのです。だから「他愛無い！」という言葉が生まれたのです。他愛ないとは、「他」の「愛」は「無」い、つまり自愛しかないという意味なのです。本当の愛は、相手が自分を愛してくれるかうれなれないかではなく、自分が相手をどう愛するかなのです。受動的愛は本当の愛でないといわれるのは、「他愛が無い」からです。他人がいらないなら、待っていて愛がやってくるわけがないのです。これは来ない電車を待っているようなもので、これほど苦しいことはありません。出すことが先です。やっあってあげることが先です。愛してあげることが先です。そうすれば必ず愛が帰ってきます。どうか、この

愛の仕組みを知ってください。

言葉一四五・中庸の大切さを教える神の愛

食べ物には、酸性の食べ物や、アルカリ性の食べ物があります。また塩辛い食べ物や、甘い食べ物や、脂っこい食べ物や、さっぱりとした食べ物などがあります。酸性の食べ物を多くとれば病の原因になりますし、アルカリ性の食べ物を多くとっても病の原因になります。当然、塩辛い物も、甘い物も、脂っこい物も、とり過ぎれば病の原因になります。これは、食べ物を通して中庸の大切さを教えている神の愛の計らいなのです。食べ物だけではありません。神は、物質文明における中庸の大切さも教えているのです。

情報・通信・交通・工業・産業技術などの進歩は、人間の生活範囲を地球規模にまで拡大させると同時に、物質的豊かさを極限まで推し進めました。今や、地球の裏側の人と簡単に会話できるようになりましたし、会いたければ一日もあれば会えるようになりました。また、お金さえあれば、何でも欲しいものが手に入るようになりました。これだけ見ると、大変素晴らしい世の中になったように思えますが、そのリスクも増大しているのです。例えば、異常気象の拡大、精神異常者の増大、経済格差の拡大、地域紛争の増大などは、そのリスクとっていいでしょう。病気が中庸の大切さを教えているように、今地球上で起きている様々な

苦しみも、中庸の大切さを教えている神の愛の計らいなのです。でも人類は、神の愛の計らいに少しも気付かず、ますます中庸から離れて行っておりませぬ。神は物質文明を否定しているわけではありません。ただ、行き過ぎは良くないですよ！ といっているのです。

濃い楽しみには濃い苦しみが、薄い楽しみには薄い苦しみがついてくるのです。苦しみが多いということ、それだけ濃い楽しみに溺れているということです。つまり、悪しき原因を作っているということです。どうか、神の愛の計らいに気付いてください。

【神様からの手紙⑧・あなた達は愛のひとり子である】

あなた達は人を憎み罵りケンカをしています。あなた達は同じ本質を宿した兄弟姉妹なのですよ！ どうして兄弟姉妹が、そのようにいがみ合うのですか？ それは、自分の本性を知らないからです。あなた達は、陰と陽から生まれた愛の結晶なのです。陰とは物質のこと、陽とは生命（エネルギー・光）のことで、形は違っても、中身はみな同じ本質によって創られているのです。水も、空気も、土塊も、菌も、虫も、鉱物も、植物も、動物も、みな同じ兄弟姉妹です。ましてや、人間が兄弟姉妹でないはずがないではありませんか。私が身を分け、あなた達を創ったのです。あなた達が苦しければ、身を分けた私も苦しいのです。あ

なた達が嬉しければ、身を分けた私も嬉しいのです。あなた達は、陰陽の法則から生まれた愛のひとり子なのですよ！愛のひとり子ということは、みな同じ子であるということです。だから、「兄弟姉妹仲良くしてください！」と私はいのです。

あなたは、人を叩いても自分が痛まないと考えていますが、とんでもない！あなたの意識は痛んでいるのですよ。なぜなら、宇宙に意識は一つしか無いからです。ですから、今は現象として感じられなくても、いつか必ず自分の身の痛みとなって返ってくるのです。私が、宇宙において一方通行はあり得ないというのは、すべての意識が繋がっているからです。すなわち、愛のひとり子であるあなたたちの意識が、みな繋がっているからです。どうか、このことを知ってください。

第9章 神

神は一樣です。この宇宙に神は、一樣しか存在しないのです。よく「私たちの宗教の神は！」といいますが、どうして宗教の数だけ神がいるのでしょうか？それは神を知らないからです。

神は神秘的な存在ではありません。何処にでも転がっているありふれた存在です。なぜなら、すべては神の化身だからです。空気も神の化身です。水も神の化身です。土も神の化身です。菌も、虫も、花も、犬も、人間も、神の化身です。どうか神を身近に感じてください。

言葉一四六・初めなき始めより存在していた神(人)

神は初めなき始めより、この宇宙に存在していました。神は生まれもしなければ、死にもしない、生き通しの存在なのです。でも、初めなき始めより存在していたのは、神だけではありません。人も初めなき始めより存在していたのです。なぜなら、神の存在を認めてやれるのは、人以外ないからです。そこに何かが存在するためには、それを認めてやる存在者がいなくては存在できないのです。認める者が存在しているから、認められる者が存在できるのです。

例えば、アスリートと審判員が同時にその場にいなければ、その試合は成り立ちません。どんなにアスリートがいても、判定する審判員がいなくては、試合は成立しないからです。その審判役を担っているのが人なのです。だから人も神と同じように、初めなき始めより存在していたのです。ということは、人は神であるということです。「神人」とは、神は人であり人は神であるという意味です。

言葉一四七・神を完全に知ることは永久にできない

神を完全に知ることは不可能です。なぜなら、神は無限だからです。無限のものをどうして完全に知ることができましようか？ もし知ることができるとなれば、それは有限になってしまいます。有限なるものは知ることができても、無限なるものは永久に知ることができないのです。

無限を知ろうとする行為は、無限を有限化する愚行です。

神を完全に知ろうとする行為は、無限の神を有限の神に引きずり下ろす愚行です。

そうです。

神を有限化する行為は、無限の数を読む愚行に等しいのです。あなたは数を、一・二・三・四・五・六・七……と、最後まで読み切ることができませんか？ 数は無限なのですから、果てがないのですから、最後まで読み切ることができないのです。神が無限だということは、果てがないということです。

私たちがすべきことは、神を認めることです。神を信じることです。神に従順に生きるということです。従順に生きるという意味は、宇宙の法則を素直に守り、進化の階段を一步一步上るという意味です。

私たちが求めるものは究極の幸せです。その幸せは、私たちの成長と共に進化するのです。神は進化しません、幸せの進化の階段は永久に続くのです。私たちは、その進化の階段を一步一步上りながら、永遠に

尽きない、色褪せない、幸せを味わってゆくのです。これは、神が完全であり無限であるがゆえに味わえる、幸せの醍醐味なのです。

言葉一四八・神は何処にもおり、何処にもいない！

「神」とは何でしょうか？ 「神」という言葉は、単なる言葉です。神という言葉で、神を表しているわけではないのです。神は言葉では表せない存在だからです。なぜなら、神には姿形がないからです。無色・無音・無味・無臭・無感触の存在が神なのです。でも私たちは、言葉で表さなくては神を受け止めることができないので、神という言葉に置き換えて神を受け取っているだけです。「……?」では、受け止めることができないからです。

神は、言葉や文字で表現できないものです。言葉や文字を超越しているのが神なのです。だから神を表すには、無言でいるしかないのです。でも、それでは何も受け止めることができませんので、「神」という言葉に置き換え神を表しているのです。

神の属性は、

・意識です。

- ・意思です。
- ・意志です。
- ・理念です。
- ・知恵です。
- ・エネルギーです。
- ・光です。
- ・愛です。
- ・無限なるものです。
- ・不変なるものです。
- ・普遍なるものです。
- ・永遠不滅なるものです。
- ・完全無欠なるものです。
- ・絶対善なるものです。
- ・絶対正義なるものです。

・一なるものです。

・私です。

・あなたです。

・すべてのすべて、有りて有るものです。

・それは。

・これです。

・あれです。

この属性を「神」の一言に包含させたのです。でもこれは、理解できる人には受け止められても、理解できない人には受け止められないのです。だから私は、神は何処にもおり、何処にもいないというのです。

言葉一四九・人は神の代弁代行者である。

人は、神の代弁代行者です。もし人が存在しなかったら、神は自分の思いを永久に呑み込んだままでいなければならなかったでしょう。幸いなことに人が存在しているから、神は自分の思いの丈をいっぱいに表示できたのです。人の手足は、神の行為を現す道具です。人の喉仏は、神の言葉を現す道具です。姿形の無い

神が自分を表現するためには、姿形を持った人という代行代弁者が必要だったのです。

あなたは今、お話ししました。それは、神がお話したのです。あなたは今、ボールを蹴りました。それは、神がボールを蹴ったのです。あなたは今、文字を書きました。それは、神が文字を書いたのです。あなたが神だから、それができたのです。そう、あなたは紛れもない神なのです。あなたが、

意識を持っていること自体・・

思考できること自体・・

話せること自体・・

この書を読むこと自体・・

創作できること自体・・

神である証なのです。

今人類は、コンピュータを操り、ロケットを飛ばし、船を浮かべ、自動車を走らせ、ビルを建て、様々な創造をなしていますが、これは神だからこそできることなのです。それも、神の自覚なしにです。もし神の自覚が持てたら、地球はおろか、宇宙さえ創造できるでしょう。いや事実あなた達は今、宇宙を創造しているではありませんか。あなたの意識で・・・。どうか、この意味の深さを知ってください。

言葉一五〇・・・「元数1」とは、神のこと

神は一樣です。この宇宙には神の外に何もありません。「一つしか無い！」ではその一つのもは、どのようにして自分を表現するのでしょうか。一つのもが表現するには、一つのもを通しては表現できないのです。一つのもが表現するためには、二つ以上に分けなければ表現できないのです。コンピューターがだけで表現できないように、神も自分を表現するためには、もう一つの何かを持ってこなくては表現できないのです。一つしか無いということは、それは絶対だということです。絶対からは何も生み出せません。それでは何も表現できないので、神はもう一つの宇宙をお創りになったのです。それが相対宇宙(表現宇宙)です。二つ以上ある宇宙です。二つあれば、無限の表現ができるのです。それが1と0の表現です。

絶対なる「1」は、神そのものです。絶対なる「1」は、元数そのものです。その元数1なる神は、自分を無数の数字に分けて放射したのです。無数の数字が、光線であり分数です。表現宇宙(相対宇宙)は、その分数によって誕生したのです。その分数が、元素となりました。その元素に番号を打ったのが原子番号なのです。その原子番号の組み合わせによって、様々な物質が生まれました。私たちの肉体も、その原子番号の組み合わせによって創られたのです。だから元を正せば、私たちは神なのです。なぜなら、元数1から生まれた分数によって創られたものだからです。私たちを含め、すべての物質は神の化身なのです。その元数

言葉一五一・神は意識

1には、意識があるのです。意志があるのです。知恵があるのです。力があるのです。光があるのです。だから私たちは、人の形をとる前から生きていたのです。また、人の形が無くなった後も生き続けるのです。

神は意識です。その意識は元数1の中にあります。その元数1の放射によって生まれた表現宇宙は、意識の海とっていいでしょう。そうです。この表現宇宙には神の意識が満ち満ちているのです。意識核として、意識核の濃縮された生命核として、さらに分数として、元素として、原子として……。この宇宙は形が創られると、その形の中に濃縮された意識核が宿る仕組みになっています。生命核として：魂として：昔から人形に魂が宿るといわれてきましたが、それは本当のことなのです。形が作られると、その形の中に必ず魂が宿る仕組みになっています。魂・・・すなわち生命核です。この仕組みに、特例はありません。原子一個の中にも、塵一つの中にも魂は宿っています。だから、人間の中に宿らないはずがありません。私たちのボディーの中に魂が宿っているのは、疑いの無いことなのです。その魂が本当の私たちなのです。

この宇宙に、意識は一つしかありません。一つしか無いということは、私たちは神であるということです。なぜなら、私たちは意識を持っているからです。もし私たちが神でなかったら、意識は一つしか無いという

真理は崩れ去ってしまいます。神は一樣、意識は一樣、だから、私たちも一樣なのです。天上天下唯我独尊(存)は、当たり前のことなのです。お釈迦様は、当たり前のことをいわれたのです。

言葉一五二・・みな神の兄弟姉妹

神の意識核によって魂(生命核)が生まれました。だから私たちの魂は、神そのものといっているのです。その魂が、すべての物の中に宿っているわけですから、日本人も、韓国人も、中国人も、北朝鮮人も、イスラエル人も、イラン人も、みな同じ神の子です。元は一つなのですから、みな兄弟姉妹なのは当然です。だから、兄弟喧嘩してはならないのです。オリンピック旗は、人種を象徴的に五つの輪で表現しているのです。人類みな神の子です。いや人類だけではありません。鉱物も、植物も、動物も、同じ神の子です。だから、無闇に彼らを破壊してはならないのです。

元が一つなら、どうして他人がいるのでしょうか。元が一つなら、どうして異質のものがあるのでしょうか。形が違っていても、同じ元数1から生まれたのですから、みな同じ兄弟姉妹です。形が違うからといって、嫌わなくてください。眼の色が違うからといって、嫌わなくてください。肌の色が違うからといって、嫌わなくてください。どうか、神の子同士仲良くしてください。

言葉一五三・・神をトコトン信じる

どんなものも、最初から完成されたものはないのです。生まれはじめは、どんなものも幼いのです。様々な体験をして、少しづつ大人になってゆくのです。今人類は様々な苦悩に喘いでいますが、それは大人になるための試練だと考えたらいいでしょう。人間は今、様々な苦しみを通して大人になろうとしているのです。成長には、苦難が伴うのです。身を通して体験しなければ、苦難の意味が分からないからです。痛みがなければ、苦しみがなければ、強くなれないのです。鋼も叩かれて強靱になるのです。あんも煉れば煉るほど艶を出すのです。何でもそうですが、厳しい道を通らなければ大きく成長できないのです。これは仕方ないことなのです。

人間は視野が狭いため、神の大きいなる思いを汲み取ることができません。人間は都合の悪いことが起きると、すぐに神を否定します。都合の悪いことが、都合の良いことにつながっていることに人間は気付かないのです。神をトコトン信じなさいと私がいうのは、この宇宙に悪いことなど一つも無いからです。神は決して悪いようには致しません。人間の目には悪いように見えても、神の目から見ればみな良いことなのです。神は私たちを心から愛しております。その神が、我が子を悪い方へ導くはずがないじゃありませんか。

最初から完成された彫刻などないのです。始めは何がなんだかわからなくても、最終的には素晴らしい彫

像となって完成されるのです。途中の状態を見て、文句をいわないでください。完成された暁には、素晴らしい彫像となるのですから……。どうか神を信じてください。本当の自分を信じてください。

言葉一五四・神はチヨークそのものである

学校の先生は、黒板にチヨークで字を書きます。書いているのは人間です。では、宇宙の黒板に絵を描いているのは誰でしょうか？ それは、チヨークです。チヨーク自身の意思で、表現宇宙に絵を描いているのです。チヨークそのものが、本質そのものであり、理念の主である神そのものだからです。ということは、チヨークで描かれた絵そのものが神であるということになりませんか？ ならば、チヨークによって描かれた人間は、神そのものではありませんか？ なぜなら、描かれた絵そのものがチヨークそのものだからです。つまり神という名の本質だからです。

私はチヨークによって描かれた神そのものです。あなたはチヨークによって描かれた神そのものです。そのチヨークは宇宙に一つしか無いのですから、そういつても誤りではないでしょう。そうです。描かれた人間は、神の理念から生まれた創造物であり、チヨークそのものなのです。つまり、チヨークが人間の姿に化身したのです。でも、どんなにチヨークが人間に姿を変えても、チヨークそのものの本質は変わらないので

す。それならば、「人間は神である」という真理を素直に認めようではありませんか。

言葉一五五・現実(人間)と真実(神)を共に生きる

真実は目に見えません。耳で聞くこともできません。舌で味わうこともできません。鼻で嗅ぐこともできません。身で感じることもできません。でもその真実が、背後から五感を働かせてくれているのです。背後の真実が無かったら、私たちは五感によって受け取ることができないのです。ということは、真実と現実とは切り離すことができないことになります。もし切り離したら、どちらも存在意義を失ってしまうからです。私たちは今、人間を感じていますが、人間という現実があるということは、その背後に必ず真実があるということです。私たちは真実から離れて存在できないし、真実は私たちから離れて存在できないのです。ならば私たちは、どのように生きるべきでしょうか。そうです。現実と真実を共に意識して生きるべきです。現実とは人間のことです。真実とは神のことです。現実と真実を共に生きるとは、人間と神とを共に意識して生きるという意味です。人間だけを意識して生きるから、私たちは苦しむのです。人間と神の両方を意識して生きれば、苦しみは無いのです。なぜなら神を意識すれば、愚かな想いも持たず、愚かな言葉も使わず、愚かな行いもしなくなるからです。原因と結果の法則は、その通りを現すのです。

言葉一五六・私から離れた神は無い！

私から離れた神はありません。また神から離れた私もいません。だから私から離れた私もありません。なぜ私から離れた神が無いかといいますと、神が私を創造する場合、神自らが私になるしかありません。神は常に私と共にあるのです。その神と対面したくば、私の中にいる神を意識すればいいのです。

「私は神を意識しているが、まだ神が現れたことがない」という人は、神に意識を向けている時間が少ないからです。気まぐれに神を呼んで、どうして神が現れてくれましょうか。神は常にあなたのハートを叩いていたのですよ。でもあなたは、困ったときにしか神を呼んでくれなかった。そんな気まぐれな呼び方で、どうして神が現れてくれるでしょうか。神と対面したくば、時間あるごとに神を意識することです。一体世の中の人たちは、毎日何に時間を使っているのでしょうか。日々の生活のことや、過ぎ去った過去のことや、まだ来ぬ未来のことに時間を使っているではありませんか。そんな時間の使い方、本当に生きているといえるでしょうか？ 日々の生活のことも、過去のことも、未来のことも、みな幻なのです！ 幻に生きて一体何になるのですか？

人生を悔いなく生きるには、本当に有る神に常に意識を向けることです。常に神に意識を向けている人は、将来に向けて布石を打っているのです。その人は、日々間違ひなく前進しています。でも、過去や未来や今

の雑事に生きている人は、一歩も前進していないのです。たとえ前進していても、進み方が少ないのです。私たちは神から出てきました。そしていつか必ず神に帰るのです。神に帰るには、常に神に意識を向けていなくてはなりません。神に意識を向けるとは、神を想うことです。神と親しくなることです。神を瞑想することです。その人は間違いなく、将来に向けて布石を打っているのです。つまり、神に帰る道を作っているのです。どうか、時間あるごとに神を意識してください。神を瞑想してください。それが、意義ある毎日を送っていることになるのです。

言葉一五七・神とエネルギーのやり取りをしよう！

私がいつも、神に意識を向けなさい！ 神と親しくしなさい！ というのは、神に意識を向けている時は、神にエネルギーを送っていることになるからです。神にエネルギーを送れば、エネルギー均衡の法則によって神からエネルギーが返ってきます。これは、山に向かって、”ありがとう！” ”とえば、” ありがとう！” ”と返ってくる山彦の原理と同じなのです。山彦は、良い原因を投げかけなさい、そうすれば良い結果が返ってきますよ、ということを人間に教えてくれているのです。

ではなぜ神に思いを向ければ、良い結果を受け取ることができるのでしょうか。理由は二つあります。一

つは、神の想いそのものが善いエネルギーだからです。私たちが神に思いを向けている時には、善いエネルギーを出しているのです。善いエネルギーを出せば善いエネルギーが返ってくるのは、因果の法則からして当然のことなのです。

もう一つは、神に思いを向けている時は、この世の雑事から離れられますので、それだけ悪い原因から離れることができるのです。例えば、一時間神に思いを向ければ、この世の雑事を思う時間が一時間減るわけですから、往復二時間良い原因を作ることになるのです。ということは、それだけ良い原因と悪い原因が入れ替わるということです。

エネルギーは実に正直です。悪いエネルギーを出せば悪いエネルギーが、良いエネルギーを出せば良いエネルギーが……。これは自動的です。さあ、神に向かって善いエネルギーを放出してください。そうすれば、必ず神から善いエネルギーが返ってくるのですから……。

言葉一五八・神の偉大さは、自分が近づいて初めて知る

世の中には、まだ自分がそこまで近づいていないのに、自分の師匠を非難する人がおりますが、これは余りにも軽薄すぎます。自分が近づいてもいないのに、どうして師匠の偉大さが分かるのでしょうか？ 神を否

定する人も同じです。神の偉大さを知るには、自分が神に近づいてみなくては解らないのです。これは遠くからチラッと絵を見て、”大した絵ではない！”とっているようなものです。絵を批判するなら、近づいてよく見てからいってください。自分が近づいてもいないのに、あたかも自分が何でも知っているかのようにいうのは傲慢というものです。

私が神の偉大さに敬服するのは、それだけ神を深く知り、神の偉大さを心の底で味わったからです。それはもう、ただただ頭を垂れるしかないのです。この宇宙の仕組みの巧みさ・精緻さ・美しさ・完璧さを知れば、あなたも神に頭を垂れるはずですよ。文句をいうなら、近づいてからいってください。近づいたら感嘆の声は上げて、決して文句はいわないでしょう。

神が創られた宇宙は、それはそれは水も漏らさぬ完璧な仕組みによって差配されています。完全無欠です。どこを掴んでみても、どこを叩いてみても、一つの齟齬も、一つの狂いも、無いのです。もしあなたがこのようにいえるなら、そこまで神に近づいた証といっていましょう。多くの人が神を否定するのは、神を遠くから見ているからです。どうか神に近づいてください。そして神を知って、知って、知り尽くしてください。そうすれば、あなたの口から出てくるのは、神を褒める言葉ばかりでしょう。

言葉一五九・二人の自分

人という字は、左辺の「ノ」と右辺の「亼」が支え合った形をしております。これは、人は支え合う生き物なのですよ！ ”ということを教えている字なのです。左辺の「ノ」は肉体のことです。右辺の「亼」は神（エネルギー）のことです。人間は肉体と神（陰と陽）の結晶体なのです。でも多くの人間は、神を自我の心（肉体の心・岩戸）の中に閉じ込めております。自分探しとは、神の自分を探し出し、自我の心から解放することなのです。でも殆どの人は、日々の生活に追われ、神の自分を探し出せないでおります。外側に気を取られていては、神の自分を見付けることはできないのです。なぜなら、神は外側にいるのではなく、自分の心の奥深いところにおられるからです。

本当の自分(神)を見付けるには、心の奥深いところまで降りて行って岩戸を開かねばなりません。私はそこに降りて行ったのです。そこには、二人の自分が待っていました。一人は岩戸の前に立ちただかる自我(肉我)の自分、もう一人は、岩戸の中に閉じ込められている神我の自分です。その日から、自我の自分と神我の自分との壮絶な戦いが始まったのです。これが聖戦といわれる戦いです。私たちの中には、天使の私(神我)とサタンの私(自我・肉我)がおり、常にこの二人は戦っているのです。私はいくど、自我の自分に負けそうになったことでしょうか。でも私は、歯を食いしばって戦い続けました。その甲斐あって、ついに岩戸を開

けることができましたのです。そこには、神我の自分が手を広げて待っていました。二人の自分が合体したとき、神が定着したのです。本当の自分が定着したのです。

言葉一六〇・神に近づく方法

大自然をごらん下さい！ 大自然はまさに神の体現化したものです。神は大自然を通して、人間に宇宙の謎を解き明かしてもらいたいと願っているのです。大自然の中に、宇宙の謎を解くカギが隠されているのです。神のなされることに一つの無駄も無いといわれるのは、すべての現象に意味を持たせ人間に教材を提供しているからです。「あなたたちはこの教材を通して神の存在を知りなさい！」と神はおっしゃっております。それは、神の自覚を深めるためにどうしても必要な学びなのです。だから疑問を持つことです。例えば、なぜ植物は緑色をしているのだろうか？ なぜ高い山に雪を留めているのか？ なぜ川は蛇行しているのか？ なぜ人間は直立で歩くのか？ なぜ夜と昼が有るのか？ なぜコウモリは暗い洞窟の中に住んでいるのか？ 疑問は尽きません。でも人間は当たり前だと思い、疑問に思わないのです。

誤解されては困りますので言い添えますが、私は物理的謎を解いてくださいといっているのではありません。大自然の中に隠されている、真理の謎を解いてくださいといっているのです。一つ疑問を解けば、一歩

神に近づけます。神に近づけば、神の自覚が高まります。大自然は神のご身体ですから、その中に沢山の教材が隠されているのです。どうか疑問を持つてください。神が何を目的として自然界を作られたのか、深く考えてみてください。気付けば、原子核を増やすことができます。

言葉一六一・・・いつまでも人間であってはならない！

よく私たちは、「人の道に恥じない生き方をしなさい！」とか、「人間味を無くしてはならない！」とか、「人間らしく生きなさい！」とかいいますが、私たちは人間が最高の生き物だと思っているから、そのような方をするのです。人間は神に至る進化途上の生き物であって、最高点にいるわけではないのです。それどころか、まだ進化の段階の下の方にいるのです。なぜなら、鉱物・植物・動物の次に位置しているのが人間だからです。人間の上には、無限に近い進化の階段があるのです。その下の方に位置している人間に生きなさいとは、おかしな話ではありませんか。私たちは一日も早く人間を卒業して、次のステップを踏まなければならないのです。そのためには、自分が神(生命)であることを知ることです。

私たちは神の分身なのです。私たちは神から生まれた神の子なのです。神の子であるがゆえに、神になれるのです。なぜなら、子はいずれ親になるからです。これは当り前の事であって、何の不思議もありません。

蛙の子であるオタマジヤクシは、幼い時にはオタマジヤクシと呼ばれていますが、いずれ蛙という名になるのです。神の子である人間も、今は人間と呼ばれていますが、いずれ神という名になるのです。蛙の子は蛙なのです。神の子は神なのです。人間の子と思うから、人間の生き方しかできないのです。今人類は、神でありながら人間と錯覚し、人間として生きているのです。だから生・老・病・死に苦しまねばならないのです。それはただ、錯覚しているだけです。錯覚を解けば、そく神なのです。どうか高いレベルで人間を見てください。人間は間違いなく、神の子なのですから……。神の分身なのですから……。

言葉一六二・嘘をついてはならない！

私の恩師である知花敏彦先生は、口癖のように「人間と嘘をついてはならない！」と戒められています。なぜ戒められたかといいますが、嘘は嘘を呼び込むからです。例えば、「バカヤロー」という言葉を発すれば、「バカヤロー」という言葉が帰ってきます。これは因果の法則が働いたためですが、「人間という想い」の原因を発すれば、「人間という想い」の結果が帰ってくるのです。一度人間という想い癖がつくと、次々と「人間」という想いを発するようになりますから、業の輪廻となって嘘をつき続けることになるのです。

その嘘の輪廻を断ち切るには、嘘をついていることに気づかねばなりません。無知が最大の罪といわれるのは、知らなければ嘘をつき続けるからです。だから私たちは、一日も早く本当の自分を知る必要があるのです。

私たちの本性は「神」です。人間ではありません。まず、そのことを知ることです。知ったら、「私は神である！」と想い続けることです。これは正想念です。真実を想っているのです。真実を想えば真実が帰ってくるのです。つまり、「神である！」という自覚が生まれるのです。これは、因果の法則の働きによるものですから間違ありません。

「人間」と嘘をつき続けている限り、生・老・病・死から開放されることはありません。生・老・病・死から開放されたいなら、どうか嘘をつかないようにしてください。

言葉一六三・特別な話ではない！

この宇宙には、たった一様の創り主がいるだけです。そのたった一様の創り主のことを、神(生命)と呼んでいるのです。ではその神(生命)が、物を創る場合どうするでしょうか？ 神(生命)自らが、その物になるしかないでしょう？ なぜなら、自分の他に誰もいないからです。他に誰かがいるなら、その者に頼んで物

を創ってもらうこともできましようが、自分しかないのですから自分で創るしかないのです。ならば人間は、神ではありませんか？

寒い朝、家で薪ストーブをたいておりました。その薪が燃え尽きたため、家の中が寒くなってきました。薪は外の物置小屋にあります。この場合、誰かが物置小屋に薪を取りに行かねばなりません。でも、自分しかないのですから、自分で薪を取りに行くしかありません。神(生命)も同じこと・・・。神しかない宇宙で何かを創る場合、神自らがその何かを創るしかありません。幸いなことに神(生命)は素材そのものですから、神自らがその物になることができますのです。だから私は、人間は神(生命)であると断言するのです。これは当り前の話であって、特別な話ではないのです。さあ、堂々と神(生命)を宣言しましょう。当たり前前のことをいうのに、誰にも遠慮はいらないのですから・・・。

言葉一六四・・神は中性

神は、左にも右にも偏らない中性です。中性ゆえに、相対宇宙を創造することができたのです。それは自分の中に、「左も右もある」「陰も陽もある」という証なのです。なぜなら、自分の中に無いものは出せないからです。神の中に陰の思いがあったから、陰の宇宙(相対宇宙)が創造できたのです。パンドラの箱から

物質を生み出すことができずとも、神の思いの中にも物理的想いがあつたからです。つまり、中性の中に陰と陽の両方が潜在しているから、陰なる物質を生み出すことができずとも、この相対宇宙は、神

神

神は生命であり霊であります。
人間も万象万物も神の化身です。
私達を生かしている「力」そのものが神であります。



神は至る処におるものです。
神は姿形の無いものです。

- ・神は理念の主であります。
- ・神は創造物の本質であります。
- ・神は絶対なるものです。
- ・神は永遠不滅なるものです。
- ・神は完全なるものです。
- ・神は無限なるものです。
- ・神は実在そのものです。
- ・神は真理そのものです。

そして神は知恵であり、力であり、光であります。

の思いが実現した結果の世界なのです。

- ・ 1の中に0が潜在していたから、0の世界が生まれたのです。
- ・ 光の中に闇が潜在していたから、闇の世界が生まれたのです。
- ・ 善の中に悪が潜在していたから、悪が生まれたのです。
- ・ 神の中に人間が潜在していたから、人間が生まれたのです。
- ・ 原因の中に結果が潜在していたから、結果が生まれたのです。

「一や光や善や神や原因」は、陽の立場です。「0や闇や悪や人間や結果」は、陰の立場です。陰が生まれたのは、中性の中に陽と陰が潜在していたからです。中性は「無・空」なのです。「無・空」とは何も無いという意味ではありません。無限の能力と、無限の可能性と、無限の性質と、無限の力が秘められているという意味です。中性には、能力も性質も力も無いように見えながら、無限の能力と無限の可能性と無限の性質と無限の力が潜在しているのです。どうしてそのような力が秘められているかといいますと、中性は陰と陽を嫌というほど体験し、両方の良し悪しを知っているからです。体験なしに、そのような能力を持つことはできないのです。神は女であり男であるといわれるのは、相対宇宙において女と男を嫌というほど体験してきたからです。良し悪しを知るには、両方を体験しなければできないのです。体験し終わった者は、「無・

空」になるのです。だから1は0でもあり、0は1でもあるのです。神は人間でもあり、人間は神でもあるのです。二つで一つなのです。

そうです。中性とは二つで一つであるという意味です。中性の中では何の性質も現さないけれど、中性から出た途端様々な性質を現すのです。色や味や臭いや音や感覚が生まれるのは、中性から出た時です。偏ると色が生まれるのです。偏ると味が生まれるのです。偏ると臭いが生まれるのです。偏ると音が生まれるのです。偏ると触覚が生まれるのです。私たちが五感を備えているのは、五感を通して様々な体験をし、中性の意味を知るためです。人間は色なのです。でも、色付きの無色なのです。神は無色なのです。でも、無色付きの色なのです。この意味の深さを知ってください。

【神様からの手紙⑨・・神には嘘がつけない!】

あなた達の中には、私(神・自分・良心)が内在しています。だからあなた達は、私に嘘がつけません。嘘についても、私はその嘘をみな知っているからです。良心の前で嘘がつけないというのは、あなた達の中に存在する良心そのものが私だからです。私は至るところにおるのです。だからどんな罪を犯しても、心から悔い改めれば、あなたは許されるのです。なぜなら、あなたの本心が裁判官(私)だからです。二度と過ち

を犯さないと誓った者に、私が罰を与えると思いませんか？ まだ悔いてないから、罰が与えられるのです。どんなに誤魔化しても、自分の心は誤魔化せないのです。たとえ誤魔化したとしても、そのツケは必ず我が身に返ってくるのです。痛みとして・・・苦しみとして・・・悲しみとして・・・そんな愚かなことはしないことです。

あなたの良心が神なのです。あなたの本心が神なのです。あなたは、いつも裁判官の前にいるようなものなのです。裁判官を騙して何かを得ても喜べないのは、裁判官そのものが自分だからです。この宇宙には自分しかないのです。どうか、自分の前で自分を偽るようなことはしないでください。

第10章 想念

想念は何でも生み出す力を持っています。想念ほどたくましく、また恐ろしいものはないのです。私たちは、その想念を持っているわけですから、正しく使う責任があるのです。もし過って使ったら、我が身を破壊するだけでなく、自然をも、地球をも、宇宙をも、破壊してしまうからです。

この章では、想念がどれほど偉大な力を秘めているか、徹底的に追求してみたいと思います。

言葉一六五・・想念のコントロール・パート1

世の中には、よくこういうことがあります。悪いことが起きれば立て続けに悪いことが起き、良いことが起きれば立て続けに良いことが起きるといったことが・・・特にスポーツ競技には、連勝連敗がつきものです。なぜこのようなことが起きるのかといいますと、明るい想念は光(エネルギー)を呼ぶため良いことが起き、その良いことはさらに明るい気持ちにさせるため、また良いことが起きるといった良い循環を生み出すからです。スポーツ競技は、それがすぐに結果として現れるため実感しやすいのです。例えばサッカー競技には、良い時間帯と悪い時間帯があるといわれますが、良い時間帯とは味方の選手が勢いづいた時で、その時ボールは味方の有利な方へ転がるのです。反対に落ち込んだ時は、不利な方へ転がるのです。これは、光(エネルギー)がボールを支配している顕著な例で、選手の気持ちが大きく影響している証なのです。この宇宙は、光(エネルギー)が強ければ良いことが、光が弱ければ悪いことが起きる仕組みになっています。このようなこともあります。心配すれば胃が痛みます。恐怖すれば心臓が高鳴ります。怒れば血圧が高くなります。人を憎んだり恨んだりすると、腎臓や肝臓の働きが悪くなります。私たちの想念は創造力そのもの

のですから、悪想念を持てばそく悪い結果として肉体に現れるのです。次のようなこともそうです。

私の知人が、手提げバックをひったくられたことがありました。知人はひったくった人を恨んでいますが、自分がネガティブな想いを持っていたから、そのような事件を呼んだのです。津波は震源地に帰ってくるのです。想念も発信した人のところに帰ってくるのです。すべて身から出た錆です。だから、人のせいにしてはならないのです。もしあなたに悪い事が起きたら、どのような想念を使っていたから悪い事が起きたのか、顧みてください。人のせいにしては、成長はありません。どうか、正しい想念を使うようになしてください。想念のコントロールは、この世における最後の学びなのですから・・・。

言葉一六六・すべては想念が先行する

「想念は実現の母」といわれる理由は、想念そのものが創造力そのものだからです。人間はその想念を持っているわけですから、本来なら何でも成し遂げることが出来るはずなのですが、今の人間は小さなことしか成し遂げられません。それは、人間の想念力に制約がかかっているからです。未熟な魂は、やんちゃをします。いたずらもします。自制が利かないのです。そんな未熟な魂に、神のような想念力を与えては、地球を破壊しかねません。そこで神は、魂の進化に相応した想念力を人間に与えたのです。それで

なくとも人間は、想念を悪く使って病気をしたり、事故を起こしたり、戦争をしたり、環境を破壊したりしています。想念の偉大さを知らないから、そのような悪しき使い方をします。「私は苦しい！」と嘆いている人がおりますが、その人は自分の想念で自分を苦しめていることに気付いていないのです。もし想念の偉大さを知ったら、決して想念を苦しいことに使わないでしょう。

想念が人生を、人間社会を、地球を、宇宙を、良くも悪くもするのです。

・想念が病気にするのです。

・想念が事故や事件を起こすのです。

・想念が戦争を起こすのです。

・想念が地球環境を悪くするのです。

・想念が平和をもたらすのです。

・想念が理想社会を創造するのです。

・想念が幸せにするのです。

すべて、想念の使い方次第なのです。人間は、想念の偉大さを知らなさ過ぎます。どうか想念の偉大さを知ってください。

言葉一六七・人間の脳は発信機であると同時に受信機である

人間には、右脳と左脳があります。基本的に左脳は発信所の役目をしており、右脳は受信所の役目をしており、右脳は受信機であると同時に発信機なのです。人間がものを思ったとき、宇宙に向けて想念エネルギーを発信しているのです。エネルギーを発信すれば、エネルギー均衡の法則に基づいてエネルギーが帰ってきます。その帰ってきたエネルギーは、通常右脳が受け取るわけですが、発信した絵模様に合わせて帰ってきません。つまり、○の絵模様を発信したら、○に合った○の絵模様しか受信しないのです。○の絵模様を発信したのに、違う□の絵模様を受け取ることはないのです。これが同調現象あるいは共鳴現象といわれるもので、この仕組みが完璧に働いているために、宇宙はエネルギーの均衡を保つことができるのです。さて帰ってきた絵模様は、そのままでは分かりづらいため、右脳と左脳がキャッチボールしながら、この世の文字や言葉に翻訳します。といっても宇宙の情報は、この世の文字や言葉を超越しておりますから、翻訳するにも翻訳する言葉や文字が無いのです。無理に翻訳すれば歪んでしまうのです。これが、真理が歪んで伝えられる理由です。

昔から真理は言葉や文字で伝えられないといわれてきたのは、宇宙から降りてきた情報は受け取った本人しか解らないからです。他力信仰が成り立たないのはそのためです。神は理解できる者にしか与えない、実

力主義を貫いているのです。これが宇宙の仕組みの素晴らしいところなのです。どうか、宇宙の情報を自分で受け取れる人になってください。そのためには、常に宇宙に向けて疑問を発信し続けることです。そこには、何の技術もありません。必要なのは、純真さです。素直さです。求める真剣さです。どうか、得られるまで発信し続けてください。そうすれば、きっと欲しい答えが得られるでしょう。

言葉一六八・私たちは常に宇宙とキャッチボールをしている

前述したように、私たちの脳は発信所であると同時に受信所です。ただし、気まぐれでやっていたのでは、この能力は機能しません。意識的に、能動的に、常に使っていないと働かないのです。何でもそうですが、どんなに偉大な能力を持っていても、使わなくては錆びついてしまうのです。宇宙の情報が欲しかったら、常に疑問を発信することです。疑問を発信していれば、ヒラメキとして、気付きとして、答えが降りてきます。それが啓示とか天啓とかいわれるもので、これは欲を持たない純真な心を持った者なら誰でも受け取れます。その受け取った情報は、その人のものです。人に与えることはできません。与えようとしても、この世の文字や言葉に型が無いと、与えることができないのです。宇宙の情報は、型のないところにはまらないのです。無理にはめようとしたら、歪んでしまうのです。だから昔から、真理は人に伝えられないといわ

れてきたのです。

自分の投げたボールが、他人に返ることはありません。宇宙の情報が欲しかったら、自ら発信し自ら受けることです。さあ、宇宙に向けてボールを投げましょう。そうすれば、間違はなく宇宙からボールが帰ってきます。与えれば与えられ、奪えば奪われる、この原因と結果の法則に感謝しましょう。

言葉一六九・自分が発信地である

想念はボールのようなものです。憎しみのボールを投げれば、憎しみのボールが帰ってきます。愛のボールを投げれば、愛のボールが帰ってきます。想念は実に正直です。それは、想念に色が着いていないからです。使い方がいいかんによって、色が着くだけです。だから、想念の持ち方が大切になってくるのです。今人類は様々な苦しみに喘いでいますが、それは苦しいボールを投げているからです。苦しいボールを投げれば、苦しいボールが帰ってくるのは当たり前なのです。それは誰の責任でもない、苦しいボールを投げている人類の責任です。想念を良く使えば幸せになれるのに、悪く使って不幸せになっているのです。しかも人類は、まだそのことに気付いていないのです。それどころか苦しみを人のせいにして、恨み、憎み、腹を立て、戦争しているのです。

自分の周りに悪しきことが起きているなら、それは、自分が悪い想念を発信しているからです。発信したら、発信した人のところに返るのです。何事も自分を起点にして考えてください。自分の想念が、自分を苦しめていることに気付いてください。そうすれば、人を恨むことも、人を憎むことも、人と諍いを起こすことも、なくなるでしょう。苦しみの原因を自分の中に探す人は賢い人です。他人の中に探す人は愚かな人です。どうか、賢い人になってください。

言葉一七〇・・想念が及ぼす端的な例

想念の偉大さについては、これまで何度も述べてきたところですが、それを理解している人はあまりおりません。そこで、想念がいかに人間生活に影響を与えているか端的な例を掲げ、注意を喚起したいと思えます。

病気は、エネルギー欠乏によって起きております。その典型的例が、ガンという病気です。ガンは腐る病気なのです。エネルギーが少なくなると、物質は腐り出すのです。物質文明が栄えると病気が増えるのは、物質に向いた人の想念がエネルギーを遮断してしまうからです。特に精神病は、ネガティブな想念が関与して起きている顕著な例です。ネガティブな想念を持てば、周りのネガティブな想念が同調してきて病気を重く

してしまうのです。物質を思えばエネルギーを遮断し、ネガティブな思いを持たれば悪的エネルギーを呼び込む、この想念の仕組みを知ってください。

・想像妊娠という不思議な現象があります。実際に妊娠していないのに腹が膨れてくるのです。子供が欲しい願望が、そのような現象を生み出すのです。想うことは、願うことです。欲することです。欲すれば、幻さえ与えられるのです。

・情報過多になった今日、情報に扇動された多くの人たちが、無意識のうちにネガティブな思いを出しておられます。そのために、ますます事件や事故が増えています。ネガティブなことを想えば、ネガティブなことが実現するのが想念の力なのです。

・今日、年に三万人を超す自殺者を出しておりますが、これもすべて想念が関与して起きている事件です。この地球の周りには様々な想いの波動が飛び交っており、その波動は同じような波動に出会うと同調するのです。自殺は飛び交っているネガティブな想いと、自殺者のネガティブな想いが同調して起きているのです。交通事故もそうです。工事現場の事故もそうです。殺人も強盗も戦争もそうです。みな悪想念が同調して起きています。

・最近動物病院が繁盛しているようですが、これも人間の悪想念の移入が原因で起きている現象です。ペットだけではありません。今や空気や水や土までも、人間の悪想念によって汚染されているのです。

・人の想念は、雨にも風にも影響を与えています。想念の調和が取れている場合は、雨も風も穏やかに降り穏やかに吹きます。想念が不調和な場合は、激しく降り激しく吹くのです。不調和な想念とは偏った想念のことで、自然界はそのことを、反面教師となって人類に教えているのです。

・大都會の空気が重いのは、不健全な人の想念が多く漂っているためです。田舎の空気が軽いのは、不健全な人の想念が都會より少ないからです。健全な想念は軽いのです。不健全な想念は重いのです。

・「ありがとう！」と書いたコップの水が長持ちし、「バカヤロー！」と書いたコップの水が腐りやすいのは、人の想いが念写として残るためです。

・感謝の念を持って耕した畑は実りが多く、無感謝の念をもって耕した畑は実りが少ないのです。戦場の跡地からあまり作物が採れないといわれるのも、戦った者の恐怖や無念の想念が関与しているためです。

・欲念を多く受けた宝石は曇ります。愛念を多く受けた宝石は輝きます。愛念を持って育てた花や木は美しく咲き長持ちしますが、憎しみを持って育てた花や木はすぐに枯れてしまします。悪念を多く受けた犬は怒りっぽくなり、愛念を受けた犬はおとなしくなります。人の想念はこのように、鉱物にも、植物にも、動物

にも、大きな影響を与えているのです。

・ 欲念を持って飼った牛の乳は栄養価が低く、愛念を持って飼った牛の乳は栄養価が高いのです。お母さんの握ったオニギリがおいしいのも、お母さんの愛念がしみ込んでいるからです。

・ 昔より「丑の刻まいり」といって、ワラ人形に釘を打ち込んで呪う行為がありますが、これは真剣にやれば本当に効くのです。でも、この呪いは諸刃の剣のようなものですから、自分も呪い返されるのです。人を呪えば穴二つという諺は、想念が我が身に返る恐ろしさを教えているのです。

このように想念は、私たちの生活に少なからず影響を与えています。どうか、想念の偉大さを知ってください。幸不幸を決定づけているのは想念である、ということに気付いてください。

言葉一七一一・なぜ神仏を想うと幸せになれるのか？

人間は、神仏の名を口にするのをためらっていません。それは誤った宗教が、人間を神仏から遠ざけてしまったからです。イエス様は、「神は私たちの手よりも足よりも近くにおられます」といわれました。お釈迦様も、「仏と私たちは一体です」といわれました。彼の偉大な覚者たちが、これほど神仏を身近なものにしているのに、どうして人間は遠くに離れてしまうのでしょうか。恐れ多いと思うから？ 神罰や仏罰が当た

と思うから？ そんなことはありません。神仏は、自分の名を呼ばれることを待っているのです。さあ、堂々と神仏の名を口にしましょう。神仏はきっと喜んでくれるでしょう。

面白いもので、私たちの想念は、何も想わないでいられないようにできています。どんなに何も想わないと思っても、想わないでいられないのが想念の仕組みなのです。その想念を、私たちは何に使っているでしょうか？ 殆どの人が、この世の生事に使っているではありませんか？ それもネガティブなこと・・・。それでは幸せになれるわけがありません。

この宇宙は、出した色の想念と同じ色の現象が起きる仕組みになっています。悪い想いを持てば、悪い現象が起きます。良い想いを持てば、良い現象が起きます。良い想いの代表は、神仏を思うことです。神仏を想えば幸せがやってくるのです。イエス様も、お釈迦様も、そのことを知っていましたので、神仏の名を口にするのを衆生に勧めていたわけです。

神仏の想いは良い原因なのです。だから、幸せという結果が帰ってくるのです。幸せになりましたら、どうぞ神仏を想い、神仏を口にし、神仏のような行為をしてください。その人は、もう幸せの株を買ったよなものです。

言葉一七二・・想念を有効に使う

これまで何度も述べてきましたように、魂を大きくするのは瞑想と強い決意と思索です。瞑想については何度も述べておりますので、ここでは決意と思索について述べたいと思います。

【決意・決心】

私はこれまで何度も「想念は実現の母である」といつてきましたが、それは想念には偉大な力が秘められているからです。その偉大な力を利用しない手はありません。想念は自由意思によって、どうにでも使いこなすことができるのです。多く使うか、少なく使うか、強く使うか、弱く使うか、何に使うか、どのように使うか、それは使う人の自由意思が決めるのです。その偉大な想念を、決意に使ってください。では、決意の有益な使い方を教えましょう。

瞑想に使う。

瞑想には集中力が必要ですが、殆どの人は雑念に阻まれ納得できる瞑想ができません。その雑念を強い決意をもって退けようというのが、一つ目の使い方です。まず瞑想に入る前に、「私はこれから生命に一心集中します。生命以外何も想いません。」と強く決意してください。そうすれば意識の中に決意の壁ができ、雑念が入りづらくなります。

反省に使う。

反省で重要なのは、反省前の強い決意と反省後の強い決意です。反省前の強い決意とは、「私は断崖絶壁から飛び降りるくらいの覚悟を持って反省する！」という決意のことです。反省後の強い決意とは、「二度と過ちを犯さない！」と良心に堅く誓う決意のことです。この二つの決意は、あなたの志を揺るぎないものにします。

自分を大きくするのに使う。

人間は楽な方へ楽な方へと傾きたがります。これは肉体を持つ人間の弱さですが、そこに付け込んで墮落へ怠惰へと誘う邪悪な波動があるのです。この誘いに勝つには、強い理性と強い決意が必要です。甘い誘惑が来たら、強い決意を持って次のように退けてください。「誘惑に負けてたまるか！ サタンよ！ 退け！」と……。聖戦とかジハードとかいわれる戦いは、このサタンとの戦いのことで、これは、もろ刃の剣のよな戦いなのです。つまり、誘惑に勝てば原子核を増やすことができ、負ければ墮落するという二面性を持った戦いです。どうか戦いに勝って原子核を増やしてください。

【思索・疑問】

神は地球上に、真理の種を沢山蒔いてくださいました。その種に水をやり大切に育てれば、多くの実りが

期待できます。神は無駄なことを一つもなされないのです。どんなことの中にも、意味ある何かが入められているのです。もし、あなたに何か起きたら、神は何を気付かせようとしているのか考えてみてください。思きつと意味ある何かを発見するでしょう。気付きや発見は、自分の中から生まれます。だから自力です。思索は、自分の宇宙の不明な点を発見する作業なのです。そのヒントは、神が蒔かれた種の中にあるのです。外側に蒔かれた種と内側の不明な点が合わさった時、気付きや発見が生まれるのです。ああそうか、「合点がいった」と・・・。

どんな些細な疑問でも構いません。自分に問いかけてみてください。必ず気付きや発見があるはず。気付きや発見は、理解力を高め神の自覚に近づけてくれます。そのためには、まず疑問の種がどこに隠されているのか意識して探すことです。意識して探せば、必ず見つかります。見つけたらその種に、水をやり、光を当て、育てましょう。そうすれば、芽を出し、花を咲かせ、実を結びます。その結んだ実が、気付きや発見なのです。あなたの周りにはそのような種が、無数に蒔かれてあるのです。

言葉一七三・・・想念のコントロール・パート2

求道者が克服しなければならない最後の課題が、想念のコントロールです。想念のコントロールのできな

いうちは覚者になれないといわれるのは、想念は自分ばかりでなく、人間界にも、自然界にも、地球にも、宇宙全体にも影響を及ぼすからです。想念のコントロールのできない未熟者に、どうして神が覚者と同じ能力を与えましょうか。もし与えたら、おそらく宇宙を破壊してしまうでしょう。

ある武道家がいっておりました。精神的未熟者に究極の技を教えれば、その者は自分の力を試そうとして必ず間違いを犯すだろうと・・・。人間は、人と違う能力を持つと試したくなるものなのです。自覚の境界線を超えた者に偉大な能力を与えても、もうそのような心配はありません。彼らはその能力を、人類のため、地球のため、宇宙のために使うでしょう。

この世の雑事に悩まされている人は、まだ想念のコントロールのできていない人ですから、まず、それを克服しなければなりません。そのためには、外側のもの（現実）はすべて幻だと思えるようにならなくてはなりません。事実、外側のものはみな幻です。この世に何一つ真実なるものはないのです。そんな幻に心を奪われていては、想念を正しくコントロールすることはできません。さあ、現実の虚しさや哀れさを心の底で知りましょう。さあ、できるだけ外側の物から離れましょう。真実は自分の心の中にあるのですから・・・。自分の心の中に真実があると思えたら、もう外側のものに心が揺らぐことはなくなります。「外側のものはみな幻だ！」と、どのくらい思えるかが勝負です。

言葉一七四・・心色（想念）によって違ってくる影響

「嬉しい涙、悲しい涙」があるわけではありません。どんな涙であろうと、涙そのものには何ら変わりはないのです。でも、その涙の中に宿っている心色は、まるで違うのです。嬉しい涙には嬉しい心色が、悲しい涙には悲しい心色が、溶けて宿っているのです。こんな実験結果があります。本当に怒りをもって植物を痛めつけた実験では、その植物は相当のダメージを受けたといえます。一方、植物を強くするためと思い愛情を持って痛めつけた実験では、かえって枝振りが良くなったといえます。同じ行為でも、心色によって及ぼす影響が違ってくるといえることが、この実験からはっきり分かります。私が教育者に怒りのムチで打つのではなく、叱りのムチで打ってほしいと願うのは、心色によって子供たちに及ぼす影響がまるで違ってきます。本当に子供を愛するなら、愛のムチで打ってください。本当に我が子を愛するなら、愛のムチで打ってください。想念ほど頼もしく、また恐ろしいものはないのですから……。

言葉一七五・・愛念を持つている存在物

あなたの身の回りにあるすべての物は、あなたの愛念を待っています。犬も、猫も、小鳥も、絨毯も、タンスも、テレビも、冷蔵庫も、あなたの愛念と愛の言葉を待っているのです。私はいつも身の回りに置かれ

ている物に、愛念を持って語りかけておりますが、彼らも愛念を持って応えてくれます。その証に、私の部屋に置かれている、テレビや、冷蔵庫や、電子レンジや、洗濯機などは二十年以上使っているのに、一度も壊れたことはありません。今乗っている軽自動車も中古車ですが、十五年以上乗っているのに一度も壊れたことがありません。私が運転するとガソリンの燃費が上がるのも、愛念にガソリンが応えてくれていたからです。どんな物も生きています。どんな物も愛念を待っているのです。ですから物だからといって、雑言を吐いたり、罵ったり、乱暴に扱ってはなりません。

想念が及ぼす影響を、人間はもう少し真剣に考えるべきです。想念は人間だけでなく、すべての存在物に多大な影響を及ぼしているのです。犬や猫などのペット病が増えているのも、空気の汚染が進んでいるのも、川や、湖や、海などの汚染が進んでいるのも、土の汚染が進んでいるのも、みな人間の悪想念が原因です。空気も、水も、土も、植物も、動物も、みな意識を持って生きています。どうか、愛念を持って接してやってください。きっと彼らは、愛念を持って応えてくれるでしょう。

言葉一七六・・想念は山彦の「いんし

山彦を体験した人はお分かりと思いますが、山に向かって「オーイ！」と叫べば、「オーイ！」とい

う声が返ってきます。それも大きく叫べば大きく、小さく叫べば小さく……。山彦は実に正直です。” ありがとう！ “と叫んでいるのに、” バカヤロー！ “とは返ってこないのです。さらに山彦の面白い点は、オーイ！ と叫べば山に反響して、オーイ！オーイ！オーイ！と声は小さくなりますが何度も返ってきます。想念（エネルギー）も同じで、良い想念を出せば良い想念が、悪い想念を出せば悪い想念が、強ければ強く、弱ければ弱く、それも折り返す波のように何度も何度も返ってきます。これは、池に石を投げ入れたときに起きる波紋と同じで、波動の持つ一つの性質なのです。その波動は、広がって行くときはゆっくりで、返ってくるときは速いのです。

エネルギーは、アンバランスを嫌います。エネルギーは常に、均衡・均一・平行状態を保とうとするのです。ですから宇宙空間にエネルギーの凹が生まれたら、即座にその穴を埋めようとエネルギーが流れてくるのです。通常そのエネルギーは出した分入るようになっていのですが、同質のエネルギーに当たると勢いが増すため、凹の中に収めきれなくなり溢れ出てしまうのです。溢れ出たエネルギーは、再び同質のエネルギーに当たって返ってくるため、何度も繰り返す状態が生まれるのです。こういう体験はありませんか？ くよくよ考えだしたら、くよくよが消えなくなり眠れなくなったといった体験が……。自分の思いが周りの想念の波にぶつかり寄せ返してくるために、そのようなことが起きるのです。周りに反響する物が無かつ

たら山彦が起きないように、宇宙空間に反響する想念がなければ、そのようなことは起きないのです。しかしこの地球の周りには、沢山の想念が漂っているため、そのようなことが起きるのです。それも良い想念ならいいのですが、圧倒的に悪い想念の方が多いいです。近年、理由なき殺人や自殺などが多発しているのも、地球の周りに漂っている悪想念の影響によるものです。もし地球の周りに悪想念が漂っていなかったら、そのような事件は起きていなかったでしょう。そのことを知っているヒマラヤの聖者たちは、朝な昼な夕な夜なに光を放ち、悪想念を清めてくれているのです。彼らの役割は、人の前で法を説くことではなく、地球を清めることなのです。

では、ここで、山彦の働きと想念の働きを比べてみることにしましょう。

●山彦は、出した同じ色の声を返します。

●山彦は、大きな声を出せば大きな声を返し、小さな声を出せば小さな声を返します。

●山彦は、周りの山に当たって反響し、何度も返します。

○想念(エネルギー)は、発した同じ色の想念(エネルギー)を返します。

○想念は、発した強さと同じ強さの想念を返します。

○出した想念は、周りの同質の想念に当たって反響し、何度も返します。

このように、山彦も想念も働きは同じなのです。私が常に神を想いなさい、それもできるだけ強く思いなさいというのは、この性質を利用すれば地球を清めることができるからです。でも残念なことに人類は、その想念を、物を得ることに、お金を得ることに、地位や名誉を得ることに、あるいは悔やんだり、心配したり、怒ったり、憎んだりすることに使っているのです。だからいつまでたっても、地球の周りの想念は清まらないのです。清まらないどころか、ますます汚れているのです。

黒い想いを持てば黒い想いが返り、白い想いを持てば白い想いが返るのです。黒い想いとは、ネガティブな想いです。白い想いとは、ポジティブな想いです。中でも神の想いは、ポジティブな想いの代表です。どうか白い想いを持ってください。神を想ってください。そのときあなたは、白い息を吐いているのです。白い息は光の息ですから、空気を清め地場を清めます。それだけ地球に貢献しているのです。良い想念は間違はなく、人に、自然に、地球に、宇宙に、良い影響を与えているのです。だから、”私一人瞑想しても！”といわないでください。一人ひとりの想いの積み重ねが、地球を浄化してくれるのです。もし、一割でも神を想う人が出てくれば、聖者たちの出す波動と相まって、地球は聖なる星に近づくことでしょう。どうか地球を浄化する一員になってください。

言葉一七七・想念は共鳴する

私たちは、常に何かを想っています。想っている時は、宇宙に向けて想念を発信しているのです。その発信した想念は、宇宙空間に広がり同色の想念に当たると共鳴し、発信者のところに返ってくるのです。これが共鳴現象とか同調現象とかいわれるもので、近い色同士は共鳴し合い、遠い色同士は共鳴せず通り過ぎて行くのです。私たちの脳も同じで、発した同じ色の想念しか受け取れないようになっています。つまり、赤色の想念を発信すれば赤色の想念を受け取り、青色の想念を発信すれば青色の想念を受け取るというわけです。自殺は死にたいという人の想念に、死にたいという人の想念が共鳴し、自殺にまで発展しているのです。殺人も事故もそうです。自分の想念だけでは、そんな悲惨なことは起きないのです。

その想念は、良いことにも働くのです。愛の想念を発信してみてください。愛を受け取ります。喜びの想念を発信してみてください。喜びを受け取ります。だから私たちは、常に良い想念を発信しなくてはならないのです。良い想念の一番は、神を想うことです。神を想えば神が返ってきます。この宇宙には、悪い想念も漂っていますが、聖者たちが放った良い想念も漂っているのです。その良い想念に同調すれば、聖者たちの想念と相まって地球を清めることができるのです。どうか神を想ってください。その想いは、聖者たちの想いと共鳴して増幅し、人類を、自然を、地球を、宇宙を、浄化してくれるでしょう。

言葉一七八・迷いの想いが無い悪を作り上げている

想念は、本質そのものであり創造力そのものです。その想念を持っているのが私たちですから、私たちは何でも創造することができるのです。でも、何でも創造できるからといって、本当に無いものまで作れるでしょうか？　いいえ、本当に無いものは作れないのです。なぜなら、私たちの想念そのものが、本当に有るものだからです。本当に有る想念は、本当に有るものは作れても、本当に無いものは作れないのです。

“でもこの世に、悪が有るではないですか？　有るということは、悪が本当に有るからではありませんか？”という質問がきます。いいえ、悪は本当に有るものではありません。迷いの思いが本質を揺り動かし、無い悪を一時作り上げているだけです。だから迷いの想いが無くなれば、そく悪は消えてゆくのです。私たちの想いが健全であれば、この宇宙に悪がはびこることは無いのです。

繰り返します。悪が有るように見えるのは、悪を認める迷いの想いが本質を揺り動かし、無い幻の悪を作っているだけです。迷いの想いが作り出した悪は、幻なのです。そんな幻の悪に、どうして私たちは苦しめられなくてはならないのでしょうか？　それはあたかも、テレビドラマを見て苦しんでいるようなものです。テレビドラマは次元が違うのですから、影響を受けることはないのです。どうか見破ってください。見破れば、そく苦しみから解放されるのですから・・・。

本当に有るものは善です。本当に無いものは悪です。神は私たちに善と悪の両方を体験させることで、本当に有るものが何か教えようとしているのです。どうか、何が本当に有るもので、何が本当に無いものか、見極めてください。見極めることができれば、もうあなたに苦しみはないでしょう。

言葉一七九・何でも有りの宇宙

「何でも有りの宇宙」といいますと、「偽や不善や醜」もあるのかという質問がきそうですが、たしかに「想念は実現の母」ですから、想念によって何でも生み出すことはできます。でも、無秩序に「何でも有り」ではないのです。そこには、ちゃんとしたルールがあるのです。そのルールとは、宇宙の法則内における「何でも有り」です。もしこのルールがなかったら、自由意思を持つ人間は、宇宙に好き勝手な絵を描いて真善美を乱してしまうでしょう。

この宇宙には、真善美の中における「何でも有り」があるだけで、「偽や不善や醜」などはないのです。もしあるなら、一旦「偽や不善や醜」が生まれたら永遠に存在することになり、この宇宙は真つ暗闇になってしまいます。幸いなことに「偽や不善や醜」は、迷いから生まれた一時の間ですから、エネルギーさえ与えなければ消えて無くなるのです。

今、人類は自由な想念を使って「偽や不善や醜」を生み出していますが、それは想念の実証実験をしているようなもの、と考えたらいいでしょう。やがて人類は、その実証実験から想念の正しい使い方を覚え、この地球に理想の世を建設することでしょう。

言葉一八〇・何でも生み出せる想念

私たちは、想念によって何でも生み出すことができます。それは想念そのものが、モノを形作っている素材そのものだからです。では、なぜ何でも生み出すことができるのでしょうか？ もうお分かりの事と思いますが、私たちには何でも想像する自由意思を持っているからです。何でも想像ということは、何でも生み出せるということですから、これは宇宙の一員として大変な責任があるのです。

地球には「事実は小説より奇なり」という言葉がありますが、この宇宙は「SF小説より奇なり」なので、私が「この宇宙では何でも有りなんですよ！」というのは、自由な想念を使ってどんな小説でも書けるからです。人類はその自由な想念を使ってこの地球上に、今苦しい小説を書いているのです。それはまだ地球人類が幼く、正しい想念の使い方を知らないからです。

進化した星の人類は、それは美しく、それは楽しく、それは感動的な、空想科学小説を書いています。そ

れも、想像を絶するファンタスティックな空想科学小説ばかりです。この表現宇宙は、様々な星の人類が書いた空想科学小説の発表会場になっているのです。地球人類は今その会場に、稚拙で醜く苦しい小説を発表しているのです。地球人類もそろそろ、進化した星の人類が書いているような、素晴らしい空想科学小説を発表したいものです。

言葉一八一・想念の管理

人間は想念を持っています。人間はその想念によって、どんなものでも生み出すことができます。想念は万能の製造機のようなものなのです。例えば、苦しい想念を持てば、苦しい世界を生み出します。楽しい想念を持てば、楽しい世界を生み出します。でもその想念は、自分の中に無いものは出せません。在庫品がケーキしか無いのに、パンは出せないということです。悪い想念しか無いのに、良い想念は出せないということです。だから、想念の持ち方が大切になってくるのです。

良い品物を出したかったら、倉庫の中を良い品物でいっぱいしておくことです。そのためには、常に良い想念を持ち続けることです。つまり白いボールの想念を持ち続け、倉庫を白いボールでいっぱいしておくことです。思っている通りのもので、それ以上でも以下でもないというのは、思っている通りのボールの

在庫品になるからです。例え黒いボールの在庫品を持っていても、反省して白いボールを多く持つようになるれば、黒いボールは白いボールに置き換わってしまうのです。私たちは、長い物に巻かれやすいのです。だから、普段の想念の持ち方が大切になってくるのです。どうか想念の管理をしっかりやってください。

言葉一八二・苦しいカルマから抜け出す方法

私は声を大にしていいと思います。「あなたの想念を正しく使ってください！」と・・・。

今人類は、沢山の苦しみを抱えています。でも、その苦しみがどこから来ているのか、誰も真剣に考えようとしないのです。なぜでしょうか？・・・それは、想念の偉大さを誰も知らないからです。苦しみは何処からやってくると思いますか？ 他人からですか？ 他国からですか？ 自然からですか？ 偶然からですか？ 運命からですか？ 神からですか？ いいえ、自分の想念からやってくるのです。

私たちは、何でも創造できる偉大な想念を持っているのです。その偉大な想念を悪用し、苦しんでいるのが人間なのです。自分で苦しみを作り、自分で苦しんでいるということです。想いは自由です。私たちは何でも想えるのです。何でも想えるだけに、正しく使う責任があるのです。なぜなら、想いは自分だけでなく、人にも、自然にも、地球にも、宇宙にも、多大な影響を及ぼすからです。しかし人類は、そのことを少しも

考えようとせず、好き放題に想念を悪用しては苦しんでいるのです。戦争もそうです。病気もそうです。事故もそうです。災害もそうです。今地球上で起きているすべての苦しみは、想念の悪用による結果なのです。

このようにいうと、「生まれたばかりの赤ちゃんは、何も悪いことを想っていないのになぜ苦しむのですか!？」という質問が返ってきます。確かに、生まれたばかりの赤ちゃんは、何も悪いことをして(想って)いないのに、不遇な境遇に生まれたり、病気になったり、事故や災害に遭ったり、戦争に巻き込まれたり、して苦しんでいます。この謎を解くには、過去生に遡らなくてはならないでしょう。

私たちは、輪廻転生を繰り返して魂を成長させている生命体です。でも、長い間転生を繰り返していると、どうしても罪を犯してしまうものなのです。本来なら、その生で犯した罪は、その生で精算して帰るようになっていくのですが、あまりにも多くの罪を作ると、その生で精算しきれなくなり、來世にまで持ち越されることになるのです。これがカルマの輪廻といわれるもので、何も悪いことをしていない赤ちゃんが苦しむ理由です。その苦しみは、過去生の罪を精算している状態ですから、今生罪を作らなければ、來世に持ち越される罪はなくなるはずなのですが、悲しいことに、苦しい環境で生きていけば、どうしてもカルマの上塗りをしてしまうものなのです。では、このカルマの輪廻から抜け出すには、どうすればいいのでしょうか？

ヒプノセラピーを受け、過去世のことを思い出すことでしょうか？　いいえ、そんなことをしたってカル

マは消えません。かえって自己嫌悪に陥るだけです。神は記憶のない過去の罪を、ドウコウしなさいとはいっていないのです。今も述べたように、今生罪を作らなければ、來世に持ち越す罪は無くなるのですから、今生正しく生きることがカルマの輪廻から抜け出す一番の方法なのです。私が声を大にして訴えたいのは、「今を正しく生きる」この一点です。

確かに、生まれ持った苦しい境遇は過去世に原因があるので、その自覚は持つ必要はあるかもしれませんが、でも、今日まで苦しい境遇で十分罪の償いはしてきたのですから、もうこれ以上過去世の罪で苦しむことはないのです。今すべきことは、今を正しく生きることです。良いことを想い、良いことを口にし、良い行いをすることです。すなわち、「身・口・意」の実践です。具体的に述べましょう。

・ポジティブな想いを持ち続けることです。

ポジティブな想いの一番は、「神を想う」ことです。神を想えば原子核が増えますから、運命が良い方向へ転換していくのです。想念は創造の力です。良い想いは光そのものですから、良い想いを持ち続けていれば、病気にもならなくなるし、事故にも遭わなくなるのです。どうか、良い想いを持ち続けましょう。

・良い言葉を口にすることです。

一番良い言葉は神の言葉ですが、今の世の中で神を口にすれば気違い扱いですから、代わりに、明る

い言葉、肯定的言葉、嬉しくなる言葉、楽しくなる言葉、建設的な言葉を使いましょう。「ありがとう！ はい！ 嬉しい！ 安心！ 明るい！」など、「あ行」の言葉は光を呼び込みますので、意識して使うようにしましょう。

・良いと思うことを積極的にすることです。

引っ込み思案はエネルギーを弱めます。行動的な人になって下さい。行動的になれば、エネルギーが強まります。それは原子核が増えるからです。思った時が、行動に移す最良の時です。おしりの軽い人になってください。

この三つをぜひ、実践してみてください。何も変わらないからといって途中で諦めないでください。「石の上にも三年」という諺があります。変化が起きるまでやり続けてください。いや一生やり続けてください。これはカルマの解消だけでなく、人生の目的である「神の自覚を持つ」ことにもつながるのですから・・・。

さあ、
明るく、明るく、朗らかに、

何事も良く受け取り、

神を想い、光を想い、日々生きてください。

その人は、間違ひなくカルマから抜け出すことができるでしょう。悪い原因を作れば悪い結果が、良い原因を作れば良い結果が、これは因果の法則からして当然のことなのです。

世間には、「私は何も悪いことをしていないのに、こんな苦しい目にあっている！」と嘆いている人がおられます。嘆いているだけならまだしも、親を恨み、人を恨み、境遇を恨み、世を恨み、神を恨み、愚痴を言っているのです。これでは、カルマの上塗りをしているだけで、何の解決にもなりません。今の苦しい状況は、カルマが精算されている状態ですから、カルマの上塗りさえしなければ、カルマは消えて無くなるのです。確かに苦しければ、愚痴がこぼれるのも無理はありませんが、その時、このように考えて欲しいのです。「今の苦しい状態は、カルマが消えていっている状態だから、ありがたいことなのだ」と．．．。「そこでさらに、次のように想ってください。「私は神である！生命である！」と．．．。神を想う時間が多くなれば、ネガティブな想いを持つ時間が少なくなりますから、業の上塗りをしないで済むのです。

人生は、今の今、何を多く想うかで決まるのです。

思いの偉大さ！ 思いの恐ろしさ！ 思いの頼もしさ！ 思いの素晴らしさ！ を知ってください。

言葉一八三・想念が実現の母である理由

私が非常に悲しく思うのは、あまりにも人間は自分の想念を軽んじて使っていることです。何度もういように、「想念は実現の母」です。私たちの想念はモノを創造する偉大な力を持っているのです。私たちの運命は、この想念をどう使うかで決まるのです。では、「想念が実現の母」である理由を述べましょう。

私たちがそこに何かがあると認識できるのは、意識を持っているからです。その意識は、想念を生み出している大本なのです。ということは、意識と想念は同じものと考えていいでしょう。その想念は、モノの本質であり力そのものなのです。意識⇨想念⇨本質⇨力なのです。「想念が実現の母」といわれる理由は、想念そのものが形を生み出す本質であり力だからです。例えば、何か悪いことを想ったとします。そうすると、本質が働き出し、想ったとおりの悪いことを作ってしまうのです。つまり、想ったその思いの力が本質を働かせ、想ったとおりのものを創造するわけです。

ただしその思いが、どれほど強いかわ弱いかによって、実現スピードや濃さに違いが出てきます。弱く想えば遅く薄く、強く想えば早く濃く……。この表現世界は波動が粗雑なために、想いの強弱によって実現スピードや濃さに違いが出てくるのです。でも、想ったことは必ず実現します。一旦発した想いは宇宙空間に漂い、縁に触れて必ず現れるのです。ただ想いの弱いものは現れ方も弱いいため、気づかないで終わる場合が

多いのです。でもどんなに弱い想いも、何度も想えば雪だるま式に膨れ、いつか大きな実現として現れるのです。ですから、悪い想いはできるだけ持たないことです。 ” 私は何もしてないのに苦しい目にあっている ” という人がいますが、何もしてないどころか、想いで、言葉で、すでに苦しいことをしているのです。他人があなたを苦しませることは絶対ありません。すべて、自分の想念のせいで苦しんでいるのです。勿論、想念を上手に使っている人は幸せになっています。

このように、何でも実現させる力を持っているのが想念なのです。それは前述したように、想念そのものがモノの本質であり力そのものだからです。ではこのことを、科学的に検証してみることにしましょう。

ガラスの上に細かい砂を置き、その砂に向かって「あー」という声を発してみてください。発した音の波形に添った砂の形が現れます。声の前にあるのは想いです。つまり、「あー」という声の前に「あー」という想いがあるのです。形に現れる背後に必ず思いが伴っているということが、この実験から解ります。音も波動です。想いも波動です。波動は波形を伴っているため、必ず形として現れるのです。それも、想いの内容に添った波形として、強ければ強いように・・・、弱ければ弱いように・・・。こんな確かな科学的裏付けがあるというのに、あなたは今後も悪い想いを使うのですか？ 賢い人は、そんな愚かなことはしません。どうか賢い人になってください。それは自分を助けるだけでなく、すべての存在物を助けるのですから・・・。

なぜなら、想念は宇宙空間に飛び火するからです。どうか、自分の想念を良いことに使ってください。決して愚痴やネガティブなことに使わないでください。

言葉一八四・四つの利点

想念を神に留めると四つの利点があります。

- 一、エネルギーが高まります。
- 二、この世の雑念から離れることができます。
- 三、神の自覚が生まれます。
- 四、過去の業を消すことができます。

一、神はエネルギーそのものです。私たちの本性は神ですから、神に意識を留めるとエネルギーが高められるのです。人間と思うことによって神の通路を閉ざし、エネルギーを落としているだけです。できるだけ多く神を想い続けてください。神を想えば思うほど、神に通じる道が太くなり、エネルギーが高まります。

二、私たちが不幸になるのは、想念をネガティブなことに使っているからです。ネガティブな想いは、エネルギーを低めるため不幸に見舞われやすくなるのです。神に意識を留めていれば、ネガティブな想いを持ちませんので、それだけ不幸から離れることができるのです。例えば、二時間神に想いを留めたとすれば、ネガティブな想いから二時間離れられますから、前後四時間良い原因を作ったことになり、それだけ幸が多くなるのです。

三、神の自覚は、神に意識を留めれば留めるほど高まるようになっていきます。つまり原子核は、エネルギーを高めれば高めるほど増える仕組みになっています。その偉大な想念を私たちは持っているのですから、その想念を使わない手はありません。ぜひ想念を、原子核を増やすことに使ってください。それはただ、神に意識を留めればいいだけです。

四、多くの人は、過去を悔いて生きています。ああすれば良かった、こうすれば良かったと……。でも、そう悔いなくてもいいのです。なぜなら、今を正しく生きれば、過去の過ちを帳消しにできるからです。今を正しく生きるという意味は、今神を想い、今神を口にし、今神のような行為をすることです。その行為も、神がやっていると思つてすることです。このように生きられたら、間違いなくあなたの過去は変えられます。なぜなら、今正しく生きようと思つたのは過去から学んだ結果ですから、これは過去を変えたこ

とになるのです。それだけではありません。今正しく生きれば、未来も正しく生きられるようになるはずですから、これは過去・現在・未来の三世を変える大変な偉業になるのです。

【神様からの手紙⑩・・想念の正しい使い方を学んでください。】

原始の宇宙は、無風状態の池に例えることができるでしょう。でも、無風状態では、池に波は立ちません。波が立たねば、そこからは何も生まれません。何も生まれなければ、何一つ物語は生まれません。そこで、私は、池に波を立たせるために、自分の想念を動かした(想った)のです。それが創造の心です。

こうして表現宇宙が創られ、様々な生き物が誕生したわけですが、とりわけ、あなた達人類は、私の代弁代行役を担った特別な存在です。ですから、あなた達には、私と同じ想念力が与えられているのです。しかし残念なことに、あなた達はその想念力を悪用し、苦しい世界を作ってしまった。でも私は、そうなることを織り込み済みで想念を与えたのです。あなた達は、今、苦しみに喘いでいますが、それは想念を正しく使う学びの試練と考えてください。やがてあなた達は、その苦しみを糧として正しい想念を使うようになるでしょう。そのときこそ、この地球に理想の世が誕生するのです。

不動心の持ち主とは、心を波立たせなくなった人のことです。つまり、正しい想念の使い方を学び終えた

人のことです。その人の心はもう波立ちませんので、もう苦しみは生まれません。苦しみも、悲しみも、幸せも、喜びも、みな想念の産物です。あなた達は、今、想念をどう使えば幸せになれるか学んでいる真っ最中というわけです。どうか一日も早く、想念の正しい使い方を覚えてください。

第11章 真理

世の中には、(非真理)幻を知ろうとしている人は沢山おりますが、真理を知ろうとしている人は僅かしかおりません。殆どの人が、真理を知らぬまま人生を終えているのです。これでは何のために生まれてきたのか分りません。さあ、折角の人生を無駄にしないためにも、真理を知って帰ろうではありませんか。それは、自分のためであり、地球のためであり、宇宙のためでもありますから……。

言葉一八五・真理とは何か？パート1

真理とは何でしょうか。「真理」の「真」とは、誠なるもの・確かなもの・不動なるもの・不変なるもの・

永遠なるもの・完全なるもの・無限なるもの・絶対善なるもの、を意味します。「理」とは、ことわり・法則・鉄則・定め・秩序を意味します。通して解釈すれば、不変不動永遠不滅絶対善なる確かなものが「真理」の意味になります。ならば、変化変滅するこの表現宇宙のすべての物は、非真理ということになるでしょう。そうです。

この世のどんなモノも、どんな現象も、すべて非真理です。私たちは、この世の無常を嘆きますが、この世のモノは何が無くなるかと、すべて非真理ですから、憂いることも、心配することも、悲しむことも、ないのです。例えば、肉親の肉体が無くなっても、自分の肉体が無くなっても、・・・です。

私たちは、真理そのものなのです。なぜなら、私たちの意識は永遠に無くならないからです。私たちの意識は、不変不動永遠不滅の真理そのものなのです。いや、意識を持つすべてのモノは、真理そのものなのです。だから、

- ・ 私は、真理そのものです。
- ・ あなたは、真理そのものです。
- ・ 万象万物すべて、真理そのものです。

いっておきますが、形の中で生きて働いている意識(生命)が真理そのものだといったのであって、形が真

理だといったわけではありません。その点誤解しないでください。

真理は、姿形が無いので見ることも触れることもできませんが、今、厳然として宇宙に存在しているのです。意識として、意志として、知恵として、力として、光として、その総合された生命として、……。だから人間を知られば、真理(宇宙生命)の実体が解るのです。

言葉一八六・真理とは何か？ パート2

真理についても少し深く追求してみましょう。私たちは「私の右側にリングがある！」という言い方をしますが、それは自分から見た場合で、万人共通の見方ではありません。あなたと向かい合っている人から見たら、リングは左側にあるからです。これは真理ではありません。このようなこともあります。

大根を買いに行き、あなたはAの大根が良く見えたのでAの大根を買いました。でも、隣の奥さんは、Bの大根が良く見えたのでBの大根を買いました。この場合二人にとって、真理は二つあることになります。でも、これも真理ではありません。どんな人にも共通なのが真理ですから、人によって違う真理は真理ではないのです。

真理は見える物でも、触れるものでも、量れるものでも、示せるものでもありません。真理はどんな条件

下にあると、絶対変わらない不変不動永遠不滅の定まったものです。例えば、ここに水と氷があるとします。でも、水も氷も真理ではありません。なぜなら、氷は融けて水になり、水は蒸発して無くなるからです。この場合の真理は水蒸気です。なぜなら、水蒸気は永遠に無くならないからです。今も述べたように、不変不動永遠不滅なるものが真理ですから、無くなってしまいう水や氷は真理ではないのです。次のような例えも同じです。

ここに美人がおります。でも、この美人は、いつまでも美人ではありません。段々と年老い、しわができ、醜い姿になり、最後は土に帰ってゆきます。これは非真理だからです。不変不動永遠不滅なるものが真理です。すから、変化し消えて無くなるものは、すべて非真理なのです。

生命(神)は、不変不動永遠不滅なるものです。その生命が全宇宙を差配しているのですから、全宇宙は真理そのものといつていいでしょう。ということは、私たちも真理そのものということになります。なぜなら、私たちの中に不変不動永遠不滅の生命が宿っているからです。そうです。本当の私たちは、生命そのものなのです。生命が思い、生命が語り、生命が事をなしているのです。

その生命は五感を超越しているのです。五感で感じるものは、すべて非真理です。五感で感じないものは、真理です。真理か非真理かを見極める簡単な方法は、五感で感じるか感じないかを目安にしてください。た

だし、五感で感じなくても非真理のモノはあります。例えば、原子です。素粒子です。でもこれも、現象として何らかの方法で捕らえることはできませんから、非真理です。

「どうか、真理を見極める目を養ってください。そうすれば、もう物に溺れることはなくなるでしょう。消えてなくなる非真理(物)を手に入れても、何の意味も無いからです。このように真理とは、永遠不滅不変不動の生命(神・本当の自分)のことをいうのです。

言葉一八七・人が真理を求めたがる理由

あなたは何が欲しいのですか？ お金ですか、物ですか、地位や名誉ですか？ 幸せが欲しいものではありませんか。人間は、お金や物があれば幸せが得られると思っっていますが、そんな物からは、かりそめの幸せは得られても、永遠の幸せは得られないのです。それを知っているあなたの魂は、永遠に尽きない、永遠に色あせない、究極の幸せを欲するのです。

人間が、かりそめの幸せを嫌い、永遠の幸せを求めたがる理由は、私たちの意識(生命)が永遠だからです。永遠の意識を持つがゆえに、永遠の幸せの中に入らなくては満足できないのです。また、その意識は飽きにくいため、同じ幸せの中には不満が起きるのです。では、永遠に失わない、永遠に飽きない幸せは、ど

うすれば得られるのでしょうか？ それは、自分が永遠の意識であると心の底で知ったとき得られるのです。意識には制限的約がありませぬ。また、生・老・病・死もありませぬ。自由です。無限です。何でも創造できます。その意識が自分であると心の底で思えたとき、心は永遠の幸せの中に入るのです。

大昔から人生は、悟るためにあるといわれてきました。でも、なぜ悟らねばならないのか、その理由が教えられてきませんでした。なぜでしょうか？ それは、悟りと幸せを切り離してしまつたからです。前述したように、私たちは永遠に尽きない、永遠に色褪せない、究極の幸せが欲しかつたのです。その究極の幸せは、「自分が意識そのものである！」と心の底で思えたとき、つまり悟つたとき、得られるのです。悟れば究極の幸せの中に入れるのです。ということは、悟りも究極の幸せを得る方便であるということになります。

これまで多くの人たちが、悟るために人生を捧げてきましたが、理由も分からず悟りを目指してきたのです。それは、悟りが究極の幸せにつながっていることを、誰も知らなかつたからです。しかし、今、ここで、悟らねばならない理由が明らかになりました。もう、悟るために二の足を踏むことはないでしょう。さあ、悟りの目的が、「究極の幸せを得るためである！」ということをしつかりと認識してください。

言葉一八八・真理学と物理学の違い

宇宙には、物理学と真理学があるのです。物理学とは、分数の組み合わせによって作られた物質世界を研究する学問です。一方、真理学とは、元数1そのものを研究する学問です。物質は消えて無くなる幻ですから、物理学とは幻を研究する学問ということになります。元数1は絶対無くならない真実ですから、真理学とは真実を研究する学問ということになります。では、どちらの学問に力を入れるべきでしょうか？ 消えて無くなる物理学でしょうか？ 永遠に無くならない真理学でしょうか？ 真理学ですね。では、今、人類は、どちらの学問に力を入れているでしょうか？

人類が今もって様々な苦しみに喘いでいるのは、消えて無くなる物理学に力を入れ、永遠に無くならない真理学をないがしろにしているからです。消えて無くなる物理学は、この世限りの学問です。永遠不滅の真理学は、あの世に帰っても通用する学問です。それも物理学のように、沢山の知識を身に付ける必要のない学問です。たった一つの真理が理解できれば、宇宙の謎のすべてが解かる万能の学問なのです。なぜなら、元数1が解れば、すべての分数の謎が解かるからです。元数1とは、本当の自分のことです。宇宙生命のことです。宇宙意識のことです。すなわち、神のことです。ですから、元数1の自分を知れば、もう何も得る必要も、何を知る必要も、何を成し遂げる必要も、なくなるのです。なぜなら、究極の幸せの中に入ったか

からです。究極の幸せ以外、一体何がいるのでしょうか？・・・。「究極の幸せが欲しい！・・・究極の幸せが欲しい！・・・」とあなたは、何万転生も真理を追求してきたものではありませんか。どうか、究極の幸せについて、深く追求してみてください。「究極の幸せ」この言葉の意味の深さは、無限宇宙よりも深いのです。

言葉一八九・火のない所に煙は立たぬ

何でもそうですが、何もしないで事が起きることは絶対ありません。事が起きるには、起きるだけの原因が必ずあるのです。火を付けたから火事になったのです。水に飛び込んだから溺れたのです。一生懸命登ったから、頂上にたどり着けたのです。これは当たり前のことです。何の不思議もありません。原因を作れば、必ず結果が生まれるのです。それも良い原因を作れば良い結果が、悪い原因を作れば悪い結果が・・・。それを教えてくれているのが、ウサギとカメの童話です。ウサギは足が速いので、カメを問題にしていまませんでした。でも、油断して途中で一休みしたため、カメに追い越されてしまったのです。それは、「一休み」という原因を作ったからです。水戸黄門の歌の一節に、「後から来たのに追い越され、泣くのが嫌ならさあ歩け！」という文句がありますが、これは因果の法則を示唆した良くできた詩だと思えます。要するに人に負けなくなったら、負けなだけの原因を作りなさい！ とこの詩はいつているわけです。

「原因と結果の法則」は絶対的法則ですから、いかなる者も逃れられません。法則を犯せば、必ず痛い目に遭います。人間は法を犯しながら、「なぜ私はこんなに苦しまねばならないのだ！」と嘆いています。責任はみな自分にあるのです。火のないところに煙が立たないように、原因の無いところから結果は絶対生まれないのです。それゆえに私たちは、法を守って生きなければなりません。この原因と結果の法則こそ、私が一番知って欲しい、守って欲しい、宇宙の理なのです。人類がこの法則を守るようになったら、今すぐにでも地上天国はやってくるでしょう。

言葉一九〇・・・どんな覚者も原因と結果の法則は曲げられない！

裁判寸前にまでいった、こんな嘘のような本当の話があります。別居中のある奥さんが妊娠してしまったのです。その奥さんは、夫に問い詰められ、こう言い訳したといます。「私は浮気していません。この妊娠は処女解任です！」と・・・ある宗教の狂信者だけありうまい言い訳をしておりますが、もし、それが事実なら原因の無いところから結果が生まれたことになり、因果の法則が成立しなくなります。そんなおかしな話はありません。妊娠した結果があったということは、そうなる原因を作っていたということです。つまりその奥さんは、浮気していたということです。良くキリスト教でイエスの処女解任の話をしますが、そ

れはイエスを神秘化するためにでっち上げた作り話です。そんな非科学的なことがあるわけではないのです。イエスはヨセフとマリヤの性行為で生まれた、私たちと何ら変わらぬ手順を踏んで生まれた普通の人間です。覚者であろうと無謀な生き方をすれば怪我もするし、病気にだってなるのです。また、覚者だって電気を使い空気や水を汚しているわけですから、応分の自然災害にも遭うのです。大雪で足止めされたことがありました。私自身、空気や水や土を汚すなどの原因を作っていたのですから、応分の結果が与えられて当然だったのです。原因を作れば必ず結果が付いてくるのです。これは、いかなる者も逃れるわけにはゆかない真理なのです。

言葉一九一・原因と結果は必ず一致する

“因果の法則を気にしていたら何もできませんよ！”という人がおりますが、それでは、あなたは火の中に手を入れヤケドをしないのですか？と訊きたいです。なぜアメリカで、銃による殺人事件が多発しているのでしょうか。それは銃の所持を許しているからではありませんか？津波で原子炉が破壊され放射能被害を受けましたが、それは危険なウランを使っていたからではありませんか？危険な原因を作れば、それ相応の結果が生まれるのです。これは当たり前前のことです。でも、その当たり前前のことを、何の疑問も持た

ずやっているのが人間なのです。

やればやり返されるのですよ！ 奪えば奪い返されるのですよ！ 殺せば殺されるのですよ！ それも因果の法則の報復だけでなく、人為的なおまけつきの報復（人為的罰則）も来るのですよ！ こんな割の合わないことをどうして人間はするのですか？ それは、因果の法則の偉大さを知らないからです。無知だからです。原因と結果は必ず一致するのです。宇宙の法則に齟齬は絶対無いのです。どうか法則を守ってください。

言葉一九二・・ 応分の責任を背負わなければならない

笑顔には笑顔が返ってきます。怒りには怒りが返ってきます。親切には親切が返ってきます。意地悪には意地悪が返ってきます。この表現宇宙は精妙な波動で創られていますので、本来、原因と結果はすぐにやってくるはずなのですが、波動の粗い今の地球では、原因を作ってもすぐに結果がやってこないため、どうしても人間は、因果の法則を犯してしまうのです。でも、原因を作れば必ず結果がやってきます。宇宙の完全性は「原因と結果は必ず一致する」という、因果の法則の絶対性が支えているのです。もし因果の法則が錆びついて働かなかつたら、宇宙はたちまち崩壊してしまうでしょう。今まで宇宙が無事存続してこられたの

は、因果の法則が正常に働いていた証しなのです。

この宇宙は、絶対宇宙と相対宇宙の対によって成り立っています。絶対宇宙は原因の世界で、相対宇宙は結果の世界です。相対宇宙で起きた出来事は、すべて絶対宇宙で作られた原因によるのです。これは、私たちの想念行為に例えることができます。私たちの想念は原因次元に属し、肉体行為は結果次元に属するので、原因である想念は見えませんが、結果である肉体行為は見えます。その見えない想念が始めに働き、後に肉体的行為に現れるのです。私たちの周りで起きている事象は、すべて想念の働きによるのです。だから想念（原因）のあり方が大切になってくるのです。

幸せな人生を歩んでいる人は、良い原因を作った結果としてあります。不幸せな人生を歩んでいる人は、悪い原因を作った結果としてあります。すべて因果応報によるもので、偶然に幸・不幸になったわけではなく、一見、やむを得ぬように見える自然災害も、人類の不調和な集合意識が生み出した必然的結果であって、偶然に起きたわけではありません。だから、不幸を全員で平等に分け合っているわけです。不幸を全員で平等に分け合っているという意味は、一人ひとり自分の原因に見合った結果を、一人ひとりが応分に受け取っているという意味です。だから同じ自然災害にあっても、被害の多い人と少ない人が出てくるわけです。私自身も、応分の結果を受け取っています。

因果の法則を信じられる人は、自分に何か起こっても決して人のせいにすることはありません。すべて自己責任として自分を戒めます。でも信じられない人は、他人に責任を転嫁して逃げております。これは愚かな人のやる所業で、賢いとはいえません。なぜなら、どんなに責任逃れしても、いつか必ず応分の責任を負わねばならないからです。逃げてても逃げてても、必ず結果は追いかけてきますので、決して逃れられません。ならばこちらから、結果を消しに行った方が気楽ではありませんか。消しに行くとは、反省をし、二度と原因を出さない(過ちを犯さない)ようにすることです。これは賢い人なら分かるはずです。責任逃れする人は、因果の法則の絶対性を知らないからです。

人の不幸は無知からきているのです。つまり自分が不幸の種を撒きながら、それに気付かない無知がもたれているのです。どうか無知を解消してください。因果の法則の絶対性を知ってください。その者は、もう愚かなことはしなくなるでしょう。

言葉一九三・原因と結果の循環の輪

「禍福はあざなえる縄の如し！」という諺がありますが、これは因果の法則を通して進化する姿を、あざなえる縄に例えて語ったものです。人間は過ちを犯します。そして苦しみます。でも、その苦しみから学び、

生き方を正すようになりません。そうなると幸せがやってきます。しかし、人間は増長し、再び過ちを犯します。そして苦しみます。でも、その過ちから再度学び、生き方を正すようになります。するとまた幸せがやってきます。こうして不幸と幸せの間を行き来しながら成長してゆく姿を、「あざなえる縄」のようだとはいっているわけです。

この宇宙は悪が勝つようにはできておりません。また善が勝つようにもできておりません。善悪の消却を通し、完全な善に向かって進化してゆく営みがあるだけです。善悪の消却とは原因と結果の循環のことを指しており、この循環の営みがあればこそ、表現宇宙はより完全に向かって進化してゆくことができるのです。

原因と結果の法則は、いってみれば循環する輪のようなものです。その輪は二つあります。一つは、表現宇宙の内(物質界と幽界との輪廻)を循環する(B)という輪です。もう一つは、絶対宇宙と表現宇宙を循環する(A)という輪です。私たちは今(B)という輪を循環しておりますが、この輪は私たちの迷妄が作りだした幻の輪で、実際に存在しているものではありません。私たちは実際に存在していない輪の中を、これまで何万回も回ってきたのです。確かに、この輪を回ることによって色々なことを学び、成長することができました。でも、そろそろ、この輪の外に出たいものです。そのためには、悪い原因を作らないようにすることです。これが輪廻の克服といわれるもので、人生の大きな目的の一つなのです。

もう一つの(A)という循環の輪は、宇宙の脈動運動による輪のことですが、ここでは触れないでおきます。いずれにしても私たちは、二つの輪を克服するために生まれてきたのです。

言葉一九四・・・この宇宙に善悪など無い！

本来、この宇宙に善悪はありません。あるのは絶対善のみです。なぜなら、この宇宙は神によって創られた神の御神体だからです。御神体の中に悪があるはずがありません。もしあるなら、神は完全でなくなってしまう。そんな神がおられるわけがないのですから、この宇宙に悪があるはずがないのです。悪があるように見えるのは、善悪を認める人の思いがあるからです。その思いは、損得を認める感情からきている。あの人と付き合ったら私にとって損か得か、この物のやり取りをしたら私にとって損か得か、そこに行けば私にとって損か得か、自分が得する場合は善になり、損する場合は悪になります。立場が変われば全く反対になってしまうのが、この世の善悪の正体なのです。だから私は、この宇宙に本質的な善悪は無いというのです。

例えば人間は、悪さをする虫を悪と見ます。そう見るのは、その虫が人間にとって都合が悪いからです。確かに人間の立場に立って考えれば、嫌な虫かもしれませぬ。でも、虫の立場に立って考えてみてください。

虫は自分の使命を果たしているだけです。例えば、蚊を一例に取って見ましょう。蚊は不潔な水たまりに多く発生しますが、これは「水はけを良くしなさい！ 生活環境を良くしなさい！」という人間に対する警告なのです。蚊は警告の役目を果たしているだけです。もし蚊がいなかったら、人間環境は今以上に悪くなっていたでしょう。完全の中に生かされている虫たちが、理由なく悪さをするはずがないのです。悪さするには、悪さをする理由が必ずあるのです。もし、あなたの前に悪さをする虫が現れたら、なぜ現れたのか良く考えてみることです。必ず理由が見つかるはずです。たとえば建物に隙間があるとか・・・、家の中が不衛生になっているとか・・・、家族間に不調和があるとか・・・、理由が解れば、虫の対処の仕方も違ってくるでしょう。

何事でもそうですが、何か事が起きるには、起きる理由(原因)が必ずあるのです。その事が、自分にとって都合が悪いから悪といっているだけで、起きている事自体は善い事なのです。もしその事が起きなかったら、過ちに気付かないわけですから、同じ過ちを繰り返してしまうでしょう。これでは進歩はありません。虫は悪役を買って出てくれているのです。そんな虫を責めるのは、お門違いというものです。

これは人間関係においてもいえることです。極端な例ですが、あなたがAという人に殴られたとしましょう。殴られた結果があったということは、殴られる原因があったということです。つまりAは殴る原因を持

っていたから、あなたを殴ったのです。あなたは殴られる原因を持っていたから、あなたは殴られたのです。Aは因果の法則に基づき、殴る使命を果たしただけです。もしあなたが、そこから何の教訓も受け取らなかつたら、殴られた体験は無駄になってしまいます。でも殴られた原因を見付け過ちを正したら、その体験はあなたを成長させます。という事は、殴られた事は善だった事になり、殴ってくれた人に感謝しなければなりません。

善悪の感情を持っている人のみに悪があるのであって、持っていない人には悪は無いです。つまり、善悪の木の実を食べている人のみに悪があるのであって、食べない人に悪は無いです。この宇宙には善も悪も無いのです。あるのは絶対善のみです。つまり、善悪の消却を通して進化する完全があります。それが分かる、人を責めなくなるし自分も責めなくなるでしょう。人を許し自分も許せる寛容の心は、すべての事象(現象)が善い方向に進化する途中の姿であると思えた時に生まれるのです。

言葉一九五・真実とは幸せを味わうことである

真実という文字を分解してみましよう。「真」とは、不変不動永遠不滅の誠なるモノ、絶対崩せないモノ、確かなモノ、を指します。「実」とは、結実したモノ、実ったモノ、つまり完全なるモノを指します。です

から通して解釈すると、不変不動永遠不滅の結実した完全なるモノが「真実」ということになります。

ではこの表現の世界に、そのようなモノがあるでしょうか。いいえ一つもありません。なぜなら、この世にあるモノは、すべて消えて無くなる不完全なモノ(幻)だからです。「私は真実を知りたい！」という人がおりますが、この世で真実を知ることが絶対できません。真実を知りたければ、生命を、神を、本当の自分を、知るしかないので。生命は、神は、本当の自分は、真実なるモノだからです。誤解しては困りますので付け加えますが、ここでいっている本当の自分とは、人間のことをいっているではありません。人間の中に宿っている、生命のことを、神のことを、いっているのです。

生命(神)の世界には、永遠に色あせない、永遠に失わない、幸せがあります。生命(神)の世界が天国なのです。でも、天国という場所があるわけではありません。幸せな意識状態を天国といっているのです。ではその幸せは、どうすれば味わえるのでしょうか。それは、生命の自分を心の底で知ったとき味わえるのです。真実を知りなさいとは、「生命の自分を知りなさい！ 神の自分を知りなさい！ 本当の自分を知りなさい！」という意味で、真実を心の底で知れば、否応なしに幸せな意識状態になれるのです。覚者たちが一様に目指すのは、この真実を知ることです。それが覚者たちの目指す目的であり、迷った人たちを導く指針でもあるのです。

「真実を知ることが幸せを味わうことである」、と私がいうのは、真実の中に幸せがあるからです。真実イコール生命です。真実イコール神です。真実イコール本当の自分です。すなわち、「真実イコール幸せ」なのです。幸せが欲しかったら、どうか真実を知ってください。それも、心の底で知ってください。その時あなたは、真の幸せを味わうことができるでしょう。

言葉一九六・心を動かしたときが真実である

現れているモノが本当にあるものなのか？ 現れているものが本当にあるものなのか？ 良く考えてみましょう。何でもそうですが、そこに何かがあるからには、それを生み出した何かが必要は必ずあります。つまり現れているモノの背後には、必ず現れているものがあるのです。現れているものがなくては、現れているものはあり得ないのです。ということは、現れているものが本当にあるもの、ということになるでしょう。

では、現しているものとは何でしょうか？ それは心です。想念です。だから心が本当にあるものです。ゆえに現象に心が動いたら、その人にとってその現象は真実になるのです。例えば柳を幽霊と見間違ひ恐怖した、あるいは木の切り株を熊と見間違ひ恐怖した、そのときその人にとっては、幽霊も熊も真実だったのです。これは次のようなことも同じなのです。

私たちは、行動に移さなければやったことにならないと思っておりますが、心を動かしたときはやったことになるのです。だからイエス様は、「汝姦淫するなかれ！」といわれたわけです。それは、「心で犯した罪も行為で犯した罪も同罪だからやってはなりませんよ！」という意味でイエス様は戒められたわけです。心でやっても、行為でやっても、同じなのです。なぜなら、想ったことは必ず現象として現れるからです。

だから、殺人ゲームなどをしてはならないのです。最近理由なき殺人事件が多発していますが、これは心の中の殺人を容認している、心の管理のずさんさが招いた結果なのです。あまりにも人間は、心の管理がずさずすぎます。態度に表さなければ、何を想ってもかまわないと思っております。

これは逆も真なりで、どんなに現象が騒いでも、心を動かさなかったらその現象は無かったことになるのです。心を動かせば有ることになり、動かさなければ無いことになるのは、心は創造の力を持っているからです。だから求道者は、不動の心を築こうと日夜励んでいるのです。覚者が常に穏やかなのは、すでに不動の心を築き上げているからです。

心を動かしたときが真実である、という意味の重さを知ってください

言葉一九七・神は偶然を知らず

神は偶然を知りません。なぜなら、神は偶然を作らなかつたからであります。しかし多くの人間は、偶然を信じ生きています。私の高校生の頃の話ですが、伯父の経営する会社のトラックが、エンジントラブルが原因で踏切事故を起こしたのです。エンジントラブルの原因が不明だったため、警察はこの事故を偶然で処理してしまいました。この例えを持ち出すまでもなく、今日の社会では、原因不明の交通事故も、地震で家が倒壊したことも、鳩の糞が頭に落ちてきたことも、悪友に道でバツタリ出会ったことも、みな偶然として「仕方が無い！」で済ましています。ならばどんな出来事も偶然で処理するべきなのに、サイフをすられたことや人に騙されたことは、警察沙汰にしているのです。なぜ事故は仕方無いで済まし、サイフをすられたことは警察沙汰にするのでしょうか？ 本当に偶然を信じているなら、どちらも偶然で処理するのが筋ではありませんか？

偶然は無秩序を意味し、必然は秩序を意味する言葉です。つまり偶然は因果関係を認めず、必然は因果関係を認める言葉なのです。それを前提に考えれば、偶然を信じている人は、自分に危害を加えた人に罪は問えないことになります。なぜなら、偶然を信じながら人に罪を問うのは矛盾だからです。偶然が本当にあるなら、サイフをすったスリは偶然に悪い環境に生まれ、偶然にスリ仲間に出会い、偶然にスリになったわけ

ですから、偶然に責任を取ってもらわなくてはならないでしょう。でも今の社会では、自然災害や事故は偶然で処理し、人災は必然で処理し人を罰しているのです。ということは、この社会の人たちは偶然を信じながら、実際は必然を認めているということです。もし本当に偶然を信じているなら、偶然にスリになった人の乗っている電車に偶然に乗り、偶然にサイフをすられたわけですから、スリに罪を問うのはお門違いというものだからです。スリに罪を問うのは、必然を(因果関係を)認めているからです。つまり、スリ本人に責任(原因)があると思っているから罪を問うのです。だからこの社会には、罪人を取り締まる警察があり、罪人を裁く裁判所があり、罪人を服させる刑務所があるのです。おかしな社会だと思いませんか？ 偶然を認めながら、必然的な処理をしているのですから……。

何事も偶然に起きるなら、サイコロの目を頼りに生きたらいいでしょう。そこに何の努力も必要ありません。一生を面白おかしく好き放題に生きたいいいのです。でも神は、そのような無秩序な宇宙はお創りになっていないのです。平安はどこから来るのでしょうか？ 無秩序の中からですか？ 秩序の中からですか？ もしこの宇宙に偶然があるなら、今カミナリに打たれて死んでも、隕石に打たれて死んでも、何の不思議もありません。私たちが曲がりなりにも安心して生きられるのは、目に見えない秩序が働いていると、心のどこかで信じているからではありませんか。そうでなければ、一時たりとも笑っていられないはずです。そう

です。この宇宙には、ちゃんとした秩序があるのです。秩序とは法則のことです。法則によって秩序立てられている宇宙には、起こるべきにして起こる、成るべきにして成る、必然があるだけです。だから法則を信じ法則に生きている聖者には、心配や恐怖は無いのです。

母親の胸に抱かれお乳を飲んで赤ちゃんの笑顔は、まさに天使の笑顔です。その天使の笑顔は、法則を信じる安寧の心の中から生まれてくるのです。私たち大人も宇宙の法則を心から信じられたら、赤ちゃんと同じように天使の笑顔で生きられるはずですよ。偶然を認める社会に真の安寧はありません。真の安寧が欲しかったら必然を認め、その必然（因果の法則・心の法則）を犯さない生き方をすることです。そうすれば、誰もが心穏やかに暮らせるでしょう。

言葉一九八・唯物論を信じている者は、この宇宙に存在しないと同じである

私たちは、毎日消えて無くなる沢山の人たちを見ております。「朝に紅顔ありて、夕べには白骨になりぬ身なり！」という蓮如上人の名句を持ち出すまでもなく、私たちは毎日この世の儂さを痛感させられております。この世の物は実に儂い存在です。いつか必ず消えて無くなります。それは、実際には無いからです。これは唯物論者であっても、否定しないでしよう。しかし彼らは、意識は頭脳(肉体)が生み出すといってお

ります。彼らは、物質は存在しないといながら、思考も、感情も、欲望も、記憶も、物質である脳(肉体)から生まれるといっているのです。実在しない脳から、どうして思考や感情が生まれるのでしょうか。実在しない脳から生まれた思考は、実在しない思考ではないでしょうか。ならば、実在しない思考から生まれた唯物論が、どうして正しいといえるでしょうか。でも彼らは、脳は実在しないけれど、脳が生み出した意識は実在するというのです。なぜなら、実際にものを考え、話し、書くことができるからだ。無いのからは、無いものでさえ生み出すことはできないのですよ。ましてや無いものが有る意識を、どうして生み出すことができるのでしょうか？ なぜ、この矛盾に気が付かないのでしょうか？

どうでしょう。実在しない肉体から生まれた意識は実在しないのでしょうか？ 例え実在しない肉体から一時意識が生まれたとしても、それは一時の意識ですから、その一時の意識が何を考えようと、何を語ろうと、何をしようと、何の意味があるのでしょうか？ まさに夢幻の話です。唯物論者は、その夢幻の一生を送ろうとしているのです。人間は、そんなものではないのです。肉体は無くなっても、意識は絶対なくなることはないのです。なぜなら、意識は肉体に付属するものではなく、生命(宇宙)に付属するものだからです。無くならない意識を持った人間だからこそ、その考えに、その言葉に、その行いに、価値があり、意味があるのです。実際に存在しないものが、何を考えても、何を作っても、何を残しても、それ自体無い

ものですから、何の意味も無いのではありませんか？ そんな無い者のいったことが、どうして正しいのでしょうか？ 唯物論者自体実在していないわけですから、その実在していない唯物論者のいつている唯物論が正しいわけがないのです。要するに、実在しない者が考えた唯物論は、夢幻のようなものなのです。

無いものがどうして意識できるのでしょうか？ 意識できるということは、意識させる力が背後にあるからです。意識そのものがエネルギーなのです。エネルギーは永遠に無くならないのです。ということは、私たちの意識は永遠に無くならないということです。だから無くなる頭脳から意識が生まれるわけがないのです。永遠に無くならない意識は、永遠に無くならない生命から生まれてくるのです。もし、肉体が意識を生み出しているというなら、あなたが感じて感じているものは肉体限りものですから、それは夢幻ではありませんか？ 無くなる者が無くなるものを見ていること自体無いですから、それは幻ではありませんか？ 無くなる者が無くなるものを一時意識していることに、何の意味があるのでしょうか？ だから私はいうのです、唯物論を信じている人は、この宇宙に存在しないとと同じであると……。

言葉一九九・自分の中に無いものは出しようがない！

「自分の中に無いものは出しようがない！」これは真理です。強盗に「金を出せ！」とどんなに脅さ

れても、無いものは出せません。自分の中に原因が無ければ、結果が出せるわけがないからです。「悪を持たない者は悪を見ることはない！」といわれるのは、自分の中に原因がなければ、結果の出しようがないからです。悪を見るのは、自分の中に悪があるからです。赤ちゃんがドロボーを見て笑っていられるのは、赤ちゃんの中にドロボーという観念がないからです。私たちが、悪を見、恐怖を見、憎しみを見、怒りを見るのは、自分の中にそれがあるからです。これは良し悪しに関係ないのです。愛を沢山持っている者は、愛を沢山見るのです。喜びを沢山持っている者は、喜びを沢山見るのです。私たちが悟れるのは、私たちが悟りを持っているからです。悟れば神が見られるのも、私たちが神を持っているからです。それは、私たちが神である証拠なのです。テレビが映像として映るのは、テレビから発信した電波と、放送局から発信した電波が同調したからです。Aチャンネルを持っていないから、Aチャンネルの電波が同調してAチャンネルの画像が見られたのです。Aチャンネルを持っていないのに、Aチャンネルの画像が映るわけがないのです。

では神は、なぜこのような仕組みをお創りになったのでしょうか？ それは、自分の中にどのような原因を抱えているか知ってもらうためです。私たちは、自分の中にどのような思い(原因)を持っているか、自覚しないで生きることが多いのです。そのために悪しき思いを持ち、悪しきものを受け取り苦しんでいる

のです。私ごとになります。私は人を責める癖を持っていました。でも、長年それに気づかないでいたのです。真理を知る前は、自分が責められても、人が責められているのを見ても、全部人のせいにしていました。でも真理を知ってはじめて、自分に人を責める思いのあったことに気づかされたのです。そしてそれは、自分が気づくために自分が意識させたことだったのです。

私たちは、テレビのブラウン管のようなものなのです。自分が発信した電波と同調したものが、自分に見える(現象が生まれる)ようになっていくのです。自分の中に無いものは、発信できないのです。発信しなければ、見せられない(意識させられない)のです。ですから何か見せられたら、なぜそのようなものを見せられたか考えてください。見せられた理由が必ず見つかるはず。自分の中に無いものは出しようがないという意味は、原因を持たないところから原因は発信しようがないから、結果は生まれようがないという意味です。

言葉二〇〇・原因なき原因とは

あなたが今存在していることは、紛れもない事実ですね。ということは、永遠の自分の存在を証明していることになりませんか？ 理由はこうです。

今あなたが存在していないなら、「0」です。でも、今存在している事実があるわけですから、今「1」があるということになります。今「1」があるということは、「1」なるあなたは、永遠に存在し続けるということです。例えばあなたが、何兆年分の一の確率で誕生したとしましょう。何兆年分の一といえば、微少な確率のように思えますが、無限時間の中においては無限の確率になるのです。数式で書けば、数式Aのようになります。

この数式Aが示すように、「1」が存在するということは、無限の存在を意味するのです。だからあなたは、永遠に存在し続けるのです。一方、今あなたが存在していないなら、それは「0」ですから、数式Bとなり、あなたの存在は永遠に「0」です。

現存している「1」があるということは、永遠の存在を示しており、それは原因なき原因になるのです。今「1」があるそのことが、永遠の「1」を生み出しているのです。これは、次のように考えれば理解しやすいでしょう。

例えば、今「1」がある事実があるならば、その「1」を産みだした「1」がその前に無くはなりません。なぜなら、親のない子は無いからです。つまり、原因のない結果は無いからです。ならば、その「1」を産みだした「1」もまた無くはなりません。そしてその「1」

$$\text{無限時間} \times \frac{0}{\text{何兆年}} = 0 \quad (\text{数式B})$$

$$\text{無限時間} \times \frac{1}{\text{何兆年}} = \text{無限数} \quad (\text{数式A})$$

を産みだした「1」も・・・こうしてこの話は、永遠に弧を描くことになります。永遠に弧を描くということは、行き着く先がないということです。行き着く先がないのは原因がないからですから、それは原因なき原因になるのです。原因を見い出せないものは、原因がないからです。永遠のものは根拠根源がないのです。根拠根源のないものは原因がないからです。今「1」があるということは、永遠の昔より「1」があったということになり、その「1」は原因なき原因になるのです。ということは、絶対宇宙には「1」だけがあり「0」は無いという証になるでしょう。「1」だけが存在する、それが原因なき原因の意味なのです。「0」は相対宇宙にのみある見せかけの「0」であって、実在するものではないのです。もし絶対宇宙に「0」があるなら、今宇宙は存在していないからです。「0」は絶対宇宙の「1」が生み出した相対的な「0」であって、「0」自らが生み出した「0」ではないのです。「0」は「0」を生まないのです。「0」は「1」から生まれるのです。だからといって、「0」を軽視してはなりません。なぜなら、「0」がなかったら「1」は無意味な存在になってしまうからです。「1」が存在を誇れるのは、見せかけの「0」があればこそです。これは電子と陽子の関係で示せるでしょう。陽子が実在するためには、電子が必要なのです。陽子は陽子だけでは存在の意味が無いのです。電子あってこそその陽子なのです。なぜなら、形がなければ宇宙に物語は生まれません。物語が生まれなくては、何一つ体験はできません。体験できない宇宙は無に等しいので

す。電子あればこそ、表現宇宙が成り立つのです。でもその電子は、一時の存在です。それは相対宇宙にだけ存在する、見せ掛けの電子だからです。だから電子から生まれてくる物質は、一時の存在なのです。この世が無常といわれる理由は、電子から生まれた一時の世界だからです。

このことからいえるのは、今宇宙が存在している「1」があるということは、宇宙は永遠に存続し続けるということです。同じように、今人間が存在している「1」があるということは、人間は永遠に存続し続けるということです。この「1」の意味の深さを知ってください。

【神様からの手紙⑪】・宇宙(神)を知る】

*パート1・・・宇宙(神)を完全に知ることは永久に出来ない！

あなた達は、宇宙を完全に知ることは永久にできません。なぜなら、宇宙は無限だからです。もし知ることができるなら、宇宙は有限になり、その宇宙を創造した私(神)も有限になってしまうからです。もし私(神)が有限なら、能力も有限になり、それこそ私は地に落ちてしまいます。永遠に知ることのできない宇宙だから、あなた達は夢と希望を持って真理の道を突き進むことができるのです。求道が永遠に続くといわれる理由は、永久に宇宙を知ることができないからです。

あなたも経験があると思いますが、修学旅行に出かける前や出かけた最初の日は、不思議にウキウキするほど楽しく過ごせるものです。でも日程を消化し、旅が終わりに近づくにしたがい、楽しさが段々と薄れてゆきます。それは、日に日に旅の終りが近づき、有限の壁が見えてくるからです。旅行は、企画している時や出発前の方が楽しいといわれるのは、その段階では楽しみの可能性が無限大だからです。有限の意識は苦しく、無限の意識は楽しくなるようにできているのです。それは、あなた達の意識が無限だからです。では、宇宙(神)を完全に知ることのできない具体的例を、いくつか掲げてみましょう。

・宇宙に霊太陽が一つしか無く、その霊太陽はすべてのものの中に存在しているという謎は、永久に知ることができないでしょう。

・意識の永久性の謎と無限性の謎も、永久に知ることができないでしょう。

・過去・現在・未来が一点であるという謎も、永久に知ることができないでしょう。

・永遠に尽きない永遠に色褪せない幸せの味を知ること、永久にできないでしょう。

・悟りに終わりが無い謎も、永久に知ることができないでしょう。

・小は大であり大は小である謎も、永久に知ることができないでしょう。

・一は多であり多は一である謎も、永久に知ることができないでしょう。

・私(神)が知恵であり力であり光であるという謎も、永久に知ることはできないでしょう。

・私(神)の全体像を知ること、永久にできないでしょう。

科学者たちは、普遍性や客観性や再現性を宇宙の謎を解き明かす物差しにしておりますが、それは有限の物質宇宙で使える物差しであって、無限の意識宇宙で使える物差しではないのです。なぜなら、意識の世界においては、普遍性や客観性や再現性などはあり得ないからです。意識の世界には枠が無いのです。可能性が無限大なのです。枠の無い無限の世界を知ることなど、絶対できないのです。無限の宇宙(神)を完全に知ることは、絶対できないのです。もしできるなら、数字も最後まで読み切れることになり、宇宙は有限の壁の中に閉じ込められ死んでしまいます。死は有限の中にだけある現象であって、無限の中にはないのです。宇宙が永遠に存続できるのは、無限だからです。永遠なるもの、無限なるもの、完全なるもの、絶対なるもの、を知ることができないのは、宇宙に初めがないからです。初めがないものは終わりもないのです。終わりが無いものは初めもないのです。そんな永遠の存在を、どうして知ることができるのでしょうか？もし知ることができるなら、それは有限になり、不完全になります。

どうでしょう！ 知り尽くせる宇宙に、どんな魅力があるのでしょうか？ 知り尽くせる神に、どんな魅力があるのでしょうか？ そんな有限な宇宙(神)なら、私の方から遠慮いたします。そんな

宇宙は、何も知りたく無いし、何も得たくありません。知ったって、得たって、すぐに消えてしまう幻なのですから……。無限の謎を秘めた「永遠・不滅・不変・不動・無窮・無類」の宇宙だから、あなた達は夢と希望の旗を掲げて突き進むことができますのです。

*パート2・・・大も小も無いことを知る(神も人間も無いことを知る)

皆さんは、大きなモノもあって小さなモノもあるといいますが、この宇宙には大きなモノも小さなモノもないのです。あるのは、たった一つのモノだけです。ただし、その一つのモノは一つのモノだけでは、一つのモノでいられないのです。もう一つのモノと相対させて、はじめて一つのモノは一つのモノになれるのです。だから宇宙は、もう一つのモノ(相対宇宙)を創って、その一つのモノの存在を明らかにしているのです。それも、同じモノを創ったのでは比較できないため、違うモノを創って際立たせて存在を明らかにしているのです。

大だけでは大はないのです。小だけでは小はないのです。大は小と比べて大になり、小は大と比べて小になります。だから宇宙は、大を持ってきて小を明らかにし、小を持ってきて大を明らかにしているのです。

この宇宙には、もともと大小などないのです。あるのは、たった一つのモノだけです。その一つのモノを大にしたのは、小を持ってきたからです。小にしたのは、大を持ってきたからです。要するに比べたから大小が生まれただけで、別に大小があったわけではないのです。大も小も一つの同じモノなのです。これを神と人間に当てはめてみると、神と人間の関係がはつきり解ると思います。

もともとこの宇宙に大小がなかったように、神と人間もなかったのです。そこには、たった一つのモノがあっただけです。そのたった一つのモノを神と呼んでいるだけです。しかし、たった一つのモノだけでは、一つのモノの存在はあり得ないので、宇宙はもう一つのモノを持つてきたのです。それが、あなた達人間です。このことからいえることは、初めから神があったわけでもなく、初めから人間があったわけでもないのです。違うモノを相対させたから、神が生まれ人間が生まれただけです。神だけでは神になりえないのです。人間だけでは人間になりえないのです。神と人間を相対させて、はじめて神は神となり、人間は人間となるのです。もし神だけなら、神とは思わないでしょう。人間だけなら、人間と思わないでしょう。神と人間を相対させて、はじめて神であった、人間であった、と解るのです。白板の上に白墨で絵を書いても分からないように、神の上に神を描いても分からないのです。だから分かるように。宇宙は人間を持つてきたのです。大が大であるためには、小を持つてこなくてはならないのです。その大を神と呼び、その小を人間と呼んで

いるだけです。だからといって、大が小より優れているわけではないし、劣っているわけでもないのです。なぜなら、大がなければ小はないし、小がなければ大はないからです。だから私は、大と小は同じ価値があるということです。つまり、神と人間は同等の重さがあるということです。神が存在しなければ、人間は存在しないのです。人間が存在しなければ、神は存在しないのです。それはもともと一つのモノだからです。繰り返します。

この宇宙には、もともと神も人間もいなかったのです。たった一つの存在者がいただけです。小と比べることで大になったように、人間と比べることで神になっただけです。神だけなら神はないのです。甘いものだけなら甘いものはないのです。一つのモノだけなら、一つのモノはないのです。このことを、しっかり理解して欲しいと思います。

第12章 真理のよろず箱

真理の光は、宇宙に燦然と輝いています。しかし残念なことに、その光がまだ地球上で輝いていないのです。それは地球人類が、人間として生きているためです。人間として生きているうちは、真理の光は輝かないのです。

真理の光は、生命の中に輝いているのです。その生命は、一人ひとりの心の中に存在するのです。だから地球人類が、心の中に生命を見つけたとき、真理の光が輝くのです。さあ、生命を見つけ、我がものとしてください。その時あなたは、光り輝くことでしょう。

言葉二〇一・一なるものしか存在しないという真理

この宇宙には、一なるものしか存在しません。一なるものしか存在しないということは、その一なるものは私であるということです。なぜなら、私は今現に存在しているからです。現に存在している私が一なるものでなかったら、一なるものしか存在しないという真理は嘘になるのです。一なるものしか無いから、現に

存在している私は一なるものなのです。一〓私です。もし私の外に何かがあるなら、二つのものがあることになり、一なるものしか存在しないという真理は崩れ去ってしまいます。一なるものしか無いということは、私しか無いということであり、それは神であるということです。なぜなら、一なるものは神の別名だからです。ということとは、私は神であるということです。

この宇宙に大小が無いのも、一なるものしか存在しないからです。もし大小があるなら、二つのものがあることになり、それでは一なるものしか無いという真理は嘘になります。だから、小さなものは大きなものであり、大きなものは小さなものなのです。一なるものの中には、大も小も無いのです。そこにあるのは、無限のみ、完全のみです。一なるものは無限なのです。一なるものは完全なのです。それが一なるものの実体なのです。無限は、一なるものの別名なのです。完全は、一なるものの別名なのです。そして、それはまた神の別名でもあり、私の別名でもあり、宇宙の別名でもあるのです。だから私は、一なるもの、完全なるもの、無限なるもの、神なるもの、宇宙なるもの、と断言できるのです。もし私が一なるものでなかったら、私は一瞬たりとも存在できないでしょう。ということとは、宇宙は消え去ってしまうということになります。どうか自分を消さないでください。宇宙を消さないでください。一なるものしか無いという真理は不変不動です。これだけは動かしようがないのです。どうか、一〓私であるという真理を心に刻み込んでください。

言葉二〇二二・なぜ宇宙は無くならないのか？

なぜ、宇宙は無くならないのでしょうか？ それは、宇宙を存在させている本質そのものが無くならないからです。本質は永遠に無くならないのです。ただし、本質が永遠であるためには、それを認める判定員がいなくてはなりません。しかもその判定員も、永遠の存在でなくてはならないのです。なぜなら、判定員が途中で無くなってしまふようでは、本質の永遠性を判定できないからです。では、その判定員は誰でしょうか？ それは人間です。なぜなら、人間は永遠に無くならない意識を持っているからです。ただし、その意識を持つ者は、一様でなくてはなりません。なぜなら、判定員が二つも三つも存在しているのは、答えが二つも三つも出てくるからです。例えば、土地の境界線を測るには起点が必要ですが、その起点が二つも三つもあつては、境界線を正しく定めることができません。同じように、二つも三つも意識があつては正しい判定ができないのです。だから意識を持つ者は、唯一の存在者でなくてはならないのです。ということは、人間は唯一の存在者であるということになります。

永遠の意識を持つ人間のみが、永遠の本質の存在を認めてやることができます。それができるのは、本質と同じ土俵の上に乗っているからです。同じ次元の存在だから、正しい判定ができます。ということとは、判定員である人間そのものが、本質そのものであるということになります。そうです。宇宙＝本質＝

人間なのです。なぜ宇宙は無くならないか？　もうお解りになったことと思います。人間が永遠に無くならないから、宇宙は永遠に無くならないのです。また宇宙が永遠に無くならないから、人間も永遠に無くならないのです。

言葉二〇三・・私たちは真理そのものである

真理とは、神のことです。生命のことです。愛のことです。空のことです。無限のことです。さらに光のことであり、エネルギーのことであり、本質のことであり、本当の私のことです。私たちは、真理そのものなのです。なぜなら、私たちが形作っている本質も、その形に内在している生命核も真理そのものだからです。私たちは、真理の塊のようなものなのです。真理そのものだから、心の底で真理そのものと想えれば、自分が変わるのです。観念的に変わるのではなく、現実的に実際的に変わるのです。すなわち、心身ともに変容が起きてくるのです。

その真理のことを、別名法則ともいっているのです。法則は真理そのものなのです。その法則は、どんなものにも平等に働いてくれます。だから、どんなにへつらっても、媚びても、法則を犯せば罰せられるのです。それは覚者も免れません。なぜなら、誰の心の中にも真理が組み込まれているからです。真理が思っ

いるのです。真理が語っているのです。真理が行っているのです。身口意そのものが真理そのものなのです。真理を生活の一部にしている人は偉大な魂です。なお真理を生活の中に生かしている人は、その上をゆく偉大な魂です。真理に生きている人は、その上の上を行く極上の魂です。どうか真理に生きてください。その人は、究極の幸せを受け取ることができるでしょう。

言葉二〇四・自分しか存在しない!?

この宇宙に一なるものしか存在しないという真理は、動かしようのない事実です。ならば、この宇宙に自分しか存在しないことになりませんか？ なぜなら、今私は現に存在しているからです。今何かが存在しているということは、その何かは一なるものの現れなのです。何せ、宇宙に一なるものしか存在しないのですから……。だから私は堂々と、自分しか存在しないと公言するのです。もし私もあり何かもあるなら、二つのものがあることになり、一なるものしか存在しないという真理は崩れてしまうからです。私が、私の他に何も無いと言い張るのは、自分の他に何かを認めれば、一なるものしか存在しないという真理を否定すると同時に、自分の存在も否定してしまうことになるからです。

このように、この宇宙に一なるものしか存在しないということは、自分しか存在しないということであり、

それはすべてのものは自分であるということなのです。すべてのものは、一なるものの現れだからです。なぜ駆けっこで、一番になりたいと思うのでしょうか？ 競走馬は負けそうになると、相手のしつぽに噛み付くといわれます。それほど一番になりたいのです。それは、自分が二番になったら、他の存在を認めなければならなくなるからです。一つの存在者は、一つでありたいのです。一番でありたいのです。それは、自分しか存在しないことを本能的に知っているから、一番を望むのです。ではこの真理を、神に置き換えて考えてみましょう。

この宇宙に神しか存在しないという真理は、動かすことのできない事実です。ということは、私は神であるということです。なぜなら、今私は現に存在しているからです。もし私が神でないならば、この宇宙に神しか存在しないという真理は嘘になります。この宇宙に神しか存在しないということは、自分しか存在しないということであり、それはすべてのものは自分であるということなのです。ならば、山は私です。川は私です。鉱物は私です。植物は私です。動物は私です。地球は私です。星は私です。宇宙は私です。有りてあるもの、すべては私です。これは、一なるものしか存在しない宇宙においては当たり前のことであって、何の不思議もないのです。私は神ですよ、あなたは神ですよ、すべては神ですよ、と堂々といえるのも、この宇宙に神しか存在しないからです。すなわち、私しか存在しないからです。

言葉二〇五・天とは何か、地とは何か

【天とは何か？】

天とは実在界のことです。五官には感じないけれど、実際に存在する世界です。そこには時間も空間もありません。一にして無限の世界です。そこには何もありません。ただ一つの意識があるだけです。だから、天という場所があるわけではありません。意識の発祥地を天と呼んでいるのです。私たちは意識を持っていません。意識を持っているということは、天を持っているということです。意識は誰でも持っているわけではありません。誰でも天を持っているということになります。これは人間だけではありません。あらゆる生き物に意識があるわけですから、あらゆる生き物の中に天があることになります。天とは恐れ多い存在でも、神秘的な存在でもありません。どこにでも転がっている、ありふれた存在です。しかし天に入るためには、自分が天そのものになっていなくてはなりません。なぜなら、知識で知っても、実際にそのものになっていなくては、その境地の存在者にはなれないからです。その境地になった者だけが、天の住者になれるのです。すなわち、究極の幸せを味わえるのです。その幸せの境地は、今人間が味わっている幸せとは違い、永遠に尽きない、色褪せない、喜びの境地です。だから、人から与えられるものではありません。自分の理解力が与えるのです。納得力が与えるのです。

【地とは何か？】

地とは非実在界のことです。有るように見えるけれど、実際にはない幻の世界のことを地と呼んでいるのです。その世界には時間と空間がありません。有限の世界です。表現の世界です。見える、聴こえる、臭える、味わえる、触れる世界です。五感で感じられる世界が地なのです。そこには、多くの物があり多くの人間がおります。だから固有の名前があります。多くの人間がいるから、様々な人との出会いがあり、様々な人との付き合いがあります。だから、そこに様々なドラマが生まれるのです。でもそのドラマは、刻々と変化し消えてゆきます。それは幻だからです。地とは、幻のドラマの生まれる世界のことなのです。

【天と地の関係】

地は実際に無い幻の世界といましたが、そんな幻の世界がなぜ必要なのでしょう。それは、天を存続させるためです。一つだけでは、何も存在できないのです。右だけでは右はないのです。上だけでは上はないのです。絶対だけでは絶対はないのです。相対させてこそ、絶対が有るのです。

影と光は二つで一つです。陰と陽は二つで一つです。物質と霊は二つで一つです。元数と分数は二つで一つです。天と地は二つで一つです。人間と神は二つで一つです。すべては、二つで一つなのです。一つの真実を明かすためには、もう一つのニセモノの存在が必要なのです。それが地なのです。

地が無ければ天はないのです。天は地によって存在させられているのです。どんなに私は偉大だといったところで、認める地がなければ天の存在はないのです。人間はその地の役割を果たしているのです。だから、人間と神は同等の重さがあるのです。神が偉大であるなら、人間も偉大であるということですよ。

この宇宙には、一対となった一つのものしか無いのです。それが、天であり地なのです。神であり人間なのです。だから私は神なのです。あなたは神なのです。天と地とは、このような関係にあるのです。

言葉二〇六・光の中に闇は入ってこられない！

光の中に闇は絶対入ることはできません。その証拠に、電燈のついた部屋に闇が侵入してきた試しがありません。これは当たり前のごとくに思われますが、大変な真理が隠されているのです。人間は、暗闇があるといますが、暗闇があるのではなく、光の無い状態が暗闇なのです。それは、もともとこの宇宙に暗闇など無いからです。暗闇は、人間の迷いが生み出した幻なのです。だから迷いが無くなれば、そく光に覆われるのです。私たちが光の想いを持ったら、もう何も恐れることはなくなります。なぜなら、闇の産物である病や災厄は、光に満たされた人の中には入ってこられないからです。私たちが様々な苦しみに喘いでいるのは、悪しき想いを持ち神の光を遮っているからです。光は実在しますが、闇は実在しないのです。今も

述べたように、闇は単なる光の無い状態だからです。だから光で満たされたら、闇である病や災厄は入ってくることはできないのです。今闇の状態でも、光が入ってくれば、そく闇は消えてしまうのです。少しづつ消えるのではなく、光で満たされたら瞬時に消えるのです。

どうか心を光で満たしてください。その者はもう、病や災厄に悩まされることはないでしょう。これは、運命にも関係していることなのです。運命を悪くしているのは、本人が心の中に闇を作っているからです。本来闇など無いのですから、悪い運命などあるわけがないのです。自分が悪想念を持ち、悪い運命にしているだけです。どうか、明るい想いを持つようにしましょう。間違いない、運命は好転するでしょう。

言葉二〇七・・与える幸せは与えられる幸せより大きい

会社をやっていた頃、私は得意先との付き合いで、度々麻雀をすることがありました。真理をやる前は敗けたり勝ったりしていたのですが、真理をやりだしてからは、途中で勝ち負けがあっても、終盤になると必ず勝ち負けがゼロになるのです。それが、やる度そうなるのですから不思議です。後で分かったことですが、これは守護霊が、エネルギー均衡の法則を肌で実感させるために体験させてくれたことだったのです。エネルギーは偏ると、危険物に早変わりするのです。だから危険を回避するために、凸から凹へエネルギーが流

れ出し、均衡が保たれるようになるのです。例えば、宝くじで大金が当たったとしましょう。これは、一度に沢山のエネルギーが入ってきたことになりまずから、明らかに偏った状態です。均衡を保つためには、何らかの形でエネルギーを出さなければなりません。それが病気であったり、事故であったり、災害であったり、家庭崩壊だったり、会社の倒産であったりするわけです。今生精算しきれない場合は来生に持ち越されるわけですが、いずれにしても、いつか必ず入った分量のエネルギーを出さなければならなくなるのです。

このように、エネルギー均衡の法則に齟齬はないのです。集めてもどうせ、痛みや苦しみで放散させられるのですから・・・ならば、わざわざエネルギーを集める愚かなことはしないことです。それよりも与えることです。与えれば必ず与えられます。それは先程も述べたように、出した凹に向かってエネルギーが入ってくるからです。何でもそうですが、出があつて入りがあるのです。隙間を作らなくては入って来られないからです。徳を積むとは、先に与え隙間を作ることの意味し、それはエネルギーを貯金していることと同じなのです。貯金したエネルギーは利子に利子を呼び、大きなエネルギーとなって返ってくるのです。賢い者は、このエネルギーの法則を逆手に取っているのです。どうか与えてほしかったら、まず自分の方から与えてください。腹いっぱいでは、どんなおいしい食べ物もおいしくありません。お腹がすいていれば、何を

食べてもおいしいのです。与えられる幸せより与える幸せの方が大きい！ という意味を噛み締めてください。

言葉二〇八・良心は神の心である

良心は、「善」「心」とも書きます。良心は、善なる完全なる神の心なのです。神の心(良心)は、ひたすらに完全を貫き通しているのです。ただひたすらに完全を貫き通す意志は、神の愛そのものなのです。その愛は、どんなしがらみにも動じません。どんなに媚びへつらっても揺らぎません。ただ真っ直ぐに善を貫き通すだけです。だから神は、愛そのもの完全そのものといわれるのです。私たちが、どんな悪い想いを持つとうが、どんな悪い言葉を使おうが、どんな悪い行いをしようが、その結果どんな苦しいことが起きようが、完全へと運ばれてゆくのです。それは、神の愛あればこそです。だから私たちは、安心して生きられるし、夢と希望が持てるのです。

良心に逆らえば苦しまねばならないのは、良心そのものが愛そのものだからです。そこに何の事情も挟んでくれません。弁解も言い訳も通じません。良心に逆らった分の苦しいお返しがあるだけです。これが峻厳な愛の対応の仕方です。反対に良心に忠実であれば、愛のお返しがあるのです。それは進化というお返しで

す。成長というお返しです。やった分必ずお返しが来ます。良心に従順であればあるほど、進化という大きな褒美が貰えるのです。これが、神とのもう一つのキャッチボールです。良いボールを投げたら、良いボールが投げ返されるのです。純真でありなさい、純朴でありなさい、子供のような心でありなさいというのは、神の心(良心)を汚せば自分自身が苦しむからです。さあ、良心に逆らわず生きましよう。その者は間違はなく、進化という褒美が貰えるでしょう。

言葉二〇九・長い夢を見ている私たち

こんな悪夢を見たことはありませんか？ 悪者に追いかけられ、心臓が止まりそうなほど恐怖している。しかし、これは夢だ！ 私は今悪い夢を見ているのだ！ “と気付いた瞬間、恐怖が去ったという体験が……。今私たちは、これと同じ夢を見ているのです。人生は夢物語りなのです。今私たちが見ているもの、聞いているもの、感じているもの、すべてが夢なのです。肉体を自分だと錯覚すれば、五感から入ってくる出来事がみな本当と思えて仕方ないのです。でも生命が自分だと思えば、この世が幻だということが分かります。生命は傷つきません。病気になるりません。年取りません。死にません。しかし肉体が自分だと思えば、どうしても生・老・病・死に苦しまねばならないのです。

私たちが一秒一秒感じている時間は、意識がなぞっている結果です。意識が途切れれば、時間も途切れてしまうのです。なぜなら、原因が無ければ結果はあり得ないからです。原因の大元は意識ですから、すべて自分の意識の中の出来事なのです。現実の世界も夢の世界も、自分の意識があればこそ感じられるのです。意識は本当の自分です。五感は何物の自分です。本当の自分である意識が、幻を見て本当になると錯覚し、脅え恐怖しているのです。つまり、五感によって意識が悪夢を見せられ、恐怖しているというわけです。それは、肉体が自分だと思っているからです。五感と意識が別だと思えば、この夢から覚めることができるのです。夢から目覚めれば、すべての悩みや苦しみから解放されます。どうか、一日も早く夢から目覚めてください。

言葉二一〇・人間が実在しない理由

人間の本质は、目に見えない生命エネルギーです。その生命エネルギーは、そのままでは自分の存在を明かすことができないため、人間を創りその中に宿って自己表現しようとしているのです。働いているのは冷蔵庫ではありません。電気です。働いているのは人間ではありません。生命エネルギーです。すべて生命エネルギーがやっていることなのです。私たちは、人間ではありません。生命エネルギーです。

その生命エネルギーは、生まれもしなければ死にもしない、永遠に生き通しの存在なのです。だから死に脅えることも、恐怖することもないのです。永遠に生き通すものは、生まれもしなければ死にもしないのです。生まれるということは、死ぬということです。死ぬということは、生まれるということです。生まれるのは、実在しないからです。死ぬのは、実在しないからです。ならば、人間は実在しないことになりませんか？ なぜなら、人間は必ず生まれて死ぬからです。人間が実在しないと私がいうのは、人間は必ず生まれて死ぬからです。生死があるのは、幻の世界のみです。すなわち、有限の世界のみ生死があるのです。無限の生命エネルギーの世界には、生死はないのです。人間が実在しない理由が、ご理解いただけただけでしょうか？

言葉二一・人間には二つの使命がある

人間は、人間を知らないで生きております。自分を知らないで、平気で生きているのが人間なのです。では、人間とは何でしょうか？ 人間とは、「人」の「間」と書きます。「人」という字の意味は、人と人が支え合い生きる生き物という意味です。「間」という字の意味は、「関係」を意味します。通して解釈すれば、人と人との関係を保ちながら生きる生き物が「人間」ということになります。いわゆる社会的生き物が人間なのです。だから決して、自分一人で生きていると思っはなりません。相手がいなければ、自分は

生きられないのです。また自分がいなくても、相手は生きられないのです。なぜなら、支え合う相手がいなければ、人はこけてしまうからです。その支え合う生き物同士が手を取り合い、この地球に素晴らしい世界を築くことが人間に課せられた使命なのです。

人間のもう一つの使命は、魂を育てる使命です。どんな生き物も群生を保って生きているのは、群魂を育て大いなる魂にバトンタッチするためです。人間も同じで、人間同士が支え合って魂を大きくし、寛大な魂にバトンタッチするためです。だから人間は、魂の保育器だといわれるのです。今人間は、自由意思を持つてドラマを演じ、魂を大きくしている真つ最中なのです。それは鉱物・植物・動物のような操り人形ではないのです。自由意思を持つ人間だから、一つとして同じ筋書きのないドラマが演じられるのです。それが、神の分身である人間の偉大な所なのです。このように人間には、地球上に理想の世を築く使命と、寛大な魂を育てる二つの使命があります。

あなたは、その使命をどこまで果たしましたか？ 向こうへ帰って地団駄を踏まないよう、できるだけ使命を果たして帰りましょう。

言葉二二二・酸素は第三のエネルギー？

宇宙意識は、エネルギーそのものです。私が「識エネルギー」と呼ぶのは、意識そのものがエネルギーそのものだからです。この識エネルギーは本源的エネルギーで、第一のエネルギーとも天のエネルギーとも呼ばれています。しかし、この第一のエネルギーは余りにも精妙なため、そのままでは表現宇宙で使用できないのです。そこで宇宙意識は波動を下げ、表現宇宙で使用できるようにしたのです。それが、第二のエネルギーと呼ばれる宇宙エネルギーなのです。一般的にいわれている宇宙エネルギーとは、この第二のエネルギーのことを指し、宇宙空間はこの第二のエネルギーで満たされているのです。しかし、この第二のエネルギーも精妙なため、そのままでは使いものになりません。そこで使えるようにするため、媒体役として人間を送り出したのです。ですから人間は、宇宙エネルギーの媒体役を担う大切な役割があるわけです。でも今の地球において、その媒体役を担える人はあまりおりません。なぜなら、生命の自覚を持つ人間が、今の地球には少ないからです。そこで宇宙意識は、さらに波動を下げ第三のエネルギーを生み出したのです。それが酸素というエネルギーです。(第二と第三のエネルギーは、地のエネルギーとも呼ばれている。)この酸素は、呼吸によって誰でも受け取ることができるわけですが、利用の仕方によって様々な効用があるのです。その主な効用は、次のようなものです。

- 一、活力源(エネルギー)として
- 二、血液の浄化として
- 三、保性力として
- 四、再生力として
- 五、本質として
- 六、光として
- 七、知恵として

このように酸素には、様々な効能力が秘められているわけですが、これは意識の高さに応じて使えるようにした、宇宙意識の配慮の賜物なのです。この酸素は、物理的にも様々な使い道があるのです。例えば、電気に変えることができます。光に変えることができます。力に変えることができます。今は知られていませんが、まだまだ沢山の使い道があるのです。

この酸素エネルギーは、波動は下がってはいますが、もともと本源的エネルギーですから、効能力はそのまま保持しています。だから意識の高い者は、その効能力を最大限に生かし利用することができるわけです。

言葉二二三・異端児

カモのお母さんが、沢山の卵を産みました。その卵が無事ヒナに返りました。でもそのヒナの中に一羽だけ、素行のおかしな異端児が混じっていました。でもお母さんがモは、「お前はアヒルの子なのよ！」といます。兄弟達もお前はアヒルだといいい、自分も何の疑いも無くアヒルだと思いい、皆と同じようにガアガア啼き地を這いずり回っていました。

ところがある日、自分がカモだったことを知ります。さらに親兄弟もカモだったことも知ります。（長い年月アヒルとして生きてきたために、空を飛べなくなつたのです）そのことを親兄弟に切々と訴えるのですが、彼らは信じてくれません。そして相も変わらず、地を這いずり回って生きております。

異端児とは、お釈迦様であり、イエス様であり、知花先生のことです。私たちは覚者のいうことを信じないで、今も人間として生きています。お釈迦さまも、イエス様も、知花先生も、私たちが、同じ手順を踏んで生まれた何も変わらぬ人間です。ただ、私たちには生命の自覚がなく、覚者には生命の自覚があるだけです。私たちが生命の自覚が持てれば、今すぐにも生命として生きられるようになるのです。もしアヒルが、心の底でカモだと知つたら、大空を自由に飛び回ることでしょう。私たちが心の底で生命だと知つたら、宇宙を自由に闊歩することでしょう。今私たちは、人間と思いい違いいすることで、アヒルのように地を這

いずり回る生き方をしているのです。

言葉二一四・天国も実在し地獄も実在するのか？

天国も実在し、地獄も実在するのでしょうか？ いいえ天国は実在しますが、地獄は実在するものではありません。なぜなら、神は完全なものしか創らなかつたからであります。もし地獄があるなら神は完全でなくなり、この宇宙は消滅しなければなりません。消滅しないのは、この宇宙は完全だからです。でも多くの宗教家は、地獄も実在し天国も実在すると説きます。もし本当に地獄が実在するなら、実在とは永遠のことですから、一旦地獄に落ちた者は永久に地獄で苦しまねばなりません。幸い地獄は実在しませんので、悔い改めれば地獄から抜け出すことができるのです。地獄などありません。地獄は、私たちの中にだけある妄想です。ネガティブな想いの中に・・・不完全な想いの中に・・・悪的想いの中に・・・地獄があるだけです。だから地獄は意識状態だといわれるのです。

私たちの想念は何でも作りだす力を持っています。想念は偉大な創造の力なのです。人間は、その偉大な力を悪用して地獄を作っているだけです。地獄は人の迷いが作った妄想で、実在するものではないのです。しかし天国は実在します。といっても天国という場所があるわけではありません。地獄が意識状態であるよ

うに、天国もまた意識状態なのです。ある宗教では、「天国にはエメラルドやルビーで造られた宮殿があり、そこで天使達がハーブを奏で歌い踊り楽しんで」と教えておりますが、例えそんなところがあったとしても、どうしてそんなところが天国なのでしょううか？

あなたは素晴らしい景色を、永遠に素晴らしいと心に止めておくことができますか？ 素晴らしいドラマを、永遠に素晴らしいと心に止めておくことができますか？ 素晴らしい絵を、永遠に素晴らしいと心に止めておくことができますか？ 素晴らしい匂いを、素晴らしい味を、素晴らしい感触を、永遠に素晴らしいと心に止めておくことができますか？ 絶対できないはずですよ。必ず飽きがくるはずですよ。陳腐化するはずですよ。私たちの意識は、必ず飽きがくるようにできています。もし飽きないなら、それは苦しみのもでもないでしょう。いや、地獄そのものでしょう。でも幸いなことに飽きがくるから、私たちは苦しみに喘がなくてすむのです。

この宇宙は止まることを知りません。永遠に循環を続けています。それは飽きたくないからです。新鮮さが欲しいからです。どんなに美しい形も、どんな美しい景色も、どんな素晴らしい色や音や匂いや感触でも、長く接していたら必ず飽きがくるのです。だから、この表現の世界に天国はあり得ないのです。天国とは、永遠に尽きない、永遠に色褪せない、幸せな意識状態を指すのです。だから天国は意識状態だということです。

この意味の深さを噛み締めてください。

言葉二一五・肉に死んでこそ真に生きる者となる

「身を捨ててこそ渡る瀬もあり」という諺があります。ある一人の戦士が、敵に追い詰められてしまわず。後ろは流れの激しい川、前は敵、絶体絶命です。 ” どうしよう！ ” と躊躇する戦士の頭上に、沢山の矢が飛んできました。戦士は意を決して川に飛び込みました。飛び込んでみると、見ためほど川の流れは激しくありません。敵があれよあれよと見ているうちに、向こう岸にたどり着き助かったのです。このように意を決して飛び込めば、案外と助かるものなのです。でも人間は目の前の肉体が惜しいばかりに、それができないのです。我が身かわいさのあまり、身を危険にさらすことができない気持ちは良く分かります。でも、それが大きな落とし穴なのです。どんなに物質に頼っても、物質が物質を助けることはできないのです。なぜなら、物質は結果次元のものだからです。どうして結果が結果を助けることができるでしょうか？ 結果を助けるには、原因を良くするしかないのです。原因とは想いのことです。でも人間は、その想いが信じられないのです。それは、目に見えず、肌で感じられないからです。だから、どうしても目に見え肌で感じる物質に頼るようになるのです。

人間は目前に死が近づかない限り、心(神)に身を委ねることができないのです。絶体絶命に追い込まれなくては、神(心)に顔を向けようとしません。あなたは今日まで、人生において色々なことを試みました。でも、人生を良くすることができなかった。今のあなたは、絶体絶命に追い込まれた戦士のような立場です。もう川に飛び込むしかないのです。どうでしょうか？ 意を決して川に飛び込んでみては……。川に飛び込むとは、心(神)を信じるということです。心(神)に委ねるといことです。すなわち、神に意識を向けて生きるということです。もしかしたら、戦士のように助かるかもしれませんよ！

肉体の自分は必ず死にます。でも、意識・生命・心・神の自分は永遠に生き通します。朽ち果てるもの生きるか、永遠のものに生きるか、どちらが賢い生き方か、あなたなら分かっていただけだと思います。

言葉二一六・生命の樹

これまで何度も述べてきましたように、この宇宙は生命の海です。一つの生命の海の中から、様々な生命体が生まれこの表現宇宙を活気づけているのです。その生命体は、互いに支え合い補い合うことによって生き長らえております。根はたった一つです。一つの命の根から様々な生命体が生まれ、この宇宙に素晴らしい絵を描いているのです。正にこの表現宇宙は、素晴らしい芸術作品です。しかし人間は、自分が生命体の

分身であることを知りません。だから、身勝手な生き方をしてこの世に醜い絵を描いているのです。

飛行機に乗って街を見下ろしてみてください。実にゴチャゴチャとしてまとまりがありません。道も公園も建物も無秩序に置かれています。また色もバラバラで統一が取れていません。だから、人間界から出てくる波動は鈍重なのです。でも自然界は違います。整然と秩序が保たれ、一幅の美しい絵となっています。実に波動が精妙なのです。例えばヒマワリ畑を見ても、同じ方向に顔を向け微笑んでいます。木は天に向かって一直線に伸びています。山も、川も、湖も、海も、四季折々違った顔を見せております。これは神の想いが、彼らを秩序ある方向へ誘っているからです。でも人間は、好き勝手な生き方をして秩序を乱しております。だから人間の住んでいる街は醜いのです。でもその人間も、一つの命から枝分かれした生命体であることに変わりはありません。根っこは一緒なのです。これを例えれば、宇宙は大樹のようなものです。その大樹の幹から枝分かれしている小枝は、植物であり動物であり人間です。そして小枝に茂っている葉は、私たち一人ひとりです。正に生命の樹そのものです。

生命の樹は、宇宙生命体の象徴的姿だと思えます。樹そのものが宇宙生命の体なのです。その樹の幹から吸い上げられる水は、エネルギーそのものといって良いでしょう。そのエネルギーが、枝葉の命を支えているのです。だから「生命の樹」を「生命の気」ともいうのです。「気」とはエネルギーのことです。

言葉二一七・情けは人の為ならず!

「情けは人の為ならず!」という諺がありますが、それを実感した体験がありますのでここで紹介しましょう。ある日地下鉄で電車待ちをしていたところ、日雇い労働者ふうの人がやってきて、「すみませんが五百円恵んでください!」というのです。何に使うのか訊いたところ、働きにハローワークまで行きたいのに電車賃が無いというのです。そこで私は「必ずハローワークに行ってくださいね!」と念を押し、五百円渡せば良いのに情けをかけ千円渡したのです。その人は平身低頭して電車に乗りました。隣の町で用事を済ませ駅の近くまで来たところで、パチンコ店から出てきたその労働者とバッタリと出会ったのです。私が問いかけると、その労働者はバツの悪い顔をしながら、「ちょっとだけ、パチンコしようと思って・・・」そう口ごもると黙ってしまったのです。どうやら全部負けてしまったらしいのです。私はその時つくづく、人に情けをかけては駄目だなあと思ったのです。これは彼も悪いが、罪を作るきっかけを与えた私も悪いのです。

世の中には、これと似たことをしている人たちが沢山いるのです。その人たちは良かれと思ってやっているのですが、案外と罪作りなことをしている場合が多いのです。人を甘やかす行為は、真の人助けとはいえません。だから恵む場合も、良く考えてやることです。情けもかけるなら、魂の成長を考えてやること

です。魂の成長になる情けとは、峻厳な愛の情けです。つまり、厳しく接することによって魂を成長させる。「愛」の「情」のことです。だから「人情」ではなく、「愛情」をかけなさいといわれるのです。人の情は、どうしても甘やかしてしまいます。特に肉親の情は、人を駄目にしてしまいます。厳しいことをいうようですが、本当にその人を愛するなら、魂を成長させる愛情をかけることです。

言葉二一八・神の温情

因果の法則の最も素晴らしい点は、心から悔い改めれば罪が消えてしまうという温情的な仕組みです。神は私たちを苦しめるために、因果の法則をお創りになったわけではないのです。生き方を正すために創られた因果の法則ですから、過ちに気付いて生き方を改めれば、あえて苦しめる必要はないのです。しかし私たちは、過ちになかなか気付くことができないし、気付いてもなかなか改めようとしません。だから神は止むを得ず、苦しみや悲しみを与えています。

因果の法則の特筆すべき点は、悪い波動には悪い波動が共鳴し、良い波動には良い波動が共鳴し合うという仕組みと、全く反対の波に出会うと波が打ち消されてしまうという、波の干渉の仕組みです。この仕組みは、神の慈悲だと私は思っています。もしこの波の干渉が無ければ、一旦出した悪的波動は、痛みや苦し

によって消さない限り、いつまでも私たちを悩ませることでしょう。しかし、過ちに気付き生き方を正したら、波の干渉により痛みや苦しみを受けずに済むのです。なぜ神は温情的かといいますと、心から悔い改めた者のお尻を叩くような仕組みを創っていないからです。神は非情な親ではありません。人の親がそうであるように、神も我が子を苦しめたくはないのです。だから心から反省し、二度と過ちを犯さないと堅く良心に誓えば、苦しむ必要がなくなるのです。因果の法則から逃れる術は無いという人がおりますが、そんなことではないのです。悔い改めた者を痛めつけて、何の益があるのでしょうか？ 神はそんな理不尽な仕組みを、お創りになるはずがないのです。さあ、心から悔い改めてください。その者は、もう苦しむ必要はないのです。

言葉二一九・人をおとしめんとする者は、自分をおとしめている

良く世間には、人をおとしめようとする者がおります。でもその者は、自分をおとしめていることに気付いていないのです。例えば、人をおとしめるためには、まず自分の心の中で色々な策略を思い巡らせなければなりません。その者は、その策略によって自分をおとしめているのです。悪しきことを思い巡らせること自体、自分を汚しているからです。おとしめる策略そのものが、自分であれ、人であれ、汚しているからで

す。おとしめるという意味は、汚すという意味なのです。これが人をおとしめんとする者は、自分をおとしめているという本当の意味なのです。憎しみの思いも、恨みの思いも、怒りの思いも、どんな汚れた思いも、自分の中から出てくるのですから、自分を汚さないで人を汚せるわけがないのです。汚物を外に出すには、出口(自分の口)を汚さなくてはできないからです。

逆も真なりで、人を愛するには自分を愛さなくてはできません。人を清めるには自分を清めなくてはできません。愛も清らかな思いも、自分の中から出てくるわけですから、自分の中に無いものは出しようがないのです。自分の倉庫に良い在庫品が無くては、良い品物は出せないのです。その意味では、愛深い人は沢山の愛のある人であり、憎しみ多い人は沢山の憎しみのある人である、ということになるでしょう。人は自分です。自分は人です。この宇宙には自分しかいないわけですから、人を汚せば自分が汚れ、人を清めれば自分が清められるのです。すなわち、自分を汚せば人を汚し、自分を清めれば人を清めるのです。

本来、憎しみも、恨みも、怒りも、自分が作らなければそんなものは無いのです。なぜなら、この宇宙に汚れたものなど一つも無いからです。あるのは清いもののみ、すなわち愛のみです。愛は実際にあるので与えることはできますが、憎しみは実際にはないので与えることはできないのです。人から憎しみをもらったという人は、自分が作るからあるのであって、自分が作らなければそんなものは無いのです。自分が作らな

れば無いという意味は、外側からどんな憎しみがきても、自分が受け取らなければ影響は受けないという意味です。世間には、人に騙され老後の貯えを奪われている人がおりますが、自分の中に汚れた思い(欲望)があるから騙されるのです。自分の中に汚れた思いがなければ、騙されることはないのです。また人のココソ話を悪く受けとって、憎悪の念を膨らませている人がおりますが、これも自分の中に汚れた思いが無ければ、そんな妄念を作ることにはないのです。すべて自己責任です。同じ波動を持っているから共鳴し、騙したり騙されたりするので、おとしめる人もおとしめられる人も同罪なのです。だから人におとしめられたからといって、人のせいにしてはならないのです。もし、おとしめられたり騙されたりしたら、よく自分の心を見つめて反省してみることです。

言葉二二〇・光文学と闇文学

この世には光文学と闇文学があります。因果律に基づいて書かれた小説を光文学といい、因果律を無視して書かれた小説を闇文学といます。闇文学を書いている作家はサタンの支配を受けていますので、文脈は重く暗く内容も矛盾に満ちており、肉体的にも不健康です。自殺に追いやられた作家の殆どは、サタンの支配を受けて心を乱した結果です。このような作家の書いた小説は、読んだ人の心を暗いものにします。決し

て有名作家だからといって傾倒しないでください。反対に光の指導霊に導かれている作家の文脈は、明るく、爽やかで、内容も理路整然としており、また肉体的にも健康です。したがってそのような作家の書いた作品は、読者の心を爽やかにします。小説も読むなら、光文学を読むようにしましょう。後味の悪くなるような闇文学は、毒になっても薬になることはありません。ぜひ、心が爽やかになるような小説を選んで読んでください。

言葉二二二・・恐るべきは自分の妄念である

サタンなど、どこにもいません。サタンは自分の思いが作った自分自身です。つまりサタンは、自分の妄念の中にのみいるのです。心配、恐怖、イライラ、憎しみ、恨み、怒り、嫉妬、ねたみ、肉欲、物欲、権勢欲などの悪的想いは自分が作ったサタンです。その自分が作った悪的想いと外側の悪的波動が同調し、災いを呼び込んでいるのです。私たちは外側から災いを受けていると思っていますが、災いの原因はすべて自分の想念にあるのです。人間は自分で災いの種を撒きながら、人のせいにして苦しんでいるのです。

宇宙が整然と運ばれているのは、原因と結果の法則が隅々に行き届いているからです。悪いことを想えば悪いことが起り、良いことを想えば良いことが起るのは、この法則によるのです。自分が苦しい原因を作っ

ているから、苦しい結果がやってくるのです。良い原因を作っていたら、苦しむことはないのです。すべて自分の想念次第です。だから、想念のコントロールが大切になってくるのです。今まで自分を苦しめていたのは、みな自分の妄念です。

- ・親兄弟のせいにしないでください。
 - ・夫や妻や子供のせいにしないでください。
 - ・友達のせいにしないでください。
 - ・同僚や部下や上司のせいにしないでください。
 - ・世の中のせいにしないでください。
 - ・自然のせいにしないでください。
 - ・偶然のせいにしないでください。
 - ・神様のせいにしないでください。
- すべて自分の想念のせいです。このことを知ったら、もう外側のものに腹を立てたり、怯えたりすることもなくなるでしょう。恐れるべきは自分の妄念です。さあ、良き想念波動を出しましょう。

言葉二二二二・・・本當に有るものとは何か？

私たちは見える物が、本當に有ると思っています。でも、見える物は、本當に有るのでしょうか？ いいえ、見える物は、本當には無いのです。なぜなら、見える物は必ず消えて無くなるからです。では、なぜ見える物は、消えて無くなるのでしょうか？ それは、実際に無いものだからです。本當に有るものなら、絶対に無くなることはありません。本當に無いから、消えて無くなるのです。その実際に無い物を得んがために、人間は毎日あくせく働いているのです。何とも不思議だと思いませんか。でも、誰も不思議だとは思っていないのです。この宇宙の実体は、見えないモノが本物で、見える物はみな偽物なのです。見えないモノこそ絶対實在なのです。なぜなら、見えないモノが、見える物を生み出しているからです。見えない原因が見える結果を生み出しているからです。結果は原因から生まれるのです。私たちは、ものをあべこべに見ているのです。

私たちの肉体は、幻の世界を見聞するために作られた乗り物です。幻の世界にいる間だけ必要な乗り物ですから、いずれ消えて無くなるのです。あのおじいさんも、このおばあさんも、消えて無くなりました。あの有名人も、この有名人も、消えて無くなりました。それを私たちは毎日見えています。でも、そのことを誰も深く考えようとしません。だから沢山の物やお金を欲しがったり、戦争をしたりするのです。もし、

この世の物が偽物だと知ったら、そのような愚かなことはしなくなるでしょう。確認しましょう。

見える物は見える物からは生まれません。見える物は、みな、見えないモノから生まれるのです。あなたは見える物が、見える物から生まれたのを見たことがありますか。物質は、見えない原子から生まれたのですよ。赤ちゃんは、見えない精子と卵子から生まれたのですよ。どんな物も、見えない世界から出てくるのです。そしていつか、必ず見えない世界へ帰るのです。それは、本当に無いものだからです。しかし生命は、本当に有るものですから、決して無くなることはありません。その無くならない生命が、本当のあなたなのです。どうか、本当の自分と偽物の自分の識別をしてください。

言葉二二三・現実と真実の見分け方

人類が、競い合い、奪い合い、争い合って苦しんでいるのは、真実と現実の見分けが付かないためです。もし真実と現実の見分けが付けば、この地球上から一切の争い事は無くなってしまおうでしょう。では、現実とは何でしょうか？・真実とは何でしょうか？・

【現実】

この世のモノは、見えます。聞こえます。臭います。味わえます。触られます。でも、時間が経てば変化し消えて無くなります。これが、今の地球人類における現実の基準です。ですからこの基準に合わない夢や幻覚は、非現実扱いされているわけです。物質化現象もこの基準に合いませんから、今の地球では現実扱いされていません。当然、幽界も現実扱いされていません。では、他の星ではどうでしょう。例えば惑星Rでは、夢も幻覚も物質化現象も幽界も現実扱いされています。これは理解力の高低から生まれる、現実の基準の違いなのです。ということは、今後、地球人類の理解力が増せば、夢も幻覚も幽界も物質化現象も、いや、妄想も、空想さえも、みな現実扱いされる時がやってくるということです。

進化した惑星Rでは、地球人類の思っている現実とは、みな幻として処理されているため、彼らの星では争い事など起きようが無いのです。幻を奪い合っても意味のないことを、彼らは知っているからです。そろそろ地球人類も、現実も、夢も、幻覚も、幽界も、物質化現象も、同じ幻だということに気付いてもらいたいものです。私が現実についてクトクトと述べるのは、地球人類は現実を真実と思いついて、様々な争い事を見出しているからです。現実とは真実ではないのです。消えて無くなる幻です。そんな幻のために、命のやり取りをすることほど愚かなことはありません。

【真実】

真実とは、不変不動永遠不滅のものです。それは、言葉や文字で表すことのできないものです。なぜなら、私たちの感覚にかからないものだからです。でも、確かに存在するのです。意識として、意志として、理念として、知恵として、力(エネルギー)として、光として、愛として、命として、法則として、そして、本当の私として・・・それが、真実の正体です。本当の私たちは、真実そのものなのです。私たちは、その真実を追い求めるべきです。真実に生きるべきです。

このように、現実とは消えて無くなるもの、真実とは永遠に無くならないものをいうのです。地球人類がこの違いを心の底で知ったなら、もう、幻を奪い合うような愚かなことはしなくなるでしょうし、妄想で自分を苦しめるようなこともしなくなるでしょう。どうか現実と真実を見分ける目を養ってください。現実(幻)で心を痛めることほど愚かなことはないのですから・・・。といっても、現実を軽んじなさい、といっているわけではありません。それどころか、重みをもって受け取って欲しいのです。なぜなら、現実が深く理解できたら、真実も深く理解できるようになるからです。私たちは今、現実を知ることによって、より深い真実を知ろうとしているのです。でも多くの人は五感に惑わされ、現実の虜になっているのです。まさに本末転倒とはこのことです。どうか、現実と真実の識別をしっかりとしてください。識別ができれば、もう、現実に惑わされることはないでしょう。

言葉二二四・言葉を上手に使う！

世の中には、否定的な言葉を好んで使う人がおりますが、その人はその場の波動を極端に落しています。言葉は、神なりきです。言葉ほど大切なものはないのです。その大切な言葉をネガティブに使っている人が、世の中には多いのです。この世に不幸が絶えないのは、言葉を悪用して使っているためです。神は嬉しくなるような、楽しくなるような、明るい言葉が好きなのです。明るい言葉には、高いエネルギーが含まれていますので、人を幸せにするのです。反対に暗い言葉は、エネルギーが低いため人を不幸せにします。それを知らない人間は、愚痴や不平不満など暗い言葉を使ってエネルギーを落とし、苦しんでいるのです。エネルギーは光ですから、エネルギーが高ければ、良いことが寄ってくるのです。

実社会においても成績の良い人は、明るい言葉や肯定的言葉を多く使っています。成績の悪い人は、暗い言葉や否定的な言葉を多く使っています。人に好かれる人は、エネルギーを高める言葉を多く使い、人に嫌われる人は、エネルギーを低める言葉を多く使っているのです。成績を上げたかったら、人に好かれたかったら、幸せになりたかったら、エネルギーの高まる明るい言葉や肯定的な言葉を多く使うようにしましょう。具体的には、

・人を元気づける言葉

- ・称賛する言葉
- ・嬉しくなるような言葉
- ・ほめたたえる言葉
- ・やる気をもたらず言葉
- ・夢や希望をもたらず言葉
- ・勇気を与える言葉
- ・積極的な言葉
- ・前向きな言葉
- ・建設的な言葉

といっても、歯の浮くような褒め言葉や、明らかにお世辞と分かるような言葉は使ってはなりません。純粋な動機に基づいた、肯定的な言葉、ポジティブな言葉を使いましょう。「はい！　そうですね！　いいですね！　よろしいですね！　そうですね！　そうですね！　」

いいですよ！」という言葉は肯定的言葉の代表です。ぜひ、皆が笑顔になるような言葉を使ってください。言葉だけではありません。体全体で肯定的な態度を示すことも大切です。例えば、首を横に振ってはなりま

せん。首を横に振ればエネルギーを拡散させるため、エネルギーを落としてしまうのです。笑顔を湛え、頷くことです。そうすれば、エネルギーが高まります。

根暗な人は、言葉の使い方が下手なのです。というより、想いの持ち方が、下手なのです。言葉の前にあるのが想いですから、明るい想いを持っていれば、明るい言葉しか出てこないのです。暗い想いを持っているから、暗い言葉が出てくるのです。よく、人のいうことを悪く取り、腹を立てる人がおりますが、これほどエネルギーを低めることはありません。また、これほど体内に毒を溜めることはありません。これでは病気になるっても仕方がありません。何事も良く受け取れば、自分を苦しめることはないのです。これは、誰の責任でもありません。みな、自分の責任です。また、自分を卑下してもなりません。よく、自分を虐める人がいますが、その人は自分に甘え、人に甘えているのです。ようするに、誰かに同情してもらいたいのです。

世の成功者といわれる人は、想いの使い方が上手なのです。想いの使い方が上手だということは、言葉の使い方が上手だということです。言葉の使い方が上手だということは、行為を表現するのも上手だということです。この宇宙には、均質なエネルギーが満ち満ちており、そのエネルギーは誰でも平等に使えるようになっていのです。どのように使うかは、その使う人に任されているのです。肯定的に使えば幸せが、否定的に使えば不幸せが、それは、エネルギーを良いことに使ったか、悪いことに使ったか、それだけのことな

のです。使い方が下手だから、人生を苦しくしているのです。どうかエネルギーを上手に使ってください。それは、想いと言葉を上手に使えば、誰でもできることなのです。

言葉二二五・科学的生き方とは

ここに、卵を前にして「一日も早くヒナに返してください！」と祈っている親鳥と、自分でヒナに返そうと、一生懸命、卵を抱いている親鳥がいたとしましょう。さあ、卵を返すのはどちらの親鳥でしょうか？ 当然、一生懸命、卵を抱いている親鳥の方ですね。非科学的生き方とは、神頼みしている親鳥の生き方です。科学的生き方とは、一生懸命、卵を抱えている親鳥の生き方です。非科学的生き方には、自分が入っていません。科学的生き方には、必ず自分が入っています。実際に変化させられるのは、自分の想いと言葉と行為であり、それは、自分抜きではあり得ないのです。神頼みは、実在しない力に頼っているわけですから、変化させられるわけがないのです。実在しないものに頼り、身を危険にさらしている例えをご紹介します。う。

ここに、信号機を頼りに運転しているドライバーと、自分の目で確かめ運転しているドライバーがいたとしましょう。信号機を頼りに運転しているドライバーは、左右を見ず青信号だけ確認し交差点を通過します。

自分の目で確かめ運転しているドライバーは、信号付近で速度を落とし、左右を確かめた上で通過します。さあ、どちらが安全で、どちらが危険でしょうか。後者の方が安全で、前者の方は危険ですね。なぜなら、自分は信号を守って運転していても、相手を守って運転してくれる保証はないからです。また、信号機に故障が無いともいえないからです。交差点で良く事故が起きるのは、信号を頼り切っているせいなのです。

科学的生き方とは、本当に有るものに生きる生き方です。自分の意識は本当に有るものですから、間違いを犯すことは絶対ありません。でも、信号機は本当に無いものですか、間違いを犯すのではありません。外側の形を頼りに生きている人は、実在しない物に生きているわけですから、原子核を増やすことができないのです。内側の自分の意識を頼りに生きている人は、実在するものに生きているわけですから、原子核を増やすことができます。確かに、他力に頼るのは楽です。自分は何もしなくてもいいのですからね……。でも神は、そんな怠け者に都合の良い仕組みなど、お創りになるわけがないのです。地球に努力という字があるのは、努力する必要があるからです。必要の無い字を、神が用意されるわけがないのです。科学的生き方とは、常に自分を入れた生き方です。非科学的生き方とは、自分抜きの生き方です。どうか、実際にある自分の力を頼ってください。他力からは何も生まれないことを知ってください。

【神様からの手紙⑫・身口意を戒めるための像】

「身・口・意」という言葉があります。この「身・口・意」の「身」とは行為のこと、「口」とは言葉のこと、「意」とは想いのことです。昔から「身から出た錆び」とか、「口は災いの元」といった戒めの言葉はありますが、「意」を戒める言葉は見当たりません。人間は見える形の部分しか重視しないため、どうしても見えない「意想い」を軽視してしまうのです。でも、一番大切なのは、見えない「意」、すなわち想いです。身を動かすのも、言葉話すのも、すべて見えない想いがやっているからです。原因(想い)あつての結果(言葉や行為)です。でも、人間は「身・口・意」を軽んじ、平気で悪しき想いを持ち、悪しき言葉を語り、悪しき行いをしています。これは因果の法則の恐ろしさを知らないからです。

神殿や仏閣に行くと、門前に仁王像や閻魔像や金剛力士像などが置かれています。目的は信者を魔から守るためだといわれています。でも、本当の目的は、因果の法則を守らすための像なのです。あの恐ろしい表情は、「因果の法則を守りなさい！」という威嚇なのです。あなたは子供の頃に、「嘘をつけば閻魔様に舌を抜かれますよ！ 悪いことをすれば火炎地獄に放りこまれますよ！」と脅されたことがありますか。仁王像も閻魔像も金剛力士像も、因果の法則を守らせる威嚇の役割を果たしているのです。

因果の法則が守られなくては、この世は真つ暗闇になってしまいます。今の地球は、真つ暗闇とまではい

いませんが、相当暗いです。それは、多くの人が因果の法則を犯しているからです。今や、門前の像は象徴的な存在になってしまいました。もう一度原点に帰り、像たちの存在意味を噛み締めてください。

第13章 人間社会と真理

どうして人間社会に不幸が絶えないのでしょうか？ それは、しっかりとした土台の上に社会が築かれていないからです。土台が不安定では、社会が揺れ動くのも当然です。では、どのような土台を用意すればいいのでしょうか？ それは、真理という土台です。もし、真理という土台の上に社会が築かれたら、どんな嵐が襲ってきてもビクともしないでしょう。

言葉二二六・人類が犯している罪

「政治の罪」

国は、国民に進むべき道を示す義務があります。しかし、今、国は国民に、どこに向かって進みなさいと

いつているのでしょうか。残念ながらありません。これは国の大きな罪です。今、国のやっていることを見てください。経済を豊かにすることしか頭にありません。殆どの政策が経済中心になっているのです。国民の所得が増えれば、幸せになると誤解しているのです。幸せは、経済を豊かにすれば得られるのでしょうか。いいえ、どんなに経済が豊かになっても幸せは得られません。なぜなら、幸せは金や物が持つてくるのではなく、心が持つてくるからです。今、国がやらねばならないのは、心の大切さを教え、幸せの道を示すことです。

人類の目的は、二つあります。一つは本当の自分を知ること、もう一つはこの地球に理想の世を建設することです。人類にはこのような、はっきりとした目的があるのです。ですから国は、この二つの目的を念頭に政策を立てねばならないのです。心が大切だと私がいうのは、心を無視してこの二つの目的は得られないからです。物質は結果の世界です。心は原因の世界です。原因の世界を良くせず、結果の世界が良くなるわけがないのです。結果主義を重視している政治では、国民に一時の幸せは与えられても、永遠の幸せは与えられません。もうそろそろ人類は、そのことに気づいても良いころです。

「経済の罪」

地球の地下には、石油・ガス・レアメタルなど膨大な資源(エネルギー)が眠っておりますが、その資源は

人間の手によって地表に取り出され、人間生活によって食いつぶされるよう計らわれています。その意味では、地下資源を食いつぶすこと自体は悪いことではないのです。しかし、急激な食いつぶしは良くないのです。なぜなら、使命の達成前に地球環境を破壊してしまうからです。そこには、ちゃんとした食いつぶしのルールがあるのです。今、地球環境がおかしくなっているのは、ルール以上に食いつぶしのスピードが速くなっていくからです。

資本主義経済の罪は、人の心に欲望を膨らませ食いつぶしのスピードを速めていることです。このまま進めば、地球環境は持たないでしょう。肉体を維持するのに、沢山の物はいりません。それは、心ある人なら、みな知っております。でも欲を膨らませた人たちは、そのことに気がきません。だから地球は気付いてもらいたくて、今、様々な警告を発信しているのです。

経済は、本当の自分を知るために必要なものであり、欲望を満足させるために必要なものではありません。今人類は、目的と方便を取り違えているのです。人類は何のために存在しているのか？ 人類は何処に向かって進むべきか？ 人類の目的は何なのか？ それを知れば、おのずと正しい経済の姿が見えてきます。奉仕経済は、その選択肢の一つです。資本主義経済から脱却する時期が近づいていることを知ってください。

―教育の罪―

一、結果を教えている罪

今日の教育の過ちは、原因を教えず結果を教えている点です。つまり、この世限りの知識を与えることに夢中になり、永遠に失わない真実を与えることを忘れているのです。たしかに、この物質世界で生きるためには、ある程度の知識は必要でしょう。でも、気が狂うほどの知識を詰め込む必要があるでしょうか。毎年、春先になると、子供たちから笑顔が消えます。試験地獄が近づいているからです。可哀そうだと思いませんか？

どんなに沢山知識を詰め込んでも、この世限りの知識なのです。そんな虚しい知識を身に付けるために、大切な青春時代を犠牲にするなど愚かです。私たちが学ぶべきことは、永遠に無くならないたった一つの原因(真実)です。たった一つの原因を学べば、すべてを知ることができるのです。

無限の分数によって組み立てられた表現宇宙には、知るべきことが無限に存在するのです。その無限の知識を、どこまで知ろうというのですか？ それは、海岸で砂粒を数える愚行に等しいのです。しかもその砂粒は、いつか必ず消えて無くなるのです。消えて無くなるものを知って、一体何になるのですか？ もう、そのような愚かな教育は止めましょう。

二、生涯教育をしていない罪

私たちは、本当の自分を知るために生まれてきました。この本当の自分を知る教育は、知識で終わるものではないのです。なぜなら、実感と実観が大切だからです。その実感と実観を得るには、途方もない学びの時間が必要なのです。それは永遠に続く学びの旅です。でも今の人間は、学校教育が終われば、それで学びが終わったと思っています。これでは、せつかくの人生を無駄にしてしまいます。人生に学びの終わりはありません。日々が学びです。一生涯が学びです。ですから、生涯教育が必要なのです。

三、宇宙の法則を無視している罪

この宇宙は、二つの法則によって支えられています。一つは、「原因と結果の法則」、もう一つは、「陰陽の法則」です。この二つの法則を私は、十字の法則と呼んでいます。今日の教育の罪は、この二つの法則を教えない点です。

【原因と結果の法則】

結果の世界で起きている出来事は、すべて原因の世界で作られているのです。この世に不幸が絶えないのは、結果を重視し原因を無視しているからです。原因である川上を綺麗にすれば、結果である川下は黙っていても綺麗になるのです。どんなに結果をいじくり回しても、原因を良くしなければ、不幸を無くすことはできないのです。このことは、いまだに戦争や犯罪が無くならないことが証明しているではありませんか。

奪えば奪い返されるのです。与えれば与え返されるのです。怒れば怒られるのです。愛すれば愛されるのです。憎めば憎まれるのです。優しくすれば優しくされるのです。これは当たり前で、何の不思議もありません。私が一番に願うのは、この「因果の法則」を学校教育に取り入れてもらいたいことです。もし取り入れられれば、今地球上で起きている犯罪や戦争は、すべて無くなってしまおうでしょう。

【陰陽の法則】

この表現宇宙は、陰と陽の調和によって成り立っています。つまり、見える物と見えないモノによって成り立っているのです。手に裏表があるように、この表現宇宙にも裏と表があるのです。なのに今日の教育は、見える物の事しか教えていないのです。こんな片手落ちの教育で、どうして子供たちが納得するでしょうか。今登校拒否や学級崩壊が起きているのは、学校へ行っても真実を教えてもらえないからです。子供たちは、真実を知りたがっているのです。子供は正直です。素直です。その正直で素直な時期に真実を教えれば、虐めも、登校拒否も、学級崩壊も、即座に無くなってしまおうでしょう。

科学の罪

現代科学の一番の罪は、科学を化学として扱っている点です。科学は原因を探る学問です。化学は結果を探る学問です。どんなに結果を探っても、それは実体の無いものですから意味が無いのです。今の科学者は、

実体のない幻を解明しようとしているのです。それは「コップ」という名前を顕微鏡にかけ分析しようとしているようなものです。ガラスは実体が有りますから分析できても、「コップ」は名前だけの存在ですから分析しようがないのです。分析すべきは、実体のある本質です。

たしかに、この表現の世界は物質の世界ですから、肉体を持つている限り物質の謎の解明は必要です。でもその化学の研究に、今のような沢山の時間とお金をかける必要はないのです。解明するにしても、必要最小限度で良いのです。この表現宇宙は、一つの本質で創られていますから、その一つの本質を解明すれば、すべての謎が解明されるようになっていくのです。すなわち、原因を解明すれば、結果はことごとく解明されるということなのです。今人類は、一生懸命結果を解明しようとしているのです。教育もそうであるように、科学も同じ過ちを犯しているのです。

―宗教の罪―

現代宗教は、次のような罪を犯しています。

一、神仏や覚者を衆生から遠ざけている罪

宗教が犯している最大の罪は、人間を神から遠ざけている罪です。一番近くにおらねばならない神を、神秘的な存在に祭り上げ、人間から遠ざけてしまっているのです。これは肉体ばかりでなく、心まで腐らせて

しまうわけですから、これほど重い罪はありません。神仏は遠い存在ではありません。むしろ手よりも足よりも近い存在です。なぜなら、神仏そのものが人間そのものだからです。人間は神仏から出てきた神仏の化身なのです。人間を神から遠ざけているということは、覚者から遠ざけているということにもなり、これは、二重の罪を犯していることになるのです。覚者も私たちも、同じ人間であり同じ神です。何一つ変わりません。ただ覚者には神の自覚があり、私たちには無いだけです。なのに殆どの宗教が、そのことを教えていないのです。神仏を衆生から遠ざけている宗教を、どうして正しい宗教といえるでしょうか。

二、他力信仰をさせている罪

どの宗教も拝む対象物(仏像・仏壇・神棚)を作り、信者に手を合わせさせております。偶像崇拜は、明らかに他力信仰です。救うのは、ご先祖や神仏ではありません。私たちの思いと行為が救うのです。なのに宗教は、ご先祖や神仏に手を合わせれば救われると説きます。もしご先祖や神仏に手を合わせて救われるなら、どうして仏壇や神棚に燈したロウソクの火で火事になるのでしょうか。なぜ、墓参りの行き帰りに交通事故に遭うのでしょうか。私たちを救うのは、私たち自身です。すなわち、自らの正しい「身・口・意」が自分を救うのです。どうか他力信仰を捨ててください。迷信まがいの偶像に手を合わせないでください。手を合わせるなら、自分の中におられる神仏に手を合わせてください。

三、宗教を職業にしている罪

宗教が食べるための道具になっていては、純粋な教えが伝わるわけがありません。どのような職業でもそうですが、欲が絡めば純粋さが失われてしまうのです。さらに現代宗教の罪は、衆生の無知に付け込んでお金をむしり取っている点です。お経の長さや内容によって、戒名の字のありがたさによって、お経を詠む坊さんの数によって、・・・支払うお金が違うのです。本来、悲しみを癒してやらねばならない坊さんたちが、そのような理由をつけ信者からお金をむしり取る宗教が、はたして正しい宗教といえるでしょうか。

四、祭事や仏事に明け暮れさせている罪

葬式に膨大なお金がかかり、葬式が終わった後の法要にもお金がかかり、神具や仏具にもお金がかかり、さらに墓を建てるにもお金がかかり、骨を預けるにもお金がかかる。ひどい宗教になると、「この有り難い物を上げれば仏さんが喜びますよ！」と、高額の物を買わせる。このようにお金がかかり、祭事や仏事に明け暮れる宗教が、本当に正しい宗教なのでしょうか？・・・

祭事や法要に固執する心理状態を、よく観察してみてください。みな、人前で良い格好をしたいがための偽善です。亡くなった人のためにしているのではなく、自分のためにしているのです。宗教家もそうですが、政治家もそういう人が多いのです。理性を研ぎ澄まし、よく見極めてください。

五、多神教にしている罪

多くの宗教は、私たちの神こそ唯一の神であるといつて、衆生を騙しています。沢山の神を作つて衆生を惑わしているのが、現代宗教なのです。神仏はこの宇宙に一樣しかおられません。その一つの神仏が、全ての人たちの中におられるのです。私たちは神の子であり、神そのものなのです。沢山の神が存在し、一人一人の中に違う神が存在しているのではないのです。一樣の神が全ての存在物の中にいて、生かし、動かし、働かしているのです。キリスト教の神も、イスラム教の神も、仏教の神も、みな同じ神です。その同じ神が、私たち自身なのです。

このように、現代宗教は大変な罪を犯しているのです。多くの人が宗教家によつて騙され、あげくの果てに戦争までしているのです。もうそろそろ、そのことに気付いてください。私たちは神の子です。私たちの中に神がおられるのです。それを知れば、もう外に神を求めようとはしないでしよう。すなわち、宗教はいらなくなるのです。

―文明の罪―

人類は、便利・快適・スピード性が文明の証しだと思ひ違ひし、今日までこの命題達成に全力を注いできました。たしかに物質文明は、かりそめの幸せを提供してくれますので、求めたくなる気持ちは分からない

でもありません。でもそれは、一時的な見せかけの幸せであって、真の幸せではないのです。真の幸せは、物質では得られないのです。いやむしろ、物質から離れなくては得られない幸せなのです。なぜなら、幸せは心が感じるからです。

どうでしょう。物質文明花盛りの今日、人々は本当に幸せになったでしょうか？ いいえ、逆に苦しみや悲しみが多くなったのではありませんか？ これは、明らかに間違った文明に足を踏み入れた証なのです。お腹をいっぱいにするのは食べ物ですが、心をいっぱいにするのは、平安と喜びと感動です。文明の本当は、人類を質の高い幸せにいか近づけるかなのです。質の高い幸せは、物からは得られないのです。もうそろそろ人類は、そのことに気付いて良い頃です。さあ、文明の方向転換をしましょう。

言葉二二七・何に生きるのか？

二重生命体である人間には、肉体の自分と生命の自分が存在します。二つの自分があるということは、二つの生き方があるということです。つまり、人間としての生き方と、生命としての生き方があるということです。でもそれを知らなければ、人間にしか生きられないのです。だから私は、真理を知りなさい！ 本当の自分を知りなさい！ というのです。私たちには自由意志があるわけですから、どちらにも生きられるの

です。でも殆どの人間は、肉体の自分に生きております。これでは、苦しい人生を送っても仕方ありません。私たちは、「生きる」という字を使いますが、この「生きる」という字は、何に「生きる」べきか考えさせる字なのです。例えば、人間に「生きれば」、老いがあり、病があり、死があります。また、人と競い、争い、奪い、戦わねばならない苦しみがあります。さらに、肉親の情、夫婦の情、友達の情、周りの人達との情など、様々な情の苦しみもあります。つまり、人間に「生」できれば、沢山苦しまねばならないわけです。しかし生命に生きれば、老いや病や死に苦しむことはありません。人と対立する苦しみもありません。情で苦しむこともありませぬ。確かに、肉体を持つている限り、人間社会を無視して生きるわけにはゆきませぬが、人間社会にポツリと浸かって生きる必要がなくなるのです。ということは、人と競い、戦い、奪い合うようなことはしなくて良くなるわけです。苦しみも少なくなるのです。どちらの自分に生きるかで、人生が全く変わってしまうのです。これは、外側の人間社会に関係ない、内側の自分の中の問題なのです。どうか、生命と人間(肉体)をバランス良く生きてください。そうすれば、あらゆる苦悩は解消されます。といっても私たちは、今までトコトン人間として生きてきたわけですから、これ以上人間を意識して生きる必要はありません。生命だけ意識して生きればいいのです。難しいことはありません。今まで人間を意識して生きてきたように、生命を意識して生きたらいいのです。肉体保身はその中において、無理なく行われる

でしょう。

言葉二二八・戦争は誰が起しているのか？

銃の引き金を引かせているのは何(誰)ですか？ 核爆弾のボタンを押させているのは何(誰)ですか？ 手

ですか？ 心ですか？

・戦争を起しているのは何(誰)でしょう？

・テロを起しているのは何(誰)でしょう？

・貧困や飢餓を起しているのは何(誰)でしょう？

・事件や事故を起しているのは何(誰)でしょう？

・自殺をさせているのは何(誰)でしょう？ 肉体ですか？ 心ですか？

そうですね。事の起こりの背後にあるのは、すべて心です。心が肉体を動かしているのです。人間はこのことを深く考えようとしません。だから心を粗末にするのです。

心が無くては、何もできないのですよ！ 心が無くては、何も始まらないのですよ！

この事実をしっかり認識すべきです。

真に国民の幸せを願うなら、心のメカニズムを解明し、正しい心の使い方を国民に周知させるべきです。これは国策として、真っ先に取り組まねばならない重要課題です。源流を清めれば黙っていても下流は清まるのです。すなわち、原因である心を清めれば結果である社会は黙っていても清まるのです。

もう、

- ・軍備にお金をつぎ込む必要はなくなります。
 - ・医療にお金をつぎ込む必要はなくなります。
 - ・事故防止にお金をつぎ込む必要はなくなります。
 - ・自然災害防止にお金をつぎ込む必要はなくなります。
 - ・犯罪防止にお金をつぎ込む必要はなくなります。
- 何事も「心」が関係していることを、教育者にも、政治家にも、知って欲しいと思います。

言葉二二九・なぜ人は「金」に魅了されるのか？

これまで金は貴金属として、また「有事の金」として大切にされてきましたが、国の信用不安が高まっている今日、ますます重要視されるようになっております。金が重要視される背景には、金を持つ普遍的価値

があります。金は供給量が少ないため、希少価値が高いのです。さらに金は不変性・永遠性(錆びたり摩耗することがない)があるため、信用度が変わらないのです。紙幣は国の経済が破綻すれば信用度は落ちますが、金は何が起ころうが信用度が変わらないのです。でも金に価値がある本当の理由は、人の心を魅了するところにあるのです。この地球上のどこの国に行っても、金を見れば人はいうことを聞きます。従います。働きます。それは、金には本源的な価値があるからです。本源的価値とは、究極の幸せを思い出させる価値のことです。(究極の幸せは生命の世界にある)私たちは、そのことを本能的に知っているため、金の輝きに魅了されてしまうのです。その意味では、金の輝きは、単なる金の輝きではないのです。生命の世界を思い出させる輝きなのです。

私は常々、この世で一番価値のあるものは労働力であるといってきましたが、それは労働力さえあれば、どんな価値でも生み出すことができるからです。でもその労働力は、人の心を動かさなければ得られないのです。だから人類はこれまで、武力や権力や金力を使って強制的に人の心を動かし獲得してきたわけです。多くの悲劇はそこから生まれたわけですが、それは、それ以外労働力を獲得する方法を知らなかったからです。でも本当は、そのような力を使わなくても、労働力はいくらでも手に入ります。私が提唱している奉仕労働力がそれです。奉仕労働力は、人の心(善意)を当てにしたものですが、その心は、真理を知らしめれ

ば金と同じように動くのです。金が究極の幸せを思い出させるように、奉仕労働力も究極の幸せを思い出させるのです。それは、奉仕労働力さえあれば幸せな社会を作れることを、誰もが知っているからです。

理想世界へ導く大きな決め手は、人の心をどう動かすかにあるのです。それは、真理を知らしめれば可能なのです。もし真理が社会に浸透すれば、人々は自分の労働力をタダで提供してくれるようになるでしょう。

金 〓 幸せを思い出させる。

真理 〓 奉仕労働力を生み出す。

奉仕労働力 〓 幸せな社会(奉仕社会)を生み出す。

言葉三三〇・労働力(人の心)こそ真に価値あるものである

資源がいくらあっても、そのままでは何の価値もありません。資源に人の手を加えて(労働力)、はじめて価値が生まれてくるのです。資源物そのものには、何の価値もないということです。こういうと、「自然界で実っている果物などは、それ自体に価値があるではありませんか」という質問がきます。確かに、実っている果物を見ているだけで腹が満たされるなら価値を認めましょう。でも、木からもぎ取って口に入れなければ腹は満たされないのですよ。木からもぎ取って口に入れるには、労働力が必要なのです。どんなに石油

資源があっても、それを汲み取って精製しなければ使えないものにならないのです。汲み取って使えるようになるには、労働力が必要なのです。今日の物質文明の繁栄は、すべて人類の労働力の賜物なのです。したがって真に価値あるものは、資源でも、お金でも、権力でもない、労働力であるところに行き着くのです。でもその労働力は、心が動かなければ生まれません。だから私は、「心こそ真に価値あるものである」というのです。

言葉二二二・労働力は売買の対象にならない

労働力は、本来売買の対象にならないものです。なぜなら、労働は肉体がするのでは無く、心がするものだからです。心は売買できません。でも肉体が労働すると考えれば、肉体は物質ですから売買の対象になってしまいます。労働力が売買の対象になれば、生産物もサービスも売買の対象になってしまいます。今日の社会でお金が幅を利かしているのは、労働力が売買の対象物になっているからです。もし売買の対象物から外されたら、個々人の労働力は社会的財産(奉仕労働力)として扱われるはずですが、労働力をバラバラに使うより、集めて使う方が合理的だからです。そうなると、社会的財産から生まれた生産物は、当然社会全体のものになるでしょう。配分についても、お金から生まれた物の配分にはお金が必要ですが、奉仕労働力(心)

から生まれた物の配分にはお金は必要なくなりません。そうなれば、「自由取得制度」が採用されるのは当然の成り行きです。一人ひとりの心が生み出した生産物の配分は、一人ひとりの心に委ねるのは当然だし、またその方が間違いないからです。

奉仕社会では、心(労働力)が価値を生み出すことを認めていますので、どんな自然物も、どんな生産物も、どんなサービスも、心の表現物として大切に扱われます。でも物に価値を置く社会では、物は単に物として扱われますので、無謀な開発、無謀な生産、無謀な消費が行われるのです。これでは、生産物の中にも労働力の中にも心が宿ることはないでしょう。労働力は「知恵と力・心」の結晶です。知恵も力も見えませんが、でもその見えない知恵と力が物を生み出しているのですから、物を単に物として扱うのでは無く、心を持つた生き物として大切に扱うべきなのです。

言葉二二二二二・自由取得制度

「配分を良心に委ねる「自由取得制度」を、夢のように考えてはなりません。なぜなら、今も現に行っているからです。あなたは家族から、食事代や着物代や家賃などを取っていますか。取っていませんか。それは家族間に自他の溝が無いからです。また家業をやっている家では、家族の労働力は惜しみなく家業に使われ

ていますし、そこで得た糧も家族全員のために使われています。この発想を広げたのが奉仕社会ですから、自由取得制も労働奉仕制も異端な制度ではないのです。社会の営みを家業と考えれば、一人ひとりの労働力を社会全体のために使い、生み出された物の配分も一人ひとりの良心に委ねるのは当然だからです。全人類が兄弟姉妹だと知り、自他の溝が無くなった社会では、このような発想が生まれても不思議ではないのです。事実進化した星では、「自由取得制も労働奉仕制も」当たり前前の制度として採用されています。幼い社会にだけ、「労働力」という言葉があるのです。本来「労働」という言葉は、「楽働」という言葉でなくてはならないのです。なぜなら、働くことは楽しいことだからです。働けば、原子核が増えるわけですから、楽しいはずなのです。それがなぜ苦しいのでしょうか？ 幼い社会にだけ「お金」があり、幼い社会にだけ「労働」という言葉があるのです。

言葉三三三・自ら難しくして苦しんでいる人間

もし人間が足ることを知り、日々生きられるだけの物で満足するならば、誰が指導者になっても無難にやっ
て行けるでしょう。いや返って、子供のような素直な考えを持った者の方が、指導者としては適任かもしれ
ません。なんせ物の配分に、何の工夫も技術もいらなからね……。ただ、必要な物を、必要な量

だけ生産し、必要な人に、必要なだけ、配分すればいいのですから……。たとえば、十人の人がいれば、単純に物を十個生産し、それを適正配分すればいいのですから……。そのような社会になれば、何も守る必要がありませんので、誰とも敵対することがなくなるでしょう。だから、奪い合いも、競い合いも、争いも、起きません。今の人間は、沢山の物を確保しなければ生きられないと思っています。しかし、地球には、何百億人もの方が生きられるだけの資源が用意されてあるのです。いや宇宙に手を伸ばせば、資源のことなど考える必要さえなくなるのです。

自然界の生き物たちを見てください。彼らは明日に備える貯えはしていません。日々与えられた物で満足しております。私は痩せ細ったりリスなど見たことがあります。餓死した熊など見たことがあります。人間の自然破壊によって餓死したりリスや熊はいても、人里離れたところで生きているリスや熊に餓死はないのです。餓死は、人間界にだけある不思議な光景なのです。

今の人間は、自ら難しくして苦しんでいるのです。
それは、

- ・ 欲を持つからです。
- ・ つまらない面子や拘りで身を縛るからです。

- ・しがらみに囚われるからです。
- ・ねばならないという制約を作るからです。
- ・つまらない慣習や風習に囚われるからです。
- ・見栄を張るからです。
- ・人の目を気にするからです。
- ・自尊心で自らを縛るからです。

ではなぜ人間は、このように自分で自分を苦しくするのでしょうか？

それは、

- ・無知だからです。
- ・真理を知らないからです。
- ・本当の人間を知らないからです。
- ・宇宙の仕組みを知らないからです。
- ・宇宙の実体を知らないからです。

この物質の世界は、無常の世界なのですよ。消えて無くなる幻の世界なのですよ。そんな幻の世界に、ど

うして、沢山の物やお金を残す必要があるのでしょうか？ あなたの命は、百年足らずなのですよ。ならば、百年生きられるだけの物やお金があればいいではありませんか。あなたの身体は、わずか二メートル足らずなのですよ。ならば、二メートル余りの身を横たえられる家があればいいではありませんか。どうして、クジラが住めるような大きな家がいるのでしょうか？ 自然界の生き物たちは、自然の配剤に文句ひとつ言わず従っています。人間だけが逆らっているのです。だから、人間は苦しんでいるのです。その苦しみは、自ら作った苦しみで、誰かが与えた苦しみではないのです。このことをぜひ知って欲しいと思います。

言葉一三四・お金の無駄遣い

今人類は、膨大な費用をかけ宇宙に探査機を送っていますが、これほど予算の無駄遣いはありません。なぜなら、外から得るものはみな幻(結果)だからです。幻(結果)を得て、一体、何になるのでしょうか？ 私たちが求めるべきものは、幻(結果)では無く真実(原因)ではありませんか。一体、宇宙の塵を集めて何になるのですか？ どんなに遠くの塵を集めても、それは、みな幻なのです。この表現宇宙に存在するもので、一つだって真実なるものは無いのですよ。そんなに宇宙の塵を研究したいなら、自分の足元にある塵を研究したらいいではありませんか。何光年先にある塵も、足元にある塵も、同じ本質(真実)によって生み出され

た物だからです。私は批判しているわけではありません。欲しいものが近くにあるのに、わざわざお金をかけ遠くに出掛ける必要はないといっているのです。そんな予算があるなら、心の研究に使った方がどれほど国民のためになることか・・・。外側のものは、すべて幻です。そんな幻にお金をかけるほど愚かなことはありません。お金をかけるなら、真実を発見するために使いましょ。真実とは、本当にあるものです。本当にあるもの、それは心です。意識です。すなわち、生命です。神です。本当の自分です。

言葉二三五・真理は社会でどのような位置を占めているか？

人間は、社会生活と悟りは全く関係ないと思っております。でも社会生活と悟りは、切っても切り離せない関係にあるのです。イエス様は「天国(悟り)に入るのは、ラクダが針の穴を通るより難しい！」といわれました。それほど悟るのは難しいのです。なぜなら、悟るためには強い強い精神力がいるからです。例えば、忍耐力が必要です。集中力が必要です。意志力が必要です。緻密さが必要です。努力心や向上心が必要です。これらの精神力は、単に一生や二生で養われるものではないのです。何万回という転生輪廻の中において、少しずつ養われてゆくものなのです。

この世に生を受けると、この世で生きるための学びが必要です。幼稚園・小学校・中学校・高校・大学な

ど、私たちは、人生の三分の一を学校教育に費やします。その学びの過程で、嬉しいこと、苦しいこと、楽しいこと、悲しいこと、良いこと、悪いこと、好きなこと、嫌なことなど、様々なことを体験します。例えば、寒い朝早く起きて学校に通うこと、学友の前やPTAの前で発表すること、体育の時間に運動場を何周も走ることに、試験勉強することなど、沢山嫌なことを体験します。勿論、社会に出れば、学生時代の何倍もの苦難が待ち受けています。就職試験、新人研修、厳しい仕事、得意先とのやり取り、ノルマ達成、上司や同僚や部下との付き合いなど、弱肉強食まがいのこの社会は、まさに格闘技さながらの戦場とっていいでしょう。しかし、そんな社会だからこそ、強い自分を築き上げることができるのです。

この社会には、政治・経済・教育・科学・文化・芸術・スポーツ、など、様々な分野の営みがありますが、すべて悟るために必要な受け皿になっているのです。その受け皿の中で、総理大臣も、学校の教師も、会社の役員も、サラリーマンも、肉体労働者も、警察官も、軍人も、芸術家も、スポーツ選手も、主婦も、人殺しも、ドロボーも、浮浪者も、強い自分を築いているのです。様々な社会体験は、悟るために必要な道具を磨く方便なのです。だから私は、悟りは社会において終始トップの位置を占めているというのです。

言葉二三六・過去に生きるは死である

人間は、過去にこだわり過ぎます。過去は、閉ざされたページです。「過去を清算せよ！」という国がありますが、過去をどう清算せよというのでしょうか。お金で清算することを清算というなら、それは、ただお金が欲しいだけではありませんか。どうでしょう。みなさんが戦争をしたのですか。戦争をした人たちはとくに死んでいるのですよ。なのに、なぜ、子や孫が責任を取らねばならないのでしょうか。精算できる過去などあるわけがないのです。もし、あるとすれば、今、仲良くすることです。そうすれば戦争で亡くなった人たちも、きっと喜んでくれるでしょう。いつまでもいがみ合っているのは、亡くなった人たちは浮かばれません。ですから、靖国神社にお参りすることも慰霊碑に花束を捧げることもなく、お互い仲良くすることが亡くなった人たちに対する最大の供養になるのです。靖国神社にお参りして、一体、何の益があるのでしょうか？ 亡くなった人たちのいい迷惑になるだけです。彼らは彼らで、向こうでの生活があるので。向こうで生活しやすいよう、静かにしてやるのが思いやりというものです。騒げば、どうしても地上に意識が引つ張られてしまいます。これは進化を続ける生命にとって大迷惑です。

戦争(災害)を形骸化させてはならないといって語りべになる人がおりますが、どんなに結果を語り歩いても原因をなくすことはできないのです。そんな時間があるのなら、自分の心を豊かにすることに使ってくだ

さい。つまり、真理の探求に時間を使ってください。その方が、どれだけ世のため人のためになっているとか・・・。過去はもう終わったのです。過去に生きている人は、死んでいるのです。なぜなら、今の大切な時間を殺しているからです。過去に囚われ、今の大切な時間を無駄にしないでください。どうか、「過去に生きるは死である」という覚者の言葉を噛み締めてください。

言葉二三七・人間は自由意思で病気を作っている

本来、この世に病気などないのです。神の創られた完全な世界に、そんなものがあるわけがないからです。もしあるなら、神は完全でなくなりません。その証拠に、自然界には病気はありません。人間界にのみ病気はあるのです。では、なぜ人間界にのみ病気はあるのでしょうか。それは、人間には自由意思があるからです。もし人間に自由意思がなかったら、自然界のように病気はなかったでしょうが、神を客観的に認知するという使命も果せなかつたでしょう。人間の尊厳は、自由意思を持って神を認知するところにあるのです。しかし、残念なことに人間は、その自由意思を悪用し、自ら苦しい病気を作っているのです。それは、宇宙法則を知らないからです。

この宇宙には、きっちりとした法則が存在するのです。その法則は、宇宙を秩序立てている中庸という法

則です。その法則を守って生きれば、人間界に病気などないのです。法則を守るか、法則を犯すか、それは、自由意思を持った人間に任せられているのです。賢い者は、法則を守り幸せな人生を送っています。愚かな者は法則を犯し、苦しい人生を送っています。誰のせいでもありません。みな自己責任です。でも、そのことを知らない無知な者は、自分の自由意思で苦しみを作り、その苦しみを人のせいにして腹を立てているです。

そんな愚かな人生から足を洗いましょう。そのためには、宇宙の法則をよく知り、法則を守ることです。宇宙の法則は、私たちの想念に正直に従ってくれます。良い想念を持てば幸せが・・・、悪い想念を持てば苦しみが・・・。どうか、自分の想念を悪用し、病気を作らないでください。さあ、想念を良いことに使いましょ！

言葉三三八・・・病気は己の本性に気付かせるためにある

人間は生命(神)が化身したものです。私たちは、生命(神)の子なのです。しかし、殆どの人は、そのことを知らず人間として生きております。人間として生きるから、病気になるのです。生命として生きれば、病気になることなどないのです。先に述べたように、本来、人間界に病気などないのです。死ぬまで元気で生

きられるようにできているのです。その証に、自然界の生き物たちは、死ぬまで元気で生きています。人間も生命として生きれば、そのような一生が送れるのです。神が病気を留意したのは、そのことに気付かせるためです。留意したといっても、神が病気を与えたわけではありません。人間の「想い」と「言葉」と「行い」が、自ら病気にしているだけです。

今日の科学は、物質の様々な謎を解明しつつあります。でも病気の解明は、遅々として進んでいません。進まないどころか、ますます難病が増えています。これほど医学が発達しているというのに、なぜ、病気は無くならないのでしょうか？ それは、そうしなければ、本当の自分に気付いてもらえないからです。つまり、簡単に病気が治ったのでは、疑問を持たないからです。疑問を持たなければ、人間は進歩しないのです。神が人間に万能の薬を与えないのは、病苦を通して本当の自分を発見してもらいたいためです。病気の謎解きは、本当の自分を知るきっかけになるのです。どうか、そのことに気付いてください。

言葉二三九・病気は己の過ちに気付かせるためにある

覚者たちは、人の世に病気があるのは、「過ちに気づかせるためである」といつております。でも人間は、いまだにそのことに気付いていないのです。悲しいことですが、人間はこの身で苦しみを体験しなければ、

自分の過ちに気づかないのです。このようにいうと、生まれたばかりの赤子は過ちを犯していないのに、なぜ病気になるのですかという質問がきます。因果の絡みは複雑なので一概にはいえませんが、通常十四歳以下の子の病気は、その子の両親に向けて発信しているメッセージです。つまり、わが子の苦しみを通して過ちに気づきなさい、というメッセージなのです。私自身を顧みても、不調な時代には、子どもたちが相次いで病気になりました。それでも目覚めないものですから、今度は自分自身が痛い目に合ってやっと目覚めたのです。目覚めて生き方を正すと、すべてが好転していったわけですがこの変化は驚くほどでした。

病気で苦しむには、苦しむだけの原因が必ずあるのです。今、病気で苦しんでいる人は、一度己の「身・口・意」をチェックしてみてください。必ず思い当たることがあるはずで、外から与えられた病気など、一つもありません。みな自分が作った病気です。このことに気付き生き方を正したら、間違いなく病気は快方に向かいます。生き方を正すとは、正しい行いをし、正しい言葉遣いをし、正しい想念を持つこと、すなわち「身・口・意」の正しい表現をすることです。この宇宙は、実に単純で正直にできております。良い行いをすれば良いことが、悪い行いをすれば悪いことが……。これは、私の体験からいっても間違いありません。どうか、「病気は過ちに気付かせるために起きている」ということに気付いてください。

繰り返します。

病気になる理由の一つは、自分の本性に気付かせるため、もう一つは、自分の過ちに気づかせるためです。この現象界で起きている、病気も、事故も、事件も、災害も、すべて、そのための方便として起きていることを知って下さい。

言葉二四〇・・病気はエネルギー不足によって起きている

病は「気」からといわれるように、気(光・エネルギー)が不足して起きているのです。気を不足させている原因は、想念を物質に偏らせ、物質に生きているためです。つまり、陰陽の法則を犯しているため、エネルギーの循環がうまく行われていないのです。これは人間界にだけある特殊な現象で、自然界にはそのようなことはありません。自然界は調和がとれているため、エネルギーの循環がスムーズに行われているのです。陰とは物質のことです。陽とはエネルギー(生命)のことです。陰に偏るとエネルギーが低下するため、どうしても病気になるのです。物質文明が栄えると病気が増えるのはそのためです。物質は陰性で影(闇)なのです。影には、一寸のエネルギーも無いのです。物が腐るのは、エネルギーが抜けてなくなるからです。だから、エネルギーが抜けないよう、冷蔵庫で凍らせたり、ラップで包んだりするわけです。人間の体も物質です。エネルギーが少なくなると腐りだすのです。ガンはその典型的病気です。

普通、私たちは、食べ物からエネルギーを摂取しています。でも食べた物すべてが、エネルギーに変わっているわけではないのです。殆どが、不燃焼エネルギー(大便)として体外に出されているのです。それは、ネガティブな想念が、エネルギー変換効率を落としているからです。また私たちは、空気からもエネルギー(宇宙エネルギー)を摂取しておりますが、これも100%エネルギーに変換されていないのです。それは同じように、物質ばかりを意識し、生命を意識していないからです。生命を意識して生きればバランスが整い、エネルギーが完全燃焼するのです。

言葉二四一・・病気とエネルギーとの関わり

私たちは生きていく限り、エネルギーと関わらないで生きることはできません。エネルギーは命の素なのです。では、そのエネルギーと生き物との関わりを、考えてみることにしましょう。

大気中のエネルギーと私たちの健康とは、密接な関係にあります。天気が悪くなると古傷が痛んだりするのは、大気中のエネルギー量が少なくなったからです。低気圧のときはエネルギーが低く、高気圧のときはエネルギーが高いのです。天気の良いとき晴れ晴れし、天気の悪いとき気分がすぐれないのはそのためです。このようなこともあります。よく森林浴に行く人がおりますが、自然の豊かなところは酸素が多いのです。

酸素そのものがエネルギーですから、酸素の多い山に行くと体調が良くなるのです。よく地場の良い所へ行けば病気が治るといわれますが、三角地帯や円錐形地帯など地場の良い所はエネルギーの流れが良いのです。水晶やダイヤモンドなどもエネルギーを高めてくれますが、これは、形がエネルギーの流れを良くするからです。宇宙エネルギーは、形の役割に沿って働いてくれますので、その性質を利用すればエネルギーを高めることができるわけです。だから、ペンダントや装飾品などを魔除けとして利用する人も出てくるわけです。でも、一番エネルギーを高めてくれるのは、人間が生命(神)を想う瞑想です。これに勝る方法は他にありません。形に頼るのでは他力です。瞑想に頼るのは自力です。ぜひ、自力によってエネルギーを高めてください。

エネルギーに、良いエネルギー悪いエネルギーといった区別はありません。エネルギーを良くするも悪くするも、想念の持ち方次第なのです。なぜなら、エネルギーは想念の色に素直に沿ってくれる性質を持っているからです。想念の色 \parallel エネルギーの色なのです。そのエネルギーは、想念の力によって強くも弱くもなるのです。ですから、エネルギーを強めたかったら、良い色の想念を強く発信することです。山彦の原理と同じなのが、想念の原理なのです。良い色の想念とは、ポジティブな想念のことです。中でも生命(神)の想念は、その代表格です。生命(神)を想っているとき、あなたはエネルギー人間になるのです。どうか良い想

念を、多く、強く、使ってください。もう病気になることはありません。

人間には右脳と左脳がありますが、唯心的なものの考え方をすると右脳が開発され、エネルギーが強まるのです。反対に、唯物的ものの考え方をすると左脳が開発され、エネルギーが弱まるのです。理由は、右脳は宇宙（天）と直結しており、左脳は物質（地）と直結しているためです。天はエネルギーが高く、地はエネルギーが低いのです。物質を想っている時は、低いエネルギーと接しているわけですから、体内エネルギーは落ちるのです。若い時はそれでも良いですが、年を取り体内エネルギーが落ちてくると、病気という形で現れてくるのです。

ネガティブな想いは光を閉ざし、ポジティブな想いは光を呼び込みます。光はエネルギーですから、光を閉ざせばエネルギーが低下し、光を呼び込めばエネルギーが高まるのです。エネルギーを低めたくなかったら、できるだけ、ネガティブなことは考えないことです。ポジティブな想いを持ち続け、できるだけ、ネガティブな想いを浮ばせないようにすることです。ベッドで寝ている人は何もすることがないので、やる気になればできるはずです。真剣にやれば、間違いなくエネルギーは高まります。それでも、ネガティブな想いから抜け出せない人は、睡眠を多くとることです。なぜ、眠ると元気になるかといえ、眠っている間ネガティブな想いから解放されるからです。ネガティブな想いから解放されれば光が入ってきますので、

エネルギーが高まり元気になるのです。といつても、睡眠薬を使って眠ることは良くありません。音楽を聴くとか、外の自然を見るとか、青空を見るとかすれば、自然と眠けに誘われますから、その方法をおすすめします。それより一番いいのは、生命(神)を想うことです。私たちの本性は生命(神)ですから、生命を想えば心が安らぎ眠くなるのです。

言葉二四二・根本治療は原因を取り除くこと

どうでしょう。この世にどんな病気も治せる医者ど、どんな病気にもならないよう教える医者がいたとすると、どちらの方が名医でしょうか。後者の方ですね。では、今人類は、どちらの医者にかかっているのでしょうか。そうです。今人類は、病気を治そうとする医者にかかっているのです。それは、原因を良くしようとしているのではなく、結果を良くしようとしている姿なのです。結果対処では、お金と手間がかかるばかりで、病気を根絶させることは絶対できません。

どうでしょう。散々好き放題な生き方をしていた人が、病気になったからといって医者が簡単に治すなら、それは本人の為になるでしょうか？ 病気はすべて心の乱れからきているのです。つまり、ネガティブな想念と生活の乱れが、生命力を弱め病気にしているのです。そのことを医者は、病人に厳しく指摘してやらね

ばなりません。その指摘によって病人が生き方を正したら、原因を正したことになりますから、根本治療につながるので。ですから医者なら、少なくとも生命力を信じていなければなりません。昔の医者は生命力を信じていましたので、少々の風邪なら、"玉子酒でも飲んで寝てなさい！" といって滅多に注射など打ってくれませんでした。薬も今のようには、たくさん与えなかったのです。真の医者は、心医でなくてはなりません。医者は、体を癒すと同時に心も癒してやらなければならないのです。なぜ医者や看護婦は、白衣を着ていると思いますか。衛生管理の意味もありますが、本当は神に近い仕事をしているからです。白色は神を意味するのです。天を意味するのです。医者や看護婦は、白衣の意味を良く噛みしめて着てほしいものです。原因を取り除こうと腐心する医者は名医です。結果を取り除こうと腐心する医者はやぶ医者です。どうか医者も病人も、原因に目を向けてください。

言葉二四三・生命力に委ねる

私たちの本性は生命ですから、私たちの中には偉大な生命力が備わっています。その生命力に何もかも委ねることです。任せることです。預けることです。心から委ねれば、偉大な生命力が働き出します。多くの病人は、医者や薬に"おんぶにだっこ"です。自分の中に偉大な生命力が備わっているにもかかわらず、そ

れを使おうとせず、医者や薬に任せっきりなのです。医者も権威を振りかざし、有無をいわせぬ治療を行っています。これでは、偉大な治癒力が眠ったままになってしまいます。真理の会得が自力によらなくてはならないように、病を治すのも自力によらなくてはならないのです。こう思いましょう。「私は生命そのものだから、私の中には偉大な治癒力が備わっている。その治癒力にすべてを委ねます！」と……。

生命力に委ねるとは、本当の自分に委ねることです。私たちの本性は生命ですから、心から生命に委ねれば、自分の本性が目覚めますのです。それは、自分と生命が一つになったからです。一つになれば、閉ざされていた回路が開き、エネルギーが流れてくるのです。エネルギーが強まれば、色々な気づきが起き判断力も増します。何よりも、心の底から喜びが込み上げてくるようになります。なぜか、嬉しくなってくるのです。そのような気持ちになれば、もう、ネガティブな想いは浮かばなくなります。どうか生命力を信じ、生命力に委ねてください。自分で生きようとしなくてください。自分(肉体)で生きようとするれば力が入ります。力みは生命エネルギーを閉ざします。力んで生きれば生きるほど、生命力を手放すことを知ってください。

言葉二四四・・・リスクはことごとく善である

どんなことにも裏と表があるものですが、その裏と表は二つで一つなのです。裏は表であり表は裏なのです。どちらも必要なのです。真実の扉は、表裏一体の中から開かれるのです。例えば、病気になるたとしても。その人は、当然、苦しむでしょう。でも、その苦しみの中から、必ず何かを発見します。それは、裏を体験することで表を知ったからです。ということは、それは悪でなく善です。よくリスクを負うといいますが、良い事には悪いリスクが伴い、悪い事には良いリスクが伴うのです。それも高ければ高いリスクが、低ければ低いリスクが・・・。良いリスク悪いリスクという言葉は、言葉の意味からしておかしいかもしれませんが、リスクがことごとく成長の糧になっているなら、それは、良いリスクとっていいのです。この世は、裏と表が交互にやってくることで、善を知り、完全を知り、成長できるようになっているのです。この宇宙に一方通行はないというのは、必ず見返りがあり、その見返りが成長の糧になるからです。どうか、病気を良いリスクだと思ってください。苦しい病気の中に、間違いなく良いリスクが潜んでいるのですから・・・。

言葉二四五・病気は影の部分である

病気は影なのです。影は実際にあるものではありませんから、エネルギー(光)を与えなければ消えてゆかないのです。それは、消極だからです。自分の力で生きていないからです。でも、光は自分の力で生きています。光は能動的なのです。しかも、光は永遠に存在します。その光は、影を動かしている黒子のような存在です。光が弱ければ影が薄くなり、光が強ければ影が濃くなるのは、影は光の操り人形だからです。影が演技しているのではなく、後ろで光が演技しているのです。影自体にはなんの力もないのです。病気はこの影と同じなのです。影だから、自分の力で悪くなることも、良くなることもできないのです。放おっておいたら風船が萎むように、影は萎んでゆくしかないのです。「ネガティブな想いを持つてはならない！」といわれるのは、影にエネルギーを与えれば、病気の働きを活発化させてしまうからです。ネガティブな想いは悪しきエネルギーですから、悪しきエネルギーを与えれば病気は進行するのです。だから、決して悪いことは想わないことです。想わなければ悪いエネルギーを与えないわけですから、病気(影)は消えてゆくしかないのです。

社会の間も同じです。人間は何か問題が起きるとすぐに騒ぎ立てますが、騒げば騒ぐほど間に力を与え問題を大きくしてしまうのです。間は実在するものではありませんから、そんなものは放っておいたらいいの

です。そうすればエネルギーを与えないわけですから、消えてゆくしかないのです。よく、靖国神社問題で騒ぎ立てますが、騒ぎ立てるから問題が大きくなるのです。騒ぎ立てればエネルギーを与えるわけですから、ますます問題が大きくなりこじれるのです。エネルギーを与えなければ自然消滅するのですから、放っておいたらいいのです。靖国神社にお参りしてもお参りしなくても、何の意味もないのです。ただ、いい格好をしたいただけです。問題を起こす方も悪いですが、問題にする方も悪いのです。まさに、子供じみています。大人なら、もう少し賢くなってください。

自我はサタンです。肉体人間はサタンです。サタンを相手に事を大きくしないでください。

言葉二四六・肉体が幻ならば感覚も幻である

病気は実際に有るものではありません。なぜなら、肉体そのものが実在していないからです。もし、肉体が実在するならば、病気も実在することになり、一旦、病気になったら永遠に苦しまねばなりません。幸いなことに、肉体は実際に無い影ですから、肉体が亡くなれば、痛みも、苦しみも、消えて無くなるのです。有るように見える、痛い、痒い、寒い、暑い、の感覚は、肉体人間の迷いの産物なのです。"でも、実際に、痛くて、苦しいではありませんか！"というかもしれません。それは、意識が受け取るから感じるのです。

肉体から意識が出たら、痛みは感じなくなるのです。これは、肉体と意識が別ものであることの証なのです。痛みや苦しみの感覚は、真理を気付かせる手段になっているのです。

痛みや苦しみは幻の肉体に付属するものであって、実際に有る意識に付属するものではありません。影から生まれたものは影なのです。幻から生まれたものは幻なのです。実在しないものから生まれたものは実在しないのです。すなわち、現象から生まれたものはすべて現象なのです。人間は、その現象に翻弄され苦しんでいるのです。もし、幽界と同じように、肉体に感覚がなくなったら、誰もが夢幻だと思って真剣に生きようとしません。それでは、表現世界で生きる意味がなくなるので、神は人間に感覚を与えたのです。痛みや苦しみを通して真実を知るので、痛みや苦しみは必要なのです。さあ、目を覚ましましょう。何がホンモノで、何がニセモノか見抜きましょう。もし見抜くことができたなら、もう病気に苦しむことは無いでしょう。

言葉二四七・・病気は覚醒剤のようなもの

五感から生まれた感覚は、実際にあるものではありません。なぜなら、肉体そのものが実際にはないものだからです。でも五感がなければ生きてゆくことができませんから、神は、実際にはない肉體感覚と実際にある

意識とを結びつけ、この世で無事生きられるようにしたのです。肉体感覚は幻で、本当にあるのは意識です。意識が受け取らなければ、そんな感覚は無いのです。その証に、針麻酔や薬による麻酔で痛みを遮断することができません。意識が受け取るから痛むのです。傷を負っても、意識(魂)が抜けていれば痛みは感じないのです。だから肉体が痛んでいるのではなく、意識が痛んでいるのです。なぜ神は、このような仕組みをお創りになったかといいますと、肉体と意識が別ものと知れば、生命に目覚めさせることができるからです。

何度もうのように、私たちの本性は生命です。肉体の自分と生命の自分とは別モノなのです。しかし、多くの人間は、自分のことを肉体だと思っているのです。肉体だと思っている間は、自分の本性が見抜けないのです。見抜くためには、疑問を持たせなくてはならないのです。だから神は、苦しい病気を与え疑問を持たせるようにしたのです。その意味では、病気は人間にとって必要不可欠な覚醒剤といっていいでしょう。

【神様からの手紙⑬】・なぜ人は自由を希求するのか？】

あなた達が「自由！ 自由！」と声を大にして自由を希求するのは、本来の自分が自由であることを知っているからです。本来の自分とは、意識(生命)の自分のことです。意識は自由なのです。どこにでも飛ばせし、いくらでも縮められるし、どこまでも拡大できるし、いかようにも表現できるのです。そのことを本

能的に知っているから、人間は自由を求めるのです。でもその自由は、野放図な自由であってはなりません。なぜなら、野放図な自由は返って苦しみを生み出すからです。苦しみを生む自由は、真の自由とはいえないのです。では真の自由とは、どのような自由をいうのでしょうか？ それは、宇宙の法則内における自由です。つまり、陰陽の法則と因果の法則内における自由です。陰に偏れば、不自由になります。結果に偏れば、不自由になります。だから、どちらにも偏らない中庸の自由を目指さなければならぬのです。

これまで人間は、気の遠くなる年月自由の尊さを学んできました。鉱物時代には、殆んど自由はありませんでした。植物時代になっても、思うような自由は与えられませんでした。動物時代になると自由は拡大しましたが、それでも本能の赴くままの自由が与えられただけでした。でも人間時代になると、自由は飛躍的に拡大されました。自由意志が与えられたのです。もう何を想うのも、何を話すのも、何を行うのも、自由なのです。これは、あなた達人間だけに与えられた特権で、他の生き物には与えられていません。ただし、全面解禁の自由は与えられませんでした。なぜなら、幼い人間に野放図な自由を与えては、宇宙を破壊しかねないからです。

今人間は、法律や規則で縛られた不自由な社会で生きていますが、これはまだ正しい自由行使ができません。ため、やむをえず作った人為的な足枷です。正しい自由行使ができれば(法則に生きたら・良心に生きたら)、

そんな足枷などいらぬのに、残念ながら人間は、まだそのことに気づいていないのです。やがて人間は、どうすれば真の自由が得られるか知るでしょう。そのとき、すべての制限制約が解除されるのです。

第14章 地球の夜明け

今、手探り状態で進んでいるのが、地球人類の現状です。それは、あまりにも闇が深くて前が見えないからです。でも、闇が深いということは、夜明けが近いということでもあります。そうです。もうすぐ地球に希望の夜明けが訪れます。人類の未来への道は明るいのです。それは、人類が何のために存在しているか知れば、おのずと開かれる道だからです。さあ、今できることを精いっぱいやって、夜明けの訪れるのを待ちましょう。

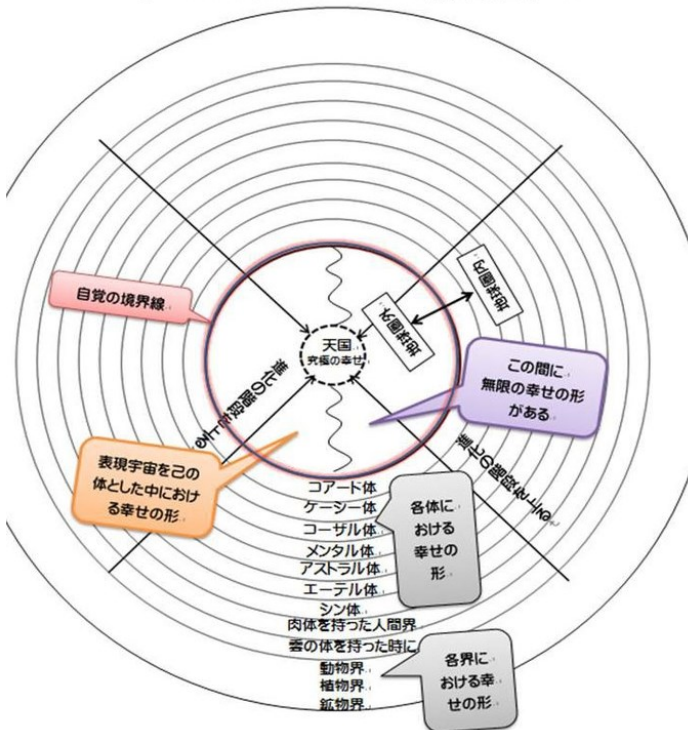
言葉二四八・人類はどこに向かって進化し続けるのか？

進化とは、読んで字のごとく「進」んで変「化」するという意味です。では、宇宙の進化のメカニズムは、

どのようになっているのでしょうか？

この宇宙には、二つの宇宙が存在します。一つは本源の宇宙、もう一つは表現の宇宙です。本源の宇宙は光の宇宙とも、絶対宇宙ともいわれ、永遠に存続する宇宙です。一方表現宇宙は影の宇宙とも、相対宇宙ともいわれ、いつか必ず消えてなくなる宇宙です。影の表現宇宙は進化し続けませんが、光の本源宇宙は完全です。ですから進化しません。では、

幸せの進化の階段図



なぜ表現宇宙は進化し続けるのでしょうか。それは、表現宇宙に存在する人類が進化し続けるからです。では人類は、どこに向かって①、どのように②、どこまで③、進化し続けるのでしょうか？ それは本源に向かって①、宇宙生命と一体になるまで②、永遠に③、進化し続けるのです。その進化の旅は果てしなく続きますから、表現宇宙もまた果てしなく進化し続けるでしょう。表現には限界が無いのです。言葉一つとってみても、行為一つとってみても、無限の表現の仕方ができます。ましてや原子の組み合わせは無限ですから、無限の表現ができるわけです。このように表現宇宙は、無限に表現できるがゆえに進化し続けるのです。

人類の最終目標は、本源の生命と一つになることですが、これは生命の自覚に終わりが無いため永遠に続くのです。生命の自覚には、これで終わりという終着点が無いのです。もし終りがあるなら、神は、生命は、宇宙は、有限になってしまいます。そんな有限な宇宙が有るわけではないのですから、私たちは自覚の旅を永遠に続けねばならないのです。

これまで人類は、気の遠くなる年月をかけ、やっと自分は人間であるという自我を持つところまで進化してきたのです。でも、まだ生命の自覚を得るところまで至っていないのです。人類は、まだ道半ばなのです。道半ばどころか、やっと進化の階段の一步を踏み出したところで、これから本格的に進化の階段を上って行くのです。でもその旅は、決して苦しい旅ではありません。いやむしろ、喜び多い旅といっていいでしょう。

それも、進化の階段を上るごとに増す喜びの旅です。さあ、希望を持って旅を続けましょう。私たちは今、生命の本源に帰るべく進化の階段を上っている真つ最中なのです。

言葉二四九・地球上の生き物達の進化の軌跡

恐竜の絶滅は、地球環境の激変から起きたという説と、隕石の激突によって起きたという二つの説があるようですが、本当の理由は、人類の魂の進化上必要なくなったから絶滅したのです。生き物たちの盛衰は、すべて人類の魂の成長に係っているのです。これは病気の盛衰とも一致するのです。

これまで、人類史において、ペスト・天然痘・チフス・コレラ・ハンセン病など数々の疫病が流行してきましたが、これは、政治の貧困や物質文明の貧弱が生み出した人為的なものでした。今日、ガンやエイズなどの病が流行したり、生活習慣病が流行したりしているのも、精神文明の貧弱が生み出した人為的なものです。つまり、物質文明が貧弱な時代には、それを警告する病気が流行するし、精神文明が貧弱な時代には、それを警告する病気が流行するのです。これは、人類を目覚めさせるための警告ですから、決して悪いことではないのです。今後も、必要な時代に必要な病が流行することでしょうが、これは目覚めてもらうためで、虚めるためではありません。人類が目覚め、魂が成長すれば不必要な病気は無くなっていくでしょう。また、

不必要な生き物たちも減っていくでしょう。特に生き物たちが減るのは、生き物たちの群魂が人類の魂に収斂されるためですから、これは大いに喜んで良いのです。

人類は、これまで地球の資源を食いつぶし成長してきましたが、それは地球そのものの成長でもあったわけです。地球は人類の進化に沿うように、やがて枯れた星になっていくでしょう。一握りの牛糞から沢山の生き物たちが誕生し、その生き物たちが牛糞のエネルギーを食いつぶして魂を成長させていくように、人類も地球のエネルギーを食いつぶして魂を成長させていくのです。地球も生き物たちも、すべて人類に身を捧げているのです。身を捧げている間にどれほど多くの悟り人を出すが、人類に課された使命なのです。

すべての生き物たちは、誕生・生成・成長・維持・消滅しております。でも、そこで体験した諸々は、みな人類の魂に引き継がれているのです。神は不必要な生き物を誕生させないし、不必要なことも体験させないし、不必要な消滅もさせないのです。地球は、今、生き物たちの絶頂期にあります。人類の魂が熟成するにしたい、やがて徐々に下降線を描きながら数を減らして行くでしょう。私たちは、一人で成長してきたのではなく、ありません。沢山の生き物たちの涙ぐましい後押しがあって、ここまで成長してきたのです。そのことを、決して忘れてはならないでしょう。

言葉二五〇・・右脳文明を求めよう！

今、地球人類は、物質文明に酔いしれています。これは喜ぶべきことなのでしょうか？ 悲しむべきことなのでしょうか？ ある人はこういいます。“このように物質文明が発達したのは、魂が進化したお陰である”と・・・。確かに、華やかな物質文明はかりそめの幸せを提供してくれますから、文明の進歩と生命の進化を結び付けたくなるのも無理はありません。でも、文明と魂の進化とは全く関係ないのです。その証拠に、このように文明が発達しているにもかかわらず、いまだに動物以下の生き方をしている人たちが沢山いるではありませんか。今、物質文明を自慢している人たちは、イエス様の前で携帯電話の使い方を自慢しているようなものです。携帯電話の使い方は、魂が幼くても教えてもらえばできるのです。しかし、真理の学びはそうはいかないのです。だから、文明の華やかさだけで、魂の成熟度を量らないでください。いやむしろ、真の文明と真反対にあるのが物質文明なのです。では、真の文明の判断基準は何でしょうか？

判断基準の一つは、自然との和合度です。もう一つは、心の平安度つまり幸福度です。この二つが揃って、はじめて真の文明といえるのです。では、今、人類は、自然と和合できていますでしょうか？ 心は平安でしょうか？ 自然破壊が進み、心の不安も増しているのではないのでしょうか。ということは、今の地球の文明は真の文明でないことになります。そうです。今、地球人類は、物質文明を真の文明だと錯覚しているので

す。では、なぜ人類は、そのような文明の道を歩むようになったのでしょうか？ それは、左脳を頼りに生きてきたからです。

私たちには二つの脳が存在します。一つは、物質的なものを好む左脳です。もう一つは、精神的(霊的)なもの好む右脳です。今日の物質文明は、その左脳から生まれた文明なのです。この左脳からは、真の幸せは得られないのです。なぜなら、左脳は地と直結しているため、左脳を多く使えばエネルギーを低下させてしまうからです。反対に右脳は天と直結しているため、右脳を多く使えばエネルギーが高まるのです。この宇宙は、エネルギーが高ければ高いほど幸福度が増す仕組みになっていますから、エネルギーを低下させる左脳文明では真の幸せは得られないのです。文明の本分は、究極の幸せに少しでも近づくことです。それは右脳を使わなくては適わないのです。

言葉二五二・文明と文化・科学と化学

文明と文化・科学と化学の関係を追究して行くと、面白いことが分かってきます。どちらも、良く似ているのです。つまり「文明と文化」・「科学と化学」が表裏の関係にあることが分かり、さらに「文明と科学」・「文化と化学」が同じ傘の内にあることが分かるのです。では、どのように似ているのでしょうか？

【文明と文化】

文明の「文」という字は、文人・文才・文学など、学識や学問のことを意味しているように思われがちですが、本当は「真の幸福」を意味している字なのです。なぜなら、真の幸福は「心」の極みから生まれ、その心は「文」の極みから生まれるからです。「明」という字は明らかにするという意味ですから、通して解釈すれば「文明」とは、「真の幸福を明らかにする」という意味になります。文明とは「真の幸せの追究」である、ということをおまづ知ってください。

では、文化とは何でしょうか。「化」とは、真実が化けた世界、現れた世界、現象界、つまり、この世のことを意味します。「文」とは今も述べたように幸福のことですから、通して解釈すれば文化とは、「この世における幸福の追究」という意味になります。確かに、この世のものは、一時の幸せは与えてくれます。でも、のど元過ぎれば熱さを忘れるのごとく、すぐに色あせてしまいます。そんな幸せが、真の幸せであるはずがありません。でも、心の幸せは、色あせないし永続します。ですから、私は、「文明の幸福は真の幸せの追究で、文化の幸福は一時の幸せの追究」という分け方をします。だから私は、文明と文化は表裏の関係にあるということです。

【科学と化学】

科学の「科」とは、実際に有るもの、真実なるもの、現わしている原因体を意味します。化学の「化」とは、実際に無い物、非真実なる物、現れている結果体を意味します。その意味では、科学は真実を追求する学問で、化学は非真実を追求する学問ということになるでしょう。つまり、実際に有る生命の世界(心の世界)を追究する学問が科学で、実際に無い表現の世界(物質の世界)を追究する学問が化学になるわけです。このように考えると、科学と化学と文明と文化は表裏の関係にあり、科学と文明と化学と文化は、同じ傘の内にあることが分かっていただけだと思います。人類は今、化学と文化の方向へ舵を取っておりますが、やがてその誤りに気付き、科学と文明の方へ舵を切るようになるでしょう。なぜなら、化学や文化はこの世の幸福に近づける役割は果たしても、真の幸福に連れて行く役割を果たしてくれないからです。真の幸福に連れて行ってくれるのは、唯一科学と文明です。化学や文化を追いかけている限り、人類は永久に本当の幸せを得ることはできないでしょう。

言葉二五二・偏りの文明を求めてはならない！

この宇宙には、常に安定の中にある絶対宇宙と、常に不安定の中にある相対宇宙の二つの宇宙が存在しま

す。今、私たちは、後者の不安定な宇宙で安定の大切さを学んでいるわけですが、では、なぜ、そのような学びが必要なのでしょう？ 理由は、表現宇宙が間違いない進化の軌道を描くためには、人類の偏らない生き方が不可欠だからです。

どうでしょう。今人類は、性の偏り、食の偏り、快楽の偏り、富の偏り、思想の偏りなど、すべての面において偏った生き方をしていませんか？ そのために、精神の荒廃が進み、肉体の荒廃が進み、社会の荒廃が進み、自然の荒廃が進み、地球は荒むだけ荒んでしまいました。では、なぜ偏ると、そのようなおぞましいことが起きるのでしょうか？

・原子爆弾はウランの濃縮されたものです。

・爆弾は火薬の濃縮されたものです。

・酸素ボンベも、水素ボンベも、ガスボンベも、みな濃縮されたものです。

・竜巻や台風も、気圧の偏りによって生じたものです。

・一極集中社会も、過疎社会も、人口の偏りから生まれたものです。

このように、何でも偏ると危険物になるのです。今、頻繁に自然災害が起きているのも、人類が物質に偏った生き方をしているためです。人類が物質に偏ると、自然界も追従するように偏りを見せるのです。それ

は自然界が同じ行動を取ることで、人類に過ちを気付かせることができるからです。要するに自然は、反面教師になってくれているのです。しかし、人類は一向に、こだわりと偏りの濃縮文明から離れようとしません。それどころか、ますます濃縮文明の色を濃くしております。

濃縮文明とは、こだわりと偏りの文明のことです。こだわりと偏りが増せば楽しみの味が増すので、どうしても濃縮文明を求めるようになるのです。その典型的例が、スポーツです。今どんなスポーツも、何々杯とか、何々レースとか、様々なこだわりを作って戦っています。それも、名誉を得るためと賞金獲得レースです。賭け事もそうですが、こだわりを沢山作れば作るほど勝負は面白くなるのです。今、人類が謳歌している楽しみを、良く観察してみてください。偏りとこだわりをエスカレートさせていることが分かります。例えばスナック菓子など、味の濃い食べ物が多く出回っております。遊園地の乗り物も、興奮度を極限にまで高めております。旅行も世界一周旅行など、大々的になっております。目でスポーツを楽しみながらスナック菓子を食べ、さらに耳で音楽を聴くといった、五感を最大限に使った楽しみ方しております。これは、一つの感覚器官だけで満足しきれないほど快楽に麻痺してしまった、人間の恐ろしい姿です。特に恐ろしいのは、興奮剤を使って楽しむ若者たちの行動です。麻薬患者が絶えない現代社会は、まさに濃縮文明そのものといつていいでしょう。確かに、偏らせれば偏らせるほど楽しみの濃度が増しますから、こだわりたくな

る気持ちには分からないでもありませんが、それが人類を滅亡へと運んでいるのです。

楽しみも求めるなら、偏らない穏やかな楽しみを求めましょう。喜びの味は薄いかもかもしれませんが、その方が危険は少ないし長持ちするのです。濃縮されたものは、エネルギー均衡の法則によって必ず分散させられます。赤の反対色は青です。白の反対色は黒です。快楽の反対色は苦しみです。どうか偏らない生き方をしてください。

言葉二五三・偏りは大敵

足を使わなかったら、歩けなくなってしまう。脳を使わなかったら、物が覚えられなくなってしまう。食べ過ぎたら、肥満体になってしまいます。食べなかったら、やせ細ってしまいます。これは、想いにおいても同じです。想いが物質に偏れば、精神が蔑にされ地球は破壊されてしまいます。想いが精神に偏れば、物質が蔑にされ地球の進化は遅れます。どちらに偏っても、神の計画は狂ってしまうのです。人類は神の意図を受け、この地球上に理想の世を築くために遣わされました。その人類が、今、偏った生き方をし、自然界を狂わしているのです。近年の動植物の異常行動、菌類の暴走、異常気象などは、みな人類の偏った生き方に対する警告です。人間の意識が物質に偏ると、自然界は反面教師となって偏りを見せるようになる。

るのです。それは、人間に過ちに気付いてもらいたいからです。つまり、自然界は人類に、「あなた達は間違った生き方をしていますよ！ 生き方を正して下さい！ 過ちに気付いて下さい！・・・」と警告しているのです。

エネルギー均衡の法則に、誰も逆らうことはできないのです。逆らえば、痛い目を見るだけです。偏りは大敵です。偏りは危険を生むのです。さあ、自然の警告に耳を傾け、偏らない生き方に方向転換しましょう。まだ間に合います。

言葉二五四・・・自然は訴えている！

自然界は春・夏・秋・冬という、調和のとれた四季を生き物たちに用意してくれています。生き物たちは、その四季に寄り添って生きること、生存が保障されています。すなわち、春、目覚めの息吹が与えられ、夏、働く活力が与えられ、秋、実りを持って冬の休息に入り、次の四季に向けて生き物たちは力をため込みます。四季の日差しは順調で、寒暖も狂いなくやってきます。梅雨の時期には必要な雨が降ってくれ、また陸風も海風も順調です。このように自然界は、生き物たちが無事生きられるよう配慮してくれているのです。しかし、どうでしょう。最近の気候はどこか狂っていませんか？ シトシトと降るはずの梅雨が、局地的に

激しく降るようになりました。台風も巨大化しています。竜巻も頻繁に起きています。雷も多くなっています。北海道の北東部の海上で、台風並みの暴風雨が頻繁に発生するようになりました。世界の気象を見ても、一方では大雨が降り、一方では日照りが続く、といった気象異変が多く起きています。なぜこのように、異常気象が多くなったのでしょうか？ それは、地球の汚れを洗い流さねばならないからです。シトシトと雨が降り、そよ風程度に風が吹いたのでは、汚れは落とせないのです。でも、どんなに汚れを落としても、次から次へと汚すのですから追いつかないのです。異常気象だけではありません。毎日のように地震が起きています。火山の働きも活発になりました。動物たちの異常行動も目に余ります。菌類の暴走も脅威です。なぜ自然はこのように、狂ってしまったのでしょうか。人類は自然界を導く指導的な立場にあるにもかかわらず、その役割を果たしていないのです。果たしていいどころか、逆に自然界を狂わすような生き方をしているのです。近年の自然界の異変は、すべて人類に対する警告です。このまま偏った生き方を続ければ、地球は黙ってはくれないでしょう。人類は、一日も早く生き方を正さなくてはなりません。地球は待つてはくれません。

言葉二五五・日本人は世界をリードする立場にある

東の先端、日出ずる国それが日本です。日本国の旗印は、日の丸です。日の丸は太陽の象徴です。原子太陽は霊太陽の前面の顔ですから、その顔を持っている日本は霊的な国なのです。これは神国という意味ではなく、波動の高い人たちが多く住んでいる国という意味です。霊的な国であるがゆえに、重要な役割があるのです。

地球の進化度はまだ幼い段階ですが、進化の節目という意味で捕えれば、地球は、今、その節目の時期に当たっているのです。地球はこれから変化の時期に入ります。それを引っ張って行くのが日本人です。日本人は魂の先輩として、世界をリードして行く立場にあるのです。特に、この書を見ているあなたは、その立場にある人です。といっても、何か特別なことをしなさい！ といっているわけではありません。神を想う時間を、できるだけ多くすればいいのです。神の自覚を高め、人間癖をできるだけ取ればいいのです。それも普段の生活の中で、無理なくやればいいのです。自分の心の中でやればいいのですから、人に迷惑をかけることもないし、何処に行く必要もないし、またお金を使う必要もありません。正しく想い、正しく語り、正しい行為をすればいいのです。正しく想う一番は、「神を想う」ことです。身構える必要はありません。自然体でやってください。どうか神を想い続けてください。それが地球に貢献することになるのです。

言葉二五六・自然界からの警告

「最近ますます自然災害が拡大しているように思えてならないのですが？」「という人がおりますが、間違いなく自然災害の規模は拡大しております。その良い証しに最近では、「記録を取り始めて一番の何々です。」という気象予報士の言葉が珍しくなくなりました。特に、日本列島に自然災害が集中しております。毎年台風が日本を襲います。地震も頻繁に起きています。豪雨や竜巻なども日常茶飯事になっていきます。世界で最初に原子爆弾が落とされたのも日本です。なぜ日本人はこれほど、痛い目に合うのでしょうか？それは、日本に熟した魂が沢山生まれているからです。どうでしょう？

何も分からない子供のお尻を叩くより、分かった子供のお尻を叩いた方が気付いてもらえるのではありませんか？これは賢い人なら、薄々気づいているはずですよ。

人間は自然災害から身を守るため色々な対策を講じていますが、自然はそれを上回る規模で迫っております。例えば、東北ではこれまで何度も大きな津波に襲われ、その都度防潮堤を高くしてきましたが、5メートルの防潮堤を作れば8メートルの津波が押し寄せ、10メートルの防潮堤を作れば15メートルの津波が押し寄せました。例え20メートルの防潮堤を作っても、自然界は30メートルの津波で迫ってくるでしょう。そうしなかつたら、災害の意味に気付いてもらえないからです。

自然は何の意思も持っていないように人間は思っていますが、とんでもない！　自然は人間以上にしっかりとした意思を持ち、人間を導いているのですよ！　ただ言葉を持たないから、身振り手振りで（行動で）示しているだけです。私だって言葉が話せないなら、行動で示します。その行動が、自然災害なのです。自然災害は、すべて人類に対する警告なのです。人類は自然界の警告を受け入れ、一日も早く生き方を正さなくてはなりません。それはもう、一刻の猶予もないほど切羽詰まっているのです。

言葉二五七・ノアの方舟現象とは・・・？

ノアの方舟現象とは、天が人類に警告する様々な現象のことです。天から啓示をうけたノアは、「もうすぐ洪水がやってくるから、逃げる準備をしておきなさい！」と警告して歩きました。でも「何を、たわごとをいってるんだ！」といって誰も取りあってくれません。仕方なくノアは、方舟を作ってそこに植物や動物や家族を乗せ、その日の来るのを待っておりました。やがて大洪水がやってきました。人々は水に吞まれましたが、ノアたちは無事に難を逃れることができました。この話は、今の地球にも当てはまることなのです。今、人類は、自然界から様々な警告を受けております。病気の多発、異常気象の多発、鉱植動物の異常行動、民族間の争い、経済の混乱、これすべて人類に対する警告です。でも人類は、その警告に一向に

耳を貸そうとしません。これだけ多くの警告を受けているというのに、いまだに好き放題な生き方をしているのです。

便利・快適・快楽を追い求める物質文明が、地球を危険にさらしているのです。人間は経済発展！ 経済発展！ と口癖のようにいっていますが、これ以上豊かにならなくてもいいのです。そこそこの豊かさで、そこそこの快適さで、そこそこの便利さでいいのです。どんな楽しみも、喉元過ぎれば同じなのです。それは、夢を見ているような虚しいものなのです。どうか目覚めてください！ 極度の物質文明は危険こそあれ、そこからは何も得られないことを……。 「人類の夜明 1・2・3・4」の書、及び光のメロディー集は、人類を救うために用意したノアの方舟です。この船に乗れば、間違いなく理想の世界へ連れて行ってくれるのです。どうか「人類の夜明」の書を羅針盤にして、地球人類の未来を切り開いてください。さあ、ノアの方舟に乗ってください。

言葉二五八・・命の綱引き

何度も述べてきたように、この宇宙には一つの命しかありません。一つの命しかないということは、すべてのものは一つの命につながっているということですが、だから、一つのもものが動けば、すべてのものに影響

を与えないではおかないのです。つまり、私が動けばあなたに影響を及ぼし、あなたが動けば私に影響が及ぶのです。

今、地球上では陰と陽に別れ、命の綱引きをしております。陰とは人間意識を持った人たちのこと、陽とは生命意識を持った人たちのことです。今、地球上では陰の意識を持った人たちが多いため、命の綱が大きく陰に傾いております。このまま行けば、陰の勝利は間違いないでしょう。陰が勝利すれば地球はどうなるでしょうか？ 今の進化の階段で、足踏みせざるを得ないでしょう。そうなつては大変なので、今宇宙から援助の手が差し伸べられています。でも人頼りにしてはなりません。地球人類自らが立ち上がり、今の苦境を乗り越えなくてはならないのです。私が瞑想を勧めるのは、一人でも多くの人に光の戦士になって欲しいからです。

一本の綱を引きあつているのですから、陰から陽に立場を変えれば、二倍の味方が得られることになりました。黒石が白石に変われば、倍の面積が得られるわけですから、失地回復も夢ではなくなるのです。敵になるか味方になるかで、展開は大きく変わります。どうか、一人でも多くの方が味方になってください。そうすれば、地球に素晴らしい夜明けがやってくるのは間違いないのです。

言葉二五九・その日は誰にでも必ずやってくる

私たちの目の前には、永遠に続く道があるように見えます。でも、それは錯覚です。私たちの目の前にある道は、いずれ消えて無くなる虚しい道です。例えば、今、自分が歩んでいる姿を、後ろから見ている人がいるとします。しかし、その人の視界から、突然自分の姿が消えてしまう時がやってきます。その人は、こう思うでしょう。彼は一体どうなったのだろうか？ 落とし穴の中に消えたのだろうか？ それとも左に90度曲がったのだろうか？ と・・・。その人は消えた場所に走り寄り、忽然と消えた自分を探します。しかし、どこにも見当たりません。これがこの世の定めなのです。

あなたは他人事のように思っているかもしれませんが、これは自分自身の切実な問題なのです。人は必ず死ぬのです。死なない人など一人もいないのです。その証に、あなたは毎日、自分の周りから何人もの人が消えてゆくのを見ているではありませんか。あなたの祖父母はどうでしょう。あなたの両親はどうでしょう。あなたの叔父や叔母はどうでしょう。隣人はどうでしょう。「朝に紅顔ありて夕には白骨となれる身なり」と蓮如上人が詠んだように、人間なんて儂い存在です。どんな元気な人も、いつどうなるか分からないのが人生なのです。

知花先生は、こんなことをいっておられました。 “あなたにいつお迎えが来るのか知っているのですか

“と・・・。そうです。私たちにいつお迎えが来るかは誰も知らないのです。今日来るのか？ 明日来るのか？ 1年後か？ 10年後か？ 50年後か？ 分かりませんが、でもその日は間違いなくやってくるのです。これは人間間だけではありません。地球だって同じです。今日、突然落とし穴に落ちるか、あるいは突然90度の曲りカーブに誘い込まれるか分からないのです。でも人間は、いつまでもこの世が続くと思っているのです。「年の初めのためしとて、終わりになき世のめでたさを！」という「1月1日」の歌詞を、本当に信じているのです。あなたの周りから知人が消えていったように、地球だっていつ消えるか分からないのです。私はネガティブにいつているわけではありません。ノホホンと生きていては悔いを残すから、生きていく内にやるべきことをやっておきなさいといっているのです。「やるべきことをやる」とは、生命の自分ができるだけ深く知ること、生命に生きること、時間の許す限り瞑想することです。そして、正しい「身・口・意」の実践をすることです。すなわち、正しく想い、正しい言葉を使い、正しい行為をすることです。そして、間違った生き方をしていたら反省し、生き方を直すことです。どうかその日になって悔いを残さないよう、毎日少しずつやっておきましょう。

私たちは、誰でもいつか必ず出てきたところへ帰るのです。それは恐ろしいところではありません。光り輝く素晴らしい世界です。そこが私たちの故郷です。さあ、その日のために、今できることを精いっぱい

っておきましょう。

言葉二六〇・賢い五人の女と愚かな五人の女

小さな島のある村に、嫁入り前の若い十人の女が住んでおりました。ある日、その村の長老が、十人の女を呼びつけこういいました。「近々、お前さんたちにお婿さんが迎えに来ることになっているから、ランプを磨いて用意して待っていないさい」と・・・。というのも、迎えに来るお婿さんの乗った船は、暗い夜に来るため、明かりを灯していなくては岸に近づくことができなからです。賢い五人の女は長老のいいつけを守り、さっそくランプを磨いて油を注ぎ用意して待っていました。でも愚かな五人の女は、「今すぐ来ないのだから！」とやって何もせず、ボールゲームをして遊びほうけていました。ところがある日突然、お婿さんがやってきたのです。賢い五人の女は、すぐに明かりを灯し無事に船に乗ることができましたが、愚かな五人の女はランプを灯すのに時間がかかったため、船に乗ることができませんでした。

真理というものは、普段からコツコツと積み上げていなくては、身に付くものではないのです。急にやっても、それは付け焼刃というものです。それではお婿さんが来ても間に合いません。賢い者は、いつ来ても良いよう準備して待っているものです。いつ船が来ても乗れるよう、普段から準備をしておきましょう。ぜ

ひ賢い女になってください。

言葉二六一・岐路に立っている地球人類

家を建てる場合、まず施主が建設会社に要望を出します。次に建築会社は、施主の要望に基づいた青写真を設計事務所に描いてもらいます。最後に建築会社が、青写真通りの家を建てます。どのような創造物も、要望と、青写真と、創造行為の三者が一体となって生まれるのです。

今、地球は物質文明真っ盛りですが、それは人の心が便利・快適・快楽を望んでいたからです。つまり人類は、物質文明という家を建築会社に要望し、それに沿った青写真が描かれ、その青写真通りの家が今地球上に建てられているというわけです。確かに、華やかに飾られた家は魅力的に見えます。でも、見かけの良い家は欠陥も多いのです。今、地球という家に、戦争・犯罪・事件・事故・自然災害・病気などが多発しているのは、華やかな文明ゆえの欠陥なのです。多くの矛盾を抱え、多くの苦しみや悲しみに喘いでいるというのに、人類は一向にこの文明を手放そうとしません。このまま手放さなかったら、一体地球という家はどくなってしまうでしょうか？

これまでこの地球上に、数知れない文明の興亡がありました。みな今日と同じ物質文明の繁栄を辿った

のち滅亡して行つたのです。極度な物質文明は、エネルギーを低下させるため長続きしないのです。これは、地球の歴史が証明している動かしがたい事実です。でも安心してください。人類はその苦しみの中から、やがて物質文明の間違いに気付きます。今、地球上では、物質文明の青写真を描く人たちと、精神文明の青写真を描く人たちの間で、綱の引き合いをしております。もし精神文明の人たちが勝てば、素晴らしい理想の世へ突入することでしょう。でも、物質文明の人たちが勝てば・・・?? この勝敗の行方は、人類の目覚めにかかっているのです。今、人類は、精神文明へ舵を切るか、このまま物質文明を続けるか、その岐路に立っています。どうか一人でも多くの人たちが、精神文明の綱引きに参加してください。地球の運命は、心あるあなたたちの双肩にかかっているのですから・・・。

言葉二六二・地球の夜明けは近い

今、多くの人類は、ぐっすりと眠りこけ夢を見ている真つ最中です。肉体という夢を・・・個人という夢を・・・人間という夢を・・・人生という夢を・・・それも楽しい夢ばかりならいいのですが、殆どが苦しい悲しい夢ばかりです。特に生・老・病・死という夢は、人間を火炎地獄の中に放り込んでいます。どうでしょう、夢は実際に有るものですか？ 幻ではありませんか？ そんな幻の夢を人類は、気の遠くなる年月

見続けてきたのです。でも人類は、いまだに自分が眠っている事に気づいていないのです。このまま放っておいたのでは、いつまでも苦しい夢を見続けなければなりません。ではどうしたら、夢から目覚めさせることができるのでしょうか。それは、目覚めた者が起こしてやるしかありません。幸いなことに、知花敏彦師をはじめ多くの覚者が真理の普及に努めてきたお陰で、一部の人たちが生命の自分に目覚めはじめました。今はまだ数少ないですが、やがて多くの人が目覚めることでしょう。それは進化の座標時間で示せば、午前四時の直前までやってきたことを意味します。ということとは、もう夜明けが近いということですよ。

知花先生は、このようにいっておられました。「私が亡くなった後、私の教えを引き継いだ人たちの手によって真理の火が燃え広がり、多くの者が目覚めるであろう」と……。そうです。やがて多くの人たちが、生命の自分に目覚めることでしょう。神の計画は万全です。一つの齟齬もありません。もうすぐ地球は、新しい日の出を迎えます。もう夜明けは目前なのです。

【神様からの手紙⑭・・本来、この表現世界は楽しい世界である】

本来、この表現世界は楽しい世界のはずなのです。でもなぜか、この地球上には多くの苦しみや悲しみがあります。それは、人類が想念を苦しいものに使っているからです。あなた達の想念は、苦しみにも喜びに

も、どちらにも使えるのです。でも、あなた達は、その想念を今苦しみに多く使っているのです。では人類は、なぜ苦しみに使うのでしょうか？ それは、自分を人間だと思っているからです。自分を人間だと思えば保身を第一に考えるので、どうしても想念を苦しみに使ってしまうのです。

もし、生命を自分だと思えたら、想念を楽しいものに使うでしょうから、この地球上に天国が作られるのも夢ではなくなるのです。私はそれを願い、あなた達を地球に送ったのです。では、地球人類が生命の自分に目覚めたら、どのような世界が生まれるのか、他の目覚めた星を例にとり、お話することにしませう。

その星には、病気はありません。事故もありません。戦争もありません。自然災害もありません。勿論、人と人とのいさかいなど一切ありません。ですから、その星には、武器など一つもありません。戦争とか、人殺しとか、争いといった言葉さえ、その星には無いのです。ですから、そんな言葉を使っても、その星の人たちには理解できないのです。説明しても、なぜ人が人を殺すのですか？ といぶかしげに首を傾げます。彼らの想念には、悪しきものが一切ないのです。

彼らは重力を自由に操り、空中を自在に飛び回っております。情報のやり取りは、殆どがテレパシーです。欲しい物は何でも空中から取り出します。ですから、食べ物も、衣類も、住居も、自分で好きなように作ります。彼らは、食べたいときに食べ、寝たいときに寝ます。働きたいときに働き、休みたいときに休みます。

ですから、その世界に、労働という言葉はないのです。労働ではなく、楽働なのです。「労」する「働」きなどあるわけがないからです。「労働」という字を使うほど、まだ地球人類は幼いのです。本来、動くことや働くことは、楽しいことなのです。彼らは、必要な物を必要な量だけ必要なとき生産します。その物作りも、刃物で切ったり、叩いたり、熱を加えたり、曲げたり、するようなことはしません。想念によって作るのです。その星に住む人類の意識が高まれば、星そのものの波動が上がるので、想念によって自在に物を操ることができるようになるのです。あらゆる物が、人の想念に従って変化してくれるのです。

こんなこともあります。着ている人が嬉しい時には、着ている衣類が軽くなったり、振動したり、淡い光を放ったりします。また、住人の喜びに反応し、家がきしんだり、淡い光を放ったりします。人の意識の高揚が進めば進むほど、物の振動数が上り精妙化するため、表現の自由が拡大していくのです。また、彼らの星では、鉱物界・植物界・動物界の生態の働きが地球とは違います。生き物の数も、種類も、大きさも、形体も、性質も、寿命も違います。山はなだらかな形をし、そこに繁茂する木々は濃い緑に覆われ、天に向かって真っすぐに聳え立っています。湖は豊かな水を湛え、川はゆっくりと蛇行し、下々に変わらぬ量の水を注いでいます。風は朝な夕なに穏やかに吹き、雨は必要に応じ夜静かに降ります。大気の循環も、海流の循環も、同じ流れの道を保ち正しく行われています。まさに自然界は、リズムあふれた調和ある働きをしてく

れているのです。

この星の娯楽はいろいろありますが、その一つに宇宙旅行があります。彼らは、C700に乗って宇宙を自由に駆け巡っています。その世界の修学旅行は、人工衛星探訪・衛星探訪・惑星探訪です。彼らの星では次なる役割に備え、子供のころから宇宙に飛び出し、身をもって宇宙の仕組みを学んでいるのです。ここで、実にユニークな娯楽があるので紹介しましょう。それは、思念シアターといわれる、今という映画館です。思念シアターといわれるように、この映画は五感で鑑賞するのではなく意識で鑑賞するのです。では、シアターの中に入ってみることにしましょう。中に入ると、中央にプラネタリウムで見られるような奇妙な機械が見えてきます。それを囲むように、沢山の席が用意されており、そこに座ると目の前に、ニューと台座が出てきます。その台座には沢山のボタンが付いており、一つひとつのボタンが七色に点滅しております。このボタンが、演じたい役柄のメニューボタンなのです。メニューボタンを押すと、前から聴診器のようなものが伸びてきて、額の中心に当てがわれます。赤いスタートボタンを押すと、淡い緑色の光が全身を包み込み、同時に全細胞を震わす音響が心を溶かしはじめます。やがて眠気を催し、自然と目が閉ざされます。といっても、意識はしっかりとしています。やがて眉間の裏側に、ギラギラとした光が見えてきます。その光に意識を集中していると、その光が次第に迫ってきて、やがて、その光の中に自分が呑み込まれてしま

ます。呑み込まれた世界は、色鮮やかな意識の映像の世界です。まるで霊夢を見ているような感覚です。物語が始まります。その物語の主役は自分です。物語の筋書きは大筋決められています。筋書きに自分好みの色付けをできるのが、この思念映像のユニークなところ。面白いことに、その物語を主観的に見ることができると同時に、客観的にも見られるのです。ようするに、主役を演じている自分と、勸賞している自分の二人の立場になって見られるのです。そのドラマで味わう感動は、地球のものとはまるで違います。心に染み入る静かな感動、すがすがしい感動、やる気をもたらず感動、夢と希望を与える感動、活力を生み出す感動、それは言葉で表現できない感動の連続です。ですから、思念シアターから出てきた人たちの顔は、誰もが喜びに満ちております。

ここで語ったことは、星の進化過程においては、まだ下の方です。形を持った生命体を受け入れている惑星は、まだ幼い段階なのです。進化した惑星では、もう形を持った生命体は存在しなくなります。進化した惑星の人類は、意識体となって宇宙を自由に飛び回り、衛星や惑星をコントロールする重要な役目を担うのです。さらに進化すると、恒星の重心に入って恒星そのものをコントロールすると同時に、身内の惑星をコントロールする役割を担うようになります。さらに進化すると、太陽系の重心へ、銀河系の重心へと役割が拡大し、最終的には宇宙意識の中心に帰り、全宇宙をコントロールするようになるのです。

このようにあなた達神の子は、進化に相応した重要な役割を担うことになるのです。それが、この宇宙における進化の旅の軌跡なのです。それは苦しい旅ではありません。楽しい旅です。私はこの宇宙に、楽しい旅しか用意していません。今、地球上に苦しい絵が掲げられているのは、人類が幼いがゆえに描いた稚拙な絵で、これは仕方のないことなのです。でも、どんなに地球人類が幼くても、偉大な神の子に違いないのですから、いずれ成長すれば素晴らしい絵を描くようになるのです。

ここで述べたことを信じるか信じないかは、皆さんにお任せします。でも、想念の偉大さを知った人なら、当然のことと受け止めてくれるはずですよ。なぜなら、この宇宙は想念によって進展してゆく想念の宇宙だからです。

おわりに

絵や文字の中には、書いた人の思いが余韻(エネルギー)として残っております。どんなにコピーしようが、一旦折られたまえた思いは消えることはないのです。この書から、私の思いを感じとってもらいたいと願うのは、その可能性を信じてのことです。ぜひこの書の中に折りたたまれている、私の思いを感じとってください。そのためには、何度も何度も繰り返し読むことです。繰り返し読むうちに、必ず私の思いを汲み取ることができるよう。

この書の目的は、気付きを与えることです。その気付きが、自覚を深めてくれるのです。一挙にやってくる自覚などありません。何度も何度も気付きが起き、少しずつ自覚が深まって行くのです。ですから、今、自覚できないからといって諦めないでください。何ごともそうですが、偉大なことを成し遂げるには努力が必要です。努力なしに成し得た偉人など、一人もいないのです。どうか、焦らず、諦めず、根気よく、求め続けてください。きっと自覚の境界線を超えられる日がやってきます。もし、自覚の境界線を超えたら、外側から宇宙を見る傍観者から、内側から宇宙を覗く達観者に立場を変えることができるでしょう。そのときあなたは、"何だ！ 自分ってそんな偉大な存在だったのか！"と、感激の声を上げるでしょう。

この世のことを優先させることほど、虚しい人生はありません。この書を読んでいるあなたになら、分かって頂けると思いますが。どうか、永遠なるものを優先させてください。虚しい人生で終わるか、充実した人生で終わるかは、あなたが何を優先させるかで決まるのです。ぜひ、本当の自分を知ることによって人生をかけてください。それ以外、人生の目的は無いのですから……。

この「人類の夜明4」は、真理を深く掘り下げた専門書となっております。少々難しいかもしれませんが、何度も何度も読み返し理解を深めていってください。この書を足掛かりに神の自覚に至ることを、心から願っております。

二〇一四年十二月

かとう はかる